

---

# 緋色の眼～Days～

ジョン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋色の眼／Days／

### 【Zコード】

Z0260B

### 【作者名】

ジョン

### 【あらすじ】

過去があるから現在があり、現在があるから未来がある。それは緋眼使い、式神使い達も例外ではない。そんな彼らの日常や過去を描いた緋色の眼の登場人物達の短編集。注意【緋色の眼を読んでからご覧になった方が意味が分かります】

## D a y s 1 · 千島蒼一（前書き）

まづは蒼一からです。

彼の前作までのテーマ曲は  
牙狼～ S A V I O R I N T H E D A R K～でしたが

D a y s は希望峰といつ曲を聞きながら書きました。

## Days1・千島蒼一

毎朝、俺は五時には起きてランニングを一時間。  
そして家に帰つたら、筋トレをしてからシャワーを浴びて朝飯。  
それが俺 千島蒼一のいつもの朝。

高校にも行つていない俺にはぶつちやけこんな事しかやる事が無い。

煉が俺の中から消えたので、俺はもうアイツにすがつて生きてい  
くわけには行かない。  
だからこうやって鍛錬を欠かさずに、いつでも戦いの準備に入れ  
るようにしている。

「おはよー、蒼一」

シャワーを浴びて出でてくると母さんが朝食を用意してくれていた。  
この家にで俺の他に唯一自堕落ではない人間、それが俺の母親千  
島遙その人。

流石に俺ほどは早く起きられないみたいだが、主婦としては普通

の時間である。

「おはよう」

俺がこの家に帰ってきたから一週間、未だに俺は家族と打ち解けていない気がする。

母親は何か楽しそうに俺が飯を食つてる姿を見ているが、その感情の正体が不明。

なんていうか、俺だけ気まずいみたいな状況。

「蒼」「もつ少しゆくつとじてもいいんだよ?」

「・・・ん」

母さんの気遣いを感じる。

だが素直じゃない俺は、適当に返事をするとTVに目を向けた。  
・・・・・ああ、やっぱもつ少し会話を続けてみようかな。

「これは、死罪六神の頃からやつてたからもつ習慣になつてるんだよ」

「へえ・・・」

母さんの顔が曇る。

そうだよな・・・息子が人殺しまがいのやつてた頃の話など面白いはずがない。

俺はついこの間まで死罪六神という組織に入つて、世界のバランスを崩すような事をしていた。

まあ・・・それで色々あつて今は敵だった家族とも和解してこうやって暮らしているのだが。

「親父も遙緋もいつも何時まで寝てるんだ?」

「蒼威君は……うーん……その辺によつて、遙緋は後五分ぐら  
いもすれば起きてくれるわよ」

「へえ……随分とのんびりした家だな

「これが普通なのよ

「そうなんだ」

そこで会話がきれ、俺と母さんはTVを眺めた。

お天氣お姉さんが今日は傘を持つてけと言つてゐる、余計なお世  
話だつての。

そしてしづめりへると母さんが言つた。

「遙緋遅いわねえ……蒼一、起こしてきて

「わかった

俺は返事をすると立ち上がり、階段を登る。

階段を登り終えると、正面にある一つの部屋の右側の部屋の前に  
立つ。

ここが俺の双子の妹、千島遙緋の部屋だ。

「おー、コラー！ 起きや！」

ドア越しに話しかけても返事が無い。

「どうにも、まだなじめない。」

段々とイライラしてきた俺は、ドアを開けると遙緋の部屋へ入った。

女の子特有の甘い匂いが鼻をつき、ベットで布団に包まっている遙緋を見た。

「う・・・・・・・ん」

甘い声が部屋に響いた。

大方、何か美味しいものでも食つてゐる夢を見てるのであろう。幸せそうな奴め。

そしてベットの台の上では粉々になつた元田覚まし時計が在つた。こいつの式神、輪廻転生の力によつて破壊されたのであらう、相変わらず危ない力だ。

式神つてのは俺にもよくわからん。

どうやら自分の根源と自分をつないで、その根源を具象化したのが式神といつのが一般論。

んで、今寝てる妹の式神の名前は【輪廻転生】再生と死滅の現象を起こす式神だ。

ちなみに、俺の式神は【修羅雪】氷の力を持つた二刀の小型チエーンソーである。

「おー、遙緋・・・起きろ!」

「ん~~ひむせこ~・・・・」

遙緋の手が空間を屈ぐ。

俺はその腕を取り、間接を決めるとそれをグイと締め上げる。

「イタタタタタタタタッ!! 痛いって!!」

一瞬で田を覚ます遙緋。フン、最初から素直に起きやがれってんだ。

そして寝ぼけ眼で俺に言ひへ。

「何でお兄ちゃんがいるの？」

「お前を起しせと頼まれたから」

「一応、思春期の女の子の部屋なんだけどなあ・・・ほり、着替えとか見られたくないじゃん?」

「お前のその貧相な体に興味はない、せめて罪歌ぐらいになつてからねつこう事はさせやけ」

「むー・・・」

膨れつ面をする遙緋。

コイツ・・・マジジで性格が変わってきたな、昔は俺にビビりまくつてたくせに。

そして遙緋を先頭にて、俺達は部屋の外へと出た。  
階段を下りて、一階へ行くと途中の廊下に親父の上半身が飛び出している。

じうやう起きよつとして力ぬきたらしい、駄目人間め。

「あ、お父さんおはよー」

駄目人間、もとい親父をまたいで遙緋は居間へと入つて行つた。  
「の反応つて事はどうやらこれは日常的な行動らしこ、この家も母さんが居なくなつたら終わりだな。

俺はすやすやと廊下で寝てる親父を軽く蹴飛ばすと居間へと入った。

「母ちゃん、もう一回飯食いたい。俺のも作ってくれるか?」

遙緋を起したら腹が減った。

母ちゃんは、それを聞くと嬉しそうに俺に向ひ。

「わかった、目玉焼きとパンでいい?」

「うそ

俺は遙緋の正面のテーブルに着く、遙緋は熱心になつてテーブの占いを見てくる。

全く・・・高校生にもなつて新聞すら読まずに占うことは嘆かわしい。

すると、遙緋が俺の視線に気づいたらしい。

「ん? 何? 占いなら私達は今口最下位だよ?」

「いや・・・占いなんかよりも新聞読めよ、と思つたからな

「新聞ねえ・・・」

フンと笑つて遙緋は俺を見る。

何だこのヤロウ、喧嘩売つてんのかコラ。

新聞ナめんじゃねーよ、確かに最近の新聞はフィルターがかかりすぎて情報メディアとは言い難いがな。

「最近の女子高生は新聞も読まないのか?」

「そりだねえ・・・TVで十分かな」

「フン、TVなんて腐った情報メディアじゃねーか、しかも口いたあくだらなすぎてかける言葉もない」

その言葉に遙緋の顔がムッとした感じになる。

どうやらお気に入りの番組だったらしいな、だが新聞を馬鹿にしたお前も同罪だ。

そして遙緋はフツとまた笑いやがると言つた。

「お兄ちゃんといつて、ハートだよね?」

「 ッ

「働きもせず、学校にも行かずにじ飯だけ食べるつて羨ましいなあ

くそ、このヤロウ。確信をつけやがった。

俺は言い返す言葉も無く、黙つてしまつ・・・マジで一年前なら考えられない事だ。

遙緋の奴は勝者の笑みで、母さんが運んできた田玉焼きを食つている。クソが。

「ハサカーでも、お兄ちゃんもアルバイトぐらい探しなよ

フフンと笑つて遙緋は居間から消えた。  
あのヤロウ、こいつが殺す。

「よお、ハート島。お父さんは悲しこぞ」

更に殺意を上昇させる声が後ろからかかる。

後ろを向くと親父がパジャマ姿で、俺を見下す……いや見下していた。

だがこの程度の生物の相手は造作もない。

「つるせえよ、お父さん。ウザーからまだ寝てりつての」

「なつー? お父さんに向かってそんな口を利くかー?」

「いいで質問がある」

「おひ、何だ?」

「千島蒼威さんは、俺に父親らしい事を一つでもしてくれたかな?」

「はー、一個もしません」

「マジ死ね、父さんなんて死んでも呼ぶか」

俺の言葉にショックを受けた親父はさつきまで遙緋が座っていた席に着いた。

すると母さんが来て朝だつてのに酒とつまみを置いていく、一体どんな家庭だ、この家は。

親父はプシュッピールを開けると、一杯ある。

「じゃあ蒼一、せめてもの罪滅ぼしこお父さんが一つだけ願いをかなえてやるつ

「ほほお・・・・・」

「それと、何か働きたくなつたらハ神の家に行つて見ろ、何かしら仕事はあるはずだ」

酒を飲んだ瞬間、まともな事を言い出したな。

酔つてる時のほうがまともな人間つて・・・マジこいつは本当に俺の親なのか？

しかし、ハ神の家に行くのは悪くない。

「よし、時雨んとこ行つてくるわ

」おひ

俺は自室へ戻り、着替えると家を出た。

そのまま電車へ乗り、一時間ほど揺られるとハ神家最寄の駅につく。

そこからバスで十分、都市部を抜け、閑静な住宅地から歩いて二十分ほどの場所にハ神家はある。

何十年も経つてそうな年季のある家だ。

正門から入ると、門の番をしてる奴が俺を見る、そして途端に顔

が引きつった。

そいつは複雑そうな顔で俺に告げる。

「な、何の用だ？」

「時雨と罪歌達に用事があんだけよ、通るぜ？」

「う・・・許可しましょう

どうやら死罪六神だった事をまだ引きずつて居るようだ。  
あ・・・そこそこや今の門番、御崎家の戦いの時に斬った氣がする  
な。

まあ・・・仕方ない。

「相変わらず、広い

そう呟く。

久しぶりに着たが全く変わってない。どこよりも今は変わ  
ないんだな。

そして俺はダラダラと歩くと時雨の執務室兼自室へと向かつた。  
案の定というか何と云つか、途中すれ違う八神の奴らは皆俺をジ  
ロジロと見てきやがる。

これじゃあ罪歌達も相当苦労してんなあ・・・

『舞い起これ、上昇気流』

突然声が響き、大地から風が吹き上がる。

そして俺の目の前ではスカートの裾をわざとじりじり押された命が  
立っていた。

何をしてるんだ、この馬鹿娘は。

「よお、今日も暑いな」

「蒼ちゃん……頼むからシッシュ口んでよ……やつた私が辛いじやない」

「知るか」

「むーー！ てか蒼ちゃん、私に会っこに来ててくれたの？」

「違う」

「はあ……嘘でもいいから君をわいこに来たー」とか言つてよ・・・・・・

「TVの見すぎだ、マセガキ」

「むーー！ 子供じゃないもん！」

「わいわいわい、おめでと！」

俺は心から拍手を送つてやる。  
命は不満そつて、俺を見ていたがやがてらしがあかないと思つた  
のだから、話題をかえた。

「んで、何しに來たの？」

「あー・・・・」

「一ートを脱出したことは流石に聞こへー」

俺がそう言つたら、命は確実に爆笑するだろ？、それだけは避けたかった。

「時雨と少し話しに来たんだ」

「へーー、じゃあ一緒に行こ、私も行くよー」

「・・・へ？」

自分でも聞抜けな声だったと思う。

しかし、命はそれを気にした風もなく俺の手を引くと走り出した。ああ・・・何でタイミングが悪いんだろう・・・

そして命は時雨の部屋の前に立つとノックをした。

返事も聞かなければドアを開ける命、ノックの意味が全くない。するとメガネをかけてPCに向かっていた時雨が顔を上げる。

「やあ、命ちゃん・・・蒼一」

「おひす」

「蒼ちゃんね、時雨さんにお話したい事があるんだってー」

「ん、わかった。まあ座つてくれ」

時雨に促されて俺と命は手前のソファーに座った。  
そしてPCを待機状態にして立ち上がると、近場の冷蔵庫を開けて氷とジュースを持ってきた。

「それで、何の話かな？」

「あー……いや、その……俺に仕事をもらひねーかな……と」

「仕事？」

「ああ……俺、高校も行ひてなこしゃる事なくてさ」

「ふむ……」

「考え込む時雨。」

「俺は恥ずかしくて、せつぱんしつぽを向いてしまつ。」

「ぶつちやけ、八神の手は足りてるんだよな、今必要なのは経営とかに詳しい人間だし」

「そうか……」

「だから蒼」「君は学校に通え」

「…………ハア？」

「おこおこ、時雨……何で俺が中学校に通わなきゃいけないんだ」

「ひょいひょいさんが学校に通いたいと言つ出してね、ついでだ」

「…………」

俺がそう言つと命が凄い顔で俺を睨んだ。

うわ、怖え……そして俺が一瞬怯むと、命は俺の体に触つて一  
言。

『私が良いこと言つまでもお座り』

体が勝手に動き、俺の体はソファーに叩き付けられる様にして座  
らされる。

体を動かそうと思つても動かない、流石【言霊】敵に回すとい  
まで恐ろしいとは。

そして時雨は苦笑いをしながら俺に言つた。

「蒼一、命ちゃんはお前と同い年だぞ？」

・・・・・・・・・ハ？

俺は目線を動かして命を見る。

身長は150センチぐらいだろう、髪型はショートカット、今の  
服装はひらひらしたスカートにTシャツ。

どうみても中学生にしか見えない。

しかし、命と時雨の顔が真面目な点から見ても真実なのである。

「・・・・・・マジなのか？」

「ああ、マジで……僕も最初聞いたときは眩暈がしたけどね」

『お座り』

命の力によつて時雨までもが椅子に吊り付けられる。  
すると、時雨はその体勢に苦しむ風も無く会話を続けた。

「やうこいつわけで、命ぢやんを遙緯と同じ高校を通わせみつけ、それでついでに蒼一も通えぱいい」「さあ、ほんまにわざわざおめでたす！」

笑顔で言つ時雨。

しかしその笑顔に騙される俺じやない、時雨が何のメリットも無く俺を行かせるとは思えないしな。

「……俺に棟名と森の護衛しろってか

「正解、流石蒼一だね。君と遙緯、更に命ぢやんまで四つ一つの家を滅ぼせるほどの戦力だ」「ほんとうに、ほんとうに守りたいんだよ」

「フン……まあこいや、あこつらを守りたいが」

俺は軽く笑うとそう言つた。

時雨も分かつてたとばかりに笑つ、そして命に懇願した。

「お願いだから、もう解いてくれないかな？」

・・・どうやらかなつ苦しかつたらしく。

そして俺達は時雨の部屋を出た。

後日ウチに来て本格的な話を母ぢやん達と進めるひじー。とりあえず、俺はニート卒業、ヒ。わらば我が家が愛しの一週間よー。

「ねえ、蒼ちやんほんま帰つたりまへうの~」

命が寂しそうに俺に言つ。

そうだ・・・」「こつてほんま帰る場所はないんだつたな。

桐生の家に幽閉されていた命は俺達が桐生家を皆殺しにした以来の仲である。

「おひ

「そひ・・・ねえ、蒼ちゃん・・・私、蒼ちゃんが大好きだよ?」

突然の命の告白。

俺は大して動じる事も無く、簡潔に応える。

「そひか

「・・・蒼ちゃんは、私の事が好き?」

「・・・好きか嫌いかで言つたら好きの部類には入るな」

「私は、愛してる。 貴方の事だけをずっと見てきた」

命の顔つきが変わった。

子供ではない、女としての天美命の顔、それは中々に美しい。  
だけど俺には

「朱音さんが一番でもいい、それでも私は貴方と共にいたい」

・・・こういうときはなんと言えばいいのだろう?

今までこんな事がなかつたから、何とも言えない。

でも俺は誓つたんだよな、コイツを守るつて。それに・・・俺が  
一線を越えなかつたのもコイツのお陰だし。  
そして決意した俺は命に言つた。

「命、ウチ来るか?」

「・・・行きたい、蒼ちゃんと一緒に暮らしたいけど・・・」

「けど、何だ?」

「私にはお金も何もない、戸籍すら危つい、蒼ちゃんの家にそんな事で住ませてもらひたのがな?」

俯く命。

しかし、「命であおひめては命はまた孤独へとなる。

俺だけ、孤独の苦しみは痛いほど知っている、中学の時はずつと孤独だったしな。

まあ・・・こいつが俺の思い違いもあつたが。あ・・・それこえ  
ば・・・

「住ませてやるが、やつぱり俺もお前と離れたくなーわ

「蒼ちゃん・・・

「俺に任せとけってー、守つてやるって約束したろ?」

「・・・うん..」

「んじや荷物とつて来い、んで時空とも云ふとけ・・・まあ奴はお見通しつぽいけどな」

「わかった! 少し待つて!」

駆けて行く命。

俺はそれを見ると胸中で朱音に話しかける。

(「めん・・・これって浮気かな? でも・・・アイツもお前と同じくらい大切なんだよ）

「 ついわけで、今日からここに住む事になつた天美命だ!  
よろしくへー。」

俺は実家の居間で高らかに宣言した。  
遙緋は開いた口が塞がらないという感じで俺と命を見つめ、母さんは苦笑いを浮かべている。

そして、親父は

「駄目だ」

「死ね」

修羅雪を首筋に突きつける。

親父はさつきまでの威勢はどうへいったのか、急にしほみだした。

「お、落ち着け・・・まあ住む分には構わんのだが、部屋が無いぞ

？」

「俺の部屋で共同生活」

「私達、もう契りは交わしましたから」

「なにいいいいいいいいつ！？ 蒼一！ お前はロリコンだったのかつ！？」

命の冗談に親父が過剰反応する。

俺は修羅雪の刃を回転させる事で、親父の発言を止めると改めて言い直す。

「命はこう見えてもタメだ、だから住ませろ、後命の衣食住は全て親父、アンタが払え」

「な・・・何故、俺が！？」

「何でも願いを叶えてくれるんだろう？」

「グッ・・・」

黙る親父、約束には妙に律儀な男で助かった。  
そして俺は命を小突くと、挨拶をさせる。

「天美命です、炊事洗濯何でもござれです。ちなみに蒼ちゃんのお嫁さんになるのが将来の夢です」

そう、命は幽閉させていたくせに炊事洗濯がさりげなく出来た。  
死罪六神の炊事、食事当番は基本的に命であり、他のやつには出

来なかつた。

剣菱もそれなりに出来たが、何より罪歌があそこまでやばかつた  
とはなあ・・・

む、回想にふけつてこる暇はない、意見を聞いてみよ。」

「母さんば、どう？」

「うーん・・・私はいいわよ、新しい娘になるんだからねー」

「わ、ありがとう」

そして今度は遙緋のほうを向く。

「お前はどうだ？ ちなみに否定的だった場合お前の高校のクラス  
メイトがどうなるかわかつてんだるくな？」

「聞こてる意味ないじゃん・・・じゃあ、賛成」

「んじゃ、決まりだな」

「うーん、母さんよろしくお願ひします」

命が挨拶をすると、早速母さんは命を連れて家中を歩き回る。  
遙緋は軽くため息をつくと、俺の方を見た。

「何だ？」

「んー・・・？ いや、お兄ちゃん笑つてゐなあつて思つてむ」

遙緋に言われて俺はガラスを見た。

そこには久しぶりにニヤけた顔の俺が映っている。

どうやら、俺も命と暮らせて嬉しいらしい、と言つよりも樂しみなのだろうか？

これから始まつていいく俺たちの新しい日々が

## Days2・秋月罪歌（前書き）

第一回目は秋月罪歌です。

前作は亡國覚醒力タルシスという曲を聞きながら書いてました。DaysではFLOWの贈る言葉を聴きながら書きました。

## Days 2・秋月罪歌

Days 2

私は呆然と日々を過ごしていた。

毎日朝から晩まで呆けるか、何かを考えて過ごすだけの日々。全てが終わってしまい、私は燃え尽きていたのだ。

(・・・私は、どうすればいいのだろう?..)

戸籍等、その他の経歴は正宗が全て、改竄、隠蔽をしてくれている。

だから普通に何でも出来るはずなのに、何も出来ない。

いや……怖いのだ、今まで裏の世界で十数年間復讐に生きてきた自分が今更・・・と言った思考に悩まされている。

夢とか希望とかは考えた事が無い、ただ復讐を……それだけで私は生きてきた。

(もう、年も23か24だっけ?・・・数えてないからよくわからぬいや)

まだギリギリ人生を取り戻せる年齢。

だが、こざ何かをやろうとするにも、何も浮かばない。

「あ、姉ちゃん」

そんな思考の渦に私が陥っていると声がかかった。

顔を上げて、声のした方を見ると双子の弟の狂が立っている。

「なに？」

「これから、どうしたいか決まった？」

「ん・・・決まってない」

狂は決まったのだろうか？

昔から、この子はあまり考えずに行動する事があるからなあ・・・

「俺は、一応秋月の長男だ・・・秋月の血を絶やさない義務があると思つんだよ」

「そり・・・やつぱそりだよね」

そう、この世に居る秋月はもつ私達だけだと思つ。だから狂は長男として、妻子を持ち新たなる世代へと秋月の血を受け継がせなければならぬ。すると、狂は私に言つ。

「だからさ、姉ちゃんは好きな事してもいいんだぜ」

「・・・え？」

「俺が5、6人子供作りや、跡継ぎには困らない、次の世代がまた5、6人作れば一族はどんどん増えていくからな」

「狂・・・」

「俺は妻や子を俺達見たいな田にはあわせたくない、呪いの子とか  
そんなんで人を括りたくないねえ。

だから・・・俺はそんな因習に囚われない秋月を作つて生きたい  
と思つんだ」

純粹に、狂は凄いと思った。

私達の全てとも言えた復讐を果たし、私は抜け殻状態になつてい  
る。

だけど、狂はもう・・・新しい道を見つけて歩き始めよつとして  
いる。

だけど私は・・・

「姉ちゃんは、ずっと誰よりも頑張ってきたんだ・・・田標が見つ  
からないのも無理も無いと思つよ」

「でも・・・」

「蒼一や命も新しい道に進んでいるナビ、自分のペースでいいと思  
うぜ」

「・・・うん」

「まあ、そういう事で・・・ああ、それと正宗が呼んでたんだった

「ん、わかった」

私と狂は八神の屋敷の中を移動し、正宗の執務室へと入った。  
ノックをして、部屋に入ると正宗が笑顔で私達を迎える。ああ、  
今日も変わらぬ日常だなあ、何て思つ。

隅の方の椅子には息子の時雨も座っていた、何か緊張しているのだろうか、冷や汗をかいていた。

「やあ、すまないね。そこに座ってくれ

「わかつた」

私と狂は、正宗の対面に座る。すると、早速話を切り出された。

「单刀直入に言おう、二人ともアルバイトをしてきなさい」

「・・・ハ？」

「・・・あ？」

「狂の進みたい道は大いに僕も賛成だ、罪歌はまだなんだよね？」

「まあ・・・ね」

ずっと貴方の傍に居て、貴方の手伝いをしたいとは口が裂けても言えない。

だけど・・・・・これだけは本当にやつてみたい事かもしけない、等と思ってしまう。

八神の仕事で忙殺される正宗、それを手伝う私・・・・・・・・・・・・

・フフツ。

・・・いやいや、思考が乱れた、今は正宗の話に集中しよう。

「それで、何でアルバイト？」

「君達に足りない物が、そこにある。まあ、数日だけじゃ感じられ

ないかもしないけどね「

・・・正宗の言いたい事がよくわからない。

私達は一応勉学は緋澄に命じられて多少は嗜んだと思う、交渉だつて何度もしたし、修羅場もいくつも潜り抜けてきた。

それに、緋眼や式神と教え込まれた体術もある。力も申し分はないと思つ。

「じゃあ三日後この場所へ行くよつ」

一枚の紙を渡された、それを読むとそこには「いつ書いてある。

株式会社ヤガミ

給与時給900円以上

資格

18～30歳位迄の方 未経験者大歓迎！！

勤務時間

10：00～19：00

勤務開始日

即日勤務OK!!

仕事内容 子供用イベントの監視

子供達の安全を見守つて頂くことがお仕事です。簡単な研修がありますので、あなたもすぐに慣れますよ。

・・・久しぶりに果てしない不安という物を味わった。

三日後、私と狂はとあるイベントの面接会場へと赴いていた。そこは何かのアウトドアパークのような場所で、大変な賑わいを見せてくる。

私と狂はそんな空気に殆ど馴染むことなく、生きてきたので驚きの連續・・・というよりも驚愕に近い。

改めて自分がどれだけ世界からどれだけ外れていたのかを再認識しながら私と狂は歩く。

それにしても、この人びと・・・凄くウザつたい。

(緋澄もやう思わない・・・?)

そう無意識のうちに声をかけてしまった。

しかし、緋澄はもう居ない・・・十数年間一緒にいた大切な同胞は世界を、私を守るために散ってしまった。

だけど、いつしか人は慣れてしまふ、自分の心にフタをして、自分を保つために。

だけどそれだけは嫌だった　この心の痛みですら、私と緋澄が一緒に居たという何よりの証拠だから・・・

「姉ちゃん、あそこみたいだぜ」

狂が指を指した先には一軒の建物がある、いかにも事務所っぽい建物だ。

確か剣菱と始めて会つたのもあんな建物だった気がする。私と狂はノックをし、返事を聞くと中に入る。

扉を開けた先に居たのは初老の御婦人。どうやら彼女が私達の雇い主なようだ。

「えっと・・・秋月さんですよね？」

私達二人を見ながら初老の女性は言つ。

そして私は、前に一步踏み出し、一礼をすると応える。

「秋月罪歌です」

狂もそれに続く。

「秋月狂です、本日はよろしくお願ひします」

意外な事に狂は被つていた帽子を取り、きちんと挨拶をした。金髪も辞めて、元の黒髪に戻った狂は、やや顔つきが険しい物の普通の少年に見える。

それに比べて私はどうだらう・・・・一応女性としての嗜みはしているつもりだが、それは主觀であつて客觀ではない。

そんな事を私が考えていると、初老の女性は続ける。

「では、こちらの洋服を着てください、早速研修に入りますよ」

服の上からその会社のロゴが入ったシャツみたいな物を羽織る。これが産まれて始めたのバイト着・・・中々可愛いじゃない。そして私達は着替え終えると、その女性についていった。

研修は主に器具の操作の仕方や心構えについてであった。

私と狂は別々のフロアに分けられて、それぞれの持ち場のやり方、作法、その他について教わる。

私のフロアは巨大な風船の中と、外にある遊具で遊ぶ子供達の管理である。

ぶつちやけ、私には子供を育てる才能が無いと思ひ、愛情を全く受けないで育ってきた子供に親が務まるとは思えない。

そこまで考えて、正宗は私にここで働く事を決めたのだろうか？

「あのう・・・？」

いやいや、あの正宗の事だ、何かきっと裏があるに違いない。  
今でこそ正宗は温和だけど、昔は凄い策略家だった気がする。息子の時雨はさらに腹黒いし。

ああ、今思えば死罪六神時代にも八神の策略に何度も嵌められたな・・・全く、何て腹黒い。

「あ、あのー」

そういうえば浅葱陸人が言っていた正宗ロリコン疑惑はどうのどう。

・・・もし事実だとしたらかなりよくな

「もしもーしーーー！」

「は、はい？」

どうやら思考の深みにはまってしまったようだ。

私の目の前には、同じシャツを着た一人の女の子が立っていた、

多年下であるうその少女。

中々にオシャレだった、明るく染めた髪、耳にはピアス。服装だって中々女性らしい。

純粹に 羨ましいと思つた。そしてその少女は言つ。

「あ、私・・・若瀬奈央って言います。えっと・・・今日から入る方ですよね？」

「あ・・・秋月罪歌って言います。ようじくお願ひします」

「あきつめやいいかさんですか、変わつてかっこいい名前ですねー」  
そりや もつ、呪いの子につけられた名前ですから・・・とは言へない。

それにしても秋月罪歌って名前を褒められたのは始めてである、まあお世辞だらうけど。

「えつと、まず子供達に話しかけられたスマイルで、そして危ない子は優しく諭してあげてください」

「あ、はい」

「怒るのは厳禁です、なるべく諭すようにしてあげてくださいね」

・・・この仕事、絶対に狂に向いていないと思つ。そして私の頭の中には嫌なビジョンが浮かぶ。

子供にキレ、神舞を発動させ狂喜乱舞している狂の姿・・・いや、流石にそこまではないだろう。

精々殴りかかるぐらい・・・ってかそれもマズイわね。

「あ、あの秋月さん？」

「は、はい！」

「あの・・・そろそろ子供達の方をお願いしますね」

「わ、わかりました！」

私は緊張しながらアスレチック広場の子供のほうへ向かう。

同僚の岩瀬さんは風船型ドームの中へ入ってしまっているので実質私一人。

落ち着け・・・落ち着け私・・・成せばなる、やれば出来る・・・

頑張れ！

「おねーちゃん、あそぼ」

可愛らじい子供が近づいてくる、私はしゃがんで視線を合わせると男に笑いかける。

自分でも会心の笑顔だと思ひほどの笑顔だ、これなら子供も喜いてくれるだらう。

「うん、何して遊ぶ？」

「笛で氷鬼しよー」

氷鬼・・・確か北のほうにいる悪鬼・・・じゃない、確か鬼に触られると凍つてしまつて動けなくなるゲームだ。

すると、周囲の子供達が一斉に集まってきた、その数ざつと見た感じ十。

どの子も一七〇と笑い、私を見ている・・・・・・もしかして

# 私が鬼？

「おねーちゃんが鬼だぞー！」

子供がワーッと散っていく。 フン・・・・・面白い、 緋眼使いの私から逃げようとするとは。

私は大地を踏みしめ、走り出す・・・たかやつてみると中々にこれが難しい。

アスレチックの地形を上手く利用している子供達はいろいろな場所をスルスルと抜けて、私をかく乱する。

「おはようございます」

「おねえちゃん、タツチしたよー」

周囲から子供達の声が響く、これじゃあキリがないわね。  
私は一瞬目を瞑り、緋眼を発動させ、目標の子供達を一瞬で視認  
すると駆け出す。

アスレチックを物凄い速さで登り、子供達にタッチしていく時には宙返りや、壁蹴りも披露し私は一気に七人タッチした。そして地面に着地すると紺眼を解く。

聴覚等が通常の状態に戻ると万来の拍手が聞こえた、周囲を見る  
と沢山の人私が私を見ている。

しまつた・・・! どうやら私は本気を出しそうたらしく、すると遠くから若瀬さんが駆けて来て私に囁つ。

「あ、秋月さん……？」

「『い、いめんなさい……ちょっと熱くなってしまった』

「まあいいんですけど……安全には気をつけてくださいね？」

「わかりました……」

岩瀬さんが再び風船の中へと戻つてこく、私はため息をつくと子供達の方へと戻つた。

子供達は目を輝かせ、私を見ている……これはこれで気分がいいかな。

「すっげー！」

「あれビーナスひさしふのー？」

子供達が私に纏わりついてくる、不思議と悪い気分はしない。というよりもこいつのは始めての経験だ、私と狂は秋月にも学校にも友達は居なかつた。正宗と訓練している時が唯一の安らぎだった生活、多分……こつちが本当の子供が遊ぶべき事だつたんだ……

そして、私は更に見た。

「はい、マー君良い子にしてたかな？」

「うんー。」

子供を愛おしそうに抱く母親の姿、私達には決して見る事の出来なかつた姿。

誰に愛されるわけでもなく、呪いの子として生きてきた私達。私

はそれに多少なりの感動を覚えた。

親の愛つて、力よりも、式神なんかよりもずっと大事なのかな・・・

「おねえちゃんどうしたのー？」

「はやく遊ぼうよー」

私もこの子達を愛してみよう、いっぱい遊んで、いっぱい笑つて。私達みたいな不幸な子なんかにはしたくない、この子たちには笑つていて欲しい、心からそう思つた。

そう決意し、私は元気良く返事をした。

「うん！ いっぱい遊ぼう！」

そろそろ夕方になつた、子供達は私に手を振つて帰つていく、中には泣きながら別れを惜しむ子まで居てくれた。

かなり疲れたが、心地良い疲労感が漂つている。私にも人が愛せると知つたから心がとても清潔しい。

すると、岩瀬さんがジュースを持つて現れる。

「あ、今日はお疲れ様です。これどうぞ」

「ありがとうございます・・・」

岩瀬さんからジュースを受け取り私はいっぱい口に含む。

ああ、五臓六腑に染み渡るってのはこうこう事なんだなあ・・・

「秋月さん、凄く楽しそうになりましたね」

「ええ、上へやつて遊んだりするのよ、多分産まれて初めてだから」

「ハハツ、そんなオーバーな。でも、やつぱは子供つていいですね」

「そうですね・・・子供は良いです」

「私、お父さんが教師やつてて、その影響でこんなアルバイトやつてるんですよ」

「くえ・・・」

「秋月さんはどんな理由なんですか?」

「お前に足りない物があるから、上へで働いてみるつて言われたんですよ」

「くえ、お父さんですか?」

「いや・・・父親とは会話した事ないです。それにもうとにかく死んでます」

「あ・・・」めんなり

「いえ、事実ですか?」

私が軽くそう笑うと、しばらく会話が途切れた、しかし、意外に気まずくなつてない。

そして私達はしばらく座りながら、黙つてジュースを飲む。

「親代わりだつた人に言われたの」

「え？」

「父も母も親戚も、私達を疎んだ・・・でもその人だけは私達を唯一かまつてくれた」

「へえ・・・素敵な人ですね」

「うん、ちょっと狡賢くて、腹黒くて、それでいて強い人」

「ハハハ、なんですかそれは？」

私と岩瀬さんは笑いあつた、歩んできた人生は多分対照的、だけ  
どこうやって笑える。

過程なんて関係ない、今が良い状態ならばこうやって私は全く違う世界の人とも関われた。

今日はかなりの大収穫だ、これから私の人生はこうやって新しく始まつていく。

好きだの愛だのは後回しにしよう、色々な事を見て、色々な事を体験しよう。

心から、そう思った。

## Days3・天美命（前書き）

今回は命です。彼女については神々で色々書こうと思つてます。  
命を書く時によく聞いた曲はさくらんぼですね。  
次回は正宗、そして時雨の一本続きとなります。

## Days 3・天美命

夕方の千島家のリビング、私と蒼ちゃんといもーとは一つの机で勉強をしている。

明日は編入試験、とりあえず筆記と面接があるらしい……全くめんどくさい。

ふと、時計を見ると時刻は午後六時、どうやらもう一時間も勉強してしまったようだ。

(ねむう……)

自慢じゃないが、私は勉強なんて殆どした事が無い。

ぶっちゃけ、小学校と中学校すらまともに行つてなかつた気がする、今思えばその記憶も全く無い。

私はとある事情により、五年以上前のほとんどの記憶を封じられている。

その前の自分はどうだったのか気になるけど、今は気にしない。

うん、気にしない。

そう　　今はただ眠い、それが私にのこつた最後の感情……

・とか言って見たり。

うー！　うー！　うー！　うー！

目の前に、並ぶのは見た事のない複雑怪奇な文様、私の圧倒的な頭脳を以てしてもちつとも理解できない。

大体、何故編入に試験が必要なのかもわからない、学校行きたい人は行かせてあげればいいじゃない。

……そんな事を考えて早十五分、さつきから全く進展していない。

そして、私は民望書房刊『これから学ぶ、中学数学の基礎』著者瀬純也値段750円を睨む。

大体高校生の編入試験を受ける私が何で中学数学を勉強しなきや  
なーらーなーいーのー！しかも隣ではさあ！

「ああ、 $x_1$ は $x_2$ の式を代入してね」

「ん……サンキュー」

蒼ちゃんといもーとが仲睦まじそうに勉強している。お前ら思春

何て思うが、無論口に出せるわけも無く、私はシロシバ問題集に取り掛かった。

しかーし、五分でもせーつ！世の中足し算割り算掛け算引き算が出来りや何とかなるのー！

「命ちゃんは出来た？」

「私の事はお義姉ちゃんと呼べー！」

やだ

うわ、このいもーと私のありがたきお言葉を一刀の下に切り捨てやがった。とても蒼ちゃんの妹とは……思えるね、うん。

この兄妹つてもしかして……結構似たもの同士？ だつてありえないほど強いし、お互い何か根暗っぽいし。

それでも蒼ちゃんは顔とかかっこいいからいいんだけどねー……つて双子だから似たような顔つきじゃん！

「何を悩んでるの？」沙月の問題はさつき解き方教えたでしょ？」

「わからないもんはわからないーいー！」

「命ちゃん……編入試験は明日だよ？」

「わ、わかってるけどさあ……私が落ちるなら蒼ちゃんも落ちると思つむ？ なんたつて中学一年から勉強してないんでしょ？」

私は蒼ちゃんに聞こえなこよに小声で言へ、チラリと蒼ちゃんの方を横目で伺うと何やら黙々とやっていた。

するどこもーとも私に顔を寄せてきて小声で何かを喋りはじめた。

「言つておくけど……お兄ちゃんはありえないほど、頭がいいんだよ？」

「ええつー？ 全然そつは見えない……」

蒼ちゃんは、私の中のイメージでは勉強が出来なくてドロップアウトしたヤクザ。

だつて初めて会つたときが・・・桐生の家の人にばつばつさと切り捨ててからねえ……

確かに怖かつたけど、あの時の私はほとんど感情なんて持つてなかつたからなあ。

お姉ちゃんと空我と大和が私の記憶を封じて、桐生の家に閉じ込めた真意はわからない。

あの日は凄く悲しかつた氣がする、ずっと泣いて、泣いて、泣いて、泣いて・・・お姉ちゃん達を困らせて.....

(痛つ・・・)

「ああ見えて、中学の時は学年トップだったわ  
頭の中に鈍い痛みが奔る、まだ思いだせないか……

「ああ見えて、中学の時は学年トップだったわ  
「信じられない……」

「人は見かけによらず、いい教訓だったでしょ？ ジャあ続きをどう  
うが」「うわ

「こもーとの無慈悲な宣告、いつか義姉になつた時にはいびり倒してやる。

そう決意し、私は再び問題集へ向かうすると家の電話が鳴り響く  
か、私と蒼ちゃんは田でこもーと出でと合図をする。

「もしもし、千鳥ですナジ……ああ、お父さんか

どうやら蒼威さんからの電話のようである。そういえば珍しく廊下に飛び出してないと思つたら出かけてたのか。

遥ママも見てないつて事はどうやら一人で出かけたようだね、この家つて本当に放任主義だなあ……

私がここで暮らし始めて、約半月。主の蒼威さんは今まで働いた金で、ダラダラと生きており、遥ママはそれを容認しつつもたまに嫌味を言つたりしている、そして子供の蒼ちゃんといもーとは毎日私と遊んだり、それぞれの暮らしをしている。  
つまりは、平和つて事、悪鬼討伐も全然していない、普通の子と全く変わらない生活。

「お父さんとお母さん今日は飲み会行くつてー

「こもーとが私と蒼ちゃんに告げる、流石蒼威さんと遥ママ、まだ

高校生の子供を置いて一人で飲み会とは……

すると、私は蒼ちゃんの顔が固くなっているのがわかつた・・・  
この顔は何かに警戒しているような顔だ。

その表情が浮かんだのは一瞬であり、数秒後にはいつも通りの無表情に戻っている。あ、そういえば……

「ねー、いもーと」

「ん?」

「私達の晩御飯はどうするのー?」

「何かテキトーに食料集めて食つてろつて言われたけど……

「じゃあ、いもーとが何か晩御飯つくつてよー」

「私があ?」

「……まあ、いいけど」

「……」の中で唯一の暇人じゃん

そういうと、いもーとはキッチンの方に向かって冷蔵庫を漁り始めた。

私は満足顔で勉強に戻ると、ふと視線を感じる……横を見ると蒼ちゃんが無言で私を睨んでいる。何故?

……もしかしたら勉強が進んでない私に怒っているのかも知れない、やん、もうそんなに私と一緒に高校に通いたいのね。

よししゃあ! 頑張って勉強するぞー。私は脳細胞をフル稼働させて、すべての持てる知識を使い問題を解いていく。

…………そんな時間が一時間半ぐらい経つただろつか？キッチンからせほんのりとした良い匂いが漂ってくる。すると蒼ちゃんはいきなり立ち上がって、

「おー、命」

「なあー？」

「……俺、ちよつと用事思って出したからパソコンに行つて来るわ」

「ん、いってらっしゃー」

「……ガンバレよ」

そう言い残し、蒼ちゃんはソービングから出で行った。 フフ……頑張っちゃおうかな！

つてーか、蒼ちゃんが私を励ましてくれるなんて凄く久しぶり、何かすっごく嬉しい！

いもーとの晩御飯も楽しみだ、遙ママの料理があそこまで美味しい以上娘であるこもーとともにかなり期待がもてる。

「命ちゃん、お兄ちゃん、出来たよー」

私は全速力で駆け出すと、キッチンの方へと向かつ。

そこには真っ白な液体が置いてあり、中々に美味しいそうなシチューがある。

いもーとはプロンを外すと、怪訝そうな顔で私へ問いつ。

「あれ？ お兄ちゃんは？」

「んー？ 用事があるからノンビリへ行くつて」

「ふうん……何かお兄ちゃんって昔から私が料理作る口は居ないんだよねー、突然遊びに行つたりさ」

「え……？」

いもーとの不思議そうな言葉に私はそれとなく不安を覚える、確かに蒼ちゃんは食べる事が好きだったはず。

死罪六神時代は、「飯の時間の五分前にはもう席についてないと いう徹底っぷりだった。

その蒼ちゃんが……

「まあ、冷めちゃつから早く食べよ、今回のはこつもよつ甘みが多くて美味しいはず」

甘みつ！？ 天美じやなくて甘みつ！？ とか思つてしまつほど私は動転しているようだ。

確かにシチューには甘みは必要である、ただそれは野菜の甘みとかルーの自体のまろやかな甘みの事を言つ。

でも、いもーとは幸せそうな顔をしてシチューを口に運んでいる、うん……あの反応なら大丈夫そうだ。

「あー、甘くて美味しい。やっぱ私は天才かも」

甘くて……？ 普通シチューの美味しいさを表す時は他の表現ではないだろ？

よくよく見てみると、私のスプーンを持つ手は震えていた。

「命ぢゃん？ どうしたの？ 早く食べなよ」

גָּדוֹלָה... גָּדוֹלָה...

いざ決心をして一口。

.....、「メ——ル——ヘ——ン——つ！な味が  
した、すなわちあ、あまままま、甘い.....。

い、あま――――――い！

「この料理は甘いから、あんまり食べると太っちゃうのが難点なんだよねー」

幸せそうな顔のいもーと、しかし私はそれどじろではない、兎に角水が欲しい。

だが、あまりの甘さに声を出す気力すら起きない。「なんじゃこの料理はあ！　ただの食物レイプじやねーか」と言いたい。しかし、天使のような笑顔でシチューを食べるimotoとの顔を見ているとそんな事は言えなかつた。

「な……中々特徴的な味だね」

「お、命ちゃんはわかつてくれる？ 時翻ちゃんとかママは生まれる時代が100年早かつたとか言つんだよー？」

……時雨さん、遙ママ。多分この料理は100年経つても受け入れられないと思います。

私は意を決して再びスプーンをとり、シチューといつ名の暴力を胃の中に収めていく。

肝心なのは舌で味合わない事、普通に噛んで飲み込むだけならば味は感じない…………私の長い戦いが始まった。

30分後、何とか完食した私は、ソファード横になっていた。いもーとがあんなに甘党だとは知らなかつた……今になれば蒼ちゃんが私を睨んだ理由が分かる。

あのガンバレよ、は…………そういう意味だったのかチクショウ。すると、ドアが開く音がして、蒼ちゃんがリビングへと入つくる。そして、部屋の中に漂う匂いを嗅いで一瞬顔をしかめると、

「…………生きてるか?」

「まちまち

「あいつは大の甘党だ、もう半端ないぐらいな

「体と心に刻み込み…………いや、刻み込まれました」

「ま、ドンマイ

そう言ひと蒼ちゃんは私の頭を優しく撫でてくれた。うわ、よっぽど後ろめたいんだな。

でも…………凄く幸せ。こうやって撫でてもうれるならこーとの殺人料理万々歳なような気もしてくる。

これはちょーーーっただけ、いもーとに感謝しなきゃいけないか

もね。だが体の調子は相変わらずよくなるのが現実。  
すると……

「あ、お兄ちゃん帰ってきたんだ」

「おひ

「お腹すこいでるでしょ？ 私の作ったシチューあるナビぐらべる？」

「あ……こや、俺は途中クラスメイトに会つておひがくーメンを  
一緒にな」

「何でクラスメイト？ 学校にもまだ通つてないでし

蒼ちゃんの顔に冷や汗。びつやう珍しく言訳をついたりして。  
少し取り乱しつつも、蒼ちゃんは慌てて言こなおす。

「いや、縄柄と会つたんだよ」

「志穂？ あの子は今海外行つてるんだが？」

「じゃ……じゃあ大野さん」

「じゅあつて何よ？」

「い、いや……あんな、落ち着いてよく聞け」

「？」

本当に珍しい事に蒼ちゃんが慌てている。それを見ていて私は一

つの事を思つてついた。

「フフフ、……愛しの彼女を見捨ててラーメン食べてきた罪は重いわよ。」

「いもーと、蒼ちゃんはね。いもーとの料理を食べたいんだけど照れて上手く言えないからそんな言い訳してくるんだよ」

「お、おこ……お命お！」

「何だ、兄妹なんだから遠慮しなくていいのじゃ。んじゅこつち着て」

いもーとが蒼ちゃんを引きずつてキッチンへと連れて行く。蒼ちゃんは多少の抵抗を試みてはいるが、だが、いもーとは意に介さない、とこつよつも聞いてないんだと思つ。恐るべし、千島遙緋。

そして壁越しにこんな声が聞こえた。

「ほら、こつまでも照れてないの」

「照れてねえってのー！」

「ママからお兄ちゃんには優しくするって言われてるんだから、ほら遠慮しないで」

「うう……ぶほつ」

壁の向ひから聞こえる轟き、蒼ちゃん、大好きだったよ……

「ちゅ、ちゅっと汚ーーーっ……。何でこきなつぱりのすばりのよーっ。」

安らかに.....

余談だが、次の日の編入試験はズタボロの体で行われた。

それでも一応合格ラインには達していたようで、私達二人は九月から高校生になれる。

ちなみに、蒼ちゃんと私のテストの結果はほとんど変わらなかつたらしい。（試験後、蒼ちゃんはしばらくショックで寝込んだ）そして私は改めて思った、千島遙緋、料理式神共に凶悪と認識。これから気をつけようと思つ。

## Days 4：八神正宗（前書き）

八神正宗は結構古くに作ったキャラですね。  
考えた順番で良くと陸人の後に来ます。  
次回は、このお話の続きで時雨です。

そろそろ神々も書き溜め終わつたので、  
十一月には投稿しようと思つてます。

とある梅雨の時期の早朝、僕は今年こそと思いつい朝一で墓参りにやつてきた。

去年はギリギリだつたからね、まあ、最近は悪鬼の数も減つて時雨が他の雑務をこなしてくれるから僕は結構暇なんだよ。

そろそろ八神の頭首もある子に譲つていいのかもしない、まあそんな事を考えながら僕は墓前に屈む。

墓は相変わらずそこにあり、いくらそれを否定したって、もう深雪は帰つてこないのが真実。だが、僕は語らずには居られない。

(今年も、生きてまたここにこれたよ)

今日は数年ぶりぐらいの一日前オフだ。ソロドしづらへ回想してみるのも良いかも知れない。

僕がの世界が変わったあの日から、この世に絶望したあの日までの事を

僕の両親は、僕と兄を捨てて八神から出て行つてどこかで死んでしまつたらしい。まあ、あんま興味なかつたね。

あの頃の八神は、本当に凶悪な集団だつたと思う。僕の祖父はとても厳格な人で、僕と兄は厳しく、強く育てられた。

齡70過ぎにも関わらずその力は若い僕と兄さんでも敵わないほど、それほどまでの格を有す男。

祖父は、主に力 権力や式神についてを僕達に叩き込んだ。

その結果僕と兄の性格は歪み、僕は家の権力を誇示してやりたい放題、兄は式神という暴力を使ってやりたい放題やつていた。

だがしかし、僕と兄の仲は決して良くなかった。八神は実力を重んじる、すなわち強いほうが頭になれるのである。

兄は日本各地を支配し、祖父に認められようとし、僕は祖父の傍で権力を使う事で認めさせようとした、今思えば馬鹿な話だが。

(まあ、今思えばあの頃の僕は馬鹿だったんだね)

そんな時、そろそろ僕も家庭を持ちたくなつた、まあ僕だつて健全な男子だからね。

そう そして祖父と浅葱要、詩歌の父親の策略により僕は浅葱詩歌と出会つたのである。

綺麗で、儂い子だつたのが印象的、何故か僕は彼女に猛烈に惹き付けられ、そして結婚をしようとした。

(まあ、そこであの馬鹿達が絡んできたんだよ、深雪も知つているあの馬鹿達さ)

それが当時高校生だった高遠陸人、千島蒼威、神埼森羅の三人、今思い返しても彼らは非常識だったね。

だけど、僕には無い大切な物を沢山持っていた、馬鹿だったけど。ああ、それはもう馬鹿だったよ。

最初は取るに足らないガキ共だと思って、僕は適当に痛めつけて詩歌から手を引かせようとしたんだ。

だが、あの三人はかなり強い　というよりも高校生のレベルを超えていたと思う。

そして彼らの中の一人、千島蒼威が僕達緋眼の一派の分家の一つ、千島家の末裔だとは思いもしなかったよ。

千島は分家の中でも本当に謎が多い、一百年前から全く音沙汰無く、ほとんど一子相伝のような家だったらしい。

ああ、そういうえば罪歌と狂と関わりだしたのはこの後だな。

それから僕は詩歌やあいつらと関わるにつれ、人と人の心や、つながりなんかも学んだ。

それは、どんな権力よりも式神なんかよりも強く、強大な力絆。

僕は詩歌との結婚を諦めた、不思議と祖父も反対しなかった、いやその頃あの人にはもう浅葱に興味はなかつたんだ。

(千島、祖父は秋月よりも真砂よりも千島に多大な興味を示していた)

その後、僕と蒼威は緋眼使いらしく生身での決闘をしてみた。

式神を使う気は全くない、今まで我流で緋眼を使ってきたチンピラに僕は負ける気はかけらもなかつたんだと思う。

実質僕のほうが優勢だった、だけど蒼威はそこで千島の緋眼の昇華型、終式を発動させた。

…………ああ、認めるよ、あれは完全に僕の負けだったね。

だけど負けて学ぶ事は数多くあつたんだよ。祖父も僕達の戦いを満足そうにして見つめていた。

それから僕は、己を磨き、新しいハ神を作るために数多く勉強を開始。毎日が戦場みたいな感じだったね。

困難な道だつたけど、今までの人生よりずっと充実していたと思う。

(そして深雪 君に出会つたんだ)

寒い冬だったと思う、再び縁談の話が来たんだ。その相手が水無瀬家の次女、小村深雪。

まあ、経歴はひたすらお嬢様な感じ、名門私立のエスカレーター式出身の子。箱入り娘、それが深雪の第一印象。

それでも一応名高い名家とあって、ハ神としては断る理由はない。そして、初めてのお見合いの時、

「正宗さんは、あまりお笑いになりませんのね」

「へラヘラしてゐる者にハ神の頭首は務まりませんよ」

「じゃあ、私が貴方が笑顔になれるように、ついていて差し上げます」

……そんなやり取りがあつたはず、そして僕達は結婚した。まあ……お家の事情って奴もあつたけどさ。  
僕はあまり深雪の事を愛していなかつた、やつぱり詩歌の事をずっと引きずついていたからね。

愛のない政略結婚、大きな家ともなればそんのはほとんど常識

である、深雪もそれはわかつてていたのだな。」

だが

「正宗さん

「ん?」

「貴方が私を愛していない事は知っています、だけ……子供を作りませんか?」

突然の申し出、しかも愛のない事もまで深雪はわかつていてそれを望んだ。

ああ、言われないでもわかってるよ、僕は最低の男なんだよ。それが僕、八神正宗。

翌年 時雨が産まれた。ああ年甲斐もなく久しぶりにまじやいだね、子供って本当に可愛いと思つたよ。

そして多分そこからだ、僕が深雪を真剣に愛し始めたのは

「時雨、正宗さんみみたいな子になつちや駄目ですよ」

「…………嫌味かい?」

「あら、聞こえました?」

「それはもう、まあ、許してくれとま言わないで、これが僕の業だ

「フフ……妻が夫を許さなくて誰が許すとこうのです?」

そんな甘い?会話が出来るほどになっていたね、ああ、僕もかなり成長したもんさ。

そう、あの時が人生で一番幸せだったと思つ。何もかもが上手くいく気がして、僕は調子に乗つてたんだ。

祖父も、僕の事を認めてくれたようで実質八神は僕のもの、そして高校卒業間近だった、蒼威と陸人と詩歌が家に来ていた。

「千島と浅葱つて、どんな事をしている家系なんだ?」

彼らはそう僕に問う。だから見せてあげた、世界の裏にうごめく悪鬼という名の生物を。

最初絶句するだけだった彼らだが、意外な事にこっちの世界に入る気になつたようである、何故かはわからないけどね。

負けん気、体術、式神を扱う才能 全てにおいて蒼威と陸人は恵まれていた。

「これが、俺達の式神……」

そして彼らは卒業し、陸人と詩歌は浅葱の家へと行き、蒼威は蒼一と遙緋と遙さんを連れて八神へときた。

蒼一と遙緋はその頃はまだ幼児だったが、時雨とともに仲が良かつたと思う。

そしてたまに罪歌と狂の相手をしに秋月へと出かけ、僕は一人の心のケアをしてあげ、僕もまた癒されていたんだと思う。

深雪も遙さんと上手くやつていたようで、僕と蒼威は安心して悪鬼討伐の使命を果していた。

(そして、あの事件が起きた……)

僕の兄、八神村雨が海外で悪鬼を狩る傭兵のような仕事から帰ってきた。

その頃の兄はもう人間が変わった様に荒れていて、まあ、無論の

事ほぼ八神頭首となつていた僕にケチをつけたわけだよ。

そして祖父は兄に言つ。

「力だけが八神じゃない事を俺は知つた、だから頭首は正宗とする

「ふざけるよ……アンタが力が全てだと教えたから、俺はここまでやつてきたのに…………」

兄と祖父の確執。それは時雨や深雪にも多少なりの影響を及ぼしていたと思う。

その頃の時雨は、小学校低学年ながらも式神を使いこなし、多方面での才能を見せる正に天才児だったからである。

この僕ですら嫉妬するほどの才能、そして深雪の育て方がいいのだろう、性格までも人に好かれていた。

ある夜の事だ、蒼威達は家族で遙さんの実家へ行き、八神の他の者も悪鬼の集団討伐に出払っていたその夜。

時雨と深雪を寝かすと、僕はもう一仕事しようと思い、庭に出る。すると……山の方から一つの式神の気配、しかもそれは兄と祖父の式神の気配、そして僕は走ったね、それはもう全力で……

「兄さんっ！」

「正宗、か……」

兄の式神【紅椿】血を操る日本刀の式神の刀身が祖父の胸へと刺さっている。

兄は虚ろな眼だが、明確な殺意を感じさせる眼で僕を見た。

「八神は、力だ……だから、お前を殺して……俺が　頭首になる

「！」

緋眼を発走させ、兄は僕に迫る。

いつかは殺しあう、昔はそう思つて生きていたが長い平和が僕をボケさせ　いや、安穏とさせていたんだ。

僕は久しぶりに昔の八神正宗へと戻り、その冷徹なる式神の刃で兄を引き裂こうとする。

僕と兄は怒声を上げながら、数時間殺しあつた　血を分けた兄弟とは思えないほどの壮絶な殺し合い。

そして僕は勝負に出た二神風雷の最終形態、刀の柄と柄を接続した両刃の巨大な刀を構え、走る。

兄もまた、決着をつけようとしたのだろう、僕がつけた傷跡から大量の血の刃が現れ、僕らは一瞬すれ違う。

その時の勝者は僕だった、僕は兄の左手を切り飛ばし、兄は僕に傷をつけられなかつた。だが、

「俺は死ねない……いつか、いつか殺してやるぞ」

兄は最後の力を振り絞つて、山へと姿を消す。

流石に追いかける気力は僕にももう無い。その場から僕は八神の屋敷へ帰ると、全ての事情を話した。

頭首の死と兄の裏切りが結果となり、僕は正式に八神頭首となる。夢にまでみた八神家頭首。

だけど、その全てを台無しにするよつなニュースが舞い込んだ。

「正宗様」

「何だ？」

「秋月家が、悪鬼に一人残らず皆殺しにされました」

部下から報告を受けた時は、僕は目の前が真っ暗になつたね。罪歌達とは、仕事が忙しくて一年ぐらい会えていない、その間にあつた事は最近聞いた。

今でも悔やんでいる、僕はあの一人の優先順位をもつと上げるべきであったと。

秋月家の屋敷に向かうとそこは酷い惨状であった。

血の匂いが充满し、しかし悪鬼と戦つたので死体は食べられてしまい、ほとんど無い。

僕は必死で罪歌達を探したが、死体や子供の服の一部すら発見されなかつた。

久しぶりに、絶望という物を味わつた、ひたすら、悲しい。それだけが心に残つていたんだと思う。

それから僕は、悪鬼の事や、秋月が何故滅んだのか、そして奥で見つかつた不自然な死体。

それらの調査を数年かけて進めるうちに、やつと結晶まで辿り着く。

日本に散らばる八つの結晶、それを追つていけば真相に近づけるかも知れない、そう思い僕は蒼威と旅立とうとした。

そして一番記憶に新しく、最悪な絶望が僕を襲う。

変わり果て、死罪六神という組織を結成した罪歌と狂。

八神に乗り込んできた死罪六神は、その時は罪歌と狂と剣菱、そして実の兄、八神村雨までもが居た。

そして壮絶な戦いの結果、深雪は……殺されてしまった。

あの事だけは、悔やんでも悔やんでも、悔やみきれない……人生を最初からやり直したいぐらいだ。

そうすれば今度こそ僕は……

そこまで僕が回想していたときである、不意に後ろから声がかかった。

「やあ、今年はお早いですね」

振り向くと、時雨が立っていた。

回想の時は違い、いっぽしの大人となっている顔つき、何とか最近嫌味っぽくなつてるのは気のせいだらうか？  
僕は気がつかれないように、田頭を拭うと時雨の質問に応えた。

「まあ、ね」

「三十分も座りこんでいて、寝てたんですか？」

「……過去を、振り返っていた。僕の変わり始めた時から、深雪が死ぬ時までね」

「…………父さん」

「お前も、まだあの時から解放されないようだね、一度回想でもしてみたらどうだい？」

時雨の花を持つ手に力が込められたのが見える。

この子もまたあの事件の犠牲者の一人、たまに夜一人で魘されているのも僕は知っている。

だけど、これだけは僕の力じゃどうにもならない、時雨自身で乗

り越えて欲しいと思つ。

「……やってみます」

「そう、か。じゃあ僕は帰るよ……今日は久しぶりに、酒が飲みたくなつたからや」

「わかりました」

僕は息子を置いて歩き出した、そう 僕らの時代はもう終わりなのかも知れない。

時雨はもう一人でやつていける。もつ僕の出番はほとんど無い。戦いの痛みと愚かさを知り、尚且つ死を乗り越えられたら多分時雨は八神最高の男になつてくれると思うんだ。

そうだろ？ 深雪……だつて僕達の大切な子供なんだからね

## Days5：八神時雨（前書き）

時雨は色々と試験的なキャラですね。  
理解者、それを田指して書いたキャラです。  
次回は、陸人か遙になりそうです。

## Days 5：八神時雨

父さんが墓場から去つていった、多分僕が来る前からずっと居たのだろう。

あの人は何だかんだ言って、他人に決して弱みを見せない。実の息子である僕にもね。

母さんを失つて父さんはどうやつてこの世界を生きてきたのだろう、誰にも弱みを見せずにたつた一人ですつと……

……ふう、感傷だな。でもまあ、今日は言つとおりに回想でもしてみようか。

何もかもが上手くいく、そんな事を思つてずっと生きてきた僕、八神時雨。

小さい頃から、望むものは何でも手に入れてしまい、金で手に入らないものは全て努力で手に入ってきた。

周囲からは次代の八神として期待され、僕もまた跡目が僕しかいないため、それになるつもりで頑張つてたね。

僕は基本的には、母さんと蒼一と遙緋と遙さんといつも一緒にいたと思う。もうほとんど家族のようなものだ。

(そう、の人達が居てくれたから僕は……)

蒼一はよくわからない子供だった、基本的には一人を好み、世界に興味が全くなさそうな感じ。

遙緋は遙緋でそんな蒼一と僕の後ろをチョロチョロとついて周り、いつも不安げな顔をしていたね。

昔はいっぱい遊んだ。毎日家中で追いかけっこしたり、外でボールやエアガンを使って毎日笑つて、笑つて、笑つて……

そして、幼い頃から僕は上を見させられて生きてきた。

ハ神の人達は僕の事を天才とか、ハ神最高の子供とか言つてよく可愛がってくれたけど。

僕は満足してなかつたんだよね。 そう、小さい頃の僕の目標は蒼威さんと陸人さんと父さんだつた。

どんな時にも冷静で、式神と緋眼終式を使いこなしどんどん名を広げていつた蒼威さん。

没落していた浅葱の力を、あの真つ直ぐな性格と圧倒的な力で立て直した陸人さん。

そして……誰もが尊敬していた父さん。

(そう……僕は常に高みを見させられていたんだ)

僕は暇な時は蒼威さんと陸人さんによく付きまとつた。

そういえば昔は蒼威お兄ちゃんと陸人お兄ちゃんと呼んでいたつけ、僕も可愛い子供だつたな。

一緒に悪鬼を討伐しに行つたとき、囮にされたり、囮にされたり、餌にされたり、いきなり大群の中に投げ飛ばされたり……

あれ？ 今思えばあれは虐待だつたのか？ 今度遙さんと詩歌さんに言いつけてやるつて脅迫してみようかな。

いや…………あの馬鹿みたいに愛妻家の一人の事だ、多分恐ろしい報復が待つてゐるだろう。

今のうちに蒼一と遙緋と梨香を懐柔しとくのも将来のためかな。老後絶対にびつてやるためにもね。

……話が逸れたね。

でも僕は思うんだよ、あの一人が居なかつたら今の僕は絶対に無いと思つ。

の人達は僕よりも遙に勉強が出来ない、思考も馬鹿といえよう、特に陸人さん。

だけど……中身が格段に僕より上だ。それだけは認めてるわ。

そんな感じで、僕は毎日を幸せい生きてきた。

そんな生活が崩れ始めたのはあの夜からだ。  
僕が確か小学校の上級生になろうかならまいかといった様な時期  
だったと思う。

その日、僕はいつも通りに小学校へ行って、いつも通り帰宅して、  
蒼一と遙緋と他の八神と一緒に訓練を積んで、  
母さんの隣でいつも通り明日を迎えるとしてたんだ、そう  
僕は何も疑つていなかつた、いつも通りの明日が来るこことを。

「ん……？」

その夜、僕はトイレに行きたくなつて目覚めたんだ。

僕は音を立てないよう起き上[が]ると、廊下へ出てトイレのまつ  
へ向かう。

八神の屋敷はその頃にはかなりの年季が入つていたため、夜中に  
歩くと子供心なりにかなりの恐怖を感じた。

遙緋何かはいつも僕を起こしてトイレに行つっていた気がする。蒼  
一を誘えれば良いのにと思っていたが、  
多分あの頃から遙緋は蒼一に対して齎えていたんだりうつと思  
あまり仲もよくなかったみたいだしね。

(やつぱ怖いなあ……)

そう思いながら僕は用を足し終える。そして八神の家の周囲で爆  
発的に式神の気配が高まつたのを感じた。

何とも禍々しい、明確な殺意を感じさせる気配。当時十歳だった

僕は足が震えたね。

だけど、あの時の僕は動けたんだ。そして僕は恐怖を押し殺し、母さんに危険を伝えようとして走った。

「時雨君っ！」

八神の分家筋の信一さんが僕に声をかける。

その声を聞くからにどうやら状況はかなり悪いようだつた。

「な、何が起きてるんです？」

「賊が侵入した……もつ何人も殺されている。君は深雪様を連れて隠れてるんだ」

「で、でも……」

「冷たいようだが、君は足手まといなんだ」

そう、いくら式神の力が強く、剣術に秀でていたからって実戦で僕が役に立つわけがない。

信一さんや父さんは人を殺した事がある。だけど僕はない。

その差は実際の殺し合いでは、かなりのハンデとなることをあの頃の僕はわかつていなかつた。

そしてそんな信一さんも……一年前に真砂剣菱によつて殺された。

「わかりました……」

それでも一応納得して僕は信一さんと別れて走る。そして廊下の角を曲がると悲鳴が聞こえた。

同時に空氣の温度が熱くなっているという事にも気づく。そして

僕は廊下を曲がる

「…………っ！」

漆黒の長髪を持つ少女がハ神の術者三人を相手にナイフを持って襲い掛かる。

その少女の目は夜の闇の中で爛々とした緋色に染まっていた。そういう、それが秋月罪歌を僕がはじめて見た時。

僕よりも三つばかり年上の中学生のような外見であつたが、雰囲気は完全に常人の域を超えていた。

そして罪歌は鋭く疾走し、ナイフで術者達の急所を確実に切り裂いていく。一撃一撃に明らかな怒りを含んだその斬撃はわずか数秒足らずで熟練した大人達を血の海に沈めていた。

「お前……」

罪歌が僕を真っ直ぐに見据える。

情けない話だが、僕はその視線に射すべられ、動く事もままならなかつたね。

直前にトイレにいつてなかつたら絶対に失禁していただろう。

「き、君は誰……？」

緊張からか、そんな間抜けな質問をしてしまつた僕。すると罪歌は一秒ほど考え込んでから、僕に言つ。

「秋月罪歌」

凜とした美しい声だつた。

「秋月つて……僕らハ神の本家じや……」

「…………！」

罪歌が僕に向かつて走り出した。ナイフを逆手に握り、多分僕の首筋を搔き切ろうとしたのだろう。

怖い、ただひたすらに怖かった。ゆっくりと死が迫つてくる感覚、そして僕は

「ああああああああ！」

無我夢中で悲鳴をあげ、何の手加減も制御も無く式神の力を発動させる。

荒れ狂う重力の波が、周囲一帯に破壊の力をもたらし、僕や罪歌をも巻き込んで顕現した。

だが、再び罪歌は緋眼を発動させ、重場の範囲から逃れる。そして右腕を僕に向け、

「炎帝」

そう呟ぐ。すると罪歌の周囲に踊るような炎が現れる。

僕達が良く見ている暁闇炎帝の黒い炎ではない、真っ赤な、血のような炎だった。

そしてその炎は僕を恐怖のどん底に叩き込むには十分すぎるほどで、

「死ね」

無慈悲な宣告。爆発的な勢いで炎が僕の体を焼き尽くそつと迫つた。

あの時のことは今でも思い出すと、我ながら良くやったと思つ。

うん、だからこそ僕は今、ここに生きてるわけで。

そう、僕は自分にかかっている重力の力を軽くして、高く、高く飛び上がつた。

初めての事で、上手く力がコントロールできなくて、僕はかなりの高さまで跳んだんだよね。

空へと登り、月さえも掴めそうな感じだった。そして下を見ると、罪歌がポカンとした顔で僕を見ている。

「どうだ、ここまでこれるか」

そんな事すら口走ってしまったほどだ、さつきまで震えて死にかけてたのにね。

僕はゆっくりと地上へと降りていいく、罪歌はハ神の追つ手を気にしていたのか、僕の事は放置して行つてしまつた。

そしてちょうど母さんと僕の寝室の屋根の上に降り立つことができ、僕は部屋へと戻る。

「母さんっ！ 敵が来てるよ」

そう叫びながら、母さんの落ち着いた顔を予想しながら、僕は戸を開けた。

しかし、そこに待つたのは最悪の現実。ああ……足が、震えだしてきたね、まだまだあの恐怖は根付いてるのか。

まず中に入つて感じたのは血の匂い、そして赤く月明かりに輝く日本刀、そして嫌いだつた叔父の姿。

「時雨、か」

叔父が僕を見た。僕も叔父を見た

いや、その奥にあるものを

見てしまった。

それは血を流して倒れている母さんの姿。綺麗だった寝巻きや髪に血がこびり付き凄惨な姿となっている。

「あ……あ……あ……母さんつー…」

僕は母さんに駆け寄ろうとした、しかし叔父は軽く足を振つて僕を蹴飛ばす。

どうりど、鉄の味が口の中に広がる。気持ち悪い。そして叔父は僕を憎悪の籠つた瞳で見ると、

「俺は正宗が憎い、八神が憎い、だからお前も憎い」

そう言い、刀を振るつて僕を切り裂こうとした。でも、いつまで経っても痛みは襲つてこない。

僕はゆっくりと皿を開け、前を見ると母さんが僕の皿の前に立つている。

血塗れでも母さんは綺麗だ、何故かそんな事を思い そして母さんの胸から銀色の刃が突き出す。

それは僕の顔の数センチ前で止まり、噴出した血が僕の顔へとかかる。

「時雨……」めん……ね

涙目で母さんが言つた。そして叔父は次々と母さんの背を刀で切り裂く。

一発一発に母さんの顔が苦悶に歪んだ、だけビ僕を見る皿だけは笑っていた。

そしてついに、沈黙。

「馬鹿な女だ、抵抗しなければ楽に死ねたものを」

その言葉で、僕の中の何かが切れた。

全身が熱い、細胞の一つ一つが熱い、体が今にも焼ききれそうで、髪も逆立つような感触。

そう、それは紛れも無く僕が全てを忘れて、怒りに身を任せた初めての瞬間。

「へ……ああああああああああああああああああああああ」

僕は全力で吼え、式神の力を何の躊躇いもなく、何の制御も無く周囲の空間に展開。

僕達が居た屋敷の屋根壁その化調度品全てが荒れ狂う重力の嵐によって吹き飛ばされ、碎かれ、破壊される。それでも僕は力を止めようとしなかった、この世界が、全てが憎かつたからだ。

その点において、僕は蒼一の気持ちが今なら分かる。あの子も多分こんな感じだったのだろう。

全ての力を出し切った僕は、全壊した屋敷の一部で母さんを抱えて座っている。

母さんはもう動かなかつた。何度語しかけても、振り重かしても全く動かない。

まだ暖かい体がだんだんと冷たくなっていくのもわかつた、そしてそれと同時に僕の心も絶望に染まつていく。

「流石は、正宗の息子と言つた所か」

後ろを振り向くと、血塗れの叔父が刀を振り上げて立つてゐる。僕はもう抵抗する氣すら起きなかつたね、もう世界がどうでもよくなつてしまつていたんだ。

そして遠くから、父さんの声が聞こえた。

「時雨つ！ 深雪つ！」

「ハハッ！ どうだ正宗！ お前が俺から全てを奪つたようだ、テリヤキだぞ！」

叔父が笑つと、父さんは唇を噛み締め、緋眼を発動させたのであら、目が赤く染まつた。

だがその色は通常の緋眼よりも更に濃い、血の色。そう、八神の緋眼墜式だね。

突如として父さんの姿が消え、叔父が吹き飛ばされる。

「なつ！？ 墜式だとつ！」

それが叔父の最後の言葉だった。次の瞬間には首が跳ね飛ばされ、更に切り裂かれる。

どんどん人の形を無くして行く叔父、そして父さんはその死体に雷撃を撃ち込むと、文字通り綺麗さつぱりと消した。

さつきまで自分の命を奪おうとしていた者が呆気なく居なくなつてしまつた、そしてそれと同時に僕を氣を失つたんだね。

次に僕が病院から出た時には、もう母さんの葬儀は終わっていた。母さんの体は炎に焼かれ、僕が今立っている墓の下へと埋められている。もはやどうしようもなかつたんだ。

それから僕は、母さんの事を忘れようと、今まで以上に勉強に

励んだんだつた。

そしてそれに追い討ちをかけるように蒼威さんと父さんは仕事で、数年間帰つてこなかつた。

その間、僕の生きがいはハ神の仕事を覚えるのと、蒼一と遙緋を鍛えることだけだつた。

遙さんが僕を気遣つて、しおりちゃん一緒に食事に招待してくれた。

多分、それがあつたから僕は今も、殆ど至る事無くいつも今を生きてられてるんだね。

回想を終え、僕は立ち上がる。

今日ここに来て、回想できてよかつたと思つ、多分これで僕はまた一步踏み出せるはずだ。

そして母さんの墓前に向かつて、

「あの時はありがとうございました。貴女のお陰で僕は今日も生きていまづ」

そう言つと、僕は踵を返して歩き出す。

これから蒼威さんの家にケーキでも持つて行つて見ようかな、僕をここまで育ててくれたお礼も言いたい。

それ以上に、僕はあの人達と会いたい。これもまた家族という形の一つなのだろうか？

まあ、とりあえず今はケーキに集中しよう。これは結構重要。そ、あの家は好みに五月蠅い。

遙緋は激甘、蒼一と蒼威さんは酒系、遙さんはチーズケーキ。命

ちやんは向だね、  
ま、蒼一と一緒に良いか。

## Days6・千島遙（前書き）

今回は、あまりスポットの当らないキャラ、遙です。  
自分の創作では@ホーム以外全てに出てるキャラクターですね。  
そんなわけで次回は蒼威達が出会った時の話になると思います。

ええ、今日もいつも通りの田常が始まりましたとも。

私、千島遙の田常は、朝六時半に起きる事からはじまる。そう、子供達に朝ごはんを作つてあげるのだ。

長男の蒼一は私よりも早く起きて、ランニングや筋トレをしてから、朝食を取るため、いつまでもぐずぐずは寝てられない。あの子がお風呂場でシャワーを浴びている音で、大体私は田を覚ますので、じこで寝過ごしたら非常にまずいのよね。

「んつと……」

じつこいつ声を出してしまったびに、私は年老いている事を実感してしまう、ああ、永遠の十代がとても懐かしい。

高校を卒業したら、すぐに私と蒼威君は結婚したし、その数週間後に蒼一と遙緋が産まれたりもして慌しかった十代。

私の両親は私が小さい頃に他界していて、蒼威君もほとんど勘当状態だったので私達の結婚は凄くスムーズだった。

良姉ちゃん徹兄ちゃんも全く反対はしなかった、それどころか蒼威君に絡みまくつて、逆に困惑してしまったぐらいである。

そして結婚式は私の生涯で一番楽しくて、嬉しかった日。空先輩

や誠兄ちゃんや、夕姉さんや空音ちゃん。様々な人が祝福してくれた。

それが今は、三十五になってしまっている。お肌の張りも日に日に無くなつて行くし、シミ対策もそろそろ本格的に考えなければ。

「ふむう～」

床では相変わらず蒼威君が幸せそうな顔をして眠っている。

どうして一緒にベットで寝ているのに蒼威君はいつも外側に出て行ってしまうのだろうか、それが一番の謎。

それにしても蒼威君、明るくなつたな……初めて会つた時はほつとんび蝶りない子だったのに。陸人君は何にも変わってないけど。……おつと、おつと、物思いしている場合じゃない、朝ごはんを作らなきゃ。

顔を洗つて髪に櫛を入れて、着替えると私はキッチンへと向かう。  
ああ……遙紺つたらまた変な甘い料理作つて、キッチン中に妙な匂いが漂つてるじゃない。

フライパンも使つたら、ちゃんと洗つとくよつと書つたのに……  
ん、これは、甘くない……命ちやんだなーっ！

後であの一人にはちゃんと言つとかなきゃ。全くもう。そして私がそんな事を考へていると、蒼一がドアを開けて入ってきた。

「おはよ～、母さん。飯できてる？」

「あ、おはよ～蒼一、もう少し待つてくれ」

「ん、わかった」

蒼一はそういうと、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで机へと持つていぐ。

そして新聞を広げて、一ページ一ページ、じっくりと時間をかけて読む。本当に……いう部分は誰に似たのだろう。

私は目玉焼きを焼きながら、息子の動きを観察する。近づいて

株でもやるつもりなのか、経済欄をよく読んでいる。

……おつと、そろそろ焼き上がりだな。

「はい」

「ん、 いただきます」

命ちゃんと遙緋が起きてくるまでにはまだ時間はたっぷりとある。朝のこの時間だけが、私と蒼一のコミニュケーションの時間でもあつた。特にこの子は相談とかしない子だから特にね。

新聞を読み終わり、朝ごはんをあつと言う間に平らげる蒼一、暇だつた私は学校の事とかを聞いてみる事にした。

「高校は、楽しい？」

「ん、まあ……神璽とか男の知り合いが居たから、何となくは溶け込めてる」

……よかつた。中学校の頃の蒼一は、誰とも接せず居たと聞いている。

やつぱりそれはとても寂しい事だと思ひし、母親としても息子には笑つていてもらいたい。

この子は、色々と傷ついてきたに違いない。あんまり蒼威君はそつちの事は話してくれないからよくわからないけど、

蒼一は……大切な女の子を鬪いの中で失つて、それで人殺し紛いになつてしまつたらしい。

でも、私は最後までこの子の味方で居ようとは思つてゐる。だつて昔がどうであれ、今はとても良い子だから……

「母さんの高校時代はどんなだったんだ？ あの駄目生物も今より

ばかおやじ

もつと駄目だったのか?」

「蒼威君は、クラスの中じゃかなつともな子だつて言われてたよ?  
委員長もやつてた事もあるからねー。」

私がやつて、蒼一は急に悲しそうな顔になつた。え? 何か  
変な事言つたかな?

すると蒼一は、一度溜息をつくと、真つ直ぐに私の手を見ながら  
言つた。

「母さん……そんな見え透いた嘘をつかなくていいんだよ」

「え……事実だけど? 蒼威君はクールで、結構物静かな子だつた  
よ?」

「なつ……一 ありえねえ……どうやつたらあそこまで人間堕ちれ  
るんだ」

蒼威君が明るくなつたのはあつちの世界で、仕事をするようにな  
つてからかな。

いや、多分蒼一と遙緋が産まれてからだと思つ、蒼威君も蒼威君  
なりに考えての事だと思つけど。

まあ……それにしても、ここまで息子の信用が無いとはね、十年  
も会つてなければ当たり前の話だけどさ。

そういえば、どつかに昔の『眞があつたはず……どうだつけ?』

「まあ、昔の事は今度教えてあげるわ、それから命ぢやんと遙緋を  
起こしてきて」

「ん、わかつた」

返事をすると蒼一は二階へ上がつていった。このまま蒼一は一人を起こして、自分は制服に着替えるのよね。

最近の流行だか何だかわからぬけど、蒼一の制服は沢山のアクセサリーがついている。

私達の時代は、腰パンが主流だったためあんまりそういうのは無かつたなあ……まあ腰パンしないだけ十分マシだけね。

そうやって、私が時代の差を感じていると、今度は詫びちゃんと遙緋が降りてきた。二人とも相当眠そうである。

「おはよう」

「ん…………おはよ」

「遙ママおはよー…………」

私の差し出した朝食を睨そつな顔で頬張る一人、こっちのほうが本当に姉妹っぽいわね。

ああ、最近もう一人欲しいなあ……なんて思つてしまつてゐる。年齢的にも多分最後だと思つし。

蒼一と遙緋もやつぱりああいつ生き死にの世界で生きているから、いつ居なくなつてしまつともわからない。

こればかりは、蒼威君の血筋に感謝している。この家で私だけが持つていらない力、緋眼。

私の血統、海野も正宗さん曰く、中々のモノらしい……まあ、徹兄ちゃんや誠兄ちゃん何かはまさに天才といえるだろ？

昔から馬鹿みたいに強かつた誠兄ちゃんだけ、徹兄ちゃんと良姉ちゃんには絶対勝てなかつたな、やはり海野にも優劣はあるのかな？

גְּדוֹלָה—מִתְּנַשֵּׁה—

「あ、命ちゃん……先に洗面台使つ？」

「んー……今日はいもーとが先で良いやー」

「わかつた」

すると命ちゃんは食器を水につけて、一階へと上がつていった。  
我が家この時間の洗面台は正に戦場、まあ、女の子が二人も居るからしじうがないんだけどね。

全く、髪の毛を縛りなさいって言つても時間が無いとか、ダメとか言つ遙緯……まあ、私もそうだつたけどね。すると何やら廊下のほうが騒がしい、ああ……今日もアレか。

「おい蒼一一、お父様を蹴り飛ばすとは何事だ！」

「んなとこで寝てるほうが悪いだろ？」「

「この家は俺が建てたんだからな、すなわち俺の領土だ」

「へッ……知つてゐんだぜ。」の家を建てる金は八神から出たらし  
いじやねーか

「うう……時雨か」

「十年分働いたんだから、庭付き一戸建てよこせたあ、随分出世したじゃねーかよ」

今日も今日とて、蒼威君と蒼一はいがみ合ひへ、そついえば蒼一は昔から蒼威君には懐かなかつたわね。

まあ、多分これが不器用な一人なりの「ハリ」ュケーションだと思つ、つてかそう思わなきややつてられない。

すると階段をドタドタと命ちゃんが下りてきた。

「蒼威パパさんと蒼ちゃん邪魔！『お座り』」

命ちゃんの式神の力が今日も発動したらし。蒼威君と蒼一は横目で睨み合いながら正座をしている。

すると今度は洗面所から遙緋が飛び出してきて、蒼一と蒼威君を「またか」みたいな目で見ながら通り過ぎた。

そう、これがこの家の朝の日常……この人、達疲れないのでしら？

そんなこんなで、私が洗い物なんかをしていると、三人が学校へ行く時間となつた。

玄関に出て、私が見送ると命ちゃんは元気いっぽいに行つてきまーすという、うんうん、明るい良い子だね。

しかし、最愛の息子と娘は一人は家の前で煙草を吹かしており、もう一人は寝ぼけ眼で立つてゐる。

「いつてらつしゃい」

私は笑顔で三人を送りだすと、リビングへ戻つて今度は蒼威君のお世話。全く、主婦は忙しい。

そして非常に珍しいことに、蒼威君は今日は朝っぱらからお酒を飲んでいない、それどころか着替えていも居た。

時刻はまだ八時を過ぎたばかり、いつもならこの時間は一度寝

していの……

「今日はどこに行くの？」

「ああ、森羅が今日休みらしいから、陸人も連れてどうか行くつと思つてね」

「陸人君……仕事は？」

「何か今、八神と合図でやつてるらしくから時雨に頼んだらしい」

「時雨君も災難ね……」

「ま、そういう星の下に生まれたような男だ、じゃあ行つて来るよ——！ また連絡するね」

「はい、こつてらつしゃい

今度は蒼威君を見送ると、私はとりあえずたまつた洗濯物から取り掛かる事にした。

この家は現在五人家族にしては洗濯物が少ないと思う。遙緋と命ちゃんも大半は制服で過ごす。

問題は蒼二と蒼威君。この二人は妙に服にこだわりがあるらしく選択のしかたにうるさい。

このジーパンは洗うなだとか、このシャツは自分でやるとか注文をつけるのよね。まあ、愚痴つても仕方が無い。

洗濯物を終えると、私はソファーに寝そべつてしまいのまま寝をする。

そして一時間ほど眠ると、お昼の準備をし、それから軽くストレッチ体操の時間。

昼ズバツとを見ながら、朝ごはんの残りを私が食べていると、玄関の呼び鈴を押す音が聞こえた。

「はーい

返事をして戸を開けるとそこには詩歌が控えめな笑顔で立っていた。

詩歌とは高校からの付き合いだが、最初は凄く暗くて苦手な子だったけど、今は親友と呼べる。

私達はたまにこつやつて集まって、お互の旦那への不満や、子育ての難しさをかたつてしているのだ。

「陸人が逃げ出したから、時雨君から私もお暇を貰っちゃってね。今大丈夫？」

「『めんねえ、多分それウチの蒼威君の陰謀だと思つ。まあ上がって上がる』って上がつて」

詩歌は気の利く子で、いつも何かしらお菓子を持っててくれる。そして私達はTVでワイドショーを見ながら、お茶とそのお菓子を食しながら語り合つ。

「それでね、陸人つたらね……また何かやってて、これは出会い系じゃない！ネットの知り合いとか嘘についてさ」

「ああ、相変わらず間抜けな言い分けだねえ」

「私、今回ばかりは本氣で怒つてもう別れるって言つたの」

「おお、詩歌も書つみつけになつたね」

「だつてそれだけ怒つてたもん！ そしたら子供みたいに泣き出してさあ……やつぱするこよ、アイツ」

「これまた、詩歌も十数年経てば変わるものだ。昔は「高遠くーん、えへへ」とかデレデレだったのに」

「今じゃ完璧に尻にしいている。まあ、あの甲斐性なしの大馬鹿者が夫なりば当然といえば当然だけじね」

「その点、ウチの蒼威君は安心だわ。蒼一が色々情報集めてるし、遙緋もよくフレッシュヤーかけてるからさ」

「蒼一君も遙緋ちゃんも優秀で良い子だもんねえ、ウチなんかは梨香が反抗期でね」

「あら、梨香ちゃんはウチの子の数倍は素直だと思つわよ」

「それが、親に黙つてピアス開けたり、最近なんか化粧もちょっと濃くなつてきてね」

「それは女の子だもん、私だって高校生の時はあけてたじやん」

「私は、ほひ地味な女だったからわ……何ていうかね……よくわからぬの」

「あはは、確かに高校の時の詩歌は地味だったわ」

「ひどーい！ それにしても、遙は昔から変わらないよね」

「何？ 私がそんな老け顔だったって言いたいの？」

「初めて会った時、先輩かと思ったもん」

「なつ…………！？ 詩歌～～～～！」

「そうやって私の午後は過ぎて行った。

そして、久しぶりだつたため私と詩歌は夕方まで話しこんでしまつた、そろそろご飯作らなきや。

「ひこうときはお互い主婦なので、知恵を出し合って話し合へ。

「どうせ蒼威君達はウチに帰つてきただから、今日は晩御飯一緒に食べなてかない？」

「ああ！ それ凄い助かる……でも梨香はびひしょ」

「携帯で連絡してウチに来てもらえばいいじゃない、何だったら蒼一を迎えに行かせるわ」

「うーん、じゃあひしおつか」

「ひつして、私達主婦の戦場が始まる。とりあえず詩歌は梨香ちゃんと連絡を取り、私も蒼威君と連絡を取る。

とりあえず、晩御飯を皆で食べようこうと、蒼威君も森羅君も陸人君も乗り気であり、決定。

梨香ちゃんもどうやら学校が終わつたら来るらしいよこよ本格的になつてきた。

そして私と詩歌は近所のスーパーへ買い物へ行き、色々と相談しながら買い物をする事一時間。

よつやく、家に着いて私と詩歌は本格的に主婦モードへ入る。

「じゃあ、そつちの揚げ物の下ajiしきれはお願い、私はツマミを作りから」

「わかった」

そんなこんなでひたすら料理を作り続ける私と詩歌。詩歌は高校の頃から料理が上手く、私はド下手だった。

しかし、千島に嫁にきてから深雪さんに沢山教えてもらつたので、まあまあの腕前にはなつたと思つ。

「ただいまー！」

玄関のほうから蒼威君の声がした。それに続いていくつかの足跡も聞こえる。

どうやら、陸人君や森羅君も一緒らしい。すると、リビングを抜けて森羅君がキッチンへ入つてきた。

「お、詩歌ちゃん久しぶりー」

「あー久しぶりだね。神代の時も結局全然会えなかつたからねえ」

「俺達はまだ浅葱とは関わりないからね、つと遙かやん一つ頼みがあるんだけどいいかな？」

「なあに？」

「今日、神璽と由加も呼んでやつていいかな？」

「ほら、やつぱたまにほこりこりお袋の味みたいなのを食わせてやりたいしむ」

「あ、全然オッケーだよ。詩歌もいいよね？」

「うん」

「悪い、助かる。じゃあ蒼一達と一緒に来るよつに連絡入れとくよ」  
森羅君はまだ結婚はしていないが、多分あの一人の事を子供のように思つてゐるのだう。

それにしても粋な計らいじやない森羅君。高校の時からこりやつて結構人の感情には敏感だつたのよね。

神璽君と由加ちゃんもとても良い子で礼儀正しいし、森羅君も可愛くしてしょうがないのである。

後數十分もすれば、蒼一達がいつも帰つてくることのあいの時間。  
今日は久しぶりに何かが楽しい、いつも楽しいといえば楽しいのだがやつぱり人が多いと違う。

私以外の皆は悪鬼と関わる世界の住人、いつこの世から居なくなつてしまふかもわからない。

だから、じうじつて一日一日を大切に、楽しく過ごせたらいいな  
と私は年甲斐もなく思つてしまつた。



## Days7・神崎森羅（前書き）

今回はいつもの倍長いです。

次回は、神璽か由加だと思います。

今日は仕事が珍しく非番だったので、蒼威と久しぶりにビーハーへ出かけることになった。

蒼威は十年間働き詰めだつたらしく、ここ数年というか、俺が再会したときにはかなり自堕落な生活を送っていた。

千島蒼威と言う男は非常に掴みづらい男。陸人なんかはいい意味で馬鹿なのである程度は読める。

だけど蒼威は今でもよくわからない、遥ちゃん何かはやっぱ妻なので結構わかつてはいそうだけどな。

まあ、そんな訳で中学校から始まつた友情もここまで続いている。思えば、蒼威と陸人が居なきや……俺は多分、もうこの世にとつぐに見切りをつけて自殺でもしていたのだろう。

それだけ、こいつらは俺にとって重要で、大切な友達なんだ。決して口にはしないけどな。

「よし、陸人も誘おう」

「アイツ……今日は八神と仕事じゃねえの？」

「そこはまあ、時雨に頑張つてもいらおう」

相変わらず無茶苦茶な奴だとは思ひ。灼也に比べればこれはまだ軽いほうだけどな。

灼也是ホントにもう、陸人と誠一先輩を足して二倍にして魔女まつせんぱこで

割つたような感じだつた。

そして俺達はバイクを転がして、八神と浅葱の仕事先へと向かう。

俺達はとある山の中腹にある場所へやつてきた。  
途中から通行止めとなつていたが、蒼威の顔を見た瞬間その許可  
が下りる。

流石、俺の部隊の危険人物リストのトップ10に入るほどの男だ。  
しかも顔パスとは中々できる事じやない。

「そろそろつづけ」

蒼威はそう言つてバイクを止めて、どんどんと林の中を歩いていく。

俺もそれに続いてしばらく歩いていくと、何やら段々と人の声が  
聞こえてきて、同時に式神の気配を感じた。

やっぱ今日は悪鬼狩りか、最近はほとんど出ないために家同士の  
争いが大きくなっているらしいがな。

そして俺達は、開けた場所に出た。そこではやっぱり悪鬼狩りが  
行われており、あらゆる所で闘いが広がっていた。

そんな争いの渦の中を俺達はこつそりと歩き、少し離れた場所で  
指揮をしていた時雨を見つける。

「よお、時雨。陸人貰いにきたぜ」

「ゲツ……ー? 蒼威さんに森羅さん……何故ここに?」

「だから陸人貰いにきたんだよ」

「それは困ります。今戦つてるのはハ神の次代を担つ子達です。やっぱりフォローが無いと心配なんですよ」

通りで若い奴が多いと思つたが、そういう事か。つてことは全員  
緋眼使いと。

一族の教育に熱心だねえ……ハ神つてのは。まあ、俺みたいな普通  
の家産まれの奴にはわからんけどな。

「ふうん……テストみたいなもんか?」

「そうですね。でも、もうテストは終わってるんで、後は残りの掃  
討だけなんですが、これが中々進んでなくて」

「んじゃ、俺がやるわ

「ちよ、ちよっと蒼威さん!-?」

突如として蒼威の周囲に式神の気配が生まれて、次の瞬間には十  
個の球体が現れていた。

これが蒼威の式神、【大我】銀色の球体を様々な形にして使役す  
る中々に厄介な式神である。

俺達の部隊の情報網によると、蒼威は本氣を出すと【鎧】【羽】  
【剣】【獣】の四つの型を作り出して戦うらしい。

俺が見たことあるのは、その一つの羽と剣ぐらいだがな。

「行け」

そう短く言つと、大我が鋭く飛んで行き、様々な武器に形を変え  
て悪鬼を襲つ。

まさに圧倒的。中々駆逐できていなかつた悪鬼が次々と絶命して、この世から消え去つていった。

「ハア……じゃあ、僕は指示をだしてきますね

もううづうづこでもなつてしまえ、見たいな感じで時雨は下に居る八神達の下へと歩いていった。

なんていうか……時雨は大人だな。いや、こいつらが子供すぎるのか。

蒼威は蒼威でもう用はないとばかり、煙草をふかしながら黙つて待つている。

「おー、お前ら来てたんか」

突如として陸人の声が聞こえた。

コイツはもう赤髪は辞めてしまったが、顔つきは相変わらず変わつてないので一目で分かる。

ああ、でもあの赤髪時代はとてもわかりやすかつたなあ……何処で見かけても、あの馬鹿だと思えたし。

「おう、これからどうか遊びに行こうぜ

「おーい！ んじゃ後は時雨に押し付けてレッジ」一だ

「よつしゃ、行くぞ森羅。」

何の後ろめたさも感じさせる事無く歩いていく蒼威と陸人。

時雨があそこまで大人っぽいのは、こいつらとずっと一緒にやつてきたからではないのだろうか……

そして俺達はバイクへ乗つて、いろいろな場所へと行つた。

通つてた中学校、高校跡地、そして山の上にある温泉。どれもこれもが懐かしくて、久しぶりに楽しかつた。

俺は自衛隊に入つてから十数年ほどんど友達も作らず、ずっと一人で居た。

何度か結婚とかも考えたが、どの子と付き合つても長続きはしない、いや、させる気がなかつたんだな。

俺がこの世で唯一愛した女性は 母さんだけだったのかも

しれない。

いや、肉欲とかそつち方面での愛は無かつたな、昔はめどつたか覚えていないが。

俺の母さんは子供の頃から病弱で、それでも一生懸命生きてきた。だけど悪い男に騙されて俺が産まれ、親父は蒸発。

その後再婚したが俺のせいで結局離婚。今ではもうくたばつたのかもな、あのおっさんも。

「じゃあ次は家で飲もうぜー。」

「おー遙ちゃんや蒼ーと遙緋に会つのも久しぶりだな

「相変わらず一人とも生意氣だよ。お前んとこの梨香が羨ましいぜ

「いや、梨香も梨香でつるをこんだよ……お父さん、もつと綺麗にお風呂使つてとかや」

「あーそれは、ウチの遙緋と命にはねえな。俺のまづが先に風呂入る」

「……お前、どんだけダラけてんだよ」

「10年間休みなしだったからな、後一年はダーラナルー……ん、森羅ビューチだよ?」

じつめすうと発言が無かつた俺に返りしたじご。  
俺はフツと軽く笑うと、

「こや、なんでもねーよ。早く行け」

蒼威の家に着くと、何故か詩歌ちやんが居た。せつこえぱずと会つてなかつたな。

俺らの部隊はまだ浅葱とは面識が殆ど無いし、詩歌ちやんは内務に追われているため現場の俺と会うことほんの一からな。  
まあ……この子もよくここまで変わったもんだ。最初は凄いとつつきにくこ子だったのに。

そして俺は遙ちゃんと神璽と由加の分の食事を頼むと、蒼威達の居るロビングへと戻る。うわ、もう酒開けてるよ……

「ああ、やっぱ仕事の後の一杯は美味しい

「おー、これは労働したモンドしかわからねえな」

どの口がそんな事ほざきやがる。この反社会人軍団め、俺なんか公務員だから大変なんだぞ。

全く……自衛隊つてのは金払いはいいのだが、いかんせん自由が足りない。

まあ、この部隊は特殊の中の特殊みたいなので、めんどくさい規律とかがあんまりなくていいんだけどさ。

そして、俺達がそんなこんなで話していると、

「ただいま」

「ただいまーっ！！」

高校時代の遙ちゃんと良く似た声、遙緋ちゃんと命ちゃんが帰ってきたのだろう。

そして数分後に私服に着替えた一人が、リビングへと降りてきた。なんていうか……今も昔もこの年頃の女の子の服装は代わり映えせんな。

「あ、陸人さんと森羅さんこんにちはー」

「ここんちはですーー！」

「うーーっす。お邪魔します」

「お邪魔します」

すると二人は俺達と同じテーブルに座り、俺達の酒のつまみを物色しながら一緒にTVを見る。

そんな穏やかな時間がしばらく続くと、ふと遙緋ちゃんが言い出した。

「そういえば、お父さんと森羅さんと陸さんつていつゞり仲良くなったの？」

「んー……確かに蒼威が俺らの通つてた中学校に転校してきたんだよな？」

「そうだ。俺と陸人が確かに中一の秋だったかな？ 確か転校してきましたばずだ。

あの頃の蒼威は、マジで弱くてウジウジしてるもの静かな奴だった。

それが今では……

「へー！ 何か意外」

「確かに陸人は転校初日に、灼也に一階から叩き落されたんだよな」

「ああ……まだ可愛い中学生だった俺に緋眼を使いやがつてな……つてかそういう森羅も肋骨折られたんじやねーか」

「そうだっけか？」

蒼威は聞こえないふりをしている。まあ、娘にあの頃の事とかはあまり知られたくないんだろうな。

弱かつた自分を乗り越えて、今の自分へと成長した蒼威。まあそれはそれでいいのだが、たまにはこうこうめに合つてもいいだらう。

「聞きたい？ 蒼威と俺らが出会つた頃の話」

「はい。」

「凄く興味あるよね～ど～今まで～」今まで落ちたのか

そして俺は話始める 全てが変わったあの日の事を。

あの頃は、それは毎日イライラしてたんだよな。  
ぐだらねー社会。ぐだらねー学校。そして俺の存在と家庭の事情。  
全てにイラついていた。

俺の母さんとあの時の義理の父は、あまり上手くいってたとは言  
いがたい、俺もガキなりにそれに気づいていて、  
だけど俺みたいな中坊にできる事なんてなかつたんだ、だから俺  
は力を求めた。

最悪の場合のために、手を汚して生きるために

「テメーが三年の有働か」

「ああ？ 何だテメーはーー一年坊のくせに三年の俺を呼び出すとはいい度胸」

「

俺は有働が言い終える前に、もう奴の顔面を殴りつけた。  
一発一発に拳の痛みと、人を殴っていると言ひどいよつもない快感が襲ってくる。

そして倒れた体に更に蹴りを食らわせるし、やがて有働は抵抗をやめた。

「おいやこ、三年の頭がこんなモンかよ

「ハ……テメー……」

じゅぢゅまだ懲りてないよつである、俺はポケットからナイフを取り出して顔に近づける。

案の定ナイフを押し付けられた有働は途端に大人しくなった。刃物つてのは中坊にとつちや最強の武器だからな。

「なあに、今までじょつとの学校のトップはアンタでいいんだよ

「……何だと」

「アンタは今まで通り威張つてりやいい。邪魔する奴は俺が殺すから安心しや」

「何考えてやがる

「俺は表に出る気はねえ……だから表はアンタが威張つてるが、アンタは俺の舍弟だ。いいな？」

「わ、わかった」

「ああ、ちなみに……俺の正体を誰かに言つた場合……マジで殺すから」

それだけ言うと、俺は有働の返事も聞かずに立ち去る。  
これで三年は飼いならした、残りは高等部のクソ共と同学年と二年だけだ。

元よりたいした奴の居ない三年には興味ない。ぶっちゃけ同学年の方がかなりキツイ。

(そういうや、最近A組の頭が変わったんだよなあ)

A組はそれまで柴崎つて奴が威張つてたのだが、最近高遠に変わつたらしい。

高遠陸人。確かに小学校が一緒だつた気がする、中学生離れした身長とガタイだが、基本は大人しく、

何処にでも居る普通の奴だつたと記憶している。コイツがブチ切れで柴崎達を全治一ヶ月にしたらしいな。

(確かこの前A組で死人出たよな……確か宮下だっけ?)

「コイツも確かに小学校が一緒。んでスゲ工苛められつ子だつた気がする。する。

まあ記憶にも残らねーどうでも良い奴だ。死んでも俺は何とも思わなかつた。

そして俺はその後、順調に所属していたE組を支配し、その後C・Dの頭も片付けたんだ。

どいつもこいつも骨がねえ……ひょっと血が出たぐりこでギヤー  
ギヤー騒ぎやがる。

だったら最初っからツッパるんじゃ ねーって話だよ。俺とテメー  
らじゅ覚悟が違うっての。

そしてそんなある日、俺が高遠陸人をぶつ潰そと△組に向かつ  
ていた時だった。

ガシャンヒガラスが割れる音がして、何かが廊下に落ちる音と共に  
悲鳴。

あーあーあーあー、喚きすぎなんだよ、ウゼエ。  
俺が人ごみを搔き分けて、ようやく事態が見える位置に行くと陸  
人がそいつに蹴りをくれていた。

「おい……明が死んでどうしたってえ？」

「わ、悪かったよ高遠……た、頼むからもうやめてくれ」

血塗れの顔で懇願するそいつ。しかし陸人は、

「何で……何で明がいねーのこ……テメーが生きてんだよ！」

更に蹴り続ける陸人……ふうん、中々危ねえ奴だな。腹が据わつ  
てやがる。

その場に居る全員は、陸人の圧倒的な暴力に何も言えずに居た。  
そして俺がそろそろ止めようとした時、

「『カラア！ 高遠、お前何やってこるー』

「ああ？ 黙つてひ……殺すぞ」

A組の担任の鈴木が陸人を止めようとするが、その気迫に押され  
て手を出せない。

つてか、この場に居る俺以外の全員が陸人にブルッちまつてるか  
らな。まあ、無理もねーけど。

仕方ない……騒ぎが大きくなると俺も動きにくくなるし止めるか。

「おい、高…」そこの馬鹿頭、邪魔だ」

俺の声を遮つて誰かが声を上げた。

その場に居る全員が声のした方を向くと、そこには見慣れない生  
徒が居る。

黒髪で色白のいかにも弱そうな奴、だけど目だけが何故か軽く赤  
っぽくなっているそいつ。

上級生か？ と一瞬思つたが腕章を見ると俺達と同学年のようだ  
ある。

「テメー……今なんつった？」

「馬鹿頭、邪魔だ」

「ああ？ テメー喧嘩売つてんのか？」

「別に？ 買いたいなら別だけどよお」

挑発するように笑うそいつ、そして陸人がキれた。  
何も考えずに、腰と体の回転をいた拳を全力でそいつに打ち込  
む陸人。

ふうん、中々のパンチ持つてやがるなこいつ。  
だが、そいつはそれを軽く避けて見せた。

「なつ……！？」

(避けた！？)

まさか避けられるとは思わなかつた陸人。いや、俺も絶対にあのパンチ一発で終わつていたと思った。  
だけ現実にそいつは避けて見せて、更に

「ハツ！ 井の中の蛙つてか？」

速い、いや……速すぎる。そんな速度でそいつは陸人の体に蹴りや拳を浴びせた。

格闘技の試合でもあんなに早い動きは見た事が無い、それほどの速さでそいつは陸人を殴りつける。

すぐに顔が腫れ、血が噴出す陸人 そしてそいつは一旦陸人から離れ、

「フィニッシュ！」

助走をつけて走り出し、陸人にドロップキックを放つた。

流石にガタイの良いあいつでもその威力は消し去れなかつたのだろう、そのまま窓を突き破つて下に落ちて行く。

おいおい……ここは二階だぜ。打ち所悪かつたら死ぬつての。  
だが、そいつはそんな事を全く気にするわけでもなく、高らかに指を掲げて勝利の余韻に浸つている。

すると、今まで呆気に取られていた鈴本が声を張り上げた。

「何をしてるんだ！ 転人生 千島、千島蒼威！」

それが俺と蒼威と陸人の初めての出会いだった。

それから蒼威は一週間の停学となり、陸人も一週間の入院となつた。

その間俺はと言つと、暇で暇でしじょうがなかつたため、B組の矢崎を半殺しにし、残るはA組だけとなつていた。

俺の最終目標は　この学校の十代の支配何かじやねえ。この町の十代を全て支配するつもりだった。

暴走族やギャングだつて、集会とかをビシツと決め手やりやあ……仕事にはなるんじやねーか？

そんな思いから、俺はそれを実現させようといつやつて頑張つてゐるわけだ。

勿論母さんにそんな事がバレたら、多分泣くだろう……でも俺にはこの方法しか思いつかない。

まあ、今の所学校の奴らにはナンパ野郎ぐらいにしか思われていないうからいいんだけどな。

そして一週間後、俺が学食で飯を食つてゐると、急に周囲がざわついた。

皆の視線の先を見ると、陸人と蒼威が何故か並んで歩いている……何故だ？

蒼威は前とは違い、弱弱しい態度で周囲にビクついているし、対照的に陸人はスッキリした顔をしている。

この一週間……あいつらに何があつたんだろう？　まあ……俺には関係ない、今日潰すか。

放課後、俺は廊下を一人で歩いていた蒼威に声を見つけた、しかも幸いな事に陸人が居ない。

これはチャンスとばかりに、俺は蒼威に声をかける。

「ねえねえ、君が千島蒼威？」

「わうだけ……何？」

決して俺の方を見る事ではなく、蒼威はオドオドしながら聞き返していく。

本当に、この前陸人をぶつ飛ばした奴と同じとは思えない。

「いやああ、ちよつと聞きたいいことあるから」つち来てくれない？

「……うん」

そして俺は蒼威を校舎裏まで連れて行き、振り返る。もう猫を被る必要も無いだろう、このからはマジで行くぜ。

「あ、あの……話つて何？」

「ああ、お前は陸人を倒したんだよな？」

「うん……でも、アレは灼也が……」

「ああ？」

「な、なんでもないです……」

「だったらA組の頭はお前だよな？ だから俺と勝負しろ」

「い、嫌だよ……」

ああ、段々と苛々してきたぞ……何だコイツのおどおどとした性格は！

陸人をやつた時、俺は素直にお前の事をスゲーと思ったんだぜ。こいつなら、こいつなら俺と互角つてな。

だけど……今のテーマは……

「あんまナメてんじゃねーぞ、『ララアー』」

一発殴る。それだけで蒼威は壁に叩き付けられて、そのままイタイイタイと蹲る。

その仕草に更に苛立つた俺は縮こまる蒼威に更に蹴りを浴びせ、

「おこロリア！ マジで殺しちまつぞー！」

「いめんなさいめんなさい」

何でコイツがこんなに卑屈なのが分からぬ、俺にお前ほどの力があれば

そう、あの時の蒼威の動きは俺の中にあつた苛立ちを全てぶつ飛ばすほど清清しかった。

何一つ悪びれず、自分が望むままに生きる。それがとても眩しかったんだ。

なのに……なのに……

「おーい、神崎君。苛めはよくないなあ」

あまりの怒りに我を忘れた俺は、後ろからの突然の声に反応がで

きなかつた。

そして 激痛。頭を何か硬いもので殴られて、俺は地面に崩れ落ちる。

「やあやあ、あの時はよくせりへくれたな」「アーッ・

B組の矢崎、C組の竹中、D組の武藤が金属バットを持って俺を見下ろしている。

……チツ！　ここから入院させとけばよかつたぜ。すると、矢崎が俺の腹を思つてきり蹴り上げた。

「よお……神崎。テメーあんま調子ぶつここんじゃねーぞっ。」

「テメーみたいな、ナンパ野郎が生意気に喧嘩してんじゃねーぞ」「フ

「つぬせえよ……」

更に暴力が浴びせられた、腹や顔を蹴られ、立たされてから何発も殴られる。

クソッ……これが終わったらマジでここから殺してやる。  
そして段々と意識が朦朧としてきた時、

「やめろや、クソ共」

千島蒼威の声が聞こえた。

「ああ？ 何だテメーまだ居たぐえつ」

田にも止まらぬ速さで蒼威は拳を繰り出し、矢崎をぶつ飛ばす。

正に圧倒的な一撃、多分鼻も折れたな。

「テメエッ！」

「ぶつ殺すぞ」「ハハー。」

蒼威が更に動いた そこまではしか俺にはわからない。  
まるでピーティオを早送りしているかのようなありえない速さで蒼威  
は動き、竹中と武藤を沈黙させる。

何だよコイツ……マジで意味がわからねえ。俺はゆっくり立ち上  
がると蒼威に問う。

「お前……何なんだ？」

「俺あ、千島灼也。蒼威の第二人格つて奴なのかね？」

「二重人格つてのはよく聞いたことがあるが、まさかこいつがそ  
うだとは。

それが本当なら全ての辻褄があつ。蒼威と灼也、なるほどな……

「そうなのか……俺は神崎森羅だ」

「お前れ……何で蒼威をいきなり殴ったわけ？」

「あいつの態度がムカついたからだ」

「蒼威はよお……お前に話しかけられて嬉しがつてたんだぜ。

前の学校じゃピーティー苛め受けたてよ。やつと“二人目”的友達が  
できるかもってな。」

「…………」

「お前はそんな蒼威の気持ちを踏みにじった」

「う、うるせえ！」

俺は蒼威、いや灼也に殴りかかった。何もかもコイツには見透かされてそうで嫌だつたからだ。

そういう、ずっと人の気持ちなんて考えた事が無かつたな。母さん。それが俺の全てだったから。

俺は蒸発しやがった駄目人間の子、きっと母さんには重荷だったはず。だからだから！

「いいか、よく聞け」

乱打される拳。

「蒼威がお前に何かしたか？　お前に不快な事をしたか？」

……見えねえ。

「暴力でのし上がる気ならよ  
たぶつてんじゃねーよー！」

蹴り、パンチ、頭突き、あらゆる攻撃が俺の体へと痛みを与えていく。

だけど　何故か一発一発が心地よかつた。本当に、何故かはわからないが

そして胸元にアッパーを入れられ、俺は後ろに吹っ飛ぶ。

「それが最低限のルールだ！ 覚えとけ

それだけ言うと、灼也は去つて行つた。俺は痛みで意識が朦朧とし、ただ思考だけを続ける。

何かアスファルトの冷たさが心地いい。秋風が気持ちいい。世界が変わつて見えた。

それだけ、アイツとの喧嘩は気持ちよかつた。

一週間後、病院から退院して学校へ行つた。  
相変わらず、学校は全く変わることがなく一見は平穀に見える。

俺は怪我した体を引きずつて学食で買ったパンを一人で食つていた。

「ここ、いいかな？」

蒼威が俺の正面の席に座つた。そして俺は、

「ああ」

とだけ返事をする。…………つてか何か喋れよこの野郎。間が重いじゃねーか。

そしてしばらく黙つて飯を食つていると、

「あー！ 蒼威、俺を差し置いて一人で飯なんか食いやがつて！」

「ま、待つてたんだよ？ でも、あまりにも怒られる時間が長い

から……」

「ああ、まあでも何とか退学にはならなかつたぜ。つと……お前、神崎と仲良かつたのか？」

「え……あの、その……」

前の学校じゃヒーテー苛め受けってよ。やつと”一人目”的友達ができるかもってな

……………ああ、もう!

「せうだよ、何か文句あんのか

「え……あ、うん。そりなんだ」

そう言つと、蒼威は笑つた。そういうや、こいつの笑顔初めて見た  
な……

何故、友達だって言つたのかは、よくわからない。

ただ灼也のあの言葉に俺が何かを感じ取つたのは事実。あの時確かに俺は何かを感じたんだ。

そして俺達はこの日から何となべつるむよつになり、魔女や冥と刃と出会つんだ。

「はい、これで出合つた時の話は終わり」

俺が一通り話しあると、遙緋ひやんと命ちやんはしきりに何か頷いている。

陸人はもう完全に酔っ払つており、とろんとした目でTVを見ていた。

そして蒼威は、耳元まで真つ赤にしながら、ずっと黙つてTVを見ている。

「やっぱ灼やは昔から変わらないわねえ～

ああ、やうか。遙緋ちゃんの中には灼也が居たんだつた。とりあえず、あいつが中に居たひとことは遙緋ちゃんも中々苦労したと思つ。

俺の時ですら、かなり暴れまくつたからな。アイツ。すると命ちやんが、

「蒼威パパは今は「んなに威張つてゐる」へタレだつたんだあ～

「だ、駄目だよ命ちやん。そんな本当の事言つちやー。」

一人はそう言つて会つとゲラゲラと笑い出す。それに比例して蒼威の顔も更に赤く染まる。

だが、遙緋ひやんと命ちやんの笑いは収まる気配がない。  
そして 蒼威がゆづくつといひを向いて、

「遙緋、命…………お前ら、今月小遣い抜きー。」

その瞬間、一人の顔が絶望に染まり、急にガクガク震えだして懇

願し始めた。

「何て大人気ない」と、思つが実際俺もあまり昔の話はしたくない。

今思えば、何て痛い人生を送ってきたんだろう、などと思つてしまつ。

「ちょっとお父さん！ それは横暴だよ」

「蒼威パパの意地悪ー！ 鬼！ 悪魔！」

「うるせー！ 僕の稼いだ金だ、俺が分配方法を決める！」

「あ、蒼ちゃんにいいつけるからねー。」

「フフン、蒼一の小遣いも止めるぞー？」

「お父様、本当に申し訳ござわせんでした」

「親を笑った罪は重い、反省しやがれ」

「うう~」

尚も言ひ合つ三人。何かとも楽しそうである。

こいつとは色々あつたけど、あの時友達だって言つておいてよかつたと思つ。

それだけは俺は後悔の多いこの人生の中で、唯一後悔していない事だった。



## D a y s 8・千島蒼威（前書き）

神璽の話は先送りにします。

今回は蒼威の罪のお話。

次回は狂のお見合いの話になります。

テンションの差が激しい一本ですがよろしくお願いします。

## Days 8：千島蒼威

夏の終わりというのは俺が一番嫌いな時期もある。

小学生の頃は、新学期の始まるときめられるから学校へ行くのが嫌だったし。

中学生の頃は、あの馬鹿共と明日から学校で絞られるのが嫌だったし。

高校生の頃は、実家に帰つてクソ親父と一緒に生活するのが嫌だったし。

そして、大人になつてからは俺が産まれて始めて人を殺した時期だからである。

俺は今、とある山奥の農村へと来ている。  
過疎化とでも言つべきか建物は殆ど無く、在つたとしてももう朽ち果てているのだ。

そして、俺みたいな都会派住人が何故こんな辺鄙な所に居るのかと言うと、墓参りのため。

そう、ここが俺の 罪の始まりの場所であった。

十数年前、大我を手に入れて俺はこの世の王にでもなつた気分で居た。

正宗曰く、大して鍛えてもないのにあそこまで強い式神を見るのは初めてらしい。

それほどまでに、俺の大我是強力な式神だったと。

俺も若かつたからその力に酔いしれて、戦術もクソもなく力押しだけで悪鬼を討伐していた。

そう、俺は自分なら全てを救える。何処までも行ける。そんなアホな思想で生きていたのである。

そんなある日。一本の電話が八神家に入った。

それは他の家からの通報による物で緋眼の一族の一つ、真砂家が寄生型悪鬼に取り付かれたという報。

電話を切ると、正宗はその場に居た俺に言つ。

「真砂家は、僕らが討伐する。それが同じ緋眼使いとしてのせめてもの情けだ」

「時雨も行かせるのか？」

「勿論」

「…………お前、時雨はまだ小学生だぞ！」

「戦闘にはなるべく使わない。だけど、これを見せるのが僕の八神としての義務」

「まだあんな小さい子に、親が人を殺すところを見せるのか？」

「ああ、これを知らなきや、時雨は八神の家の重みに耐えられない」

「そりや…………」

「君こそ大丈夫なのか？ まだ、殺した事が無いんだろ？」「…………」

「人との戦場では一瞬の躊躇や油断が死に繋がる。まあ、行つて見れば身を持つて分かるはずだよ」

そう、締めくくると正宗は部屋から出て行つてしまつ。

一人取り残された俺は、一人蹲つて考える。これから、

俺は人を殺すのか、と。

寄生型悪鬼は本当にタチが悪いというのは、一いつらの世界で最近有名な事。

それがまさか、俺に降りかかるとは

真砂の緋眼は昔より伝わつた薬で、緋眼を制御していたらしい。その製法、材料などは俺達同じ分家にも伝わらないほどである。だからこそ、こうなつたのかもしれない。

そして、その薬は一言で言うならほぼ毒薬らしい。飲んだ大多数の人間が薬害となり、真砂はどんどん

数を減らしていった。それ故に、こんな辺鄙な山奥に住んでいるのだと。

今回の討伐に参加したのは、俺、正宗に八神の若いのが五人と正宗の実子である時雨。

この五人は、八神の中でも有望とされている五人。正宗がつれてきた理由が俺にはなんとなくわかる。

ようするに、コイツは家が一番大事なんだって事がな。

誰一人喋る事無く、俺達は山道を進む。

そして、少し開けた場所に幾つもの家屋が並び、人の気配は全く

しない。

その代わりにむせ返る様な血の匂いだけが、いくら平穏のよう見せかけていても消されていなかつた。

すると、

「 来るぞ」

正宗が唐突に咳く。そして、その声とほぼ同時に家屋から真砂家の面々が現れた。

老若男女ばつちりと揃つており、これからこれを殺すという事が俄に信じがたい。

そして真砂家の面々は全員 泣いていた。

「僕は、八神家頭首八神正宗。貴方達を 討ちます」

そう言つと一神風雷を構えて、走り出す正宗。

俺や時雨や他の五人もそれぞれの式神を発動させ、實際言つと動けなかつた。

すると、真砂家の者達は次第に寄生型悪鬼の本性をさらけ出し、式神と緋眼を以て襲い来る。

「タスケテ……モウイヤ」

「殺してくれえつ！」

涙を流し、懇願する真砂家 そして、俺は見てしまった。

真砂家に憑いている寄生型悪鬼が 確かに笑ったのを。そしてどうしようもない怒りが、俺を埋め尽くした。

「『めん……』としか言えない」

大我に念じ、刀の形を作る。俺はそれを掴むと緋眼を発動させ、走る。

久しぶりの怒りに呼吸が荒く、頭の中で火が燃え盛つているように熱い。熱い。熱い。

大我的剣を振るい、寄生された者の首を俺は斬り飛ばした。途端に吹き出る熱い血潮。

生暖かい鮮血が俺の体や顔に降りかかり、もう気が狂いそうだった。

「蒼威つ！ 油断するな！」

正宗の声が響き、俺は我に帰る。見ると、首を斬り飛ばしたはずの真砂家の者が立ち上がったのだ。

そして刀を持ち、俺に再び襲い掛かつてくるが、何とか緋眼を発動させて回避。

俺は持っていた剣を槍に変えて、思いつきり殴り飛ばした。

「寄生型は一回殺せつ！ 悪鬼の部分を殺した後、人間の部分を殺すんだ！」

正宗はそう言つと、二神風雷の雷の方で悪鬼の部分を切り裂き、容赦なく風の方で首を切る。

そして、更に何事も無かつたかのように次の悪鬼へと切りかかっていく。

その時の俺には正宗が人間に見えなかつた。何故、何故、何故、アソツは簡単に殺せるんだわつ。

「死にたい……もつ、死にたい！」

真砂家のまだ若い女の子が俺に向かって鉈を振るつ。その目には涙。

俺はその子の右腕に憑いた寄生型悪鬼を睨むと、肘の辺りから一気に切り落とす。

またも鮮血が飛び散り、気が狂いそうになるがそれでも俺は

「本当に、すまない」

一気に首をはねた。これで……俺は一人の人間の命を奪った。そして周囲を見渡すと時雨が泣きながら重場で、真砂の体中の骨をへし折っている所だった。

駄目だ 時雨にまだ、小学生のアソツに人を殺させるわけにはいかない。

俺は四つの大我を飛ばし、空中で刃に変形させるとそれを回転させて、バラバラに切り裂いた。

……これで、三人か。

「時雨……」

「っく……ひっく……蒼威お兄ちゃん……何で……何で……」

自分でも何を言つているのかわからないのであらう。時雨はただひたすらに泣いた。

俺も時雨にかける言葉が見つからない、見ると他の八神もそれぞれが泣きながら戦つている。

死んでいく真砂の大半は俺達に礼を言つて死んでいった。だが、それは俺達にとつては

まだ責めてくれたほうが嬉しい。罵られれば少しは気分が楽になるが、礼を言わると本当に狂いそうになる。

そして、もう二んな戦いは一刻も早く終わらせたかった俺は、

「【羽】を使うから、お前等下がれ！」

正宗や時雨や他の八神はその技の破壊力と規模を良く知っている。だからすぐに俺の背後へと下がり、黙つて状況を静観していた。俺はといふと、全ての大我を背中に集め、一対の翼に変化させるとそれをはためかせ空中へ。

眼下に見えるのは半数の死体と半数の寄生された真砂。

そして、俺は。

「恨んでくれて構わない。本当に申し訳ない」

大量の羽が地面に向かつて放射され、真砂を次々と貫いていく。その余りの羽の量に、人間の体なんかは一瞬で粉々にされ血の海だけが後に残る。

そして、俺が地面に降り立つと、

「御苦労だつた」

正宗が相変わらずの表情で俺に言う。その無神経さに腹が立つたが俺はある事に気づく。

正宗の刀を握っている柄の部分から血が滴っていた。多分これは

「じゃあ、生存者を探そう」

俺の視線に気づいたのか、正宗は手を俺に見えないように隠すと何事も無かつたかのように歩く。

俺達もその後に続き、生存者を探し始めた。時雨なんかは何回も

嘔吐し、もはや生ける屍状態。

だけど、あいつはあいつなりに頑張っているようで、弱音を吐かず俺達についている。

そんな時雨を見てか、他の八神も必死にこの惨状に耐え、無表情で歩く。

だが俺はもう、泣きたくでしょうねがなかつた。

「皆、気分が悪いか?」

「はい……」

「これが、人を殺すという事だ。これが駄目ならハ神から出て行ってくれても僕は一向に構わない」

誰も返事をしなかつた。正宗はそれを分かつていたのか、

「人を殺せる人間は悲しいが、強い。強くなるにはこうこう代償が必要なんだ」

「わかつてます……」

「それがわかつたなら、良い

そんな会話を交わしていた時だった、

「助けて! 助けてください!」

そんな声が前方から響き渡り、一人のジンベエをきた少年が走つてくる。

年は時雨よりも少し上ぐらいだらう。子供ながら中々の精悍な顔

つきだつた。

どうやら、悪鬼に寄生されてない生き残りのようである。すると、正宗は屈みこんでその子に問ひ。

「君、名前は？」

「剣菱…… 真砂剣菱」

「直系の長男だね…… 他と一緒に居た人は居るかい？」

「居ない……。でも、椿が！ 椿がおかしくなったんだ」

その、剣菱という子には事の状況がよくわかつていないのでどう。正宗はそんな剣菱を優しく宥めると、

「わかった、調査に向かおう」

そう言つて俺達が歩き出した時、突然上から殺氣を感じ俺達が見上げると

女の子が斧を振りかぶつて木の上から落ちてくる所だった。まずい、このままでは時雨が。

俺は瞬間に大我を顕現させると、十個の球体を槍のように引き伸ばして串刺しにする。

付近の木に磔状態にされた、その女の子はまだ十歳にも満たないだろう。そして四つの悪鬼が寄生していた。

「つ、椿！ 椿…… 椿い！」

「オ…… イ…… サ……」

剣菱が絶望に染まつた顔で、大声を上げた。そうか、この子が椿だつたのか。

そして正宗が風雷牙を放ち、悪鬼もろとも焼き尽くされてしまつ。後味の悪い……最後だつた。俺は……何をしているんだろう。

「お前……よくも椿を殺したなあ！」

剣菱が俺を怒りの籠つた目で睨み付ける。だが、誰も剣菱を止めようとしない。

俺自身も、剣菱は止められない。ひたすら泣きながら俺の事を睨む剣菱をただ黙つてみていた。

そして俺の心も同時に打ち砕かれてしまつた。

何が最強の式神だ。何が緋眼だ。何が千島蒼威だ。俺は、俺は結局無力じゃねえか。

真砂の者を誰一人救うこともできなく、生き残りの心すらをも傷つけた。

こつちの世界に入つて　　俺は、自分の偶々恵まれていた境遇に酔つていたのだ。

生まれながらの式神の才能。生まれながらの緋眼使い。それらを以としても俺は誰も救えない。

だから　だから煉も灼也も俺は救つてやれなかつた。

任務が終わり、俺は八神の家に帰ると、一ヶ月くらいの休暇を言い渡された。

といつよりも正宗以外のあの戦いに加わつた者は全員休暇を出している。

時雨もじばらぐ小学校を休み、深雪さんの実家へと行ってしまった。

俺はと言ひと、まず飯が食えなくなつた。特に肉や刺身なんかは見ただけで吐き氣がする。

遙ちゃんはそんな俺を心配して、色々な料理を作ってくれたがほとんど手がつけられない。

(最低だな……俺)

こここの所、全てのストレスを遙ちゃんにぶつけていいる氣がする。遙ちゃんんだつて大変なのに。

それは分かっているのだが、俺の心はそれについてこれない。あの剣菱という少年が預けられていた施設から脱走したと聞いても何も思えなかつたほどだ。

人を殺したという事を忘れるためにも、俺は酒に溺れ、朝から晩までずっと飲んでいた。

それでも赤い酒をみると吐き氣がするので、ほとんどビールか焼酎。

すると、部屋の障子が開いて、

「蒼威君……ご飯出来たよ

「…………いやない

「でも、もう四日も何も食べてないじゃない……少しは食べないと

「こりなこつて言つてるだろー。」

俺は顔を上げてつい怒鳴ってしまった。頭では怒つてはいけないと分かつてゐるの。

すると、遙ちゃんは遙緋を抱っこしながらだつたため、遙緋が驚いて泣き始める。

「おーよしおし、遙緋～～泣き止もつね～良い子良い子～

遙緋の泣き声が頭の中に響き渡り、同時に真砂の子供達の泣き声も蘇る。

俺は逃げるなうにして、布団の中へともぐりこんだ。

次の日、俺が目覚めるともう正午だつた。

# 顔の男。

田は落ち窪み、酷いクマ。 体全体が痩せ細つて、 肌の状態なんか  
最悪の一言であつた。

これ以上見ていると鎌を害いたくなるので  
居間へと向かう。

「あれ……？」

遥ちゃんは洗濯にでも出でこるのか、姿を見かけない。

その代わり、布団がしかれた場所では蒼一と遙緋がスヤスヤと寝息を立てている。

全く以て羨ましい。立場を変わりたいぐら<sup>イ</sup>である。  
それにしてもこの寝相…………明らかに遙緋の方がスペース狭い  
よな。

俺は蒼一をもつひよつと、端に寄せてひつと触りついた。

「…………っ」

だが、触れない。なんていうか……人殺しの手で大切な子供に触りたくなかつた。

そのまま、触るか触らないかでじばし悩んでくると、蒼一と遙緋はほぼ同時に目を覚ました。

これだから双子というものは怖い。一人は同じよつの動作で目を擦り、ほぼ同時に起き上がる。

「おとせん……？」

「おひとせん」

不思議そうな顔で俺を見る蒼一と遙緋。すると遙緋がハイハイしながら俺の股の上に座る。

すると、何故か蒼一がムッとしたよつの顔をして遙緋を押しのけながら同じく股の上に座つた。

なんていうか、ここに彼らの力関係が立つた今わかつたよつの気がする。

だが、極自然に俺は一人の子供を抱いていた事に気づき、離そうとするが、やっぱり止めてしまつ。

「おい、お前らあ。おつかさんどこ行つた？」

「おふよ

「ところ

…………「ひつちだよ。すると、蒼一と遙緋はお互にを横田で見る  
と、

「おふよー。」

「とにかく。」

じつやう一人とも自分の意見は譲らないつもりらしい。  
すると、障子が開いて洗濯籠をもつた遙ちやんが部屋に入ってきた。

「あ、蒼威君起きたんだ」

「うん……どう行つてたの？」

「洗濯物干しに行つてたの、ああ、やっぱ一人とも起きあちやつた  
か？」

「おいお前らへ一人とも違ひじゃねえか~」

俺は蒼一と遙緋に極自然にくすぐり攻撃を仕掛けた。すると無邪  
気に笑う一人。

つられて、俺も口の端が吊りあがつてしまつを感じる。ああ、  
久しぶりに笑つた気がするな。

まあ…………「こつらのお陰つてやつかね？」

「蒼威君、久しぶりに笑つたね」

「うん……何か、吹つ切れたかも」

「それはよかつた。じゃあ、今日からちやんどい飯も食べてね？」

「うん……少しずつ頑張るよ」

「じゃあ、もう一回蒼一と遙緋を寝かしつけましょ〜」

「え、何で？」

「蒼威君、最近私に全然構ってくれなかつたから、少しだけ。ね？」

復帰一戦目にしては中々ハードだが、これも家族のためだ仕方ない。

俺を、支えてくれる大切な家族のための、な。

「あの時の遙ちやんは可愛かつたなー」

そこまで思い出して、俺はついそんな事を声に出してしまった。  
俺が今居る場所は、真砂家の慰靈碑の前。そしてそこには最近新しく名前が刻まれている。

真砂剣菱、と。あの子もやつと一緒に帰つてこれたんだ。俺が全てを狂わせてしまつたあの子を。

ただ、蒼一の話だと剣菱は復讐を謳つていたが、実際には結構ためらつていたらしい。

それが事実なら、俺の罪は軽くなる事は無いが、心は中々に変わつてくれる。

「ウチの息子の仲間になつてくれてありがとう。君は嫌がるだらうけど、それは礼を言ひつよ」

慰靈碑に俺は語りかける。もう彼はこの世にいなければ、語りかけた。

ウチの蒼一はもう人を殺し、一線を越えてしまったが奴は俺以上に割り切つている。

敵だから、俺を殺そうとしたから切り捨てた。そんな感じで割り切つてる事は凄いけど悲しい。

遙緋は……あの子の力なら、俺や蒼一みたいにはならないかもしない。

何よりあの子は諦めない。気は弱いけど最後の最後まで足搔いて、自分の限界をつくす。

「全く、正反対の兄妹だな」

でも、それがきっとつか  
か。俺はそう思つてこる。

## Days9：秋月狂（前書き）

何とか、時間が取れて書けました。

そういうえば緋色の眼の読者数が10000人突破しました。  
皆さん、お読み頂きありがとうございます。

次回は遙緋です。

## Days9・秋月狂

「狂、お見合いをしてみないか?」

十一月中旬、急に正宗に呼び出された俺は本当に唐突にそんな事を言われた。

あのアルバイトをしてから何ヶ月か経つたが、姉ちゃんは保育の道に進む事にしたようである。

……史上最强の保育士になるかもしれないな。ウチの姉ちゃん。元々小さい頃から姉ちゃんは泣いてばかりいた俺を、よく慰めてくれた。多分、向いてる道だうつとは思つ。だが俺は……

「相手は?」

「八神が【数の十名家】に属された事は知つているよね?」

数の十名家、かなり昔から十までの名を冠す一族が登録される組合みたいなモノ。

家柄、頭首の力量、そしてあと一個何かが必要らしいのだが。それを満たし邪魔な数字を排除する事で属する事が出来るという事ぐらいは知つていた。

ちなみに八神は最近時雨と正宗で八頭家を倒したので、晴れて入る事ができたのである。

「ああ……八頭を倒したんだったな」

「ある程度時雨だけでも十分だったね。そして僕が各家に挨拶に行くと、七海から縁談を持ちかけられたんだ」

「へえ……」

「時雨はまだ結婚は早いと思つ。だから狂、君を推薦しておいた」

「なるほどな」

「秋月はハ神よりも血が濃いからね。向いつの頭首も壇んでくれた上」

「相手はどうな子だよ?」

「七海家の次女、七海奏……………15歳だ」

「……………セイサ正宗の領分だら」

「僕は断じて口っこいんではない! いいか狂! あの馬鹿一ワトロ  
や馬鹿根暗の言ひ事を信じてはならない」

突然怒り出す正宗。その反応から相当弄られた事が伺える。

俺も陸人とかから、話は聞いたけど、女子高生に手を出すのは流石に犯罪だと思った。

……………ん? さてよ。ってかそれ、俺がこれから歩む道じゃん!

「じゃあ、四日後だからな。しつかりと体調整えておくれよ!」

「……………」

正宗の部屋から出ると、俺は八神の屋敷の中歩き、時雨の部屋へと向かう。

一年前までは色々あつた俺とアイツだが、今では俺と姉ちゃんの良き相談役となつてゐる。

といつよりも、甥っ子になる可能性が非常に高く、何時の間にかよく喋るようになつたんだな。

そして、アイツの部屋の前に着くとノックして中へと入る。

「おう

「何だ、狂か

「おー！ 珍しい奴が来たじゃねーか」

何故か陸人までもが時雨に部屋に居る。この人はホント、浅葱とか立場を気にしない人だな。

二人は何やら海外の地図を広げて書類の端々に赤い線を引きながら何かを話し合つていた。

この地図は……英國の方か。全く今度は何をたくらんでいるやら。すると陸人が俺のほうを見て、心から氣の毒そうな顔をした後、

「狂……お前も口リコンだつたんだな」

「ち、違えよー！」

「もしかして緋眼使いは皆口リコンなのか？ 正宗然り、お前然り、時雨然り」

「何で僕も入つてるんですか……」

時雨の意見は黙殺しておくとして、俺は相談を始めたことにした。

「お見合いつて何をすればいいんだ？ つてか何なんだ？」

俺は一人に問う。

「女の子をもてなし、良い気こさせておいてその家の情報を巧みな  
詰術で聞き出す場だよ」

「女と美味しいモン食つて、気にいられたらお楽しみの一晩を過ごす  
場だな」

先に言つたのが時雨。後に言つたのが陸人。これだけで二人の人  
柄がこれ以上ないほどよくわかる。

うん……こいつらは全く当てにならないな。ああ、ごめん。こいつ  
らに聞いた俺が馬鹿だったよ。

「服装はどんななの着て行けばいいんだ？」

「イカす服！」

「スーツだろ？ うね

「スーツか……俺、八神の奴しかもってねえぞ？」

「俺は無視ですか……」

「僕のを貸してあげよう。一応、狂のお陰で僕はお見合いしなくて

済んだんだからね

まさかコイツ……自分がやるのが嫌で正宗に俺これをやるよつこ  
向けたんじゃねえだろうな……

お見合ひ当日。俺はガチガチに緊張して、とある料亭の前に立つている。

すると居る居る。ガラの悪いヤクザみたいなのが、料亭を取り囲むようにして包围していた。

たまに無線だかなんだかで連絡を取り合ひ、物々しい雰囲気となつてゐるその料亭。

俺は意を決すると、正宗にひつひつと入っていった。

ガン付けとかには自分では慣れているつもりだったが、こつも人が多いと流石に嫌だ。

中には明確な殺意をぶつけてくる奴もあり、神舞を使つて苛めてやううかと思ったが、やめた。

「なあ……お見合ひつてこんなに殺伐としていたのか？」

「いや、七海はヤクザと繫がりが深いからね。多分これは七海特有のものだと思つ」

ヤクザと繫がりが深い……俺の頭の中に極道の妻のようなイメージが湧き上がる。

うわあ……俺は髪が長くて大人しいタイプの女の子が好きなのに。いつもプレッシャーを与えられるような嫁は絶対に嫌だ。だが、現実は刻一刻と迫っている。

そして、一つの部屋に通された俺達。

「あちらはまだ来ていないうだね」

そこは広い和室のような場所で、人目で豪華だとわかるような造り。

俺ら死罪六神はほとんどが、アパートか、安いホテル生活だったためこういうのには全く慣れない。

剣菱なんかは昔は結構お坊ちゃんだったようで、最初は愚痴りまくつてたけどな。

ああ、剣菱……お前が今でも生きていってくれたら俺はもう少し今が楽しかったかもしねれない。  
そして俺がそんな感傷に入つていると、

「御待たせ致しました」

和室の扉が開き、ひ弱そうなおっさんと明らかに子供っぽい女子が入ってきた。

多分、命とタメ張るぐらいの童顔であらわ。だが、化粧などもばつちりとしていて中々に可愛い。

だが、俺の食指はちつとも動かない。年の差七歳だぜ？ 正宗じやん。

「はじめまして、秋月狂さん。七海家頭首七海惣一です」  
頭を下げるそのおっさん。「うわあ……俺みたいなガキに」。  
俺も正宗に翻つたとおりに礼を返すと、

「はじまして、七海家頭首殿。秋月家長男、秋月狂でござります」  
そして娘の奏さんも俺に挨拶をし、料理が運ばれてきて会食が始  
まった。

しきりに喋る正宗とおっさん。俺はたまに来る質問に「ええ」だ  
の「はい」だな答えながら料理を口に運ぶ。

奏さんはひたすら控え目に過ぎし、凄く丁寧な動作で料理を口に  
運んでいる。

ああ……なんていうか育ちの差といつものを感じるな。そして、  
料理も残り少なくなった頃。

「では、これからは若い二人にお任せをして……私達は別室へ参り  
ましようか」

「ええ。狂、しっかりとエスコートするよう」

黒い笑みを浮かべて、正宗とおっさんは出て行つた。ありや、絶  
対別室で何か企んでやがる。

……………つて二入きりかよオイ！『ままずい』『ままずい

ぞこれ。

「ア、ハハハ……い、行っちゃいましたね」

「そ、そうですね」

秦さんが俺の方を向いて言つ。うわあ……何か完璧齧えたような  
顔をしてるだ。

俺は何か喋ることが無いかと、お茶を一杯啜り、窓の外を見た。

「ブホオツ！」

「え、あ、秋月様？」

窓の外を見た瞬間俺は口に令んだお茶を噴出してしまった。ああ、  
とんでもないモン見ちまつたよ。

すると、秦さんが俺におしほりを差し出してくれた。礼を言つて  
受け取ると口を拭う。

そう…………窓の外の草むらで命と蒼一と神璽と遙緋と由加が居  
やがつたのだ。あいつら…………どうしてこりゃ。『  
蒼一は口元を押されて震えてやがるしよ。アイツ、マジでいつか  
殺す。

すると命がスケッチブックのような物を取り出しつゝ、なにやら文  
字を書き始めた。えーと……？

「（）趣味とかあるんですか？」

全ての棒読みではあるが、秦さんはいきなりの質問に照れながら  
も答えようとする。

ナイス命！ 今度アイス買つてやるからな。蒼一は処刑決定だが。

「えつとお……お菓子作りです」

何とも女の子らしい趣味である。俺の周りにはそんな女はずつと  
居なかつた。

姉ちやんは趣味とか無いし、命は趣味蒼ちやんとかせりやがったな。

遥緋のアレは、一度蒼一にハメられて食つたがアレは料理とは言ひがたい。調理した砂糖だな。

「女の子らしい趣味ですねえ……」

「いえ、そんな……」

それっきり俯いて黙ってしまつ奏さん。マズイ……またピンチだ。助けて命ちやん！ 僕は再び外を見ると今度は遥緋が何かを書いていた。

そこに書かれていた言葉は……

「奏さんは、普段はどうのような事をなされてるのですか？」

「はい、普段は高校に通つていて、休日には悪鬼討伐のお仕事などをやっております」

「へえ、高校に行つてるんですか。僕は、行けなかつたですからねえ。羨ましいです」

「高校なんて面白くあつませんよ。私、暗いからあんまり馴染めてませんし」

「そ、そなんですか……」

「はい」

正に藪蛇だ……くだらない事まで聞くんじゃなかつた。でも、高

校は行つて見たかつたなあ。

つと、そんな事を考へてる場合ぢやない。次頼むぜ、おい。

すると、今度は由加が文字を書き始める。つん、あの子なら眞面目さうだし安心だな。

えーっと……なんて書いてあるんだ?

「好きなお野菜はなんですか?」

「…………はい?」

「い、いや、失礼」

あの女～～～～～っ!! バルの世界にお見合いで好きな野菜聞く男が居るんだ。

次だ次! おつ今度は神璽か。アイツは情報によると女に関しては百戦錬磨らしい。

早くこの気まずい空氣を開けせねば! わあ、早くしてくれ。そして神璽がパツとスケッチブックを掲げた。  
俺は、つい瞬間にそれを読んでしまう。

「安産型ですね」

…………おい、「ララ。俺に今何を言わせやがった。

前を見ると、奏さんは顔を真つ赤にして俺の方を見ながら小さな声で言ひ。

「あ、あの秋月様……私達まだ知り合つたばかりですし……その、まだ子供とかは……恥ずかしい」

「す、スマセン!」「みんなさー! 本当にどうかしてるんです

今日の俺!」

もはや土下座せんばかりに、俺は頭を下げて奏さんへと謝った。  
横目で見ると、外では命達が腹を抱えてグラグラ笑つてやがる…  
…ア、ハハハ、アハハハハハ。

もうきれそうな五秒前だな。ああ。俺結構我慢したよね?うん。  
我慢した。そろそろキレてもよくな?

すると、蒼一がスケッチブックを掲げる。

「よひしければ、外に散歩にでも行きませんか?」

奏さんは苦笑いしながらも承諾してくれた。

そろそろ、十一月なので外は中々に寒い。だが全く歩けないほど  
ではない。

むしろさつきまで暖かい空間に居たせいか、凄く清清しく感じる。  
そんな料亭の庭を、無言で歩く俺と奏さん。ああ、外へ出ようが  
中へ居ようが気まずい。

『結界、効果は庭の式神の氣配完全消滅』

本当に一瞬。命の声が響き渡り現れていた式神の氣配も一瞬で消  
える。

あいつら……何を企んでやがる。すると奏さんが、

「今、式神の気配と何かの声が聞こえませんでしたか？」

「た、多分正宗のボディーガードでしょうね。ええ、きっとねつです」

「やっぱり八神は凄いですね……今の気配は凄く洗練されていた  
気配ですよ。凄いなあ」

「そ、そつなんですか」

「ええ……それにしても秋月様がこんなに面白い人だとは思いませ  
んでした」

「え？」

「言いくらいんですけど……秋月様。あの……死罪六神だったじゃ  
ないですか……だから」

「ああ、そういう事か。今更ながら奏さんが何故俺にビビっていた  
のかがわかったよ。」

「俺は元死罪六神の第二位秋月狂。きっとその悪名は奏さんの耳に  
も届いていたに違いない。」

「これも俺の罪だ……ああ、いつやつて償つて生きていいくのか。」

「スマセン……でも、俺はその事実を悔いるつもりはありません」

「え……？」

「俺達のために散つていった仲間が数多く居ます。俺がそれをない  
がしろにしてしまっては、あいつらに

申し訳が立ちません。だから俺は どんなに嫌われようと、罵られようと、死罪六神であつた事を誇りに思います」

「秋月様」

それが死んでいった村雨、暁、ナナシ、剣菱に対する俺からの弔い。

これだけは俺は死んでも譲れない。あいつらと共に戦つた日々も決して忘れない。

すると奏さんの俺を見る目が少し変わった。まあ、やっぱり嫌か。そして俺にとって気まずい沈黙が続き、庭に居るのもそろそろ限界だと思つたとき、急に冷たい空気が流れ出した。

「寒う……」

奏さんが寒そうに縮こまる。俺はステッツの上着を脱ぐと奏さんの肩にかけてやつた。

流石に俺みたいな奴とお見合いした後に、風邪なんてひかれたら洒落にならないからな。

それにもこの突然の冷氣……修羅雪だな〜〜〜〜！ しかも言靈によって気配が消されてるからわからんし。

すると少しほなれた茂みから由加がまたもスケッチブックを掲げていた。

そこに書いてあつた言葉は【好きなお肉は？】だった。

「テメエは少し食い物から放れろやー！」

「えつ？ 私……そんながめつかつたですか？」

「あ…………い、いや違うんですよー！」

「秋月様……言いたい」」とはちやんと言つてください。……私は、先に部屋に戻つてますね」

すると、奏さんは走つて行つてしまつ…………あーあーあーあー  
あーあーあーあーあー  
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー  
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー  
ア、アハハ。アハハハハハハハハハハハハ。

「狂……悪い。まさかこんな事になるとはー！」

「神璽はシモネタが多すぎる。やはり人間は食事について語るべき」

「いや……最後の由加ちゃんのせいだと思つただけだな」

「ところとも、お茶を吹いた時点でアウトだった」

「いや~狂ちゃんドンマイ! 帰りにラーメン奢るよ。いもーとが

「え、何で私がっ！？」命のせんが覗きこむよつて言つたんじ  
やない

「覚えてないなー。それに情報源はいもーと同じやん」

「だつて……時雨ちゃんが言つてたんだもん」

そーかそーか、時雨もグエルだったのか、あの口リ「ン野郎。  
ハハハハハハ、やっぱ俺の味方は姉ちゃんだけだよ。どーせ、ど  
ーせ俺なんて。

「あ、あの狂ちゃーん……？」

「……極点神舞」

俺は極点神舞を発動させた。昔は、囚と一人でしか出せなかつたが今は違つ。

周囲に白い風が舞い起こり、俺の怒りと共に世界を蹂躪していく。俺はゆっくりと後ろを向き、命達に視線を向ける。すると、奴らは途端に態度を翻す。

「ヤバ……」

「よくも、久しづりに俺をここまでキレさせてくれたな」

殺意をぶつけるが、厄介な事にここいらはかなりの修羅場を潜つている。だから、あまり効果は無い。

だが、俺の怒りは十分すぎるほど伝わったようで、蒼一が命を前へと差し出した。

「み、命！ 狂を止めるんだ！」

「う、うん……』『世に『」

「させらかよー！」

命の言靈は声を媒体にして世界を改変する。だから、瓶さえ出せなければ能力が発動しない。

俺は風を操つて、命の周囲を囲むと音の伝道を無くしてやるよつに調節する。

案の定、いくら風の結界の中で怒鳴つても世界は全く変わらない。  
そうすれば命は無力に等しい。

そして更に結界を操作し、空中で緩急をついたスピードで絶叫マシンのよみづてを搔き飛ばしていく。

「み、命ちゃんが……」「…

「神靈、逃げる」

「あーつ！ ちよつと榛名君に由加ちゃんズルイ！」

それぞれの鎧を纏い、空へと飛翔する神靈と由加。甘い、空はもう俺の領域だ。

極点神舞に念じ、神靈と由加が居る地点に数千発の風球を放つ。最初は二人も頑張つて避けていたが、あまりの量に次々と連續で風球当り、やがて変身が解けて、庭にあつた池の中へと墜落した。

「ククククク……後はクソ兄妹、テメーらだけだぜ」

俺が笑いながらそつと、蒼一と遙緋は冷や汗を垂らしながら俺を見る。

「あ、お兄ちゃんどうしたの？」  
「ケケケケ！」

「逃げられない……かといって戦つても分が悪い」

「 もお、嫌あ……」

「仕方ない、最後の手段だ。…………狂、すまなかつた。許してくれても構わないぞ」

蒼一が本当に珍しい事に頭を下げる、だーが！ 許すかこの馬鹿野郎。

力を練りこみ、更にイメージし。俺は白い風の巨人を作り上げる。膨大なエネルギーが固定され。

今にも溢れんばかりまで貯める。

「くたばれやあ！」

「い～やあああああ～」

「うおおおおおお！」

流石に殺すのは後味が悪いので、蒼一と遙緋の面の面のうち中間に地点に巨人の拳を叩き付ける。

すると瞬間にハリケーンのような突風が吹き荒れ、蒼一と遙緋は高き空へと舞う。だがその時、

「秋月様！？ これは一体

最強にタイミングが悪い事に、奏さんが騒ぎに気づいて戻つてしまつたのである。

だが、今更この風のエネルギーを鎮めるにはひょつと遅い。奏さんも、空高くへと吹き飛ばされてしまった。

「ヤ、ヤベエ」

俺は空へと飛び、奏さんを抱きかかえると、極点神舞の力を完全に鎮めた。

まだ、あまり慣れていないためこの力を使つと、俺には殆ど制御出来ないのである。

だが……怪我をさせなくてよかつた。マジで洒落にならなかつたからな。

「秋月様……」

「ああ、スマセン。ちよつと馬鹿共に教育してやつてたんで

「いえ……でも空を飛びぶつて気持ちいいですね」

「まあ、俺もこの式神を手に入れた時は、夢中で空を飛びまわりましたよ」

そんな取り留めの無い話をしていると、俺達は地上にゆつくつと降り立つ。

俺はそつと奏さんを下ろすと、正宗にこの騒ぎがバレないといひ、さつさとお見合いを終わらそうと決める。

いやあ、でもこれで完全に嫌われただる。ストレス解消も出来たし、ある意味ではあいつらに感謝かもな。

そして、俺達は早足で料亭の中へと戻つていった。

正宗には軽くバレていたものの、何とか蒼一達に全ての罪を着せる事ができ、お見合いは終わった。

やっぱ俺にはまだ結婚は早いな。今回の件でそれがとてもよくわかつた。

まだまだ、修行や知識が足りない。後は礼儀作法とかもちゃんと勉強しなくてはならない。後女性会話も。

そんな風に、のんびりと八神の屋敷で構えていると、俺の臥室の内線で正宗から呼び出しがかかった。

「なんだあ？ もしかしたら苦情でもきたのか？」

軽くドキドキしながら、正宗の無駄にだだつ広い部屋に入ると、何故か家政婦が数人。

それは頭に三角巾、そしてエプロンをつけたクンガキ命達。ははあ……罰掃除つて奴か。

俺は奴らを見下しながら、正宗の執務机の前まで歩いていく。

「チクシヨウ……狂むやんめ」

「耐えろ、耐えるんだ俺……」

後ろからの物騒な命と蒼一の「めぞ声を黙殺すると、俺は正宗に問う。

「んで、どうしたんだ？」

「ああ、さつま七海家から連絡があつてね」

「苦情か？」

「いや違ひ……狂、どんな手を使つたんだ？ あのお堅い七海家の次女が君とお付き合ひしたいと」

「……ハ？」

一瞬思考が止まつた。何故？ 何で？ 何故に？ Why?

「しかも結婚を前提にだ。狂、しかも君は安産型だとかなんだと、チェックしたそうじやないか」

「あ、アレは……」

「まあ、何にせよ縁談がまとまつて良かつたよ。あ、これは彼女の連絡先だから、この後連絡しておくよつて」

正宗は俺に一枚のメモ用紙を渡すと、コートを着てビルから出かけようとする。

え？ おこおこ、ちょっと待つてくれよ。だが、正宗はきびきびと支度をすると命運元気だ。

「じゃあ、僕は出かけるけど。サボるんじゃないよっ！」

「へーー」とヤル気のなさげなつめき声を聞くと、満足そうに正宗は部屋から出て行ってしまった。

後に残された俺は、メモ用紙を握ったままポカンとした顔で立ち会へすしかない。すると、

「ロココノ」

命がボソリと呟く。

「ロコータ・コンプレックス」

続いて蒼一も。

「幼女性愛」

と、遙緋。

「異常性愛者」

更に神靈。

「ペド野郎」

止めの由加の一言で、俺の理性は再び爆発した。

次回は未定です。

神璽と由加の話はまだ先送りなので、  
浅葱家の話になる……かと思います。

神々の第一話にこれが追いついたら、  
神々編のキャラの日常をやるかもしれません。

久しぶりに憂鬱な気分。

今日学校で貰つた一枚のプリントは絶対に、お父さんには見せてはならない。

ママならまだいい。だが、お父さんは絶対駄目である。その点はお兄ちゃんも同意してくれた。

曰く、「奴を人目に晒すのなら俺は出家する」だそうな。だが、何故か同意できてしまう。

ウチのお父さんは見た目はそれなりに良い。全然若く見えるしね。だけど普通の家のお父さんは違う、朝からお酒を飲んでグータラグータラ。

ヤル氣のない曰は、一日中パチスロ雑誌を読んだり、近所の野良猫のノミ取りなんかをしている。

本当に欲望のままに生きている人なのよ。だからこそ　　父兄参観には絶対に呼べない。

私は家に帰ると、速攻自分のお兄ちゃんの部屋へと向かい灰皿の上にプリントを置くと、

近くにあつたライターに火をつけて完全に燃やしてしまった。あ、輪廻転生を使えばよかつた。

でもまあ……これで、危機は去つた。お兄ちゃんは命ぢゃんのプリントも取り上げて処分してたし。

そして私は憑き物が落ちたような気分で、自室へと戻り、昼寝を始める。

後になつて思えば、私達は一つのマヌスを犯した。

そう、毎日ダラダラと生きてくるお父さんを侮っていたのだ。

そして、昨日。今日の父兄参観は五時間目・六時間目の授業である。

まあ、紙を完璧に処分し夕飯の時にも全く話題に上らなかつた為、ゆつたりとした気分だ。

ママには少し悪い気もするが、これも息子と娘の平和な学校生活のため。ごめんね、ママ。

ママへと心の中で謝るとい、私は昼休みをゆつたりと堪能する。

(ああ、学校つていいなあ……)

クラスの皆は楽しそうに談笑し、会話に加わらない者もそれぞれが思い思いの昼休みを過ごしている。

ああ、ちなみにお兄ちゃんは命けやんは違うクラスに編入された。流石に双子が同じクラスとかは無いみたい。

さらには命ちゃんまでもが他のクラスなので、騒がしくないのである。

由加ちゃんは同じクラスだけど、昼休みはいつも睡眠の時間やりしい。何やら食後の休憩にはこだわりがあるようだ。

榛名君は昼休みはいつもバスケかサッカーをしてくる。どうやらお兄ちゃんもたまに混ざってるみたい。

そして私が、そんな事を思つていると聖子と志穂が私の席へとやってきた。

「今日、ハルちゃんのお父様は来るの?」

「うひん、プリント見せてないから知らないはず」

「えーお父様に会ったかったなあ」

「残念そつに言ひ聖子。何故？ ってかウチのお父さんとは一回しか会つた事無いじゃん。

まあ、印象が強かつたんだろ? な、きっと。

「ハルのお父さんかっこいいからね。ウチの親父さんとは大違によ」

「かっこいいかなあ？」

「かっこいいじゃん！ ウチの親父なんかお腹は出でてるし年々体臭はキツくなつてくしや」

「いやあ、多分若いだけだと思つよ。確かまだ30代だし」

「えーっ…? やっぱり若いんだあ」

「だつて、私とお兄ちゃんをママが鳴らす時まだ高校三年生だよ?」

「うわ！ ハルのお父さん凄いな……」

「もつとも考へてないだけだよ」

「でも結構良いお父さんだと黙つたけどなあ～せひ、よくウチのお店にも来てくれる」

「え？」「

聖子の言つた何氣ない一言に私は違和感を覚えた。確か聖子の家はうどん屋だったよね。

それにうどん屋へ行つた話なんて一度も私は聞いたことが無い。いつの間に……

「いつもパチンコ帰りにきてくれるよ～ウチの店にはうどんの神様が降りてるってさ」

「ええつ！？」

「後たまにね～自衛隊のカツコイイお兄さんと一緒に来るかな

多分森羅さんだ。まあ、あの人はカツコイイ。本当に何で結婚しないのかが不思議。

前にお父さんから聞いたのだが、マザコンがどうとか言つてた気がする。

「ああ～じゃあアタシも今度久しぶりに聖子の家に行こうかな

「おいでおいで～」

一人で盛り上がる聖子と志穂。しかし私はそんな会話に加わる気にはなれない。

もし、もしの話だけど。お父さんが聖子の家に行つて私の言われたくない様な話をしたとしたら……！

いや、落ち着け私。ウチのお父さんだけそこまでデリカシーがないわけじゃない。

お母さん曰く結構な紳士らしからね。だけど……陸人さん達の

話だとお~~~~~つ！

「ん？ ハルビウしたのよ？」

「別に……ちょっと頭痛がね。それより聖子、お父さんと父兄参観の事言つてないわよね？」

「う~ん、どうでしょお~？」

「ちょ！ それ困るつて！」

「冗談だよ。最近はウチの親が厨房に居る時間ばかりに来るから、あんまり話せてないんだ」

「ああ……よかつた」

「ハルはそんなにお父さんが来るのが嫌なの？」

「嫌つ！」

だつて あのお父さんだよ？ きっと、何か騒ぎを起こすに違ひない。

ママ曰く、昔はもう少し静かな人だつたらしくけど陸人さんの影響であんなになつてしまつたらしい。

つてか……陸人さんつてあの中じや凄い弄られキャラだよね。皆が口を揃えて馬鹿つて言つほどだもの。

そんなん馬鹿かなあ……？ と思つが、ママも常軌を逸す馬鹿と言つていたほどだ。馬鹿なのだろう。

「結構良さそうな人なのにね」

「うそ、そうだよね」

わかつてない、絶対聖子と志穂はわかつてない。あの若々しくて、爽やかそうな外見に騙されちゃだめなのよ。中身はそこらの親父よりもタチが悪いし。

「まあ、こつかウチに泊まりにくればわかると思つむ……嫌でもね」

「え~じゃあ、今度志穂ちゃんと行くね」

「そういえばハルの昔の家は大きなお屋敷だったわね……今度の家にも期待期待」

「いや……アレはハ神のお家で……今は普通の一戸建てなんですねど」

そんな事を話していると、チャイムが鳴つて昼休みの終了が告げられた。

確か五時間目は英語か……まあ、どうせお父さんとかがこないからいつも通りに受けよう。

そう思い、後ろを向くと廊下や教室の一部に数名の親らしき姿が見える。ふふん、やっぱり来てないな。

私は安心して、教科書と筆記用具を出して授業の開始を待った。

五時間田の授業は英語の「Hi-Lo ケーション」。英語の講師を招いて対話する授業である。

英語を使った様々なゲームや、対話の仕方を覚えていくというかにも保護者受けしそうなその授業。

後ろに十人位の父兄が居るせいか、先生も緊張気味に授業を行っている。

私はと詰つと、お父さんの姿が見えなくて気が緩んだのか、非常に眠い。といつよりも意識が飛んでる。

教室を見渡すと、志穂と聖子は普通に授業を受けしており、由加ちゃんは……何かキヨロキヨロしていた。

榛名君に至っては開始数分でもはや半分夢の中である。非常に羨ましいことこの上ない。

「スーパーまで乗せていつて欲しい時は、Could you give me a ride to the supermarket? OK?」

そんなヌルい英会話をしていると、教室の後ろの扉が開いた。  
一応意識しているのか、クラスの視線が入ってきた人物に集中する

あ、アレは!?

ムースで撫で付けた黒髪に、黒のジャケットに白のワイシャツとネクタイ。そして下には少し薄汚れたジーンズ。

そこには余所行きの格好のウチのお父さん 千島蒼威がコンビニの袋を提げて教室に入ってきた。

ってかお父さん! お願いだからワンカップを大量に購入したコンビニの袋なんて持つてこないでよ!

「……あー、『父兄の方はどうぞ奥の方へ』

先生もやや面食らったのか、調子の外れた声で言つ。当たり前だ、じつみても高校生の親には見えない。

中学校ならまだわかるが、流石に高校生での外見は若すぎるだ  
けつ、みたいな視線がお父さんに集中している。

だが、お父さんはそんな視線に気づく事無く香気に手を振り替え  
していた。つて誰に？

見ると、私から少し離れた右の席では聖子がお父さんに手を振つ  
ていた。おいおい……何時の間にこんなに仲良くなつた。  
するとドアがまた開いて講師のケビンが入ってきた  
しか  
も今度は森羅さんを連れて。

「オー！ ソーリイ。 いきなりの方を案内してたのデス。 じつ  
後ろで見学しててください」

ケビンは日本語は結構喋れる方だが、まだ発音がいまいち上手く  
ない。

しかも中々にお茶目な性格であり、男女問わず人気がある二十代  
後半ぐらいの教師である。

森羅さんは森羅さんでノソノソとお父さんの隣まで歩いていくと、  
早速何やら一人で話し始めた。

ああ……お願いだからお兄ちゃんの方へ行つてよ。私がチラチラ  
と視線を送るが全く気づかない一人。

「お、遙緋ちゃん。ちゃんと授業中起きてるじやん

「当たり前だ。俺と遙ちゃんの娘だぞ？」

「お前と遙ちゃん、授業ほとんど出てなかつたじやねーかよ

「出ではいなかつたが、ちゃんと起きていたぞ！」

「威張んなよ……」

ちょーーー 馬鹿！ セめて皆に聞こえないような声で言ひてよ。後私の名前を出さないで～さつきから、クラスの皆がお父さんと森羅さんの方氣にしてるんだから。

と心の中で喋つてみるが、あの人達には通じないだり。いや、通じたら通じたで嫌だけどさ。

私は何とか助けてもらおうと、榛名君と由加りやんの方を向いたが、もうとうの昔に寝てこるよしだ。いよいよ万策も尽きた……ああ、最悪。

その後は、滞りなく授業は進んだ。今はプリントを配られ各自項目を埋めていっている。

その時、ケビンが父兄のまづく近づいて何やら話しかけ始めた。

標的は……お父さんの方ー？ ケビンやめてー！ あの人には近づかないでー！

「オーワー お父さんお若こですネえ Who is your  
chid？」

私の願いも空しく、お父さんには話しかけるケビン。ってか……お父さん英語喋れるのかな？

これは少し気になる。お父さんに勉強とか教えてもらつたこと無いしね。

そういえばママにも無い……いつも私達の宿題を見ててくれたのは時雨ちやんだつたつて。

「おい森羅！ 何で言つてるんだ？」

「テーマの子供ははじつだつて言つてるんだよ」

「お、俺の子供は日本人だぞ？」

「馬鹿！ そのドイツじゃねえ！ お前の子供は誰だつて話だよ」

教室中に起つた失笑。ケビンも苦笑しながらお父さんの答えを待つ。

「……お父さんって日本語すら危つい。本当にもう嫌。するとお父さん。納得がいったようにポンと手を打ちケビンに向かってへラへラしながら、

「オーウー・マイベイビー・イズハルヒ・ ウェンツー！」

馬鹿だ……ベイビーって。陸人さんの方がずっとまともかもしない。

それにウェンツって何よ！ もしかしてセンキューの事？ 意味わかんない！

するとケビンが私の方を向いて、

「オー！ ハルヒのお父さん。お若いネ」

「は、はあ……そうですか」

教室中の視線が私に向かっている。本当にもう嫌あ……早くお兄ちゃんのトコ行つてよ。

森羅さんは森羅さんで苦笑いしながら私の方を見つめるし、榛名

君は寝てるし！

由加ちゃんも寝てる！それに志穂！遠くの席で笑いすぎだから…。  
ってか皆〜！ヒソヒソ話しながら私の方を見ないで〜。

「ハイハイ、お喋りはそこまで…」

先生の手を叩きながらの一聲によつて、再び授業へと集中し始める私達生徒。

お父さんは何かホッとしたよつた顔をしている。一番ホッとしてるのは私だつての！

だが、それ以降ケビンは父兄達に話しかけるわけでもなく、私達の周りをうろついてながら質問に答えていた。

ふう……これでやつと、私も授業に集中できる。

数十分後チャイムが鳴り、授業が終了した。親が居る子達は恥ずかしがりながらも、親元へと行つている。

私はといえば、疲れ果てていてもはや動く気力すらない。ああ…  
志穂と聖子と美穂とかがお父さんに話しかけてるよ。

すると森羅さんが突然動き出し、榛名君と由加ちゃんの席の近くまでいくと、

「おい、神璽、由加

その一言で目覚める一人。すると、段々と一人の顔が青ざめていくのが見える。

珍しいな……あの一人の顔が青やわるなんて。

「し、森羅さん……来てたんですか」

「…………」

「お前らやっぱ寝てたな。これで、お前らの学校の経費削減申請が出来る」

「あ、アハハハハツ！ ジョ、[冗談]でしょ！」

「いーや。杉谷さんが結構上に嫌味言われてるんでナーマジで、お前らの学校交友費は減るから覚悟しとけ」

「や、そんなあ～」

なるほど……森羅さんは査定に来てたわけなのね。それに暇だからお父さんはついてきたと。

いや……ワンカットの袋持つてるから、多分途中のコンビニで会つたのだろう。悪運強いなあ……

そして頃垂れる榛名君と由加ちゃん。アハハ、私を見捨てた天罰だ。そして私が心の力でせせら笑つていると、

「よお、遙緋

後ろを向くと、やつあめどとは違いつもの表情のお父さん。

「あ、あはは……」

「お父さんとお母さんに授業参観を隠すとはこい度胸だな」

「あ、お兄ちゃんの発案なんだよ」

何とかお兄ちゃんに罪をかぶせようとする私。まあ、こいつも振り回されてるからこれくらい良いよね。

つと、〇〇。後の事は考えるのはよめ。そんな算段をしていると、急に不安そうな顔になるお父さん。  
はじめて見た……こんな顔のお父さん。こいつも威張って笑っているお父さんが……

「やっぱり、俺みたいな親は嫌なのか?」

こきなりそんな事を言こ出した。いや……嫌つてわけじゃないけど。「うーん……

なんていうか私は慣れてないんだと思つ。小学校も中学校も、お父さんにはいつも行事には一回も来なかつたから。

こつも居たのは時爾ちやんとママとお兄ちゃん。それが千島家の常識だつた。ああ……なるほど、お父さんは

「嫌じやないけど……まあ、普通はワンカップ持つて学校には来ないよね」

「う……」

「後は問題ないかな。私もお兄ちゃんもずっとお父さんが居なかつたから、こまいちょくわからないんだ」

「やつが……」

お父さんさ、父親らしこ事をしてみたかったんじゃないのだろう

か。

私達が小学校に上がったか上がらなかつたぐひこ家を出て行つたお父さん。

でもやつと、悪鬼のまづの仕事のめどがついてダラけているお父さん。

確かに父親らしい事は何一つしてもらつていない。だからこそ、今日は来てくれたのではないか。

いや、来てくれたというよりも多分、森羅さんから授業参観の報せを聞いて少なからずショックを受けたのかもしれない。

何か……悪い事しちゃつたな。お兄ちゃんは毛ほどもそんな事を思わないだらうナビ。

「でもまあ……来てくれて嬉しいよ」

「お、そつかそつか

「お兄ちゃんも喜ぶんじゃないのかな？ 保障は出来ないけどね」

「ああ、蒼一と命の教室は六時間目に行く予定なんだ」

「命ちやんは絶対喜ぶね

「ある意味、あいつの方が実の子供らしい気がしてきた……と、俺もう行くわ

「うん」

なんなく、今日はあの掴みどりのないお父さんの一面が見えた。

せうこうと、お父さんは手を振りながら私達の教室から出て行つた。

た気がする。

お父さんは、何か”親”といつも非常にじだわりがあるようだ。おじいちゃんやおばあちゃんの事とかも関係しているのかな？ そり、お父さんの親に私達は会った事が無かった。

ママの両親は、ずっと昔に死んじやつたらしこから余えないけど、お父さんの方は生きてこない感じ。

「おーーーー。それじゃあ六时限はじめるやーーーー！」

あ……一つの間にか休み時間は終わり、六时限の先生が来ていた。何か今日は色々考えたからもつ眠い……この時間は寝ちゃおうかな、と思った時にはもう半分夢の中……

結局、六时限は全て寝てしまった。寝ぼけ眼で学校を出ると、何故か校門にお兄ちゃん。命ぢゃんも一緒に居て、私の姿を見つけると手を振ってきた。何だろう？

「どうしたの？」

「…………お、親父が保護者会で出てから待つてみた。腹減つたから何か奢りせてーんだー。」

何ともまあ……素直じゃないお兄ちゃんだ。多分、お兄ちゃんも

嬉しかったのだろう。

お父さんが今日来てくれた事がね。それと、隠してたことへの罪悪感も出てきたのかな?

「蒼ちゃん、何か今日の日本史寝なかつたんだよ! 何でかな~?」

「何でだらうねえ~?」

私と命ちゃんは理由をわかつてながらも、わからないフリをした。それと同時にお兄ちゃんの機嫌がどんどん悪くなつていいくのがわかる。本当に、意地つ張り。

そして、私達三人は校門の傍の鉄柵に寄りかかつて保護者会が終わるのを待つていると、

「お、お前ら何じてんだ?」

父兄達の間からお父さんがひよひよつ顔を出した。すると命ちゃんが、

「蒼ちゃんが蒼威パパさんと一緒に手を繋いで帰りたいって言つたから待つてたんだよーーー!」

「言つてねえよー ぶつ殺すぞー!」

「蒼!」…… わすがにそれは俺も嫌だぞ

「だから言つてねえつてのー!」

「まあ…… 遅くなつちまつたからな。今日はバーッと焼肉でも行くかあ!」

「おーいー！ 遥ママが後で絶対怒るだろ？ ハビ

「肉か…… あ、待ってた甲斐があるな」

「んじょ、せひゅうとに連絡しろー 代金は時雨に経費で落とさせる

相変わらずの極悪人だ。時雨ちゃんが大人びて見えるのはお父さんと一緒に居たからかもね。

命ちゃんがママに電話すると、ママは何故か快諾してくれた。  
もしかしたら、今日は晩御飯作る気がなかつたのかも知れない。  
そして私達は、多分生まれて始めて家族全員で焼肉を食べに行く。  
それは、今まで一番楽しい食卓だった。

## Days11・浅葱陸人（前書き）

次回、神璽と由加をやつて緋色の眼から神々にかけての話は終わります。

その次からは神々のキャラの短編が出てくるかと思います。  
とりあえずトップバッターは、九我山律です（多分）

浅葱家の婿養子になつて十数年。そういうえば、俺が婿養子になるつた時、家族の誰一人として反対しなかつたな。

というよりも親父とお袋は詩歌に土下座してたな……何が「こんな馬鹿息子と結婚してくれてありがとう」だ。

俺の妹の時は結構モめたくせにな、そういうや……姪っ子の裕美にも長く会つてない。ってーか、高遠家途切れんじやん。

……思考が逸れた。そうそう、俺は浅葱家に入つてからほぼ毎年新年は八神家新年会に参加してきたんだ。

すなわち、新年の初っ端から蒼威の不景気なツラと正宗の怪しい作り笑顔を毎年見てるつて事だ。

でも、蒼威と正宗が居るのは久しぶりだな。そんなわけで、今年も例に漏れず八神家新年会会場に俺達家族は向かっていた。

時刻は夕方から夜になろうという所。腹の減り具合も中々にちょうどいい。

「ハル姉ちゃん達もう来てるつて

「へえ、相変わらず遙の所は行動が早いわねえ」

詩歌も梨香もなにやら楽しそうである。梨香なんか昨日までは死にそうなツラして大掃除してたくせによ。

まあ……あの馬鹿でかい浅葱家を掃除するのはかなりの労力だったと思つ。

その間、俺はと言つと邪魔になるからといつ理由で外の掃除ばつかりやらされていた。後はバイクの整備。

あのクソ寒い中草むしりやらやられたわけである。なんていう

が、家の俺の地位が本格的に危ない。

犬でも飼われたりしてみる。あつと言つ間に俺の居場所は浅葱家から消えうせるだらう。

そんな事を考えながら、俺は車を走らせハ神家の指定された場所に車を止めた。

新年早々だつてのに、妙に騒がしく明るいハ神家。所々では酒飲んで馬鹿みたいに暴れてる奴もあり、なんともまあ。

「陸人、降りないの？」

「ああ、今降りる」

詩歌に促されて俺は車を降りる。そして三人で並んでしばらく歩くと時雨を見つけた。

どうやら来賓客に挨拶をしていくよつでいつもの俺様に向ける笑顔とは違う、微笑を携えていた。

そして俺らに気づいたらしく足早に近寄ってきて、

「陸人さん、詩歌さん、梨香ちゃん。あけましておめでとうございます」

「」「あけましておめでとうございます」「

俺達三人も習慣に翻つて時雨へと頭を下げた。すると、時雨が懷から何か白い物を取り出して、

「はい、梨香ちゃん。お年玉」

「あ、ありがとうございます」

「「」めんなさいね、時雨君」

「いや、一応二十歳は超えますしこれぐらいは当然ですよ。詩歌さんも昔僕に下さいましたしね」

「やつねえ……何時の間にか時雨君も「」めんなに大きくなつたのねえ」

「あはは……でも、陸人さんと蒼威さんは僕が生まれてから一度もくれませんでしたけどね」

「まあ……「」めんなさい。陸人と蒼威君には常識とかモラルとかその他様々が壊滅的だから」

心外だ。一度くらいあげた事あるつての！ そう確かアレは

「おい時雨！ 十三年ぐらい前に何かやつたじゃねーか！」

「……ああ、蒼威さんと陸人さんが僕を騙してパチンコ屋に連れて行つたときですね。

そういう、確かに僕が貰つたお年玉を全額スつて泣き出した僕に下に落ちていた玉を渡して

「ほらーこれがホントの落とし玉だぞ」とか白々しい事言つてしまつたよね」

あれ…………… そうだったつけ？ た、多分蒼威がやつたんだよそれは。

つかお前ら何だその田はー その「」めんなさいの田はー

お父さん泣いてやつ。

「相変わらず最低だね。時雨さん、本当にめんなさい」

「子供からお年玉を巻き上げるなんて大人の風上にも置けないわ。  
ごめんね時雨君」

「いえ……もう慣れました。とにかく、父の所まで案内しますよ」

そう言つと、時雨は梨香と詩歌を引き連れて歩き出した。「う…  
…何かついていき難い。

仕方が無いので、俺は一人方向転換をすると蒼威や他の知り合いを探して歩き始めた。

八神のおっちゃんやら、若い衆に挨拶しつつ進んでこくと蒼一と遙緋と命が恐るべき勢いで飯を食つてするのが見えた。  
もはや皿にかぶりつくな感じ。流石蒼威の子供と居候。

「よお、あけましておめでとう……随分と食つてるな」

「あけおめ陸人さん！　あのね。私達大晦日から何も食つてなかつたの」

「あけましておめでとうございます。実は、お父さんが大晦日の食事代をパチンコ代にいれて、見事惨敗しました」

「あけおめ、陸人のおっさん。んで、母さんが久しぶりにブッキンして親父半殺しにした後、家出しちまたんだよ」

相変わらず蒼威も馬鹿だな。……ん？　俺らの中でも一番まともなのは森羅な気がしてきたぞ。

「つて事は遙ちゃん今日もキレてるわけ?」

「命の”探知”でやつと見つけ出して、俺ら三人で説得してやつと機嫌なおしてくれたんだよ」

「お前らも大変なんだな……」

「つてワケで、陸入さんお年玉ひょーだい」

「下さい」

「あ、お願ひします」

手を出しつぶる三人。ヤベ……こんな事想定してなかつたから金がねえよ。

財布の中に一応三万ほど入つてゐるが、これは翡翠の改造費にしき込もうとしてるんだけどな……

うん、今回は間が悪かつたと思つて一万円を三人で分けてもらおう。割れないけど。

「んじゃあ……一万やるからそれを三人でわけなさい」

すると、三人表情が微妙に変化した。そして一瞬でアイコンタクトをすると遙緋ちゃんが、

「そりいえば、梨香ちゃんが最近気になつてゐる人がいるんですねー?」

「ああ、そーそー。アタシもあの子はカッコイイと思つよ」

なぬ……」「いらっしゃ今なんと言つた?

「でも結構遊び人つて噂だよな」

「なにいいいい!? そいつの名前は… 住所と電話番号は…?」

「何がド忘れしちゃつたー」

「福沢諭吉っぽかったよねー。皆で諭吉を見れば思い出すかもねー」

どんなイケメンだ。

「ああ、そうだな」

「…こいつら足元見やがって…………! だ、だが翡翠の改造はいつでもできる。来月だって出来るしな。

しかし、梨香がへんな男に酷い目にあつてからでは遅い。それに時雨の反省もあるし。

俺は財布から万札をもう一枚取り出すと、遙緋と命に渡した。それを受け取ると二人とも凄い良い笑顔になつた。

蒼一は蒼一でいつも通りの表情だけどな。流石は煉を十数年宿していただけの事はある。

「んで、そのヤロオは誰よ?」

「ジョニーズの藤崎君」

「裏で百人斬りの藤崎って言われてる新人アイドルの事つすよ」

「梨香ちゃん。その人に最近御執心なんですね」

「ハ、ハハハ……そ、うか。そーな、の、か」

…………この辺は遙ちやんの血筋だと心から思つた。命も順調に千島の毒に侵されているようだな。

蒼一達と別れた後、蒼威や森羅を探して再びつりつく俺。この家広すぎだつづーの。

ただ、こういう雰囲気は嫌いじゃない。誰もが楽しんで、飲んで、騒ぐ空間。素晴らしいね。

そーいや、梨香達は何してるんだろうか。と、そんな事を考えていると、前方では隠し芸大会が行われていた。

この大会……ここ十数年ずっとやってるな。確か昨年の大賞は時雨と蒼一だったなあ。

敢闘賞は確か正宗。あいつは何か色々と間違つっていた。さて、今年はどうなのかなー？

「続いては、エントリナンバー19番 秋月姉弟による漫才です！」

久しぶりに腰が砕けそうになる虚脱感。ハア？ あの一人が漫才？ すると正月らしく晴れ着を着た罪歌とスーツを着込んだ狂が引きつった笑いでステージの横から

「どうもー」とか感情の籠っていない口ぶりで歩いて行き、マイクの前に立つ。

そういえば、この隠し芸大会は若い衆は強制参加だつたな。やらないきや、スゲー怒られるらしいし。

俺も昔は蒼威と組んでバーチャルセックスの芸をやり、見事敢闘賞をとつた。

それを見て詩歌は卒倒し、遙ちゃんは蒼威に殴りかかつてその暴れっぷりから大賞を貰つていたけどな。

…………うん、もづ黙に出すのは止めよ。

「いやー新年明けましたね、お姉ちゃん。今年もワロシクお願ひします」

「そりだねー今年もよろしく。そりこねば狂ちゃんは今年の抱負とかあるのかなー?」

「僕はアレだな。うん、やっぱ今年はアレだよ」

「もうかアレかー……ってアレってなんやねーん!」

ズビシッと入る罪歌の突っこみ…………うん、お前等にしては凄い頑張ったと思うよ。

周囲は完全に冷え切つた空氣となつており、シーンと静まり返つてただ壇上で狂と罪歌が恥ずかしそうに俯いてる。だが奴らは諦めなかつた。再び泣きそうな表情で声を絞り出すと、

「そ、そういえばお姉ちゃん。僕、最近凝ってる事があるんだ」

「へー。私にも教えてよ」

「んとね……仕事しそぎて肩がこりてるんだよー」

「へえ、じゃあ後で奏ちゃんに揉んで貰えぱいよ……って趣味じやないんかーい！」

極寒地とはこの場所の事を言つのだろ。完璧に白けきつてしまつた。

もう見てられないよ。という事で俺は隠し芸大会の会場からそくさと抜け出そうと人ごみを掻き分ける。

後ろからは”何故か”冬だというのに熱風を感じ「笑えよ……笑えよコラアー！」とか「何で私達が……」とかいう声も聞こえなくもない。

でも無視無視。どんなに悲鳴が聞こえようが無視無視。俺は関係ありませーーーーん。

折角の晴れ着の後ろが少し焦げてしまつた事を気にしつつ。俺は会場を練り歩く。

するとまあ……やつと発見できましたよ。蒼威と遥ちゃんは、宴會場の隅の方に一人で居た。

俺は安住の地を見つけたような足取りで一人の下へと行くと、

「おっす。あけおめー！」

「おー……あけおめ」

「あけまして「ケツ」！」

ちなみに先に言つたのが蒼威、次に言つたのが遙ちゃん。殺すわ。

だが、どうやら相当出来上がっているようで、一人の周囲には大量の酒瓶の空が投げ捨てられている。

流石の俺も酔っ払いにはキれない。遙ちゃんの酒癖が悪いのは十数年前に嫌と言つほど知つたからな。

「聞いたぜ蒼威。またパチンコかよ」

「う、うるせえ……イベントだったからつこ……な、わかるだろ？」「この気持つ？」

ああ、嫌というほどわかるよその気持ち。俺も実は一昨年未遂に終わつたがやうとした。

そして俺が中学校からの親友の問いに答えよつとした時、

「わかつたら、殺すからな？」

遥ちゃんのドスの利いた声。だが顔はいつも通りの笑顔。マジ怖い……

しかも片手に持つてゐる酒瓶は俺の頭部を血に染めるのは最適だろうというような形。

俺の爆轟が先か、遙ちゃんの酒瓶が先かといった所。さて……そろそろ逃げようかな。

「おい、田那。酒が足りない」

「あ……すぐ持つてくれるか」

「一分以内な。遅れたらその秒数×一時間の間口きこてあげないか

「そ、速攻行つて来ます！」

子供か、お前らは。蒼威は緋眼を発動せているのだろう、田に  
も止まらぬ速さで消え去った。  
すると遙ちゃん。手持ち無沙汰になつたのか俺の顔をジィッと見  
てきて、

「相変わらずのアホ面だな……羨ましいよ。その能天氣で何も考え  
てないような表情が」

「ハハハ……ビビの従兄弟のお兄さんには負けるけどな。あの人  
こそ能天氣の擬人化だろ」

「…………」

「まだ引きずつてたのかよつー…？」

「女の子にとつて、初恋は特別なんだよね」

「いや……君つてか俺もだけど、そろそろ40でしょ？ 女の子と  
か言われても

「うわわわ、馬鹿」

酒瓶の一撃。クソ痛え……どうでもいいけど、遙ちゃんは酔っ払  
うと男口調になるのダ。

「詩歌を大切にしてやれよな。いつまでも馬鹿やつてられる年はも  
う終わつたんだ」

「まあ……美津子ちゃん事件の時は御迷惑おかげいたしました

「ああ、アレね。君の口クでもない人生で一番の汚点だろ? そんな売女のガツバガバがいいのか?」

追記、シモネタも激しくなります。

「ハハハ……いや、生活に刺激が欲しくて

「性活だろ? まあ……奥手な詩歌にそれを求めるのは厳しいだろうと思ひナビだな

「ナウなんだよなー」

「ウチの場合は逆だけどな

「……ハ?」

「忘れる、馬鹿野郎」

はい、もう一発酒瓶が脳天に叩きつけられました。いい加減切れてもよくな?

ってか、それにしても蒼威の野郎は遅いな。もうとっくに一分は経つただろうに。

「うつ……蒼威のバカヤロー……」

飲みすぎたのか、遙ちゃんは酒瓶を枕にして机に突っ伏してしまった。

なんていうか、女ってスゲー理不尽。俺の散々頭を叩かれた痛み

の怒りはどうすればいいんだよ。

そんな事を思いながら一息つくと、蒼威が口ソロソと入り口のま  
うから歩いてきて、

「やつと寝たか……」

「テメ……俺を匿してやがったな？」

「悪いな……だが、ここからは俺の手腕を發揮しきついたい。」

「ビースンだよ?」

「ん? 一緒に寝る」

「それだけかよ!?

「馬鹿だなあ……酔っ払って記憶がないのに起きたら變する夫が抱  
きしめて寝ていてくれている。」

女だつたら誰もがときめくだろ? これぞ俺の完璧な仲直りプラ  
ンよ。完全新作千島蒼威オリジナルストーリーだ!」

「こつも酔つているのか、ちょっとウザい。そいや、昔から夜  
だけテンション高い男だったよな。」

「まあ……朴念」と呼ばれたお前がよくわざで考えたもんだ

「元ネタは遙緋の持っていた少女マンガだけどな」

「パクリじゃねーか」

「ハハハ、細かいと詩歌ちゃんと嫌われるぞ」

そんな勝者の笑みをかまして、蒼威は遥ちゃんを抱き上げると部屋から出て行った。

うん……俺は今非常に怖い物を見てしまったよ。勿論蒼威ではない。

それは……遙ちゃんの手がピースサインになっていたといつ事……女ってホント怖えわ。

そんなことなでその後も色々とあり、俺の今年の八神家新年会も終わらうとしている。

毎年色々とトラブルが起るが、今年は色々と疲れたような、疲れていないような……

現在はまあ、これも毎年恒例の行事なのだが、参加者の酔いつぶれていない者全てが庭に集まり輪を囲んでいる。

中心に居るのは勿論頭首である正宗。新年初っ端から凛とした振る舞いでマイクを取り、

「では……今年も、皆最後まで諦めずに生き残るように。全員が幸せな一年を送れます様に」

そういう、手を叩いて目を瞑る。その場に居る全員代俺も漏れず手を合わせると目を瞑る。

本当に今年は色々な事があった。遙緋ちゃんと時雨が俺を訪ねてきたときには本当にビックリしたわ。

小さい頃から可愛げが無かつた蒼一も、更に可愛げが無くなつており、本当に荒れ果てていたよな。

でも今はこつして皆で今年一年の門出を祈つてこる。まあ、

本当に激動の一年だった事が伺えるよな。

「今年も、幸せありますよ！」

俺は、一度声に出して再び田舎を瞑った。

Days12・棟呂神璽（前書き）

久しぶりの投稿です。今回は一本連続で^\_^

そろそろ三月。俺も高校一年生へとついになる。

高校一年といえば、一生で一番楽しい時期なのではないかと思つ。俺は限定されるけどな。

都からは出れない。これはまあ……いいとしよう。俺が結晶を否定したら先生はどうなつちまうんだよ。

だが……これだけは我慢できないというのがある。それは 女遊び。

大阪に居た頃は自由だった。毎晩夜遅くまで遊び呆け、色んな女と知り合つた。

一番燃えたのは女を寝取る事。それまで他の男の女だったモノを自分のモノにしてしまう背徳感。

……そのお陰で男からは嫌われまくつたけどな、俺。

遥緋ちゃんと知り合う前からも、今の中高で先輩を一人ほど食つた。全部寝取りでな。それも来月には卒業！ バイバイ！

「だけどさあ……」

ど、つい口に漏らしてしまう。幸い聞こえてないようではあるが。俺の目下最大の悩みは 現在、とある女と同棲しているという事。しかも知らない女ならまだいい。

問題はそいつが俺の幼馴染にして、俺と同じ結晶使いであり、昔の榛名神靈を知っているという事である。

名前は棗由加……言いたくないのであるが、実は俺の初恋の人。絶対これだけは言えないけどな。

それにしたつてもう吹っ切れたわ。なんたって、まだ先生と暮ら

していた頃の話だからな。

「ねえ、神靈」

と、少し離れたソファーで何かの雑誌を読んでいた由加が俺を呼ぶ。

「ん？ どうした？」

「神靈、変わったよね。昔はこじないやりしき雑誌見なかつたよね？」

由加が読んでいたのは俺の秘蔵コレクションの一つ。しかも一番お世話になつたものもある。

どこからどう見ても裏モノであるそれは当然モザイクがかかっているわけが無く全てが丸見え。

体内に しかも初恋の人にエロ本しかも裏モノを見られた俺。一瞬思考が停止してしまつた。

「あ……いや……ああ……」

「神靈の変態」

想像してみ？ 好きだつた女の子にして、姉のような存在に自分が一番見られたくないモノを見られる気持ち。

まあ……アレだ。よくある母親にエロ本が見つかつた時のような心境。親の事覚えてないけど。

そんなわけで、俺は慌てて由加からエロ本を奪おうと詰め寄るが逆に足を引っ掛けられて転ばされてしまつ。

……相変わらず、体術だけは半端無く強いな。

「駄目、これは私が預かる」

力では絶対にかなわない。大体由加が俺と一緒に住むのは最初末来さんが猛反対した。

男女の眞操がどうのこいつのとか長々と言つていたが、森羅さんが一言。

「例え神璽が由加に夜這いをかけたとしても一瞬で殺されるのがオチですよ」の一言によつて可決された。

男としては悔しい限りだが、それが現実なので仕方が無い。蒼二だつて由加に勝てるかわからんと言つてたし。  
だからこそ、悔しいので俺はささやかな反撃を試みた。

「ほほお……由加も中々エロエロ淫乱ですね。それを使ってナニかする気ですか？」

俺としては、軽いジョークのつもりだつたんだ。だが、由加は顔をトマトのように真つ赤にして、

「…………っ！ 馬鹿！」

由加が俺のエロ本を手で引き裂き、更にはミニアイミ箱にそれを押し込んで火をつけやがった。

メラメラと燃えるあいりちゃんの肢体……を写したページ。俺はそれを拾い上げ心のそこから叫ぶ。

「あいりちゃん…………ん！ ああ…………あいりちゃん！」

「神璽何か知らない！」

そう言い捨てて部屋から出て行く由加。それと同時に部屋の煙探知機が作動し音を立てる。

突然の事に慌てる俺。すると一分もしないうちに、血相を変えた

未来さんがすっ飛んできて何事か  
みたいな顔をする。そして、最悪な事にその時の未来さんの視界には俺はこう映ったであろう。

『工口本を部屋の中で燃やす榛名神醜』……ああ、案の定その日一日は説教で終わっちゃったよ。

結局、その日由加は帰つてこなかつた。どうせ行き先は蒼一の家だろう。遙さんに迷惑がかかるつづーの。

あの家はなんともまあ……居心地が良いんだわ。常に誰かが騒いでいるしな。

逆にウチは静かなもんだ。由加は夜はTVをずっと見ているし、俺はずっと携帯を弄つていて。

会話をすると言ええばするが、それは取りとめも無いもの。昔みたいにずっと隣で一緒に居るなんて事は無い。

そんな事を考えながら、学校へ向かっていると前方で蒼一が一人歩いていた。

「よお！ 今日は一人か？」

「やっぱ由加が行つてたのか」

「ああ……あの連中と居ると騒がしそぎて頭がおかしくなる」

「散々遙緋と命と喋つていたぞ。それこそ一晩中な……だから奴らは寝坊した」

「ふうん……」

「エロ本が見つかったそつだな。ちやんとそういうものは隠しておくれのが礼儀だぞ」

「ずっと一人暮らしだったからよ。つーか、お前は隠してあるのかよ?」

「冗談めかして俺は聞いてみた。まさか、蒼一がエロ本を持つているとはイメージできない。性欲なんてかけらもなさそつな涼しげな男といつのが俺の蒼一のイメージ。だが……」

「ああ。取り出すのに五分ぐらいかかる」

「ええっ! ? 持ってるのか!」

「当たり前だろ? 。俺だつて男だ」

「いや……何かイメージが出来ない」

「そつか……ま、勝手に頑張れや」

「そつ軽く言つ蒼一」。いつその事ちやんにバラしちまおつかと思う。

だが、蒼一も俺の秘密を色々と知つてゐる。特に由加に知られたくない事を沢山な。

すなわちお互い何もできないという事。蒼一は俺をせせら笑い。

俺は何もできずに歯噛みする事だけ。

「つー！ 悔しい！ チクショウ、千島蒼一に不幸が起きまよ  
うこー！ さう神様に祈った。

………… そう、後になつて思えば、まさか現実になるとは思わなかつた。

教室に入つて早速お昼寝タイムに入る俺。すると始業時間ギリギ  
リに遙緋ちゃんと由加が入ってきた。

遙緋ちゃんは俺と由加を気まずそうに見つめ、由加は完璧シカト  
にきやがつた。フン、ガキめ。

H口本ぐらいいいじゃん。アバだつて俺は腐るぞび持つてゐし。  
ウチのクラスの男も全員持つてるんだよ。

なのにあんな些細な事で田くじら立てやがつて、もうこー。あの  
アホには愛想が及きたわ。

そんなこんなで、午前中の授業が終わり昼休み。いつもだつたら、  
一緒に学食行つたりもするが今日は行かない。

由加は由加で授業が終わるとさつさと出て行つしまつたしな。仕  
方ない、蒼一とかと食つか。

俺は席から立ち上ると、隣のクラスに居る蒼一の下へと歩く。  
そして教室を出た辺りで聞き覚えのある声。

「み……命ー すまない。許してくれー」

「…………やだ。H口本持つてゐなんて信じられないー！」

廊下では小柄な命ちゃんが蒼一の首を掴んで引きずついていた。そ

れも、片手で。

きっと式神の力を使つてゐるのであらう。大柄な蒼一を苦も無く引きずつていぐ命ちゃん。

俺の存在にも気がつかないほど怒つてこむやつであり、何となくドナドナが聞こえてきそうなその風景。

フフン、朝俺を見捨てた天罰だ。酷い目に会いやがれ！

「ち、違つてんだ命！　あの本は神璽が……！」

「神璽ちゃんが？」

いきなり振り向く命ちゃん。ビーやう俺の存在には気がついていたみたいです。

しかし蒼一君。俺の所為にするとは度胸だね。

「命ちゃん。蒼一は嘘をついてるよ」

「そうなの……？　でも神璽ちゃんも持つてゐるんでしょ？」

「それは認める。でも蒼一のは超過激な裏モノで変態が見ゆるひみつなヤツなのさ」

でまかせだけどな。

「なつー！」

「蒼一ちゃん……最低。やっぱ眞靈で意識改革しなきゃ」

「ま、待て！　神璽いいいいいい！　覚えてろよおー！」

そのまま引かれりて屋上の方へと消えていった蒼一と命ひやん。

アデュー、君の事は忘れない。

心がすつきりとした俺は満足した表情で学食へ向かおうとする。

するとまあ……田の前に由加が居た。

大方学食でたんまりと食つてきたのだらう。心なしか昨日よりも表情が柔らかい。これなら仲直りできそうな雰囲気。

だが　俺の口から出てしまつたのはただの憎まれ口。

「何見てんだよ」

ああ、俺の馬鹿馬鹿。すると由加もムッとした表情になり。

「別に見てないもん。自意識過剰過ぎ」

「あれれー？　俺君に言つたんぢゃないよー？　独り言つただけなんだけどな？」

「……馬鹿じやない？」

「」の前の数学で因数分解つて何？　とか聞いた人に言われたくないですねー

ああ、更に由加を傷つける事を言つてしまつた。由加は俺と違つてほとんど学校には行つていない。

由加の方が結晶を扱つのが上手い為、ずっとアイツは研究施設に閉じ込められていた。

だから高校の勉強にはあまりついていけない。だからこそ、それだけは馬鹿にしちゃいけない事だつた。

「…………」

由加は俺から田を逸らすと、教室の中へと入つていつてしまつた。

ふう、俺つてマジ最悪だわ。

俺がずっと遊んで暮らしていたのも由加のお陰なのにな。……クソッ！ こんなはずじゃなかつたのによー！

めんどくさくなつたので、そのままカバンをこいつやつと取りに行つて学校をサボつた。

ああ……今日は由加は帰つてくれるのだらうか。あんな酷い事言つちまつたからな。

今まで俺は女なんてオモチャのように扱つてきた。酷い事もしたし、弄んだ事も数え切れないほどある。

別に失つてもいい。世界の半分は女なんだから。そんな気持ちで生きてきた俺。だけど、由加だけは失いたくない。

我ながら自分勝手だとは思うが、失いたくない。でも、素直になれない。

「はあ……帰るかあ」

トボトボと歩いて家に帰ると、中では何故か森羅さんが座つていた。

今日は非番なのだらう。いつもとは違う私服姿でのんびりと構えている。

「お帰り」

「ただいまっす」

「サボりか?」

「……はー」

それつきり特に何も言わない森羅さん。何か妙に気まずい。無言の圧力とでも言つのだろうか。

たまに森羅さんは休日返上で俺達の面倒を見ててくれている。本当にこの人が上の人でよかつた。

部隊が結成されてから、俺達の扱いは飛躍的に上がつた。それも単に部隊の皆さんのお陰なのである。

そして、あんまり黙つてるのが苦手な俺は、とりあえず森羅さんに相談してみる事にした。

「森羅さんは一番大切な女人を傷つけた事がありますか?」

「ああ」

「良ければ……話してくれませんかね?」

「俺は、実の母親を殺した」

「え……」

「俺が警察に捕まりなきや、多分母さんは生きていたのかもしれないと」

「……そらなんすか

「ああ、俺は母さんに最後まで謝れなかつた。自分がやつていた事を最後まで言えなかつた。

それが、俺の唯一の心残り。だから神璽、言いたい事は早めに伝えておけよ。人間何時死ぬかわからないからな」

「…………俺、ちょっと出でます」

「そ、うか。晩飯までには帰つてこひよ。今日は俺が作つてやる」

「うひつす

俺はアパートの外に出ると、すぐに意識を集中させた。すると、商店街の方に由加の結晶の気配。

こいつには非常に便利な能力である。だが、俺はこれの所為で旅行にするいけない。

でも由加が居る。一人じゃない。俺の苦しみを分かつてくれる人が居るんだ。何で俺は気がつかなかつたんだ  
全力で走つて俺は商店街の方へと向かつた。由加に会いたい。すぐには会いたい。その思いだけ。

そして由加の気配がどんどんと近くなり、ちょうど由加が顔を真っ赤にして本屋から出てきたところに遭遇。

「神璽…………

「由加…………

ええい！ 素直になれよ**榎名神璽**。おれ今こそ本心を伝えるべきだ。  
だが、先に切り出したのは由加。頭を下げて俺に持つていた本屋の紙袋を渡す。

「神璽、ごめんね」

袋を開けるとあいりちゃんの写真集。ま、まさか……こいつこれ  
を買ったのか！？

年頃の女がこんなエロ本を買つなんて相当勇気のいる行動だと思  
う。男の俺だつて緊張するのに。

……そりいえば、由加はこういう奴だつた。昔から怒る時は全力  
で怒つたが、謝る時は全力で謝る奴だつた。

俺は由加顔を上げた由加の顔を見ると、頭を下げた。

「由加。俺も酷い事言つてゴメンな」

「神璽…………うん、いいよ」

「やうか……じゃあ、仲直りな」

俺と由加は笑いあうと握手をした。握つた由加の手は暖かくて柔  
らかいけど、少し表面が硬い。

何度も何度も戦つたため、手の皮が厚くなつているのだろう。だ  
が、それすらも何故か愛おしい。

正面には薄く笑つている由加の顔。子供の頃からずっと変わらな  
いその笑い方。

でも何時の間にかその顔は大人の表情。なんていうか……その…  
…綺麗だつた。自然に頬が赤くなつてしまつ。

この俺がだぜ？ あらゆる女を食つてきた俺が一人の女を見て顔  
を赤らめている。ああ、このまま色々したい！

「帰らうか」

「あ、ああ……」

普通の俺だつたら、カラオケかホテルに連れ込むのだが由加はそうはいかない。

大体どんな顔をして誘つて良いのかが分からぬ。この俺がだ。本当に由加は攻略が難しい。

そして俺達は色々な話をしながらアパートまで帰つた。帰ると丁度森羅さんが晩飯の準備を始めた所。

俺も由加も手伝つて、その晩の料理はいくつか失敗したものの、凄く美味しかつた。

だけどまあ……俺の期待していたような展開は何一つ起きてないんだけどな。ああ、俺達はどうせ幼馴染だよ。

うん、きっとそれが一番の良い形なんだ。由加もいつか誰かと結婚する。勿論くだらん男だつたら殺すべきだ。

「神璽、お休み」

「ああ、お休み」

そう言つと由加は自分の寝室へと入つて行つた。追いかければ追いかけられるのだが、それはしない。

何故かそのドアは凄く遠い場所に見える。絶対入つては行けない様な禁断の場所。

何となく、俺はそんな事を思い一回欠伸をすると自分の寝室に入つてさつと夢の世界へと旅立つてしまつた。

余談ではあるが、屋上に連れ去られた蒼一は命ちゃんに散々意識改革をされたらしい。

翌日の通学路では俺と由加と千島さんの田の前で、一人の熱い会話が交わされていた。

「命、愛している。命、アイラブユー。俺はもう命の事しか考えられないんだ！」

「わ、わかったから蒼ちゃん……人前だから静かにね？」

「命……好きだよ。ずっと俺達は一緒に」

うわ言の様に弦く蒼一。ビーツやハリ電線で頭の中を少し書き換えられたらしい。

あのクールな千島蒼一が情熱的になり、愛の言葉をこのクソ寒いつつーのに、朝から喋り捲っていた。

ぶつちやけ、キモい。それは千島さんも同じようであり、

「ほんのお兄ちゃんじゃないよ……」

「ああ……これは誰なんだ」

「いもーとお！ 助けてー！ 蒼ちゃんに犯されるう

「もお、仕方ないなあ」

小走りでじゅれあう二人の下へと向かう千島さん。後に取り残される俺と由加。

何か凄い穏やかな空氣だ。由加と語るとこなんに落ち着くなんて

今まで気がつかなかつたぜ。

すると由加がいつも通り薄く笑みを浮かべ、

「楽しいね。神璽」

「ああ 楽しいな」

その時、気持ちのよい春風が舞つた。俺と由加は髪を押さえて空を何気なく見あげる。

いつも通りの晴天。それを見ていると、自分達が何ら変わらない普通の高校生のように見えてくる。

空は今日も青い。俺達は今日も楽しい。そんな事を思ひと俺達は今だじやれ合つ三人の下へと走り出した。

111から を読む上での注意 + ボツ短編（前書き）

はい、注意書きとおまけページみたいなモンです。  
キャラの由来とかボツ短編とかあります。

## 「」から を読む上での注意 + ポツ短編

「」から に投稿する作品は緋色の眼の神々の黄昏の時の短編です。

神々の黄昏を最新話まで読み進めていないとわからないかもしないので「」注意ください。

ところがで、今回なおまけページといつ事で蒼威の一田で投稿しようと思つたけど、何かめんどくせくなつたり、色々テンションが落ちて投稿しなかつた作品です。

駄目親父千島蒼威の苦悩する父親の姿を書いてみました。書いてみて、気づいたんですけどウチの親父より蒼威はまともだなあ……何て思つた作品です。

後おまけなのでキャラの由来とかその他設定を書いて見ましょうかな。書けるキャラ限定です。

### 【キャラ】

千島蒼一 蒼威の息子だから一代目の蒼つて事で蒼一でいいや。性格は昔の蒼威を暗くしたのがベース。

千島遙緋 やっぱ遥はつけたいよなあ……んじゅ、ハルヒでいいか。無理矢理だけど流行りだしという理由から。

八神時雨 ま、親父が正宗だし、何となく時雨で良いんじゅね？兄キャラが欲しかったので生まれた。

秋月罪歌 今思つと、スゲエ名前。でもさり気なく出番が多いキャラ。実はかなり強い。戦つたのは鬼神ばつかですかね。

秋月狂 うん、何も思いつかなくて泣く泣く狂でいいや。どちらみに結構エロい。

浅葱梨香 陸人の詩歌の子だから、りかでいいや。漢字は適当。神々ではかなり扱いが大きい。

御崎朱音 アカネ。何か響きがいい。ちなみに、暁と戦つていなかつたら瞬を殺していたほど強い。

御崎暁 何か朱音つて夕暮れっぽいから暁でいいや。何だかんだ言つて結構シスコン。

真砂剣菱 真砂は失敗だつたなあ……色々と。でもキャラとしては好き。暁とはシスコン同士仲が良かつた。

八神村雨 時雨と同じく。力に溺れた阿呆。だが、さり気なく面倒見はいい正宗の兄貴。

榛名神璽 御崎家編で緋色の眼を終わらせるつもりが失敗したため作つた。名前の由来は入れ物

秉 由加 神璽と同じく残つた設定を使って作った。名前の由来はこれまた入れ物。

神代此方

実はナナシつて名前だけで終わらせるキャラだつた。

神代彼方

ナナシが名前を持つたため、急遽緋色の眼用に作成。

神代瞬

同じく、実は他の作品でこいつらだそつかと思つてましたのよ。

神代刹那 同じく。ちなみに刹那達は偽名です。母がつけた本名はついに明かされなかつた。

天美命

五分で考えたキャラ。ここまで重要なキャラになるとは誰も期待しなかつた不遇な子。

天美運命 命がヒロイン級になつたので、最強の壁を置いてみた。名前の由来は”命”の漢字がついてるから。

有馬空我 空我つて名前は素直にカツコイイと思つたから。ちなみに有馬は偽名

石動大和 空我と一緒に運命を守る騎士のような役割だったが、ただのサンドバッグ化。石動は偽名。

神崎森羅 昔やつてた小説から出演。ちなみに十五分で考え付いた。結婚させてようかどうかかなり迷った。

浅葱陸人 同じく。相変わらず馬鹿を貫いてるので一番書きやすい。ちなみに婿養子になる前は高遠。

浅葱詩歌 同じく。明るくなつた詩歌を出すのも悪くは無いな、と思い書いた。ちなみに親父はまだ生きてます。

千島蒼威 同じく。微妙な優等生から駄目人間へと変貌。15年間で人は墮ちる。いつのまにか最強へ。

千島遙 同じく。緋色の眼の中では一番目に凶悪。旧姓海野。四季シリーズの妹です

八神正宗 同じく。ロリコンと散々弄られたため、割かし明るくなつた。しかし戦いでは鬼。

海野誠一 同じく。なんとなくゲストキャラで出してみた。@木一ムどうしようかな……

海野夕 同じく。この世界最凶キャラ。さり気なく緋色の眼エピローグにセリフだけ出演。

戌亥空 同じく。名前だけ出演。前作では主人公だった：相変わらず誠一のツッコミ役。ゲイボルグは錆びていない。

戌亥空音 同じく。名前だけ出演。腹黒さが消え、普通の主婦に。空に空音は安直過ぎたと今更ながらに反省。

岩瀬純也 同じく。Daysに名前だけ出演。大学で出来ちゃつた婚。ヤクザの親に妻の面倒を見てもらい卒業して教師へ。

岩瀬奈央 純也の娘。罪歌のバイトの同僚。年の離れた弟が居る。夢は罪歌と同じ。

戌亥翔 @ホームのキャラ。空の息子。緋色の眼エピローグで命と追いかけっこしている。やはり親に似て女顔。

海野友一 翔と同じく。名前の由来は誠一の願いを込めて、友達を一番大事にする男。愛という妹が居る。

大野聖子 遥緋の友達でも作つとくか。みたいな勢いで作られた。  
実家はうどん屋。

絹塚志穂 蒼一と遥緋と幼稚園から一緒に。ちなみに中々のお嬢様。  
昔は三人でよく遊んだという設定。

伊達英輔 蒼一達の友達。修学旅行編で初登場。ちなみに、D  
aysで短編今書いてます。

村松信吾 同じく。ちなみに英輔とは幼馴染。神璽のナンパ術の  
弟子第一号。

と、まあ基本的にはこんな感じですね。

それではボツ短編、ボツ短編とある父親の一 日をどうぞ。

まあ、平和だ。

俺、千島蒼威は今日は珍しく朝早く起きたので、TVを見ながら  
のんびりと日曜を堪能している。

一年ほど前までほぼ休み無しでずっと働いてきたので俺にはしば  
しの休養が必要だった。

……いやいや、別に働きたくないわけじゃない。ただね。なんて

いうの？メリハリつてやつだよ。

人間ほどよく頑張つたら、ほどよく休憩しなきゃ駄目なのよ。

そんな言い訳を頭の中でしつつ、俺は本田＝本田のビールに手をかけ、

「全国のお父さん。お酒はほどほどにね」

ちょうどつけていた某チャンネルに出演していた猿みたいな爺さんが言いやがった。

何やらこの男、最近では視聴率王などと呼ばれていてこの時間帯のニュース番組の顔だな。

ちなみに何でこのニュースを見ているかといふと、息子の蒼一が大好きで千島家の朝はいつもこればかりなのである。

すると酒のコーナーが終わり、今度は美人で巨乳のアナが出てきた。やっぱジジイよかこっちだわな。

「続いては、荒れる子供達。家庭での親の責任と教育の特集です」

すると様々なVTRが流れた。

高校生で恋人が妊娠してしまい、転落人生を送つた男とその親の悲惨な未来。

大人しい優等生の子供がある日、キれて両親を刺し殺してしまつという未来。

そして特集の締めに再びジジイが出てきて言つ。

「全國のお父さん。もつと子供とVHS＝ビデオケーションを取つてあげてください。子供はいつもSOSの信号を出していますよ」

そうやって番組は締めくくられました……ビデオケーションですか。

ハッ！ 何で俺がいきなり弱気の敬語モードになつてんだよ。ウチの子に限つてそれは……

「……で俺は、ちょっと後ろ向きに想像をしてみた。

「蒼威パパさん！ 私、蒼ひやんの子供を妊娠してしまいました！」

「まあ……そういうことだ親父」

「なつー？ おこおこ、お前からわからぬつあるんだよー。」

「私は産みますよ。だつて私と蒼ひやんの愛の結晶だもん」

「まあ、やうするわな」

「や、そつなのか……？」

「あ、やつこえば蒼威パパさん。ウチのお姉ちゃんがかなり怒つてるんで、挨拶にこと言つてるんですけど」

「え……俺が行くのか？」

「子の不始末は親の責任だそうだ。ま、よろしく頼むぜ」

「なにいいいーーー？」

現れる数千もの悪鬼の大群。そして【九尾の狐】の全幹部に囲まれ、リンチされる俺……  
賠償金一億。そして蒼一と命は子供を連れて蒸発……更に遙ちやんは遙緋を連れて俺と離婚……

「い、い、嫌だあああああああア！」

おのれ蒼一ーーー！。お父さんはそんな子に育てた覚えは無いぞ！  
大体アイツは昔から親の俺にも考えている事がよくわからなかつた。ま、数年しか一緒に居なかつたけど。

しかしそれを差し引いても、奴の行動や言動は尊敬する父に対するものじゃない！

一発ガツンとやつてやらなきゃいかんな。

「ん？ 駄目親父、こんな朝早くにどつした？」

苦悩していた俺の背後から声がかかる。そしてその声の主は俺の息子、千島蒼一。

振り向くと奴はネクタイにジャケットを着用した私服で俺を見下ろしていた。

俺は「ホンと咳払いをして、姿勢を正すと、

「蒼一、こりに座りなさい」

「さかみ」

そうきたか……！」のクソガキヤアツ！

「……来月の小遣いは要らない様だな

「チツ……」

渋々と心から嫌そうな顔で俺の正面に座る蒼一。全て、この人に礼を取くせない態度は誰に似たんだ？

遥ちゃんはああ見えて、かなり作法は厳しくされたらしく俺よりも心得ている。

じゃあ……誰に似たんだ？　まあ、きっと先祖の誰かにこうこう奴がいたんだろうな。

「お前、う〇〇の言ひ出しないか？」

俺がそう言つと、蒼一は心から氣の毒そうな顔で俺の事を見やがつた。

そして、一息つくと真正面から俺を見据えて言つ。

「つこに脳みそまでアルコールにやられたか……よし、これからテ

メーは禁酒だ。決定。」

「違えよー。」

「んじゃ、何だ？　俺に世界を大いに盛り下げる千島蒼一の団でも作れってか？」

「それも違う！　つてか下げるなよー。」

「じゃあ、早く言えよ。もう一分もアンタのために浪費してしまっただろ？」「

こんつのクソガキ……本氣で大我でぶちのめしてやる？と思つ。いやいや、子供がムカついたから式神で半殺しだしましたーなんてことが知れたら俺の名声は確実に低くなるだろ？

ただでさえ、ここ数年まともに働いてないのに。いつもやって入つて埋もれてくんだな。……話が逸れた、じゃあ言ってやる？

「お前、命とするときは避妊はしろよなー。」

チクショウ、あのクソガキ。お父様を全力でじばき倒しやがって。あの後、俺は怒り狂った蒼一に完膚なきまでに叩きのめされて意識を失つてしまつたようだ。

しかし、大いなる収穫もあつた。そつ、蒼一はシモ系の話に免疫が無い。

だからこそあそこまでに過剰な反応をしたのである。クククク……大人びてはいるがまだ中坊だな。

あの様子だとまだしてはないようだ。とりあえず安心。

「お父さん、お兄ちゃん凄い怒つてたよ？ 何か言ったの？」

また、キッチンで何か得体のしれない食い物を作つていたのだろう。

Hプロンを外しながら、遙緋が俺のほうに向かつてきて言ひ。この甘党は誰に似たんだか。遙けやんは甘いものがあまり好きではない。だとしたらまた誰かであろう。

それにしても遙緋は蒼一と違つて素直に育つてくれたようだ。俺に生意気な事は言わない。素晴らしいね。

「いや、性教育の話だ。アイツも命とほぼ同棲してるからな

「ふうん……そういえばたまご、命ちゃんの甘える声とか聞こえるからねえ」

「な、何だとー？」

「命ちゃん積極的だし」

「命めぐらし俺を離婚に追い込む気が」

「何の話？」

「いや、なんでもない……そういえばお前、何か悩みとかないか？」

「悩み？」

「ああ、お前みたいな根暗女は溜め込みやすいからな。お父さんが話を聞いてあげよう」

「失礼ね！ 強いて言つならお小遣いが少ないぐらいかな？」

……なるほど、確かにいつらの小遣いは月に八千円だったはず。高校生としては妥当だろ？

しかし、俺の時にはもう少し貰つてた気がするな？ いや、俺はカツアゲしまくったからだ。

ああ、そうそう。そういうば、この前俺の部屋のタンスの後ろに封筒に入った金があつたな。

「よし、遙緋！ 俺の部屋のタンスの裏に封筒があるから取つてこい

「え、あ……うん！」

遙緋は大急ぎで、部屋から出て行く  
あ、アイツ緋眼使つてやがる、何て女だ。

遙ちゃんは俺が居ない間どんな教育をしていたのだろう。いや、俺が会つた時はもう少し大人しかつたな。

でもアイツもいつか嫁に行っちゃうんだよなあ……まさか時雨とかじやないよな……。

「ただいまっ！ あつたよ」

遙緋から封筒を受け取ると、中にあつた金を取り出す。1、2、3、4……おお！ 一亿万五千もある。

俺はその中から五千円札を三枚取り出すと、遙緋に渡した。

「これを三人で分けろ」

「やつたあ～～っ！ お父さん大好きー！」

……ほほお、これが父親の喜びかもしね。娘が楽しそうにしているのは中々気分が良い。

これの究極版が陸人になるんだろうな。少しは奴の気持ちが分かつたかもしれない。

いや……馬鹿の気持ちは俺みたいな天才には分かるはずが無いアッハッハッハ。

「んじゃ、クラスの子とカラオケに行く事になつてたから行ってくるね！」

「おうー、声帯潰れるまで歌つてこいやあ

「はいはーい

そう言つと遙緋は支度をして物凄いスピードで家から出で行つた。だから無闇に緋眼使つての！

それにしてもまあ……久しぶりに父親らしい事をした。これで遙

紺は大丈夫だろ？

「ただいまー」

おっ遙ちゃんが帰ってきた。たまには父親らしい事をしたと皿櫻してやるひじやないか。

最近、俺はどちらも遙ちゃんの信頼を失って気がするな。これで一気に挽回できるはず。

俺は急いで立ち上がりと玄関へ向かつ。

「お帰り、遙ちゃん

「あ、うん……ただいま？」

「荷物重いでしょう？ 俺が持つよ」

「あ、ありがと！」

買い物袋を持ってキッチンまで行くと、荷物を置いた。

遙ちゃんは、ポカンとした顔で俺の行動を見つめている。フフフ、次で止めた。

「蒼威君……どうしたの？」

よじ来た。俺は遙ちゃんを優しく抱きしめると、耳元で囁く。

「こつも頑張つてもりつてゐからね、たまには俺がこいつ事しないと」

「え……こいよそんな……私は好きでやつてるんだし」

クツクツクツ、このやつ方で落ちない女は居ない。正に空先輩の行つたとおり。

女は幾つになつても愛される」と、大切にされる事がとても嬉しい。

遥けちゃんは久しぶりに耳まで真っ赤にして、上目遣いに俺を見つめて、「えへへ」と笑う。

可愛い…………おひこれで準備は整つた。

「遙ちゃん、俺今日は子供達に初めてお小遣いあげてみた」

「へえ～喜んだでしょ」

「うん。遙緋にあげたんだが、凄い喜んでくれた。この封筒様様だよ」

俺は手に持つていたさつきの封筒をヒリヒリと振つて見せた。すると、それと同時に遙ちゃんの笑顔が硬直する。…………アレ?

「蒼威君~？」

「な、何?」

「その封筒はねえ……来月のパーク費用だよお?」

「へ?」

「蒼威君がよくパチンコでずっと前からパチンココジコジ貯めてたアタシのヘソクリなの~」

「あ、あ、あ…………」

「蒼威君、そこそこ正座」

「はー…………」

日本最強と言われた式神使いの俺でも脅えてしまつほどいの威圧感。  
そういうれば遙ちゃんの説教は滅多にしない分長いんだよなあ……  
それこそ全ての不満が出てくる。

そして、

「蒼威君ってさ昔から思つてたんだけどお金に凄いルーズだし、女  
心分かつてないよね？ 女にとつてはデートは幾つになつても  
大切なもものなんだよ？ これ、昔も言つたよね？ それに、一年前  
だつてさあマツサージ師の美穂ちゃんだけ？あの事もまだ  
ちゃんとした弁明聞いてないよね？ 陸人君の美津子ちゃんの事そ  
れじや笑えないよ。大体さあ、朝からお酒つて体と子供達  
の教育上よろしくないんだよ。想像してごらん。自分のお父さんが  
朝からビール缶開けて、仕事もせずに新聞読んでるの。  
嫌だよね？ それにさあ……最近夜はすぐに寝ちゃつてアタシの事  
全然構つてくれないしさあ。聞いてる？ねえ聞いてるのー？」

火責めのよくな一時間が終了した。俺の陸人達に聞かれたら元気よく屋上から飛び降りたくなる演説と、空先輩の言つていた困つたらキスで口を塞げ作戦が功を奏し、何とか許しを貰えた。

しかし、来月は高級温泉旅館に連れて「行くことになつてしまつて」いる。

そしてガキ共のその間の食も確保しなければ、ああ……金もないしどうしよう……。

ん、そういえば俺には便利な時雨ハズレが居たじやないか！  
俺は早速廊下に出て、八神の時雨直通の番号を押す。…………4  
ホール田で時雨が出る。

「はい、時雨ですけど」

「おっ！ 時雨か？ 俺だ！」

「……オレなんて知りあいは居ません。では失礼します」

「そりが、そんなに部屋に大我を打ち落とされたいか」

「あ、蒼威さんですか～どうも、お久しぶりです」

「白々しい……さて、用件だが仕事を回してくれ！」

「蒼威さんが出来るような仕事は無いです」

「わたくしアラツー」

「神代との戦い以降、結晶が安定しますからね。悪鬼の数が結構減ってるんですよ」

「ぬう……」

「だから八神は経済方面に力を入れてるんです。蒼威さんは算数すら危ういでしょ？だから無いんですよ」

「な、ナめんな！」

「要人暗殺なら腐るほどありますよ。例えば～～」

「いや……もういい」

「そうですか。まあ……何か適当なのがあつたら回してみますよ」

「お願ひします……」

俺は意氣消沈をして電話を置く、時雨ときあめが駄目だとすると後は陸人達だ。

陸人は浅葱あさぎじゃ権力低いし……詩歌ちゃんは遙ちゃんの耳に入る恐れがある。

森羅や先輩は公務員か…………くつやーーーーに来て知り合いざないが少ないのが裏目に出るとは。

ちなみに正宗の野郎は論外だ。絶対に俺が苦労する道を選択しあがるからな。

すると、落ち込む俺の目の前に二コ二コ笑った命が現れた。

「よお……電話使うのか？」

「蒼威パパさん、せつきは随分盛つてましたねえ」

「 つー?」

「俺を花とするならば君は太陽だ！君が居るから俺は咲き誇れる。  
……普通は女性を花に例えませんか？」

「うう……望みは何だ？」

「流石お話が早い！ 実はちよつと御相談が」

「な、何だ？」

「いやねえ……実は一せつきの五千円にもう二千円プラスしてもら  
いたいなーなんて？」

「うう……」

「蒼ちゃんとお揃のピアスが欲しいんですけど、後二千円… お願  
いします！」

「バ、バイトでもなんでもすればいいだろ」

「心から君だけを愛している。僕はもう君無じじや

「わかったわかった！ 持つてけ泥棒！」

俺のサイフから飛んで行く1000円札が一枚。  
そして命は軽くスキップしながら家から出て行つた……あの悪魔  
め。

やはり俺には……あそこしかなかつ！

一時間後、俺は行きつけのパチンコ屋の前で蹲つていた。  
財布の中の残金は五五五二円。せつかもで一万円以上はあつた  
のにこの低落。

まんちゃんなんか大嫌いだ〜〜！ やつぱ女の子は黒髪の遙  
ちゃんみたいなタイプに限る。

へン！ あんな金髪ビキニ女なんかもう知らん！

「……はあ」

しかしそんな事を言つても、財布が軽いという事実は全く変わらない。

そして俺はこの世の全てを喪みながら、町をトボトボと歩く。  
ここに住むようになつてから約一年と半ヶ月、中々良い所だが  
いまいち道がよくわからぬ。  
だが、こんな気分の時にはちょうどいい。俺は適当な道を歩いて  
いく。

「……？」

すると、珍しい事に老舗つぽいづじん屋が立つてゐるのを見つけた。

俺らが子供の頃には結構あつたのだが、それも時の流れなのだろう。今では全く見かけない。

そう思つて、急に懐かしくなつて俺の足は自然とつじん屋へと向かつた。

そして、カウンターに近づくと、

「親父さん、かけそば一ツ」

「あ、はーーい。いらっしゃいませ」

店の奥のほうからビニカで聞いたよつた声が聞こえた。  
すると現れたのは、遙緋の同級生の……聖子ちゃんだったかな？

ふんわりとした雰囲気の女の子だが、今は頭にバンダナを巻いてエプロンをしているので、なんていふか、凄くこの前見たときよりも大人っぽく見えた。

「あれ？ ハルちゃんのお父様じゃないですかあ」

「あ、娘がいつもお世話をなってるね」

「いえいえ～私こそ、ハルちゃんとソージ君とハルちゃんにまわせ話になリつぱなしなんですよ」

「そ、そ、うかい……いやね。親としても釐一の傍若無人っぷりには手を焼いているんだよ」

「え？ ソージ君は学校じゃ静かな子ですよ？ あんまり喋らないし、でも可愛いんですね」

「ハハハ、あのガキのビニカが」

「やつですねえ～実はここだけの話一週間前にですね」

それから聖子ちゃん……いや、聖子様による子供達の近況が語られることが十分。

……ククッククククククククククク！ これでのクソガキ共の鼻つ柱をへし折れるつてモノよ。そして俺がうどんの代金を払おうとするとい、聖子様が言った。

「あ、今日は私が奢ります！ 今後ともウチのうどん屋をどうぞ御覗願に！」

「ありがとうございます！ ああ、家の手伝いなんだ

「あ、はい。ウチは兄弟が結構多いのでお父さんもお母さんも忙しいんですよ」

「偉い！ ウチの馬鹿娘何かは今日はカラオケになんて行ってやがるのに……君は偉いよ。」

今度陸人や森羅をだまくらかしてこのうどんを五十杯ぐらい食べさせよう。

味もさることながら値段もリーズナブル。素晴らしいね。このうどん屋。正にうどんの神様が光臨してるよ。

「そんな事なことですよ～では、また御来店くださいませ」

その後、本屋とかへ寄つて俺が家に戻ると千島家では夕食が始まつていた。

我が家ルールとして、食事に遅れたものはいくらおかずが少なくて文句は言えないのが鉄則。

さすがに盛りが三人も居るせいか、俺が帰ったときにはもうほとんど無い。

だが、俺には聖子様のうどんがまだ胃の中に残つてゐたため、十分すぎる量であつた。

そして、俺は皿までの復讐を果たす。

「なあ、蒼一……お前の学校に藤島京子ちゃんつて居るか？」

俺のその問いに、遥ちゃん以外のメンバーの箸が一瞬止まる。命は俯いてジッと蒼一を睨んでいるし、遙緋は気まずそうにお茶を一杯啜つた。

だが、まだまだだ。

「何だ、お父さんには話してくれないのかー。じゃあ命、一年生に杉村君つて子は居ないか？」

再びピリッとした空気が流れる。今度は逆に命が俯き、蒼一が命を睨み始める。

ケケケケケケケケッ！　お父様を張り倒し、脅迫した罪は重いぞ貴様等。

そして、遥ちゃんだけが頭にマークを浮かべながら成り行きを見守つていた。

「ハハハハハハ、お前達も青春してるじゃないか。結構結構」

そして、俺は笑いながら食器を下げるとき最高の瞬間で風呂へと漫かり、上がった。

やはり風呂上りの一杯は美味しい。これで後は面白ごっこでも見て今日は寝ようかな。

俺はTVのリモコンのボタンを押すと、適当にチャンネルを変え始める。

すると、朝のジジイがまたTVに出ていた。ビーナス、夜の討論番組らしい。

「今、問題になっている少年問題についてありますよね。私も朝の番組で紹介したんですが深刻ですね」

「やつぱり、家庭でのP///I/コケーションも重要なですね」

「おーおー、俺は今日は子供達とP///I/コケーションを取りまくったぜ。やつぱり重要なのはそこだよな。」

「だけど、最近の子は敏感ですからねえ……些細な一言でも結構傷つく事が……」

「やはり程々に、それで居て重要な所はしつかり變してあげないと

「子供のプライバシーの侵害とかはマズイですね。全国のお父さん、気をつけさせてさこね」

そう言って番組は終了した。…………何か朝と話ってる事違くね?

つてかなんだかつてつてつてから後に感じるこの異様な殺気の  
ようなものは。

そして俺が振り向くと

千島蒼威

全治一週間の軽症。

## Days13・伊達英輔（前書き）

本当にサブキャラの話となつております今回。  
本当に勢いとノリだけで、考え付いた作品です。  
そして次回こそは律です！ もうほとんど書けました。

神々の次話投稿ですが、また長期で出かけるので  
24日か25日に一話連続投稿します。

人生とは、常に敵が居る物なのかもしれない。

小学校の頃は田の上のたんごぶである上級生達と喧嘩ばつかしていました。

中学校の頃は親や教師 果ては他行の生徒とばかり喧嘩をしていました。

同胞と言つてよかつたのは、書籍と幼稚園から一緒の村松信吾と少数の友人だけである。

そして今、高校時代の敵は何とも我ながら数奇な人生を歩んでいると思う それは親友の父親であった。

俺は一昨年、恋をした。それは激しい恋。もうその子が好きで好きで堪らない。

好きな子の名前は大野聖子といつ、この街の中学生出身の女の子。ちなみに実家は老舗つぽいうどん屋。

俺はたまたま入学式での子と喋り、一瞬で恋に落ちたんだよ。早い話がヒトメボレ。

だが、その恋は前途を極めた。まず、クラスが違ったので親しくなる機会がまったく無い。

放課後に待ち伏せとかも考えたが、いつも千島遙緋と絹塚志穂と一緒にため内気な俺は話しかけることができない。

信吾だつたら玉砕覚悟で突っこむのだろうが、生憎俺はそういうキャラじゃないのだ。だからそんな感じで夏休み突入。

夏休みが終わった九月の始業式。奇妙な転校生が三人ほどウチの

学年に來た。

隣のクラスに編入された桑由加、そして俺のクラスには天美命と、千島蒼一といふ転校生がやつてきた。

まず話題になつたのが、隣のクラスの千島遙緋の双子の兄だとう事。まあ、顔は良く似ていたな。

そして天美命と何やら付き合つているような雰囲気があつた。

だが、浴びせられる質問に段々と嫌気が差したのか千島蒼一は全然喋らない。

それと引き換えとばかりに天美命はベラベラと一日中喋りまわしている。本当に、奇妙な連中だった。

そこまでは良いんだ。良い奴なら話すし、悪い奴なら付き合わなければ良いだけの話。

だが　俺が一番許せなかつたのが、

「あ、やっぱソージさんだあ！　お久しぶりですー」

「えっと……大野さんだよね？」

「聖子でいいですよ。隣のクラスに編入したんですか？」

「ああ……まあ、これから妹共々よろしく」

「任せてくれさいー。じゃあ、早速学校の中でも案内しましちゃうか？」

？

「え……？　ああ……頼むよ」

そのまま蒼一の腕を取り、隣の校舎へと消えていく一人を俺は黙つて見つめていた。

……久しぶりに人を殴りたいと思つた。そして、何となく泣きそ  
うにもなる。

流石にその日は一日へこんだまま無為に過ごし、放課後も教室で  
最後の一人になるまで呆けていた。

すると我が親友村松信吾も鈍いなりに俺の異変に気づき、相談に  
乗るといつ。

しばらく迷つたが、信吾は口は結構堅いので全部話す事にする。  
そして、十分ぐらいかけて全てを話すと、

「千島が恋敵か……」

「ああ……」

「俺もあの野郎は気に食わなかつたんだよな。女はべらかして何時  
もスカしてやがるしよ」

「おお。お前も同じ気持ちだったのか

「当たり前だぜ。つづ一わけで、久しぶりにちょっとシメて見る?..」

「シメるのはやめようぜ……ただ、軽く齧すとか

俺達は中学の頃は恐喝とかイジメもやつていたのだが、とある事  
件をきっかけに止めた。

恥ずかしくて後輩にも馬鹿にされたが、まさか二人組の小学生に  
タコ殴りにされるなんて……

その後輩達も今ではその小学生にズッタズタにされたけどな。あ  
あ、あの小悪魔とはもう関わりあいたくない。

確か名前はなんだっけ……確か犬だと海だと何だかだつたな。  
すると信吾も思い出したのか顔を青くして、

「そ、そつするか」

後になつて思えば、やはりあの小学生達の教訓を生かして止めておくべきだった。

翌日、千島蒼一を呼び出した俺達は完膚なきまでに叩きのめされた。触る事すら出来なかつたんだ。

殴り合いになつた瞬間。背筋も凍るような殺気が充満したのだけは覚えている。

そう、そんな奴に俺達が勝てるわけがなかつたのであつた

「ふう」

物思いに耽るのを止め、俺は溜息をつく。アレからもう一年か……今では蒼一や聖子ちゃんとも何故か友達になり、毎日楽しい生活を送っている。

本当に人生何があるかわからない。信吾に至つては、もう昔の事何か丸つきり覚えていない感じだ。

友達になれたのは良いが、それつきり俺達の関係はまるで进展していない。

というよりも、下手に動いてこの関係を崩すのが怖い。もしフ撒れでもしてみる、一度と友達には戻れない。

それぐらい、この恋にはリスクがある。そして、同時に最強のラ

イバルも同時に存在していた。

「ねえねえ、今度ハルちゃんのお父様はいつ来るのー？」

「いや、授業参観以外であの人人が学校なんかに来ると思ひつへ.

「それはほり、愛する娘と息子の様子を見にとかあ？」

「あの人につてそれは無いよ。きっと今頃、野良猫のノミ取りか  
「いいともー」とかテレビに向かつて言つてゐるはず」

「残念〜」

「聖子……何でそんなんにウチのお父さんにこだわるの？」

「だつてかつこいいし、お話は面白いし。パーフェクトなお父様じ  
やない？ 私の理想の男性なの」

千島蒼威……去年、ホストみたいな人と授業参観で蒼一一をからか  
つてた人だ。

命ちゃんは何が楽しいのかブンブン手を振り回していくだけ……

「まともな仕事してればいいかもね。あの人組織には合わないらし  
くて、フリーみたいなものなのよ」

「そこがいいのよー！ 孤高の男つていうか、女は近づくなーみた  
いな？」

「ああ、だつて浮氣なんかしたらママに殺されるしね。キャバクラ  
行つて帰つてきた日には、

ママは包丁投げつけるわ、関節技決めるわ、本当に大変だったんだから……」

スゲエ母親ですね、おい。

「あはは……何か可哀想

「自業自得だよ。バーしてママが居るのにキャバクラ何か行くんだ  
うー。」

「それは男だからでしょ、お父様本当に可愛い

「そんなモンなのがなあ……」

遙緋ちやんと楽しそうに千島蒼威のクソッたれについて語る聖子  
ちゃん。今日も可愛いね。うん。

ただ好きな女の子が他の男の話をするのって結構心行くんだ。  
さてどうしたもんかな……

その晩、俺は悩みに悩んだ。それはもう悩んだ。酒も飲みまくつ  
た。そうしなきゃ堂々巡りにしかならない。

嫌がらせで信吾にも電話をかけた。そして部屋で一人で叫んだ。  
妹は「ミミを見るような目で俺を見た。

そして 明け方頃。ついに俺は一念発起し、夏祭りに誘つ事に  
決めたんだ！

やうなればやる事は早いほうがいい。そーいや、神璽はまだ病院で寝てるらしいけど大丈夫なのかな？

まあいい。アイツがその程度でくたばるわけ無いからな。千人の女と寝るまで死なないらしいし。由加ちゃんも可哀想に。

そんなわけで一旦俺は寝て起きたらシャワーを浴びて、勝負服に着替えるとリビングに居る妹に、

「どうよ。マイスター？」

「おかあせーん！ またおにいちゃんがくるったー」

たつたと駆けて行く我が妹（十歳）…………いかん。俺は何をしてるんだ。これじゃあまるで信吾だ。

こぐらテンションをあげる必要があるからってこれじゃあいつも俺じゃない。

落ち着け、落ち着けよ俺。…………よし、これでいつも伊達英輔だ。うん、変な奴を思い出した所為でおかしくなったよ。そして俺は電車に乗り、いつもの通学路を歩くと途中で方向を変えて決戦の地のうどん屋へ。

かなり緊張している。だがここまでいたらもうヤケだ！ 俺は震える手でドアを開けて中へと入った。

「いらっしゃいませー……あ、英輔君だー！」

幸いな事に聖子ちゃんが居た。神様ありがとー。愛してる！ だが、心臓が高鳴りまくり。

「少し近くに来たから、ちよつと寄つて見たんだよ

「今日は信吾君と一緒にないの？」

「ああ、アイツは……まあ、どつかで遊んでるんじやないかな？」

「ふうん。じゃあ、御注文は何に致しますかー？」

「あ。きつね一つ。大盛りで」

「はいはーい！ きつね大一つー！」

厨房の奥からお袋さんの声が聞こえた。今は親父さんは居ないのか。よし、好都合。

俺は差し出されたお冷を飲み、喉を潤す。現在聖子ちゃんは暇そ  
うに店内をウロウロしている。チャンスだ。

「うーーーす！」

卷之三

ପ୍ରକାଶକ

突然ドアが開いて現れる傍目にも堅気とは言い難そうな強持ての男達。しかも数は三人。

全員俺が見上げるぐらいの長身で、全員私服。革ジャンを着込んだ大柄な男とアロハシャツのホストみたいな男。

た。これが本当は父親かよ。超若いじゃん」と、すると聖子ちゃんは営業スマイルで三人を出迎えた。

「「Jんにちはー蒼威さん」に陸人さんに森羅さん

「「Jんにちは聖子様。今日は馬鹿一人も連れて来たんじよろしく。  
俺はいつものセツトね！」

「馬鹿は陸人だけだら……あ、俺は生中と肉つづん大盛りで」

「へッ！ マザコソと女に頭のあがらねえオタクがよく言つぜ。俺  
も生中と枝豆どざるを大盛りでー」

仲が悪いんだか良いんだかわからない三人は、俺の座っている力  
ウンター席傍にドスドスと腰掛けた。

早速聖子ちゃんが頬んだ酒やらシマミを持つてくると、おっさん  
達はわいわい騒ぎながら談笑を始める。

すると聖子ちゃん。何を思ったのか俺の方を向くと、

「あ、そういうえばそこに居る英輔君も蒼一君達のお友達ですよー」

えええええ！？ 何故俺を紹介する必要があるの！？ すると  
千島蒼威が俺の方を向き、

「おお！ いつもウチのクソガキ共がお世話になつてます」

「あ……いえ、俺も仲良くなつていただけて光榮です」

「またそなんあ！ 遥緋はともかく蒼一のクソつたれには手を焼か  
されるでしょ！」

何だこの人。何でこんなに軽いノリなんだアー！？ つか、息子  
をクソつたれって……

千島蒼威氏は何か変な父親だ。この人が蒼一と遥緋ちゃんの親と言つのが凄く納得できる。

俺は「はあ……」とか適当にお茶を濁して何とか会話からの脱出を図るうとしたが、

「蒼威、息子のダチに何のもてなしをしねえってのは、少しどうかと思ひやせ」

突然意味が分からぬ事を言い出した革ジャン。ええ、何か俺一人状況に置いてかれでんだけ……

「確かに……よし、英輔君。こいつこおいで」

「い、いや……そんな、いいですよ」

「ああ？」

革ジャンを着込んだ大柄な男が俺を見た。うわあ……絶対この人ヤクザだよ。助けて聖子ちゃん！

だが聖子ちゃんは厨房に入つてしまつていて、姿は無い。他に客の姿も無い。

全ての救援が断たれた俺は、なるべく生存確率を上げるために千島蒼威氏達のテーブルにつく。

「今日は俺の奢りだ！　じゅんじゅん食つて飲んでくれたまえ！」

「いや……悪いですよ」

「安心しなさい。俺達は今日偉大な鍊金術師へとなり大きな成功を掴んだのだよ英輔君！」

完璧酔つてゐるなこの人。千島蒼威氏は懐から大量の諭吉を取り出すとそれで自分の頬を叩き始めた。

すると、他の一人のうちのまだ堅気つぽい方 確か聖子ちゃんは森羅さんと呼んでいた人が、

「すまないな。こいつら酒に酔つと人に絡みまくるんだ……しばらく付き合つてくれないか?」

「あ……はい」

「俺は神崎森羅。そこの馬鹿面が浅葱陸人。よろしく」

「あ、はい……伊達英輔です」

「一応、由加と神靈の保護者代わりのよつた訳だから、そんなに警戒しなくて良いよ」

「由加ちゃんと神靈の保護者だったんですか。初耳です」

「まあ……特に血縁とかは無いんだけどね。良かつたらあの二人の話とかも聞かせて欲しい」

「いいですよ。俺が知つているような事でよければ」

森羅さんは何か凄いまともな人だった。俺が由加ちゃんと神靈の話をするとかなり真剣に、

そして笑いながらよく聞いてくれた。それだけで、この人の神靈と由加ちゃんへの愛のようなものを感じる。

蒼威氏はひたすら愚痴ばっか、どうやら家で相当激しい事をやつ

てこる「らじくブツブツ弦くよう」に喋った。

陸人さんは……何か奥さんと娘さんに冷遇されているようであり、酒を飲みながら一人で泣いている。

時折聖子ちゃんも会話に参加し、目的と違つてはしまつたがそれなりに楽しい食事のひと時。

酒も「高校生ならノマノマイヨイ」とか意味不明な理由で大量に流し込まれた。そして会話は子供について再び語られ始めた。

「やべえ……命が妊娠なんてしてみる。俺はどうすればいいんだ」

「梨香あ……詩歌あ……お願いだから、俺の誕生日くじに覚えててくくく」

「蒼」にも常識くじにあるだろ。高校生なんだし

「馬鹿野郎！ 僕だつて高校で出来ちゃつた婚だぞ！ お前んとの由加だつていきなり妊娠するかもしねいんだぞ」

「そんな馬鹿な……ハハハ……でも神璽の奴が……

「神璽つて女好きだろ？ 男と女つてのは何があるかわからぬいからなあ」

「ああ、その前に彼氏ハつ裂きにすりじゃいいんだよ

「…………お前の遙緋ちゃんだつてそりじゅねーかよ  
「うわあ…………お前も陸人と一緒にか

「詩歌…………違うんだ。アレは会員制の出会い系サイトで……」

「お前だつて由加がそつなつたらハツ裂きにするだろ?」

「梨香…………な、何だその目は」

「……まあ、わからん」

「梨香あああアツ!!!! 詩歌あああアツ! お父さんをお父さんを許してくれえ!」

「うるせーーーワトリ!」

「人の会話遮つてんじやねーよ!」

ボ「ボ」に殴られる陸人さん。一人とも子供達の将来について深く悩んでいるようです。

周囲にはかなりの量の酒瓶。うええ……気持ち悪い。蒼威さん達はまだ全然平気そうなんですけど……  
この人達の胃袋と肝臓はどうなつてるんだ。全く。これじやあ……俺の目的がいつまでも、

「お~お~、英輔君。君には好きな女の子とかいないのかい?」

「君ぐらいの年ぐらいだと、一人ぐらいは居るだろ?」

今度は俺が絡まれました。はい、森羅さんも完全に酔っ払つてしますね。うわあ、もう駄目だ。

「まさかウチの梨香じやねーだろ?」

り、陸人さんの娘さんなんて知りませんよ～～つーか、厨房で洗物してゐる女の子ですよ～

「じゃあ、遙緋なのか！？」

何でそうなるんですか。

「お、違います」

「ウチの娘のどに不満があるんだ――アツ！」

ぐいぐいと締め付けてくる蒼威さん。完全に冤罪だ。理不尽だ。

「不満なんて無いですよお～」

「じゃ、じゃあ由加なのか!? おい、英輔君。由加なのか!?」

だから、何でそうなるんですか！？ 他にも女の子いっぱい居る  
でしょうが。

「あ、由加ちゃんは怖いです～～僕はんの時に話しかけると鬼ですううう

「なにい？ 由加だつて優しい所とかあるんだよおお！」

もはや滅茶苦茶であつた。俺を含め全員が悪酔いし、まともに呪律が回っていない。

すると由加で……いや、床でシクシクと一人泣いていた陸人さんがむくりと起き上がり一言。

「なるほど、聖子様か」

ひとつと最高のスマイルでそう言った。途端に俺の顔は真っ赤に染まり、何も言えなくなってしまった。  
その反応を見て蒼威さん達は急に真顔になると、テキパキと片づけを始めた。何だ、このいきなりの変わりよつは。散らかっていたテーブルの上を片付け終わると、妙に真面目な顔で蒼威さんは一万円札一枚テーブルに置き、

「すまない、英輔君。調子に乗りすぎた」

「頑張つてくれ。無論、由加達には内緒にしておこう」

「恋は渾身の右ストレート。 b y 浅葱陸人」

それを言つと嵐のよつにお店の外へと出て行つてしまつ蒼威さん一行。本当に、テンションで生きている人達である。この一時間ほどの付き合いでもそれだけはわかつた。ついでに、かなり良い人達であつた事も。

なんていうか、馬鹿なんだよね。いい意味で、何となくその教育方針やら考え方にも尊敬できるような所もあつたしやつぱり俺達みたいな子供とは違うと思つた。

「あ、蒼威君達やつと見つけたー！」

「ヤ、ヤベヒ……遙ちゃんだ。逃げるぞー！」

「待つなさーい！ 蒼二、遙緋、命ちゃん。そつこいつたわよ

「わわわわわわ！ 蒼二テメヒー！ お父さんに蹴りくれやがつたな

「命お！ 噛むなよお、マジ痛いからあー！」

「OK、遙緋ちゃん。俺は素直に降伏しよう」

店の外からそんな声が聞こえた…………うん、軽く前言撤回。そして何かが殴打されるような音。掠れた悲鳴だけが、静かになつた店に響き渡つた。ああ、何か一気に空しくなつてきたよ。

そして何かが引きずられていくような音がした後、店の静かさに気がついたのか聖子ちゃんが出てきた。

「あれ？ 蒼威さん達食い逃げ？」

「いや、お代なら置いてつたよ」

「あ、ホントだ……それにしても、今日は楽しかったねえ」

「ああ、凄い人達だつた……」

「英輔君があんなに必死になつてる顔始めてみたよー

「ハハハ……お恥ずかしい」

それつきり少しの間会話が途切れた。今なら言える。いけ、伊達英輔、男だろ。

それに陸人さんも言つてたじやないか、恋は渾身の右ストレートだつてさ。すなわち直球つて事だよね？

俺はそう勝手に解釈すると、声を絞り出すよつとして喋りだす。

「あのや……来月つて何か大きな用事ある?」

「ん? 特に無いなあ……」

「じゃあた……夏祭り、一緒に行ひつよ」

言ひたあああー つこに言ひまつたよ俺。だが、聖子ちゃんは特に何の反応もせずに、

「……よ~? ってかどうせ神靈君辺りが監で行ひつて言ひだし  
み

「いや……そりじやなくて、その……一人で……」

「え……」

明らかに聖子ちゃんの顔が変化した。うはあ……これで俺はもう後戻りは出来ない。

嫌だつた。この心地いい友達関係を崩すのが嫌だつた。嫌だつた。何もせずに卒業してしまつのが嫌だつた。

でも、これで俺は一步進めた。なのも出来なかつた一年前とは違う。ついに一步前へと進めた。

「いいよ

「…………え?」

我ながら間抜けな声だつたと思つ。

「一緒に、一人で行つてもいいよ

「あ、マジドー。」

「うん」

「じゃ……じゃ、じゃじゃあ、あ、後でメールか電話しても良いかな？」

「うそ……待つしる」

「はあ……照れる聖子ちゃん可愛いぜえ。やつたよー。やつたよー。うん、脈アリって事じゃん。

」「のぞこなさがいい！」「の照れてお互いが喋れない空気がいい。すると聖子ちゃん、氣まずさを解消するためか

「じゃ、ね今まじめやね」

「うそ」

もう壇ごとテーブルの上にあった酒瓶を数えて、領収書をジッと見てかかった金額を計算していく。

「お会計、一万三千五百八十円になります」

「え……？」

足りてませんよおお！  
蒼威さん。

メッセージにアドが入つてなかつたのでここで返信します。

^つよしさん

現在、過去の小説は自分のPCに残つてゐる程度です。  
投稿した場所も迷惑書き込みのせいで、かなり後ろになつてしまつてます。そして一番の問題が、それは某ゲームの一次創作なんですね。

だから、それを知らない人には全く意味がわからないと思うんです。一応緋色の眼は、それと同じ登場人物と過去の出来事があつたけど、そのゲームとは関係がないようなパラレルでの話みたいな感じで書いてます。自分のオリジナル？の部分だけ引き継いで書いてるんですね。

現状では過去作を読む事は自分で検索して探してもらうしかないのですね。千島蒼威とかで検索すれば結構ヒットしますので。

というわけで、次回は梨香です。

それは、僕の十歳の誕生会の時の話。まだ僕が私という一人称だった頃の話。僕が初めて恋を知った時の話。

あの頃の九我山の期待は全て僕に注ぎ込まれていた。やつと生まれた跡継ぎ、だけど女。それでも跡継ぎ。

その為、僕は幼い頃から徹底的に厳しく育て上げられた。普通の女の子みたいて綺麗な服を着れる事は滅多に無い。

それでもその日は、私の十歳の誕生日だという事で普通の女の子の服を着させてもらえたんだ。

(そして、時雨と出会った)

父は色々な家の者を私の誕生パーティーに呼んだ。それこそ、家の使用人を総動員するほどの規模。

僕は知らない大人や知らない子供にずっと頭を下げさせられ、大した感情が込められていない

「おめでとう」をそれこそうんざりするほど浴びせられた。そんなこんなで僕が疲れてジュースを飲んでいた時、

会場が一瞬「ざわつ」という音を立てて静まり返った。気になつて私が見るとこちらへ歩いてくる数人の男達。

「おい……八神だぞ」

「千島と浅葱も居るじゃんか……」

「アレが緋眼の一族か……」

「後ろの子供が、あの八神の次代か……いいか？　顔を忘れるなよ？」

「珍しいな……あの家がこいつらの場に出張つてくるのは」

私も顔ぐらい一人の子供を除く、全員の顔と簡単な経歴は知っていた。

八神家頭首八神正宗。あの八神の現頭首であり、その武勇も耳に届くほど。

その後ろを歩くのが浅葱陸人。浅葱の当主の夫であり、浅葱の力を僅か数年で立て直した立役者。

最後尾が千島蒼威　　最強最悪の式神使いとして最近名を馳せている男。

最近では、八神に戦いを挑んだ土倉をたった一人で全員叩きのめしたという情報まである。

だけど、その蒼威と陸人の後ろを凜とした姿勢であるく少年は見た事が無かつた　すると父が、

「やあ、ようこそいらっしゃいました」

「お招きに預かり光栄です。九我山さん」

「それで、あの……後ろのお三方は……」

「ああ、後ろの二人は非常に凶悪な殺人犯のような目つきをしておりますが、息子の世話係なので安心してください」

「はあ……」

笑いの感情を感じさせない笑顔で言つハ神正宗。後ろの一人は少しムスつとしたが何も言わない。

すると、一番後ろに居た子供が一步前に出て父の前で頭を下げる  
と、

「はじめまして、ハ神正宗の息子のハ神時雨と申します」

「ああ、君がハ神の次代か。まあ、ウチの子とも仲良くなつて  
くれると在り難いよ」

「ええ、僕も仲良くさせて頂ける事を光榮に思います」

もう一度恭しく頭を下げて僕の方を見る時雨。後ろの一人は何故  
か笑いを堪えていたがな。  
すると時雨は僕の方へと歩いてくると、

「お誕生日おめでとうございます」

ああ……僕だって女の子なんだ。一人の男性にときめくなんての  
は良くある。

信じろよ。僕だって結構女の子らしいんだぞ?今では少女マンガ  
は「ソリと集めてるし、恋愛小説を書いたりもする。

主人公僕。相手は理想の男性な。我ながら痛いが。まあ、僕は本  
当に不覚にもハ神時雨の笑顔に一目惚れしてしまったのだ。

「あ……ありがとうございます」

「これ、プレゼントです。良かつたら受け取つてください」

渡されたのは指輪。それも大して高い物でもないし安くもないもの。

「だけど、あの頃の私にはそれが、まあ……その……婚約指輪？……ああ、婚約指輪に見えて仕方が無かつたんだよ！……そして思わず赤面して私は気の利いた挨拶も出来ないまま　ただ、ドキドキしていたんだ。」

決して私は年下が好きというわけではないんだぞ？　ただ時雨がかっこよかつただけで……ああ、何を考えてるんだ僕は。

「では、また後で」

それだけ言つと時雨はスッッと立ち去つてしまつた。僕は何の声もかけれない。

追いかけようとしたが、使用人にお色直しの時間だと止められてしまう。ああ……時雨。

そんなわけで、僕は大急ぎでお色直しを終わらせると時雨を探して会場を歩き回つた。

「どうだらう……？」

正宗さんなら見かけたのだが、肝心の息子が居ない。もしかしたら、どこか一人になつているのかも知れない。

そんな予想をした私は、階段を上がつた所にあるテラスのような場所へと足を進めた。

すると、案の定時雨はそこに居た。それも浅葱と千島と一緒に。何を話しているのかと僕が聞き耳を立てていると、

「今日は疲れたなあ……もう帰りたいわあ。それで一緒に梨香と寝

るんだ！」

「オメーの臣体と一緒に寝たら潰れちまつよ」

「ハンー む前なんか最近息子に冷たくされてるから良いくせ」

「うつ……でも遙緋が懷いてくれてるから良いくせ」

「今度、僕から蒼一に何で嫌いなのか聞いておきましょか？」

「時雨……つてか嫌いが前提で話を進めるなつーのー。」

「蒼一は僕にも少し余所余所しいですかね。僕としても話してみるだけ得がありますから」

「うわあ……まだガキのくせに、生意気な事を」

「そーいや。確か九我山の女の子に指輪あげたよな？ このマセガキ」

「ああ……あの男っぽい子ですか。まあ、九我山の『機嫌も取れて、どこかの変な女から無理矢理渡された指輪も処分できて正に一石二鳥でしたね。それに、どうでも良いことです。』

……え？

「うわあ……将来の女泣かせがここに居る」

「絶対口クな大人にならねーな」

「まあ……一緒に居る大人達が口クな人じゃないですかからねえ」

「てめコラア！陸人はまだしも俺までいれるんじやねえ！」

「蒼威、これはお仕置きが必要だぜ……」

「おう！……あつ！逃げるな時雨！待ちやがれ！」

その後、私は……生まれて始めて本氣で泣いた。三日間ほどずっと泣いた。

まず男っぽいと思われた事が本当に悲しくて、そして指輪に関しては心に深い傷を負った。

舞い上がっていた自分が馬鹿馬鹿しくて、滑稽で、本当に悲しくて。

それから僕は一人称の私を辞めて僕と言いはじめる。理由は酷く陳腐な物。

いつか時雨を見返してやる。アイツよりも強くなつて、アイツが惚れるぐらい綺麗になつて、

アイツの心を弄んでゴミのように捨ててやる。そう決意して僕は女と見てくれなかつたアイツへの皮肉として

僕と名乗る。これは一種の決意なのだ。そして僕は式神の修練を積み、様々な勉強をして、”鬼憑”的力を高めていく。

幸いな事に弟も生まれてくれた。これで僕はもう九我山の跡継ぎになる必要は無い。

そして、数年後「九我山の戦姫」と呼ばれるほど強くなつた僕は、女性としての美しさも運が良い事に兼ね備えていた。

そりやもう、縁談は断るのがめんどくさい位来たし、言い寄つてくる男も掃いて捨てるほど。

僕はその間さり気なく、情報屋を使って八神の情報をそれこそ逐

一集める。

二年前に起きた神代との戦いの時には、少し協力してやろうと思つたが”十文字”から何故か禁止が出てしまつ。

元々僕らの特区には関係なかつたし、家の者も危険には晒せない。莉王は警告を無視して一人で行つたけどな。

数の十名家では十文字が一番強い。それこそ、他の家が結託しても奴らは余裕で返り討ちにするだろう。

あいつらは何か気味が悪い。あいつらの取り巻きの一派も何か気味が悪い。

だからこそ、数の十名家は五家に分離して今では十文字派と四条派に真つ一いつ。ちなみに僕らは四条側である。

そして神代戦争終結後、八神は八頭を倒して八の名を冠する數の十名家へと入つてくるのだつた。

あの八頭を倒すとは時雨も中々強くなつたものである、すると八神側から連絡があり近々挨拶に行くとの事。

「やつたあ！」

と思うわざ使用人の前でガツツポーズしてしまつた僕。これが、後の律様御乱心事件の発端となつた。

まあ……それはおいといて、挨拶の話。数年ぶりに舞い上がつた僕は一番自信のある服を着て、下着も一番可愛いのにした。  
……いや、深い意味はないんだ。どーセ、どーセ僕なんて男してしか見られてなかつたんだし。

そして、八神が九我山の屋敷に着た。ちなみに僕は緊張しそぎて、明け方まで一人布団の中でクスクス笑つっていたのである。

「お久しぶりでござります。九我山さん」

「ええ、律の誕生会以来ですね。まさか貴方達も数の十名家に所属

なむねとせ

「八神の力にも限界が見えましてね。これからは、特区を中心に色々とやっていこうかと」

「宜しくお願ひします。私はもう病弱の身で、」おまじめ、家の方は律にまかせつゝきりなのですよ」

「ほお…… そういうば、随分とお綺麗になりましたな」

「ええ、今では伝説の娘ですよ……ん？」どうした律？

「え？ ああ、すいません」

固まつてしまつた。私の視線は、今正宗氏ではなく後ろの時雨に釘付け。

相変わらずカツコイイ～～！ もう意地悪するとかそんな考えは全て吹き飛び、愛して欲しい。ただそれだけ。

だが、私の熱烈な視線には全く気づかずに時雨はただ、後ろで黙つて座っていた。

「ほ、私の事、覚えてる？」

僕は時雨にそう聞いてみた。だが、時雨は眠そうに目を擦り一言。

「え？ と…… まだ私としても小さかつたものでよく覚えてないんですよ」

何だと？

「あの頃、時雨殿は小学校に上がったぐらいでしたからな。覚えてないのも無理は無い」

「お恥ずかしい限りでござります」

そのまま、用はないとばかりにまた後ろへ下がつてしまつ時雨。僕の心は再び絶望へと染まる。僕の数年間は一体なんだつたといふのか、僕は何のために

時雨が僕を見ていた時間は数秒ほど。この数秒のために僕は僕は数年間も 頑張ってきたのに。

何の感慨とばかりに俯く時雨。僕はただずつと貴方を見てきたのに、酷い……

結局その日はそれで時雨達は帰つてしまい。僕は一人傷ついて、しばらく引きこもりがちになつた。

そんな現状を開拓すべく、三ヶ月後に僕は気分転換も兼ねて出かけることにした。

しばらく落ち込んでいる間にもめんどくさい仕事が入つたため、いつもやつて休日を満喫するのは久しぶりの事。

「やあ……颯太はいるかい？」

やつてきたのは五月の 事情があつて颯太だけの屋敷。幼少時からこの家とは親しくさせてもらつてゐる。

すると、使用人があつてきて「颯太様はいつもの場所です」と伝えられた。僕はそのいつもの場所へと向かう。

少し離れた場所にある、大きめの体育館のような施設。中に入るといつも通り金属バットを振つている颯太の姿。

バッティングセンターが入つてゐるその場所は、昔から颯太や僕達が集まる一種の秘密基地のような場所。

大人になつた今でもよく来ている。すると、颯太が私の姿に気づ

いたのかバットを振るうのを止め、

「律、よく来た」

「ああ……お邪魔させてもらつていいよ」

「問題無し。莉王も来ている」

「何?」

颯太の視線の先には、ソファーにびっかりと座り込んで偉そうにしている金色の髪をした男。

本人曰く、「金髪って何か王っぽいじやん」と、家に規定に逆らつてまでもその色を維持しているその男。

名前は四条莉王。変人揃いの数の十名家でも一番の変態と称される男。

「莉王も居たのか……」

「ハハハ、新時代の王はアウトドア派なんだ。屋敷に引きこもつてばかりじゃ民の状態もわからん」

「ここは室内だろ……」

「この偉そうな態度は相変わらず。自分の事を【王】と称し、また常に王であろうとする男。それが四条莉王。

まあ……偉そうで変人なのだが中身は中々に出来た人間であり、颯太を含め僕の幼い頃からの数少ない友達の一人。

すると莉王は、手招きをしてこちらに来いと示す。僕は溜息をつくと、莉王の正面のソファーへと座った。

「フン、それにしても相変わらず不景氣なツラだな」

「余計なお世話だ」

「それよりも、聞いたぞ律。少し前にハ神がきたんだってな？」

「…………ああ」

「その様子だと、見向きもされてないようだな」

「「ひぬせ」…………」

「俺様は幼い頃からお前の努力を見てきた。女でありながら、強く、美しくあろうとするその姿勢。

お前は素晴らしい女だと俺様は思っている。だが、肝心の思い人の態度は全くつれないのが現実だよな」

「…………何が言いたい？」

「美貌は駄目だった。だが、もう一つの方は試したのか？」

「あ…………」

「力で、お前はハ神時雨とまだ勝負をしていないだろう」

確かにそうだった。僕の外見は見向きもされなかつたが、まだ力の方は試していない。

そして、力の方は美貌よりも遙に自信がある。絶対に時雨に負けた氣はしなかつた。

僕はそんな自信を持つるほど頑張ってきたし、それを知っているからこそ莉王も僕にそう提案したのだと思つ。

「……負けなさい」

「その意気だ。そして何と俺様達四条は、近々八神潰しの計画を練つてゐる。わー凄い偶然」

「……何だと？」

「俺様は人類の王。そして剣術にしても王。王とは頂点。俺は、全ての剣士の頂点に立たなければならぬ」

「はあ……？」

「聞いた所によると、八神正宗は中々の剣豪らしい俺様は引くわけにはいかない」

相変わらず、破綻した理屈だ。だがこれが莉王。あの帝さんの事件から、こいつはこうなつてしまつた。

王、頂点。懐かしい、いつも帝さんはそんな事ばかり喋つていたな。

「しかし……いきなり攻撃するのもどうかと思つや。確実に他の家や世論を敵に回すだらうしな」

「安心しろ馬鹿者。一応は復讐心に駆られた八頭の頭首からの依頼だ。八神を叩きのめせとのな。

王としては下の者の意見を聞き流す事はできない。やはり、民の事情に目を向けてこそその王であろう」「う

「ふうん……」

「ま、他にも色々と手は打つけどな。その辺はお前や颯太に動いてもらひや」

「御意」

「なるほどな……四条、五月、九我山ならばたとえ浅葱や千島が介入してきてもあまり問題は無い」

「一階堂も居るぢや。あの雨龍が協力を申し出でてきた」

「あの男がかつ！？ 下手すれば僕達が滅ぶぞ」

「安心しろ。そう簡単には裏切らせない。王として家臣の事も監視はするぞ」

…………一階堂雨龍は数の十名家の中でも危険な男。奴に歯向かつて破滅したものも居るが、

一番多いのは奴に裏切られて破滅した者が一番多い。それ程に自分勝手な奴なのである。

自分中心という考え方では莉王と似ているが、アイツは情の力ケラも無い。だから僕は嫌いなんだ。

「というわけだ、律。乗るか乗らないかはお前次第だ。さあ、どうする？」

莉王が意地悪そうな顔で僕を見た……ちえつ僕の答えなんて当たる予想できているし、

心眼で知つてゐるくせに。だが、莉王は何も言わずにじっと僕を見つめている。颯太もさり気なく視線を送ってきた。

……ああもう、お前達はそんな僕に喋らせたいのか。

「答えは、Yesだ。これで満足だろ？」

莉王の顔に薄い笑みが張り付き、少しほなれた場所に居る颯太も軽く笑つたのを感じた。

そしてこの日から、僕の運命は大きく変わったんだ。

## D a y s 1 - 5 ・浅葱梨香（前書き）

今回は結構長いです。

今までの d a y s の中じゃ一番長かつたと思います。  
色々と詰め込みすぎたかもしません。

そんなわけで次回はファーストコンタクトですね。  
神々の黄昏が蒼一達の話になつてからの話ですが。

といつあえず、剣菱、暁、ナナシが再登場し雨龍も絡んでいきます。

「え～……来月にある体育祭について、議論したいと思います」

時刻は放課後。私達三年B組のホームルームの時間。  
教壇に立つのはクラス委員長のマッシンこと、松島楓君。スポーツ万能、勉強壊滅といった微妙な委員長。

修学旅行が終わったら、すぐに体育祭がある我が学校。お父さん曰く、昔からそういうらしい。

中高一貫教育のこの学校は蒼威さんや森羅さんやお父さんの母校でもあり、その三人で悪名を町中に轟かしたらしい。  
だが、私は浅葱陸人の娘があるので高遠陸人とは完全に無関係だと先生達は思ってくれている。ホントありがたい。

お父さんも浅葱の一員なので、かなり情報は隠蔽されているので  
その辺は大丈夫だろう。うん。

「まあ、最後の体育祭だからね。優勝の美？ 何だかそんな勢いの  
モンでも飾ろうかなーと思いまして、

「いつからクラス一致団結して、優勝を狙おうかと思いましてホームルームの時間を割いたわけなのですが……」

「競技何あるのー？」

「俺、100メートル出るー！」

「私綱引きやりたーー！」

「え……ああ、まあ、その辺も今からね」

「いや、そりゃ、議題は進行していく。本当にノリの良いクラスで助かると思うよ。私は適当に何かやろう。

大体中学三年にもなって、体育祭ぐらいで盛り上がりが盛り上がるのは素直に羨ましい。

私だつて昔はこういうイベントが好きだった。でも……何か今は正直気乗りがしないね。何でだろ？

「浅葱つち。何か出るー？」

少し離れた席から竜胆ちゃんが話しかけてきた。いつもと変わらぬ能天氣な竜胆ちゃん。

だが、何か違和感がある。修学旅行が終わってから妙に色っぽいといふか、何といふか。

竜胆ちゃんと並んで歩くと自分が凄くガキっぽく見える。それはクラスの皆も同感なようで、よく話題がである。

最近では高等部の先輩までもが、竜胆ちゃんに告つたといふのだ。本当に雰囲気が今までとは違っていた。

「いや……私は、綱引きで出るよ」

「ふうん……アタシは郁人と二人三脚出るんだあーー！」

「相変わらず仲いいね」

「そりゃもうー、じい……家族だからねえ」

「ん？ 何か言いかけた？」

「「めん~。ちょい、噛んじつたあ」

そんな感じで時間は過ぎて行き、私はクラスリレーと綱引きに出る事が決定した。

うん、凄い無難。お父さんは残念がるだろ?けど、私はこう見えてというかそのまんまだけどかなりの赤面症。  
これはきっとお母さんの遺伝なんだろうな。お母さん、今でも蒼威さんとか遙さんに押され気味だし。

私もあんまり目立つのは好きじゃない。せめて、こうこう日常ぐらいい慎ましやかに生きたいのよね。

だが、ここで一つ問題が発生した。とある競技が埋まらないのだ。その競技とは三人三脚。ちなみにかなり恥ずい競技だ。

何せ、父親と先生と生徒でやる競技なのだ。全く、誰がこんな恥ずかしい競技考えたんだろうね。

「佐藤やれよー。目立つの大好きだろー」

「あー俺、そういうのバス」

「誰かやろうよー。つか、出てる競技少ない奴が普通でねえ?」

「はあ？ んなら、テーマが出るよ」

押し付け合いが始まった。男は男同士でなすりつけあい、女はもはや他の話題へと移っている。

これがこのクラスのいつものパターン。「さつと誰かが何とかするだろ」「そういうスタンスなのだ。

そのしわ寄せがいつもするのがマッシン。本当にかわいそうだと思うが、ドンマイとしかいにようが無いね。

するとマッシン。しばらく俯いたかと思つて、急に顔を上げて黒板を殴つた。

「お前らア！ 少し俺の話を聞け！」

普段温厚なマッシンがキれた。流石に無駄話は収まる。そして、マッシンは咳払いをすると、

「実はな……鈴本先生は今年で先生辞めるんだってよ

鈴本先生というのは、私達のクラスの担任の先生。年はそろそろ定年が近いのではないか。

白髪にメガネの丸っこい体系。凄くおつとつとした先生で、怒った時なんて見た事が無い。

諭すように注意するのが特徴で、相談とかにも真面目に答えてくれるので生徒の人気は高い。

私も嫌いじゃない。授業は分かりやすいし融通は結構利くしね。でも……先生が辞めるなんて知らなかつたなあ。

「だからよ……俺ら鈴元先生の最後の生徒として、先生を優勝に導いてやるぜー！」

マッキンは熱い人だ。それはもう、羨ましいぐらいに熱血。そしてウチのクラスもさり気なく熱血。

気分が乗らないと究極にダラけるが、気分が乗ると異常な爆発力を發揮するこのクラス。

少なくとも、マッキンの怒鳴り声によつて何人かはヤル気を出したようだ。だが……

「でもさあ……ウチの親父腰が悪くてさあ」

「アタシんち、店やつてるから親これないよー?」

「ウチなんか、ぜつてーこねえよ。ビーセ、男と遊んでんだりうな」

「うわ、若田んち怖いなー」

「ひみせえよ」

「そりかあ……やっぱそんな、凄くガタイがよくて運動神経のある親なんて居るわけないよなあ……」

絶望したようなマッキンの声。確かにマッキンの家は親が離婚しているので、これないのでさう。

そうやって時間だけが無為に過ぎていつた……うん、これは今日中に決まりそうに無いね。

私はそり考え、さり気なく帰り支度を始めようとじでいるところ

「確かさー。浅葱の親父つてスゲー強そりじやなかつたつけ?」

小学校から一緒の藤井が唐突にそんな事を言い始めた。しまった……こいつは見た事あるんだつた。

そう思つた時にはもう既に時遅し、クラス中の視線が私に向いていた。もう逃げ場が無い  
そしてスマセン……マッキンの瞳がせつめからずつと私を捉えて離れないんですけど。

「浅葱……お前の父親の身長いくつ?」

「ひゃ……百八十七ぐらー」

そう、ガタイは素晴らしい。頭も素晴らしい悪いけど。

「親父さん、体育祭にこれないかなあ？」

結局私はマッキンの視線から逃れる事ができずに、三人三脚に出場する事になってしまった。

いや、まだ決定じゃない。お父さんが運よく浅葱の仕事でも入ってくれればそこで終わりだ。

お父さん達は私が中学に入つてから、体育祭に来たことが無い。

まあ、叔母さんとが来てくれたけどさ。

それに、浅葱だつて暇じやない。お母さんは帰つてこない日せ一週間ぐらい帰つてこないし、

お父さんは…………毎日七時には家に居る飯がする。まあ、ハル姉ちゃんの家よりはマシかも。

蒼威さんはほほ一年中、働いてないらしいし。でも、あの八神のバックアップがあるから当然か。

お父さん曰く、蒼威さんは本当に群を抜いて強いらしい。だから、あんなに自堕落な生活が送れると。

蒼一さんはもハル姉ちゃんもすつゝい強いし。本当に千島は凄い家系だ。でも浅葱は復興したばかり。

ああ、でもお父さんとお母さんで頑張つて立て直したんだから、娘として比べるのは良くないな。

そんな事を考えていると、もう家の前。「ただいまー」と返事が無いのはわかつてはいたが、言つてしまつ。

「お帰りー」

……珍しい。お父さんがソファーに座つている。今日は非番だつたのかな?

「お父さん、お仕事は?」

「今日は半ドン。明日からじぱり帰れないけどな」

やつた。多分長期のお仕事だ。これで、体育祭には出れないだろう。

私は答えがわかっているのに、元の人に聞いてみることにした。

「じゃあお父さん、私の体育祭これないよね? 残念だなあ……出

て欲しい競技あつたのに

「出れるよっ。」

「三人三脚なんだけど…………え？」

「お前の体育祭は行くよ？　だからこな、めんどくさい仕事を終わらせるために明日から泊まりなのぞー。」

「…………マジ？」

「マジだ。ちなみに詩歌も行くからな。悪いがしづらくなれば蒼威の家に泊まるか、晩飯は一人でやつてくれ」

「あはは…………はは…………」

「三人三脚か。まだあの競技あつたんだなあ。お前の担任誰だつけ？」

娘の担任の名前ぐらい知つとけよ、と思つのは私だけだろうか？

「鈴本先生だよ、数学の」

その瞬間、お父さんの顔が強張つた。この顔は何か嫌な事を思い出している時の顔だ。

そのまましばらくお父さんは喋らない。ただじつと、何かを思い出しているような顔で居る。

何を考えているんだろう？　本当にワケがわからない。たまにこうこうの顔をするのだ、お父さんは。

すると、お父さんは私の視線に気づいたのか、表情を緩めると、

「……絶対行くわ、お前の体育祭」

久しぶりに聞く、浅葱<sup>おとうわん</sup>陸人の心からの真面目な声。

呆気に取られた私は何の反論も出来ずに、そのままソファーから立ち上がって部屋に行つて

しまったお父さんの後姿をただ呆然と見つめていた。

次の日から、お父さんとお母さんは大きな荷物を持つて浅葱の家へと行つてしまつた。

お母さんは終始機嫌がよく、出かける時には手なんか繋いでいた。全く、恥ずかしい。

ただお父さんは何か考えているような感じ。でも私は何か拾い食いでもしたのだろうと思い気に留めない。

それからはもう！ パラダーアイスみたいな？ 遅くまで起きてても怒られないし、何を食べても良い。

最高！ ってな感じで竜胆ちゃんとかと朝まで遊んだり、週末には千島家に泊りにも行つた。

相変わらず楽しい楽しい千島家。ただ、蒼威さんも何か妙に思いつめた表情をしていた。

蒼一さんとハル姉ちゃんが「何か拾い食いでもしたんでしょう（だろ）」と言つて完全に放置だつたため、

私はその意味を深く考える事が無く、由加さんや神璽さんや命ねーさんとかも一緒に、カラオケ行つたり色々遊んだ。

「そーいや、森羅さん何か最近元気ねえよな」

「捨い食いでもしたんじやない?」

「由加じやあるまいし……」

「……黙れ」

由加さんのボディブローをモロに喰らって悶絶する神璽さん。本当に、良いカツプル?だ。

いつか私もこんな相方が欲しいなあ、とは思いつつも知り合いの顔を思い出しては消えていく。

理想は高いほうじやないんだけどなあ……藤崎君ももうスッパリ諦めたし! つか、誰がお父さんにバラしたんだろう?

そして楽しい時ほど、時間はあつと言ひ間に過ぎ去ってしまう、今日は体育祭當日。

昨日は何故かお母さんだけ帰ってきた。何か知らないけど、お父さんは一日実家に帰つたらしい。市内なのにね。

現在は午前中の序盤とも言える競技が終わり、私達のクラスは中々の成績を出していた。

ちなみに、私はとつと綱引きに出ただけ。後は後半のクラスリレーと……はい、三人三脚ですよ。

「浅葱つちー! お皿(はんび)ーするの?」

「お母さん達が來てるから、そつちで食べるよ

「うーつす! アタシと郁人はこいつ抜け出して吉田屋行つてくれるう!」

ああ、そういえば郁人君と竜胆ちやんは勘当をわれてるんだっけ。やつぱり「うう」家族の和氣藹々とした空気は苦手なのかもしない。

「……良かつたら、ウチと一緒に食べる?」

一瞬、竜胆ちやんの田に迷いの感情が出たのを私は見逃さなかつた。

「……うう。郁人が、待つてるから」

「わかった。じゃあ、また午後から」

「うん……ありがと。じゃあねえ~」

そう言つと竜胆ちやんは人ごみの中へと消えていった。

私は何故か溜息をつくと、家族の待つている場所へと向かう。ええと……あ、居た。

今日は遙さんと蒼一さんとハル姉ちやんと命ねーさんまで居た。……この人達学校は?

それと……おお、珍しい人が居るー。

「お、梨香。久しぶり~」

「あ、こんにちは、海里叔母さん」

私の目の前に居る人はお父さんの妹の、海里叔母さん。本当に良い叔母さんなの。

お父さんの妹って言つのが信じられない。どうやつたら、いいま

で似てない兄妹が出来るんだろ。

「おじいちゃんやおばあちゃんも全然普通の人だしね。しかも、めつちや優しくじときた。」

「馬鹿兄貴に苦労してひしょ、義姉たこもわつをまだわつと愚痴つてたわ」

「御迷惑おかします。海里叔母たこには本当に迷惑をおかけしてばっかで」

「こやこや、あの馬鹿のお陰でこんな良い義姉ちやんと姪が出来たから万々歳よ」

「海里叔母たこがついで貰えると、心が軽くなるよ」

海里おばさんとの隣ではお母さんが寝息を立てていた。ああ、飲んだんだね。

お母さんせじまじく飲むと寝ちゃうか、意識が混濁する。それでお父さんはその隙に乗じて私を作つたらしい。

娘にそんな話をするなよと聞いたかつたが、その前にお母さんの式神がお父さんに迫つてこたので何も言わなかつた思い出がある。

「梨香ちんー 詩歌ママの料理美味しけねー!」

「うそ。これでママを超えるかも……」

「味付けのバランスが素晴らしい。母さんは親父の趣味に合わせて少し濃いめだからな」

「ひらすら蒼」セイタ達のお皿にはお母さんの作ったお弁当が二つ。

たつたそれだけの理由で学校を休むのかこの人達は。私がそんな感情を込めて遙さんを見ると、

「いやね……私も蒼威君も高校時代は出席日数ギリギリだったから強く言えなくてね」

「何してたんですか……」

「やん。梨香わやんにはまだ早いわよお」

「そうですか……」

その後は、私もしつかりとお弁当を食べた。蒼一さんなんかは、私がから揚げを食べるとこいつそりと悲しそうな顔で私の事を見る。……そんなに食べたいんですか。

というわけで、お箸で口に運んであげたら嫉妬した命ねーさんにから揚げを叩き落され、それに激怒したハル姉ちゃんがねーさんと喧嘩になり、

最終的には遙さんのゲンコツで一人とも大人しくなった後、蒼一さんは一人から無言の重圧を浴びていた。

そんな楽しい食事が終わり、更には昼休みが終わってもお父さんの姿は見えない。

……お父さん、どうしたのかな？ 性格上、逃げたつて事は確實に無い。お腹でも壊したのかな？

「じゃあ、午後の部に出てきますー」

「梨香！ 女は気合だぜー！ ねえ、遙さん」

「そうね。ナメられたらそこで終わつよー！」

妙にテンションの高い海里叔母さんと遙さんに後押しされて私はクラスの輪へと戻つていった。

そして始まる午後の部。クラスリレーは一生懸命走つたが、結局一位。私は一人抜かしたぐらい。

海里叔母さんの「行け！ 梨香あ！ させーつ！」が無かつたら、もう少し早く走れたかもしぬないが。

今は竜胆ちゃんと郁人君が二人三脚で走つている。何か竜胆ちゃん、凄く楽しそう。

郁人君もあんまり笑つたりしない人だけど、今は口元を緩めながら走つていた。でも、何か寂しそう。

「浅葱さん。『父兄の方は……？』

「あ、先生。それがまだ来てなくて……」

「ほつほ。まあ、気長に待ちましょう」

「はあ……」

鈴本先生は、のほほんとした表情で笑つた。本当に、穏かな先生だ。

だが、これでも昔はかなり厳しい先生だったらしい。英語の国松先生が確かそう言つてた。

それが今では…………と考えていた時、見覚えのある頭が視界をよぎつた。

その色は、紛れも無い赤。ツンツンに立てた長髪。ま、まさか……

「高遠……高遠なのか？」

呆然とした、何か幻でも見ているような口調で鈴元先生は呟いた。

「よつ！ 先生、老けたなあ」

「……この馬鹿者が！ 僕はお前らが中学卒業してからも心配で……心配で！ 結構正面目に探したんだぞ。

どうしても高校卒業した後の記録は見つからないし！ お前の親御さんは知らない一点張りだし！」

鈴本先生が本気で怒鳴っていた。うわあ……こんな先生始めて見た。

だが、肝心のお父さんは相変わらずへラへラと笑いながら、

「悪いな。ちょっと、国家レベルの仕事についててな。ああ、ちなみに梨香は俺の娘だから」

「な……浅葱さんがか？」

「おう、元高遠陸人は、現在は浅葱陸人なのだーあはは。簡単に言えば婿養子になつたつてワケよ」

「せうか……千島や神崎とは未だに連絡取つてるのか？ あいつらは生きてるのか？」

先生は心から心配そつこ、お父さんを問い合わせる。何か良いなあ……じうじうの。

今の学校は生徒のために必死になつてくれる先生はそつ多くは無い。

でも、鈴本先生の今の気持ちに偽りは無い。それほどの必死さを

私は感じた。

「まあまあ、まあは勝つこと考えよつや」

そう言つとお父さんは私と先生の中間に立つて、紐でお互いの足を縛り始めた。

先生は何も語らない。ただ、嬉しそうに顔を綻ばせてお父さんを見ている。

……昔、何かあつたのだろうか。兎に角、問題兎だつたらしいし。そして私達は、そのまま前の一人三脚が終わるまで黙つて待機しついに出番が来た。

「つしゃあー 先生、梨香！ 行くぜ」

「うん」

「高遠……」

お父さんのガツシリとした腕が私の背中に回された。いつもは嫌で仕方が無いが、

それでも今は凄く頼もしい力強さ。お父さんの視線はもう前しか見てない。本気で集中していた。

この競技で1位を取れば、多分総合クラス優勝が出来る。だからこゝは何としても頑張らなくてはいけない。

私も戦闘時と同じくらい集中しただけを見据え パンツという音と共に走り出した。

「おひああー！」

こきなりもの凄い勢いで引っ張られた。ちゅ、馬鹿！ 足並みぐ

らご合わせようよ。

……と思ったが、ついていけないのは私だつた。先生はお父さんの足並みについていっている。

まさか先生がこんな……トロイ先生だと思つていたのに。だが、まだレースは始まつたばかり、

後続にも大した距離は出でていなく、全員の速さが拮抗していた。うわ、皆必死だよ。

そして、私達が始めのカーブに差し掛かつたとき、

「先生、久しぶり！」

観客席から蒼威さんの声が聞こえた。見ると、千島家全員勢揃いで私達を見ている。

先生の顔が一瞬驚愕に染まり、だがすぐに穏かな表情に戻つた。  
蒼威はもう結婚していて、双子の子供が居る。もう一人の女の子は居候な。

病氣つづーか、人格ももうアイツだけで毎日楽しく酒飲んで暮らしてやがるよ

「そりが……良かつた。アイツは……親とも折り合いが悪かつたし」

「今でも悪いけどな。でも、アイツはとても良い家庭を作つたぜ」

「ああ……わかるよ。一瞬見てアイツの成長がわかつたよ」

何時の間にか、私達の組は後続を追いついていた。だが、まだ他の二クラスが並んでいる。

私も、お父さんも、先生も一生懸命歩幅をあわせて走るが、中々差は変わらない。

そして、一度目のカーブに差し掛かったときまた大きな怒鳴り声が一つ。

「先生！」

客席から森羅さんが吼えた。何か絵になるなあ……

今度は予想していたのであるつ、先生は手を振り返す余裕まであつたようだ。

「森羅は自衛隊のちょーっと危険な部隊に所属してる。ま、でも俺らと同じような仕事なんだけどな。

ちなみに結婚はしてねえ……多分、一生しないかもな。アイツはまだ真里菜さんの事引きずってると思つ

「神崎のお母さんか……本当に、俺はあるの時アイツやお前らの力になつてやれなかつた」

「いや、自業自得さ。でも先生だけだぜ、俺らにビビりに何度も注意してくれたの。

今になつて思えば、凄い感謝している。あの時はウザくてしちょうがなかつたけど、今ならわかるよ

「高遠……」

「さつー！ ラストスパート行くぜー！」

更に速度が上がつた。もう息が苦しい。足が重い。走りたくない。それでもお父さんや先生は諦めていない。汗を浮かべて走つている。

私も負けられない。それに、やっぱり先生には優勝を上げたい。

それは私の心からの本心。

走れ、走れ、走れ、体にそう命じて一歩一歩進んでいく。そして

体育祭は終わった。私達のクラスは結果的に総合優勝した。ま、去年もしたんだけどね。

三人三脚は最後頑張つたおかげか、何とか一位になる事ができた。その後が大変だったんだけどね。先生は感激して泣いちゃうし、お父さんは勝利のポーズしたり、

本当に、恥ずかしくて疲れた一日。でも、悪くは無い。そして、これからは打上だあ！

クラス全員で、晩御飯食べに行つてその後カラオケに行くというオーソドックスなスタイル。

とりあえず、私はシャワーを浴びたかったので途中まで一緒に竜胆ちゃんとこうやつて下校していた。

そして道の分岐点で竜胆ちゃんは立ち止ると、

「うめん。アタシと郁人今日は用事があつて行けないの」

「え、ああ……うん、眞に言つておくね」

「ありがと」

「うん……じゃあ、また来週ね」

「…………うん、わよな」

またね、じやなくよなひ。いつもの竜胆ちゃんと何かが違う。  
私が疑問を持った時には竜胆ちゃんはもう振り返る事無く、走つ  
ていつてしまつた。

まあ事情は来週聞けばいいだろ。私はそつ納得して家へと向か  
う。

…………そして、月並みだが今になつて思えば、ここが私達の末  
来の分岐点だつたのかもしれない。

## Days16…名も無き鬼神（前書き）

パソコンが復帰と思ったらOSが消えないと。リアルが死ぬほど忙しいので復帰は8月かな…

暇すぎて続編のプロットの原型ができてしましました。

といつあえず、今のところの予定では神々から10年後の時代でやります。

主要キャラの一人は律の弟です。

携帯からなのでメッセージの返信は厳しいです。すいません。

評価のまゝ近日起に返信をさせていただきます。

## Days16・名も無き鬼神

「じゃあ、つまらない話でもしてみようか」

物心ついたときには、僕等はもう人間じゃなかつた。

一体いつ、この体になつてしまつたのかはわからないし、知る気もない。

それでも幸運だったのは、僕が一人でないこと。

僕の周りにはバケモノを受け入れてくれる人間、そして兄弟がいた。

血は繋がっていないらしい。現に僕と兄とでは、バケモノになつた時の姿が違う。

兄の姿はケンタウロスと呼ばれる類のもの。でも、僕の姿は何なのかわからない。

学さん達も、僕の姿の名前はわからないと言つた。でも、そんなのどうでもいい。

僕は僕。それは変わらない。学さん達もそう言つてくれた。今思えば、あそこは楽園だった。

今でこそ鬼神と人間は敵同士。でも、あの頃の世界 僕の居場所は共存できていたんだ。

「なあ、僕達の力は神様から『えられたものなんだ。それで、もつともつと皆で幸せになろうよ』

兄はそういった。僕も賛成だった。この町にいる人は温かい。人間と鬼神だけどわかりある。

だからこそ、僕も自分の力を存分に發揮して皆の為に生きていきたい。そう思った。

でもね。それは違つたんだ。僕の居た世界は、世界中その他の人から見たら異端でしかなかつたんだ。

僕らが居た町は、指名手配されているような人間が集う町。遙か遠くの城下町から逃げ出してきた学達。

その頃の世界は、一部のモノしか知ることが許されない時代。他の思想や知識は危険と称される時代。

この町に居る学者は皆。世界の在り方に異議を唱えて追放された人間ばかり。

だからこそ、僕らは受け入れられたのかもしない。常識。そんなモノを覆そうとしていた人達ばかりだからさ。

「おはよう。教会の人間がこの辺りをうろついているから、これを持つて早く帰りなさい」

ある日。いつも習慣で学者さんから本を借りた僕らは、学者さんの真剣な表情から

危険性を感じ取つて、その本 北欧神話の本を借りると早々に住処へと帰つた。

薄暗い部屋で一ページ一ページを一人でゆっくりと読んでいると、広場のほうが騒がしい。

何かを感じた僕らは、古びたロープを纏つて広場へと向かつた。

「この者を危険思想につき、神の名の下に処刑を行つ。」

僕らがついた頃、教会の兵士が一人の学者へと剣を向けていた。そして振り下ろされる。血がドバッと噴出して、さつきまでついていた首がごろりと転がつた。

でも、皆悔しそうに俯いてはいるが、誰もそれに異議を唱えない。そう、逆らえば殺される。

僕は思うんだ。宗教は神様を信仰している。何故、人が神様を信仰するのかというと、救われるから。

あの学者さんも神様を信じていた。でも死んだ。こんな広場で無残に殺された。しかも同じ神を信じる者に。それって何かがおかしくない?

何で、神様は学者さんを救わなかつたの?

考えても考えても分らない。日に日に答えは遠ざかっていく。何

故、何故と。

この国は皆同じ宗教を信仰している。でも、幸せな人と幸せじゃない人が居る。

なら、神様なんていらないんじゃない? だけど、皆それを考えずにただ信仰している。

いい加減に詰まってきたので、僕は兄へと問う。

「神様つているのかな?」

「僕は信じてないよ

「なんで?」

「見えもしないモノを信じるよつ、見える自分を信じて行動したほうが楽しいからさ」

「でも、僕信じてるよ?」

「皆が信じてるから信じなきゃいけないルールなんてないよ

「.....」

「それよりも。僕らもそろそろここを出て行こう。これからこの國中を周つて、

僕らの仲間を探しにいこう。僕とお前が居るんだ。この國にはもつと僕らの仲間が居るはずだよ」

「うう」

そうして、次の日に僕らは最低限の荷物をもつて旅立つた。そし

て一年。僕らは國中を周った。

時に殺されそうになり、時に笑い。世界がこんなにも楽しかったと思ひながら旅をする。

兄の仮説はやはり当たつていたようで、何人かの仲間とも出会えた。

ヴィクトルとレナードとリーシャ。少し年下の兄妹のような感じがした。

そして当初の予定通り、自分達が住んでいた町へと五人で帰ると、そこにもう町は無い。

建物は全て焼かれ、更に酷い腐臭まで漂っている。町へ入るとそこには死体の数々。

パン屋のおじさん。酒場のお姉さん。知り合ひの学者の子供。全てが体中切り刻まれ、

縄をかけられて吊るされている。そこはもう、地獄のよつやな場所だったよ。

「酷い……」

「教会の仕業だね……」

「僕らが住んでいた傍の町でも同じような事があつたよ

三人は悲しそうにそつづぶやいた。僕は僕で声すら出なかつた。  
何で、何で。

本当にわからない。僕らを怖がつて殺すのならまだいい。だけど、  
何で同じ人間で殺しあうの？

何でお互いを認められないの。僕たちには言葉があるじゃないか。  
何で話し合いで解決できないの？

そして僕らは自分達の住処を見つけた。やはり火で焼き尽くされ  
ており、跡形も無い。

兄は跪いて、瓦礫を腕で払う。何もでこないだろつ。そつ思つた時、兄が突然手を掲げた。

「神々の黄昏だ……」

そこにあつた本は学者さんから貰つた最後の本。奇跡的に炎から逃れ、焼かれなかつた唯一の遺品。

兄はしばらく黙つて、ページをめくつていた。どれくらい経つたかはわからない。

それでも僕らは待ち続け、ようやく兄は立ち上がり、

「神が居なければ、僕らがなればいい。僕らが人間を救つてあげるんだ」

それが、ラグナロクの始まり。僕の人生が変わった瞬間。

僕らはラグナロクという組織を作った。まず求めたのは力。力が無くては人は救えない。

伝承や聞き込みから様々事を調べ、森の奥に住んでいたおじいさんから、僕らは「コンセプトを習得。

不思議な紋様。この世界に反する力だとおじいさんは言った。

「コンセプトは反する力の一端に過ぎない。力は一つじゃないのだよ」

そう最後に教えてくれた。多分、その言葉があつたから僕らは反意思を知れたんだと思う。

普通の人間には反意思は使えない。でも、僕らはある程度使える。これが、奇跡という力。

人間達が神を信仰する理由。そのおかげで、ラグナロクは規模が大きくなり、段々と鬼神が増えていった。

その間僕は何をしていたのかというと、世界を見ていた。

国を出て、あらゆる場所へと行つた。必要ならば、言語もたくさん勉強した。

だけど、僕に待つっていたのは過酷な世界の現状。親を殺す子供。子供を虐待する親。

人を平氣で殺す者。人を平氣で陥れる者。年端の行かない少年少女に乱暴する者。

奴隸呼ばれる人間。黒人と白人。宗教戦争。部族戦争。快楽殺人。享樂殺人。

世界は美しくなんか無い。少し視点を変えればそこは地獄絵図だった。

くだらない自尊心。腐敗した権力者。力あるものが弱いものを守るわけではなく

搾取し苦しめている。それでも、僕は希望を捨てなかつた。

視線に入るものは全て守るうとしたし、食事や寝る間も惜しんで

僕は救おうとした。

だけど、それは無駄でしかなかつた。人間の惡意はどんどんと膨らんで行き、

最早際限が無い。世界には毎日誰かの泣き声が響き渡り、他では悪がほくそ笑んでいる。

これだけ救えた？　いいや、これだけしか救えなかつたんだ僕は。僕は誰にも泣いて欲しくない。僕達を受け入れてくれた人間には笑つていて欲しい。

僕はただ、誰かの笑顔を守りたかつたんだ。悲しみの涙が要らない世界が欲しかつた。

でもさ……いくら救つても救つても悲しみの声は何時までも世界から消えなかつた。

そして　　僕は一つの結論を出した。

人は救えない。

そのうち、人は人を傷つけるだけでなく、地球をも傷つけ始めた。あらゆる生物が泣いた。無念だつたろう、悲しかつたろう。同じ人でない僕には気持ちが痛いほどわかる。

人間は愚かだ。滅ぶことが分つてもそれをやめない。誰もが後先考えない。

今の自分がよければ、自分程度が何をしても　と、頭が良いからわかつてしまっている。

そんな生き物達をこのままにしていいのか？　このまま滅びを待つのかい？

そして、僕は兄に話してみた。すると兄は悲しそうな顔をして、

「そうだね。でも、可能性は〇じゃないと想つよ」

「でも、限りなく〇に近いよ」

「でも〇じゃない

「そう。じゃあ、僕は〇だと思つて生きるから」

そして僕らは対立し、滅びあつた。最愛の兄も死んでしまつた。

いや、僕が殺した。

僕らは人を救えない。そして僕らも救われない。だから、一回りセツトしてしまおう。

人の痛みを知り、悪意の愚かさを知る、優しい心を持つ人間だけを残して

しばらく探すと、適任のような存在を知つた。それはガルムの一族の研究成果。

だが、その実験は最低だつた。人と結晶の融合。僕が一番嫌いな人体実験。

六道を滅ぼしたくなつたね。だけど、六道は世界に貢献している。彼らの実験によつて僕らのルーツや様々な事がわかつてゐる。だから、僕は責めれない。

被験者で生き残つたのは一人だけ。本当はもう一人居るのだけど、彼は事情的に不可だらう。

三名の被験者のうち、一人は誘拐されとある男に結晶を移植された。それが

被験者番号1 棚名勇一

被験者番号2 粕垂矢子

の二人の日本人。六道が密売ルートから手に入れた二人の少年少女。

色々と六道のお陰で二人の事を知れた。二人とも、優しい子だった。

親に捨てられた事を恨まず、健気に実験に耐えている。お互いを励ましあつていたりもした。

そして僕は思つた。人間でも鬼神でも救えなかつた。でも、人間でも鬼神でもない

新しい種ならどうであらうか。幸いな事にこの二人は心の痛みを

知っている。

これから六道でまともな教育をしてもらえば、いつか救いの神になれるかもしねえ。

そして僕はそう期待して、この一人の為に世界を一回りセットしようとした。

「それが、君達だよ」

## じじから を読む上での注意 + おまけ編（前書き）

そういうえば、久しぶりのDaysだ……

とりあえず、予定としては・

次回、時雨と律。

陸人だいありー

ネタがあつたら、何かひとつ。

続編連載開始＆ファーストコンタクト

みたいな予定で行こうかと思つてます。

Daysの方は結構方式が違つていて不安なので、ご意見、ご感想、短編リクエストがあつたら評価欄かメッセにてお願ひします。

## ここから を読む上での注意 + おまけ編

ここから の 小説を読む場合は、神々の黄昏を最終話まで  
読んでからみないと、意味が分らないかも知れません。

とこりわけで、おまけ編スタートですよ。

今回は神々の新キャラについて色々と。

牧島郁人・竜胆

神々の黄昏、裏の主人公。 郁人と竜胆については全て書けたと思います。

個人的に一番好きなキャラなのですよ。 蒼一や遙緋は強い主人公だったのです、

逆に今度は最弱にしてみようと思い、こりやつて作つてみました。  
結果的にラストで強くなつたのですが、郁人仕様になつたフラガラ

ツハは、  
郁人の（約束）や（決意）から生まれた反意思が起動の鍵となるので、

まあ、それを失つたらまた最弱へと逆戻りです。竜胆が愛想を尽かしたらもう一般人w

### 二階堂雨龍

投票でめつさ嫌われてる彼。とりあえず、彼については続編で色々明かされるかと。

ただの快楽殺人者では終わらしそうに無いキャラです。蒼一と少し似ているのかも。

二階堂家は長男、次男、三男の構成。雨龍は末っ子です。

### 四条莉王

王を目指して作ってみたキャラ。帝と何があったのかは何時かの機会に。

家族構成は祖父と祖母と莉王のみが直系。父と母とは死別。兄は出家。

莉王は兄の居場所をつきとめてはいるものの、会いに行くのが怖くて行けていない。

ちなみに帝は@ホームの住人の設定だがカケテナイ〇一二

### 五月颶太

無口キャラ。Daysで一人称が書き難かつたり、全てわかつてゐる系のキャラなので扱い辛くて影が薄くなつていった。

五月家の家族構成は、長女、次女、三女、長男。

律と莉王も恐れる姉が二人。口が悪い妹が一人。それが苦手でほとんど家出状態。

### 七海奏

出る前に色々と設定が一番変わった不遇な子。式神すらも一転三転。初期プロットでは緋色の眼史上最強電波女でした。

家族構成は今は、父、母、次女、三女。長女（遠音）の話は七海家ではタブー。

幼い頃姉妹三人が誘拐事件にあり、七海家の運命が狂つたのは有名な話。

### 九我山律

一步間違えばストーカーなキャラ。ハ神時雨の嫁候補。

女性としての嗜みは全て通っていた高校で厳しく躰けられた為、ほぼ完璧。

### 趣味はドライブ。家族構成は父、母、長女、長男

弟の令に対しでは時に厳しく、時に甘く。続編では弟の方が活躍しそうな気配。

### 口キ

本名不明の鬼神。とある宗教国家にて生まれる。

口キの狂化状態は新種。といつても遙昔に存在していた種類の生き物です。

半狂化状態がその後の天使のモチーフとなつたという設定。

口キの世界に対する思いは、少し自分の思いもいれてみましたが、好きなキャラです。

### ガルム

六道家の実験により生まれた鬼神。六道家は非人道的実験も数多くするが、

同時に全てを受け入れる家。鬼神だろうが、悪鬼だろうが、新種の生物であろうが

分け隔てなく接するのが六道流。継承の力は六道同士でしか使えないが、

紡が異端なだけです。継承の具体的な能力については続編で。

ヘル、ヨルムンガルド、フェンリル

ロキと同じ国で生まれた鬼神。一番年上はフェンリル。次がヨルムンガルド。ヘル。

フェンリルとヨルムンガルドは同じ村で生まれた極めて特異な鬼神。ヘルは一人に凄く可愛がられた。その為か、少しお互いを依存しきっていた。

この子達はもつと出番作りたかったなあ、とか思っています。

第一次ラグナロクの話でもかけば、出せるのですが、何か長くなりそう・・・

### スルト（千島藍）

千島最強の男。藍は一番難しくて、色々と悩んだキャラでした。緋色の眼の時に勢いで出してしまって、ビートしたもんかと考えていたのですが

上手くまとまつたかと・・・。鬼神の中では間違いない古代鬼神並に強い。

鬼神としての能力は運命やロキ以下ですが、レヴァティーンが大きな差となっていますw

神々の黄昏ではあまり触れなかつたのですが、藍は青鬼の鬼神です。赤鬼の鬼神である刹那達と妙に仲が良かつた理由は、やはり同属だからでしょうか。

まあ、最初は青竜つて設定だったのですが、少し続編で紛らわしくなるので変わりました。

全体的な反省点としては、結構無計画に進めたので、初期プロットとは全くEDが違つお話となってしまいました。

大きな変更点としては。

運命、空我、大和の死亡。

新しい千島の存在。で名前が明らかに。

この辺りが、続編を意識したら消えました。とりあえず、続編に関しては

ちゃんとストーリー練つたのでここまでは変わらないと思ってます。  
最終話の構想は前から固まってるんで。千島蒼一の全ての答えが出ると思います。

それでは、おまけ短編、【終わらなかつた世界】をどうぞ。

夏特有の強い日差しが差し込む、四条家の大きな庭の一角。五月  
颯太はのんびりと麦茶を啜りながら、  
目の前で行われている、夏だと言つのに非常に見ていて暑苦しい  
こと極まりない風景を見ていた。  
少し離れた場所では、剣王を構えた莉王が一人のまだ中学生ぐら  
いの外見の少年を追いかけていた。

「令い……。貴様、何が超生理だ！」

「ち、違つただよ。莉王兄ちゃん。僕じゃなくて、紫ちゃんがね？」

「問答無用！ 貴様は律の弟として少し根性が足らん！ 僕様がみつちりとじる」してやる」

令と呼ばれた少年の名は九我山令。九我山家の長男にして律の弟。颯太と莉王は令を赤ん坊の頃から知っているため、もはや弟のようなもの。男の兄弟が居ない颯太にとつてはかけがえのない友であり、また兄を失つた莉王にとつても大切な兄弟のようなものであった。

「お、お姉ちゃん！ 助けてええ」

「フフフ、無駄だぞ令。律は一年ほど所要で帰つてこないだらつて、紫も連れて行つたしな」

「うう……何で僕がこんな田に。紫ちゃんが行きたくなーいつて言ったからなのにー！」

「過去は変えられないぞ令。さあ、存分に半殺しあおうじやないか！」

「いやあああっ！ 颯太兄ちゃんも笑つて見守つつつ、颯太は久し

ぶりに平穀が戻ってきたことを悟つた。

千島家のリビングで千島蒼一は緊張した面持ちである一点を見ている。その時間、かれこれ三十分ほど。

蒼一の視線の先には安らかな顔で眠る天使 最近生まれた弟の千島光希。生後三ヶ月。

部屋には数々の子供用品。遙緋や命が物凄い勢いで光希の世話を始めた為、蒼一はずっと光希を構えなかつた。  
だが、今父と母は居ない。遙緋と命は一階に居る。これは絶好の好機と蒼一は光希を抱こうとするのだが。

(寝ている……)

穏やかな寝息を立ててゐる弟。余りにも可愛くて、つい光希のほっぺをツンとつづいてみる蒼一。

弾力性があつて、柔らかく。少し温つてゐる感覚。正直、病み付きになりそうだった。

(あのダメ親父には似ませんよ(元ひ)

と心から願いつつ、蒼一は光希のまつペをブンブンとつづく。すると、

「お兄ちゃん……？」

その声に声も出ないほど驚く蒼一。つい、体が反射的に反応してしまい修羅雪を抜きつつでも動ける体勢へ。

廊下の入り口からそれを見ていた遙緋はやや呆れながら、笑うと

「ふーん。お兄ちゃんも光っちゃんに触りたかったんだあ」

「ち、ちちちちち、ちちばえよ！　ぶつ殺すぞコリコリ！」

つい、反射的に怒鳴ってしまう蒼一。すると、その声に驚いたのか。

光希が田を覚まし、しゃべり上げる様に泣き出す。マズイ、マズイ、マズイ。

慌てて何とかしようとすると、何も思いつかない。

そんな蒼一を邪魔そつこじかすと、遙緋は優しく光希を抱き上げて、

「お～よしよし。怖い怖いお兄ちゃんですねえ～

「グ……ッ！」

だが、光希が泣き止む気配は無い。段々と遙緋の顔に焦りの感情が浮かぶ。

すると今度は蒼一がニヤニヤと笑い、

「ハツ！　テメーの硬い胸に抱かれたくなーってよ。せつせつ俺に渡しな

「か、硬くなんかないもん！」

「いー や、硬いね。むづアレじやん。お前の胸つて強化ガラス並み  
じやね?」

「言ひたなあ～っ！ 触つたことも無こべせこー。」

一人が正面からにらみ合つてると、不意に一階から謳歌を聞き  
つけてきた命が現れた。

千島家から出でていき、運命達と暮らしてこるもの、よへいの家  
に入り浸つている。

スタスターと蒼一と遙緋の所まで歩いた命は、光希を遙緋から優し  
く取り上げると、

「おーよじよし。蒼ひやさんとこもーとほ怖こですねえ

すると光希が急に泣き止み。けりけり甘やかに笑つ。何故だ。何故だ。何故だ。

実の姉と兄より他人を選ぶのかと言つた表情をしてこる蒼一と遙  
緋。だが、笑つている。

結局その日も蒼一は光希を抱くことができなかつた。

由加と神璽が住んでいるアパートの向かいの高級マンション。そこで、運命と大和と空我と命は生活していた。

金の蓄えは十分にあった。一族の住んでいた場所に戻れば、過去に人間から奪つた財宝があるので

それを裏のルートに流して運命達は金を作っていたのである。

そんな生活が始まって半年近く、空我と大和は街のホストクラブで働いており、運命は毎日ダラけていた。

ある日、大和が買い物から帰宅すると空我の姿が無い。お気に入りのバイクも無かつたので出かけたのだろうと

判断すると大和は部屋の中に声をかけた。

「運命ちゃん。ミコちゃん。ただいまー」

反応が無い。玄関を見るとそこにあるのは運命の靴だけ。一人とも居ないのか。

そんな思いで、リビングへ入ると大きなソファーアで運命が昼寝をしていた。

「全くもう、暖房もつけないで」

じつそり、毛布をかけてやるうとすると違和感に気づいた。自分の足元に黒い塊。

しかも動物。犬のような形だ。だが、見た事が無い種類の犬だった。

「おお? お前どうしたんだ?」

荷物を置いて頭を撫でようとすると、犬は露骨にそれを嫌がり運命へと飛び乗ると、

その上ですわり、安らかな顔で大和の事を見る。言いたい事は目

でわかつた。

「！」の……！ 僕ですらそこには座った事が無いのに…」

怒りに身を震わせた大和は、犬を掴んで床に置くと息を呑んで運命に寄り添うように

寝転がつた。他の女の子にはよくやる行動なのに、今は凄く緊張している。

だが、紙幅の時。心から安らかな表情で大和が運命の髪の匂いを堪能していると、

「おい、クソ鬼」

突然、犬が喋った。余りの事に驚き、声を出してしまった。「なが、運命が起きたら殺されてしまうかもしねないので、ゆっくりと息をつき、ソファーから降りる。

「あ、あれれ？ 何で犬が喋るのかなー？」

「チッ。人様の娘にちよつかい出しゃがつてよ。やっぱ、頼んで出してもらつた甲斐があるぜえ」

「ま、まさか……！」

「おつ、俺様は九尾の狐だ。宿主の結晶から意思だけを抽出し、反意思で新しい体を構成して貰つている。

力は微弱だし、移動範囲も限られてるけどなあ！」

「お、お父様でしたか！ 失礼しました！」

「娘には内緒だぜ。いいか、テメエがあいつらから貰つて来た事にしろ。

何時か、俺から正体話すからよお……もし、バレたらその瞬間テメエを噛み殺す」

「は、はい。でも、何で会つてあげないんですか？　きつと喜ぶと思ひますけど」

「今更どのシリ下げて会えつてーんだ。俺が死んだ所為で、こいつをあんな田にあわせちました。

女房にもちゃんと育てろつといたんだけどよお……俺様を追つて自殺しちまつたらしくてな。

いやはははは。モテる悪鬼は辛いぜ」

「……わかりました。」

「ここので狐に取り入つて置くのは悪い話ではない。いつか、いつか結婚を承諾してもらう時

のためにポイント稼いでおく必要がある。それに、父としての言葉に胸を打たれた。

自分の父は自分の事など、どうでも良かつたようで殆ど本能のままに生きていた悪鬼。

だからこそ、少し羨ましいと思つてしまつ。

すると、玄関の戸が開く音がし、命が帰ってきた。狐はすぐに嫌そうな顔から媚びた犬の表情へと顔を変え、

一田散に命の足元まで走つていぐ。

「あー！ 犬だあ！ これ、大和が買つてきたの？」

「あ、ああうん。まあ……知人から貰ったのさ。名前はキュウちゃん。よろしくね」

「うん！ よろしくねキュウちゃん」

屈んだ命のももや膝を噛め回す狐。更には飛び掛つて押し倒すと、顔をなめ始めた。

くすぐったいよーと笑う命。狐はひたすら舐めている。

それを見て、大和は「犬って良いなあ」という思いと共に、一つの事を連想してしまつ。

（もしかして……運命ちゃんにバレるとああいう事が出来なくなるから言わないのか？）

結局、真相は闇のまま。大和はすやすやと眠る運命を見て、気にしない事に決めた。

その頃、無事に九尾を運命達の住居へと追いやった神璽は、部屋で一人ほくそ笑んでいた。  
あの戦いの後から、何が起きたのか自分で九尾がとても騒がしくなつたのである。

由加の方にも居る分たれた九尾も同じようで、いい加減ウンザリした二人は、お互いの中からどうにか九尾の意思だけを抽出し、新しく体を作つてやつて、運命達の方に行くように仕向けたのであった。

ただ、一定の距離を離れてしまうと意思の供給が出来なくなる為、さほど離れては行動できない。

そして、結晶の力を上手く使つ為には九尾の意思が絶対的に必要である事もわかつた。

普通の人間では耐えられない膨大な反意思を一人が制御できていたのは、偏に九尾の存在によるもの。

かつて、圧倒的な力を持つていた九尾の狐が制御の大半を請け負ついてくれるからである。

（やつと出て行つたか。ふふふ、これでまた由加と二人っきり）

由加は中には居なければどうでもいいようで、外に出た九尾を妙に可愛がつてゐる節があつた。

しかも、九尾も九尾でかなりの女好き。それが、神璽には面白くない。

だが、もう居ない。これで、元の生活が戻つてきた。清々とした氣分で神璽がソファーの上で転がつていると、玄関のドアが開く音がし、九尾をマンションに置きに行つた由加が帰つてきた。

「よお、お帰り」

「ただいま。運命、寝てたし命も居ないからそのまま置いてきたよ」

「ういーー！ お疲れさん」

「やつぱり、あいつも嬉しいみたい。当たり前か、実の娘と暮らせるんだもんね」

「そりゃそうだ。俺だって、出来るなら本当の家族に会つてみたい

しな

「……私ね、考えたんだ」

「何を？」

突然表情を引き締めた由加の変化を悟ると、神璽はソファーから起き上がって、正面から由加を見据えた。何かを決意したような瞳の輝き。神璽は息を呑んで、由加の言葉を待つ。

「高校卒業したらさ。私、一課から脱走して家族と六道紡を探しに行く」

「え？……つて！　お前もかよーー？」

「え……神璽も行く気だったのーー？」

「当たり前よ。ガルムが言つてたんだ、紡つて奴が全てを知つてるつてな。

……親は、まあ、そのついでぐらいで。一度俺らを捨てた奴らだからなー。口クでもねえんだろうけど

「そう。じゃあ……後、一年後ぐらいか。皆と一緒に居れるのは

「そうだな……でも、一人じゃない。俺には由加が居る。由加には俺が居る。

少し寂しいけどよ。一人じゃないんだ。我慢できるか？」

「うん。寂しいけど、我慢する

「俺も、我慢だ。おんこやのことをえねええええ！　けど、我慢してやるよ」

そういうと、由加と神璽は笑つて外を見つめた。何時の間にか、見慣れた町。

自分達にまともな生活は無理だと思つていた。腹を割つて話せる友人なんて出来ないと思つていた。

でも、この町に来てから全てが変わつた。自分たちは運が良い、心からそう思う。

二人はしばりべの間、住んでからずっと変わらない窓の景色を眺めた。

いつか、旅立つた時に絶対に忘れないために

## Days17：八神時雨の困惑（前書き）

時雨と律の話は、これで一応の纏まりがつきました。  
次回の陸人だいありーは今までと少し違った、  
浅葱陸人の日記形式になつてます。

とりあえず、それで神々から新作までに何があつたのかが少しあわ  
ると思います。

## Days17：八神時雨の困惑

困った事になった。僕 八神時雨は今、人生の岐路に立たされている。

部屋に飾つてある母親の写真に目をむけ、母さん、僕はどうしたらいいのでしょうか?と問いかけるも、

母親はいつもと変わらず微笑んでいるだけ。そう、わかっていたんだ。助けは無いんだと。

これは僕自身の過去の償いであり、僕自身の存在の責任であると思う。

僕の無駄に広い私室に次から次へと運ばれる荷物。それを見て、僕はため息をつくと、

「どうしてこんな事に……」

とつぶやいた。

全ての始まりは、昨日の仕事が終わった時。僕は、全ての神々の黄昏事件の事後処理を終えた事に一人感動し、

これから最近少しハマっている、遙緋から教えてもらったサイトへとアクセスしようとした。

オンラインゲームという少しお金のかかるゲームなのだが、これが何気に面白い。

最近では睡眠時間を削つてまで一日一回はログインしている。ちなみに一番強いのが蒼威さん。

流石に一ノードこは勝てない。だが、この前遙さんにメチャメチャ怒られたらしくあまりログインしなくなっていた。ぞまあみろ。ネットと現実。両方で蒼威さんにイジめられた僕としてはニヤニヤ笑いが止らない。

この隙を突いて蒼威さんよりもレベルを高くして、後で散々いじめてやろうと思つている。

そんな事を思つていると、不意に父さんが僕の執務室に現れた。

「少しいいかな？」

「なんですか？」

「……は？」

「僕もずっとと考えてたんだ。お前みたいな若い者が朝から晩まで休み無しで働いててどうする。

お前は高校の頃から口クに友達も作らず、遊びにも行かずにハ神の仕事をしてきたよね。

そこで僕は思いついたわけだ。これを僕のハ神の最後の一年として、来年からお前に頭首を譲ろうと思つ

「いや、でも僕は仕事が楽しいですし……

「つべこべ言うな。いいか、これは頭首命令だ。明日から一切の仕事につく事を禁じる！」

そう言つと、父さんは満足をうなづいて部屋から出ていった。拍子抜けしてしまつた僕は、

そのまま一時間ほど椅子に座りっぱなしで、何時の間にか寝てしまつていた。

翌朝目覚めて、皆で食事をとつてゐる最中、父さんが全員の前で昨日の事を発表した。

皆の顔は明るい。そつか、そんなに僕が居ないのが嬉しいのか。

「時雨様。一年間私達にお任せ下せー」

「日本を離れて、海外旅行などされてきては如何ですか?」

「いやいや、まずはお疲れを癒しに温泉などは……」

皆に様様なパンフレットや雑誌を渡され、僕は困惑しながらそれを持つて自室へと入つた。

執務室とは違ひ、僕の自室には特に何もない。パソコンとベッドと本棚。

壁には蒼一や遙緋と写っている写真。それ以外は何もない。簡素で無駄に広い部屋。

とりあえず、パソコンをつけてネットゲームへとログインする。すると、早速誰かがチャットで話し掛けてきた。

掃除「よお。お前が昼間から居るなんて珍しいな」

相手は戦士の掃除。すなわち、僕の弟分の千島蒼一である。名前は変換をミスしたらしい。

ちなみに遙緋はハルで蒼威さんはタイガー。陸人さんは翡翠。全く芸がない。

由加は何故か亞矢子という名前でやっていた。理由は秘密とのこと。意味がわからない。

シグレ「一年間休暇を出された」

掃除「うお WWWWWお前もついに親父の仲間入りか WWW」

シグレ「勘弁してくれ。それと、その無駄な英字はなんだい？ 皆使ってるようだが」

掃除「笑いつて意味だ♪とりあえず、暇できたらこっちにこよ」

シグレ「わかった。久しぶりに皆にも会いたいしね。そっちは元気なのかい？」

掃除「母さんは親父と病院。あの駄目人間。やつと車買ってやー。これで、母さんも楽になるだろうよ」

二ヶ月前の謎の車両運搬具の計上はこれが原因だったのかかもしれない。全くもう。

掃除「んで、遙緋は四条の奴とどつか遊びに行つた。命は運命の家」

シグレ「何！？ 何故、莉王と遙緋が遊びに行くんだい！」

掃除「何か、九我山のねーちゃんの紹介らしいぜ。あいつの強さに一目惚れだとよ」

あの十名家最強の変人め。僕の大事な妹分に手を出しやがつて、いや。遙緋も来年は18歳だ。

そろそろ僕が口出しするような年じゃないだらう。あの子も立派に成長したもんだ。胸以外。

遥さんはあんなに豊満なのに、何故伝わらないのだらうね。ああ、

蒼威さんの影響か。

可哀想に。そして、莉王には釘をさしておこう。無論、体に。

掃除「あ、そーいや。お前もつこに九我山のねーちゃんと同棲始めたよな?」

シグレ「は?」

掃除「親父とか正宗さんがそう言つてたぜ~~~~おめでとう!..」

嫌な予感がした。自慢じゃないが、僕の悪い予感といつのはほほ確實に当たる。

幼い頃から非常識二人組と一緒に居た所為か、こんな悲しい能力が身についてしまった。

すると外の方でトラックの音。珍しい、戦闘も無いのにトラックが来るなんて。

シグレ「すまない。少し怖くなつてきたから、一回落ちる」

掃除「うーー お疲れノシ」

ノシとは何なんだらう、と思いつつ僕はパソコンの電源を切った。そして早足で外へと向かおうとし、

ドアを開けた瞬間、信じ難い光景が広がっていた。そこに在ったのは中型のトラック。

運転手の姿を見てみると、まだ若い高校生ぐらいの女の子だ。ど

う考へても似合つてない。

そして 助手席から降りてきたのはまつりと着物をきた、律の姿。

「やあ、時雨。花嫁修業に来たよー。」

その瞬間、僕の背筋が凍りついたのは言ひまでも無い。といふか、意識を失いかけた。

そして、現在。僕の何も無かつた私室が物凄い勢いで蹂躪されていく。荷物運びの女の子は本人曰く「律ねーさんの舍弟の鳴神紫つす。よろしくお願ひします」だそうな。

その子は良く働く子で、律を部屋に通して十五分で全ての荷物を運び終えると、

僕らに手を振つて再びトラックに乗つて帰つてしまつた。正に疾風迅雷。

すると、律が一本のDVDを僕へと渡す。部屋のパソコンで早速再生してみると、

そこに映つっていたのは九我山の直系。それも、律の家族の父と母と弟らしい。

「おねーちゃんを、よろしくお願ひします」

と弟。律の弟にしてはかなりの常識人だ。

「八神さん。この子をどうかよろしくお願ひします。律ちゃんはこう見えても、死くすタイプでして。

女性としての嗜みもほぼ完璧に叩き込んであります。どうぞ、味見でもなさつてくださいな」

とお母さん。天使のような笑顔でそんな事を言われても困ります。律も隣で「お母様つたら」とか赤くならないで欲しい。困ります。

困ります。  
そして、中に居た大柄な男性　　律のお父さんが一步前に出てきて、

「よひしーーー」

とお父さん。絶対律はこの人似だ！　それが終わると、映像は途切れた。

なんとも氣まずい沈黙が流れる。律は妄想の世界に逝つてゐるしね。ああ、気が狂いそうだ。

「……花嫁修業つて一体何をする氣なんだい？」

「ん？　まあ、時雨の事がよく知りたいんだ。」

「それを、何故家で……」

「だつて、将来の旦那様の好みの味付けとか知つておきたいじゃないか」

「……そうかい」

そう言われては何も言い返せない。それに、僕と律は本当に結婚してしまうのだろうか。

律は僕の事が好きらしい。でも、僕はわからない。そもそも、本気で好きになつたのは

昔一回だけ。高校の頃に三人付とき合つたが、全員に「人間の肩」と罵られ、あえなく終了。

そんな僕が、人に好かれる資格があるのだろうかね。

次の日から僕と律の共同生活が始まった。しかも、初日から寝不足という最悪なスタートだ。

律はとんでもない格好で寝る女だ。僕がいくら注意しても寝にくいと言ってそのまま寝てしまう。

僕たつて男なんだ。性欲たつてある。仕方が無いので僕は自身の式神【重場】を使って

自分を一晩中布団に固定してひたすら円周率の暗記をしていた。

3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3  
2 7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6 9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4  
9 4 4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4  
0 6 2 8 6 2 0 8 9 9 8 6 2 8 0 3 4 8 2 5 3 4 2 1 1 7 0 6 7  
9 8 2 1 4 8 0 8 6 5 1 3 2 8 2 3 0 6 6 4 7 0 9 3 8 4 4 6 0 9  
5 5 0 5 8 2 2 3 1 7 2  
5 3 5 9 4 0 8 1 2 8 4 8 1 1 1 7 4 5 0 2 8 4 1 0 2 7 0 1 9  
3 8 5 2 1 1 0 5 5 5 9 6 4 4 6 2 2 9 4 8 9 5 4 9 3 0 3 8 1 9  
6 4 4 2 8 8 1 0 9 7 5  
6 6 5 9 3 3 4 4 6 1 2 8 4 7 5 6 4 8 2 3 3 7 8 6 7 8 3 1 6  
5 2 7 1 2 0 1 9 0 9 1 4 5 6 4 8 5 6 6 9 2 3 4 6 0 3 4 8 6 1  
0 4 5 4 3 2 6 6 4 8 2  
1 3 3 9 3 6 0 7 2 6 0 2 4 9 1 4 1 2 7 3 7 2 4 5 8 7 0 0 6  
6 0 6 3 1 5 5 8 8 1 7 4 8 8 1 5 2 0 9 2 0 9 6 2 8 2 9 2 5 4  
0 9 1 7 1 5 3 6 4 3 6  
7 8 9 2 5 9 0 3 6 0 0 1 1 3 3 0 5 3 0 5 4 8 8 2 0 4 6 6 5  
2 1 3 8 4 1 4 6 9 5 1 9 4 1 5 1 1 6 0 9 4 3 3 0 5 7 2 7 0 3

6 5 7 5 9 5 9 1 9 5 3

0 9 2 1 8 6 1 1 7 3 8 1 9 3 2 6 1 1 7 9 3 1 0 5 1 1 8 5 4

8 0 7 4 4 6 2 3 7 9 9 6 2 7 4 9 5 6 7 3 5 1 8 8 5 7 5 2 7 2

4 8 9 1 2 2 7 9 3 8 1

8 3 0 1 1 9 4 9 1 2 ...

朝日がこれほど待ち遠しかった口は無い。やがて、律が目覚めて着替えを終えると

僕はホッと一息つき、式神を解除した。

「やあ、時雨！ 良い朝だね」

「この二十年間で最低の目覚めだよ。ああ駄目だ……頭の中に数字が溢れて覚醒状態だ」

「……？ まあいいや。とりあえず、僕が君の朝ごはんを作つてやるから少し待つてろ」

「ちよ！ 勝手に家の中を

はい、律は僕を黙殺 といつか耳に入つてないのだろう。そのまま部屋を出て行つた。

それから約一時間と少し。僕が必死に円周率を頭から叩き出そうと努力していると、ドタドタと音を立て、部屋の障子を破壊せんばかりの勢いで開けて律が帰ってきた。

その手には朝だといつのこと、一晩中寝てないといつのこと、何故かハンバーグ。

「僕の全てを込めて作ったハンバーグだ。食つてみてくれ」

「うう……わかった」

…………美味しいぞ、これ。久しぶりに、美味しいと言つ物を食べた気がする。

律はそんな僕の表情を見て、満足したのか二三三笑つていて。何か凄く負けた気分だった。

「美味しいだろ？」

「ああ、認める。美味しいよ」

正直、遙さん級に美味しいかつた。口には出さないけど。

それから、僕と律は殆ど同棲と言つても言い位の生活を始めた。と言つても、毎日遊んでいるだけ。

律は九我山のお嬢様な筈なのに、僕よりも俗っぽい人間だった。まさかラーメン屋に替え玉なんてシステムがあるとは……

それから服のセンスがなつてないと駄目だしまでされた。仕方ないじやん。年中スーツなんだから。

一番律が驚いていたのが、僕の無趣味さ。正直「時雨、人生楽しいか？」と聞かれた時には泣きそうになつたね。

律は車が趣味らしい。後日届いた煌びやかなスポーツカーは彼女の宝物らしく、毎日掃除をしている。

僕も手伝わされた。車を掃除するなんて初めてで、半ば悪戦苦闘しながらも最後には綺麗になつた。

「どうだ。こうこうのも楽しいだろ？」「

……認めるよ。楽しかった。今までこんな事は経験したことが無い。

その後も、僕は色々と教わった。九我山家の新年は大麻雀大会が開かれるらしく、僕もルールを叩き込まれる羽田に。しかし、こういうのは得意だ。一ヶ月が経つ頃には僕はもう負けが無い。八神が廃業したら雀荘にでも就職しようと思つ。

そんな日々が半年ほど経つただろうか。時に喧嘩し、時に笑いあつた僕と律。

…………本当に、認めたくは無いのだが、僕は律に次第に惹かれて行つたんだ。

律は何時も本気だつた。僕に対して、何に対しても。それが、とても僕には嬉しく、羨ましい。

律は僕に足りないものを沢山教えてくれた気がする。

そして、ある日僕は庭で律と向かい合い、一つ真剣な話を振る事にした。

「律。僕は、八神の跡継ぎだ。だから、何時かは誰かと結婚して子孫を残さなくてはいけない」

「…………うん」

「でも、僕らは混血同士。君も知っているだろ？ 混血と混血で子供を作つた場合の事を。

僕らハ神ではずっと前から純血の子をもうつて、子孫を作つていた。

勿論、僕の母さんもそう。僕らは、八神の緋眼を絶えず後世へ

と残す義務がある

「わかつてゐよ。確かに、混血と混血で子を作ると力の強い方が引き継がれるんだつたよね。

しかも、それについては何ら科学的根拠も示されていない。正に運次第というやつだ。

後、極稀だが二つの力が合わさって、新しい力となる場合もあるらしいね」

「うん。正直、緋眼と鬼憑はほぼ互角だな」と思つ。だから、どちらがくるかわからぬ。

もし、鬼憑が生まれたらその子はハ神を継げない。きっと辛い思いをしてしまうだろ。

それに、もし君が子を産めなくなつたり、緋眼使いが生まれなかつたら、僕は君と別れて他の誰かと子を作るしかないんだ」

「…………

「それが嫌なら、ここではつきりと別れよう。それが、九我山律と八神時雨が生まれた時に

背負つた宿命なんだ。混血同士の結婚は難しい。千島みたいな家なら別だが、

僕らハ神や九我山は違う。下手をすれば、家族まで敵に回してしまうかもしれない結婚なんだ」

「……時雨は、僕の事好きか？」

「……正直に言つと、好きだよ。少し前までは苦手だつたけどね

「じゃあ、”私”はそれだけで十分。全ての犠牲を背負つても、

私は君と結婚したい。

子供だってちゃんと私が育てる。一人でも、たとえ君が居なくな  
ろとも

「君がそつなら僕は 律、君を絶対に幸せにすると約束するよ」

ああ、恥ずかしい。だけど、きっとこれが僕の本音。半年間一緒に居た律は、僕に色々な事を教えてくれた。

それは、昔の僕だったらどうでもいいと切り捨てたような事が多  
い。

でも、今では全てが大切な思い出。僕は律を抱きしめた。生まれ  
て初めて、本当に好きな女の子を抱きしめた

翌日、僕らは一緒に田を覚ますと律曰く「漫[画]でよくあるおはようの儀式」をして、食堂へと向かった。

昨日あれだけしたというのに、鬼憑使いの体力は底なししか。と思  
いつつも、実は僕もしたかったというのは一生の秘密。

蒼威さん達に知られてもしてみる。死ぬ寸前までその事で僕をか  
らかうに違いない。

二人でこっそり手を繋いで、食堂へと行つて見るとおかしな事に  
人の姿が無い。

それどころか、給仕の係までいない。そして 裏手の方から聞  
こえる妙な歎声。

僕らがその方向へと向かうと、想像を絶する光景。何故、何故、  
宴会が行われてるの！？

「おお、時雨様がお目覚めになられたぞおおおおつー。」

八神でも調子の良い人柄の宗助が僕らに気づいて声を張り上げた。

何だ、何だ、何なんだ？

何時も使われる宴会場のステージを見ると、何か変な事が看板に書いてある。

「き、み、が、そなうなら僕は　律、君を絶対に幸せにする約束するよ？」

……ま、まさかと思い、その下に視線をやる。

「し、ぐ、れ、様、」結婚決意、おめでとうございます？」

全員がニヤニヤしながら僕と律を見てくる。クソ、昨日の会話は皆に聞かれてしまったのか。

ああ……僕の威儀が……八神の立場が……ああ、あは、あははははは。

いいよ。いいよ別に。どうせ、僕はこいつやって弄られる運命なんだ。あはは。あはは。

すると、鼻眼鏡をした父さんが僕に向かつて歩いてきた。この人は、真面目なのか、不真面目なのか。どっちなんだ。

「お前達が進む道は八神の今までの主義に反する行為だよ」

「わかつてます。でも　」

「言つた。息子の結婚を祝福しない親が何処にいる？　それに、過去の八神がどうした！

お前達は、今しか生きられない。だから、後悔しないことよつてな。  
精一杯頑張つて見るといいぞ」

「はい！」

「お父様。これから、宜しくお願ひ致します」

「いやあ。可愛げのカケラの無い息子と違つて、可愛らしき義娘が  
出来て僕も嬉しいよ」

珍しく、父さんのテンションが高い。この人、もしかして女の子  
がほしかったのか？

だから、蒼威さんや陸人さんにロリコンロリコン馬鹿にされるん  
だ。

「時雨、どうしたの？」

「早く来い。お前には今から、皆の前で挨拶をしてもらひんだから」

「あ、はい。今行きます」

そして、僕と律は手を繋いで宴会の輪へと加わった。

## Days18・陸人だいありー（前書き）

今回は結構重要な話です。

時間軸上では、緋色の眼新作の時期のお話といつか。

その時期までの陸人の日記です。

神々の黄昏から九年間。何があつたかが、大体語られています。

そして、新作は土曜日に投稿する予定です。

こちらもよろしくお願ひいたします。

後、朱音人気が高いので短編一本書き始めてます。

こちらも完成したら、投稿致しますのでよろしくお願ひします。

2022年

・十一月

何か、詩歌にボケ防止のために日記帳を貰つた。そんなにボケてるか、俺？

蒼威や梨香や遙ちやんや森羅にその事を話したら、

蒼威は、

「二口トリだから所詮三口坊主だる。いや、三歩歩いたら忘れちまうかなーわはははは」

「ひいいやがつた。チクショウ、いつか大怪我すればいいの。」

梨香は、

「え……お父さんって十文字以上の文章作れるんだ

と嘆いながら。お前はお父さんを何だと思つてゐるんだ。

遙ちやんは、

「詩歌から物を貰えるなんて奇跡じゃない。良かつたわねえ」

と言いやがつた。いやいや、悲しい事言つなよ。じぱりへ落ち込んだのは言つまでも無い。

森羅は、

「それよりもよ、大人の女性つて何を貰つたりしたら嬉しいかな？」

と言いやがつた。はいはい、完璧俺の話は無視ですねー。ムカつきますねー。

何か色々言われて悔しかつたので、今日から毎日日記をつけてやるぜ！

2023年

・一月

いきなり間があいてしまつた。クソ、蒼威の言つたとおり三歩歩いたら忘れちました。

昨日、蒼威の家に次男が生まれた。40近くになつても盛りやがつて。だが、可愛かつた。

名前は光希とつけるそつだ。蒼一と遙緋で考えたらしい。あの二人も良いセンスしてやがる。

夜、詩歌にもう一人作つてみるかと聞いてみたら、「冗談じやない」と言われた。泣いた。

何か子供のような奴が居るのにもう一人とか無理らしい。梨香つて子供っぽくないと思うのだが、

梨香じやないらしい。じゃあ、誰の事？ ま、まさか隠しそー！？

・五月

時雨と律が結婚した。正宗は終始笑顔だった、気持ち悪い。時雨は幸せそうだった。

ただ、皆の前で俺と蒼威がお前にした事はなさないでくれ。お陰で遙ちゃんと詩歌に

一人して怒られた。しかし、遙ちゃんつてある意味魔性だよな。時雨軽く泣きそうだつたし。

律はもう時雨にベタベタ。結婚式で舌を絡ます奴始めて見た。可愛い俺の娘は顔真っ赤にして見てた。

2024年

・六月

もう日記を書く回数は気にしない。ようは何年書いたかが重要な よ。

蒼一と命が結婚した。最後の最後まで大反対していた運命は、俺 の隣で号泣してたよ。

お願いだから一度と人の隣で日本刀をブンブンと振り回さないでほしい。

切れたから。さりげなく首の皮が切れちゃったから！

後、大和が詩歌口説いてたから、殴つてやつた。詩歌もまんざらでもないような顔をしないでほしい。

あ、蒼一の結婚式は普通だつたぞ。うん、料理がめっちゃ美味し かつた。

・八月

森羅が未来と駆け落ちしたり、神璽や由加もそれに合わせて消えちまうし、色々混乱したわ。

とりあえず、一課はほぼ解散。森羅と未来は一課を退職して、浅葱と八神で雇うらしい。

ちよつち国との関係が悪くなつたが、そこは十名家の八神さん。色々と金を動かしたらしく。

・十月

時雨に子供が生まれた。しかも、双子の男。名前は北斗ほくとと南斗みなど。これから八神は面白くなりそうだぜ。

しかし、あの時雨が子供ねえ……ガキの頃からアイツを知つている身としては、しみじみとくる。おめでとう、時雨！

2025年

・三月

遥緋と莉王の結婚式だった。泣いた花嫁姿が遙ちゃんと似てて少し驚いた。あの子も変わったね。

蒼威は光希を膝に抱いて苦虫を噛み潰したような顔をしていた。そんな蒼威を見て

遙ちゃんは苦笑い状態。ちなみに、ブーケを取ったのは梨香だ。

昔は近づく男全てを殺すつもり

満々だったが、彼氏一人いない娘の将来に少し不安を覚えた俺が居た。

・五月

またも結婚式。最近多いね。どこつもこいつも盛りやがって、俺なんか詩歌と四日以上口きいてもらつてないつづーのに。しかし、おめでとう。狂と奏。スゲ ヤクザが多い結婚式で無駄に血が騒いだ。俺らで狂に口リコンコールしたら罪歌に燃やされかけたよ。ま、時雨を人柱にしたから無事だったけどね。結婚して子供が生まれても不幸な奴だ。

・七月

梨香に彼氏が出来た。昔だったら五秒で殺してただろうが、今は違う。

相手は俺と同じ堅気の少年。うん……長くは続かない気がするよ。俺らの世界は異常だからね。

そろそろ詩歌と話し合つてお見合いでも持つてこようと思つ。

2026年

・一月

那<sup>な</sup> 蒼<sup>あ</sup>一と遙緋の子供が生まれた。一人とも女の子。名前は蒼華<sup>そうか</sup>と莉<sup>り</sup>

蒼威が孫バカになつてしまい氣色悪い事この上ない。そういうや、

光希とは叔父と姪なのに

三歳差なんだよな。なんか驚いた。俺もそろそろ孫とか欲しいな

あ……

女系一族なんで、多分生まれるの女の子だろうけど。野球とかやらせたいなあ。

2027年

・三月

梨香が別れたらしい。やつぱり、一般人とは無理らしく一日中泣いてた。

その晩その意味では私は恵まれて居たと詩歌が俺に言つた。久しぶりに感動して泣きそうになつた。

そして梨香が高校を卒業したので浅葱の頭首へ。俺は大学まで遊ばせてやろうつと思つたけど

梨香の決意は固い。だつたら、親として何も言ひまい。

・四月

梨香が頭首になつてから一月。霜月の家は浅葱をナメやがつた。やつぱり頭首が若いと

じつちの世界はナメられちまつ。梨香は泣かなかつた。それどころか、口で霜月を圧倒。

俺にできる事は何か無いかな と考えた結果、郁人を拉致つて霜月の家に殴りこみをした。

結果は圧勝。梨香はあんまり喜んでくれない。だが、

「次はお父さんに頼らなくとも何とかして見せるんだからね！」

とガツツを見せた。流石俺の娘。詩歌もババアも笑つてた。

・五月

遙緋に子供がまた生まれた。名前は灼汰あらた。……アイツみたいな奴になつてほしいと思つ。

・六月

蒼一に子供がまた生まれた。名前は煉次れんじ。……アイツは嫌味な奴だつたからなー。捻くれなければいいけど。

2028年

・五月

何気に狂の子供が生まれた。男の子だ。名前は善ぜん。かっこいいね

罪歌と正宗はどうなるのだろうか……

ついでに森羅の子供も生まれたー。女の子、名前は……あれれ？  
忘れた！

……ごめんなさい。実は漢字が難しくて読めなかつたんです。  
皆の前では、わかつてるフリしてたけどな。

・七月

罪歌、告る 正宗としづらく何処かへ 式は挙げずに籍だけ入れ

る」と。

美雪姐さんの事もあるだろ？が、俺はこれで良いと頷く。  
正宗の事を口コロコンと呼ぶと罪歌が可哀想なので、2代田口コロコン  
・緋眼使いは狂に進呈。

今度休日には蒼威と一緒にトロワイヤーを買いたいにいくつもりだ。  
……あ、そういうやあいつらが子供作ったら時雨の弟になるのか！  
？でも、俺は応援するぜ！

2029年

・三月

蒼威が完全に孫バカになつた……もつね、見てて気色悪い。

余りにも氣色悪すぎて、ビデオに蒼威の孫バカっぷりを記録して  
詩歌に見せてみた。

すると詩歌。家の奥の方を漁つて一本のビデオテープをテッキに  
セツト。

そこには梨香に対してもう一つ行動や発言をして  
いるイケメン（俺）の姿。  
誰か俺を殺してくれえええええつ……！

・五月

蒼一、浮氣疑惑。千島戦争開始。何故か俺も巻き込まれた。

命はワンワコンと喚き、運命は「殺してやる」と阿修羅姫を振り回  
していて、恐ろじこ事この上ない。

・六月

遙ちゃん、暴走。第一次千島戦争開始。ちなみにこの日記は病院から書いている。

蒼威は隣で包帯グルグル巻きの状態。そんな蒼威の傍では、莉那と蒼華が

つきつきついで「おじーたん。おじーたん」と……スゲエ負けた気分。

・七月

ついに終戦。犠牲が多くた……光希のセンスは神だわ。

2030年

・一月

浅葱のババアがついに死んじまつた。婿入りした時から散々いびつてくれたババア。

詩歌とイチャイチャしようとするとエアガン乱射してきたババア。やつと居なくなつて清々すると思つたけど、現実は違う。やっぱり、人の死は悲しい。

とりあえず、なんだかんだ言つて世話になつたからな。天国で梨香の事見守つてやってください。

・四月

蒼一がついにユニオン設立計画を始めた。スゲエ、あいつはマジで凄いと思う。

下手すりや、十名家に次ぐ日本最大級の組織になるかもしない。勿論、そうなつたら浅葱も傘下に入る。

まあ、神々の黄昏事件で作られたアイツの理想の世界、見せてもらおうじゃねーか。

トップは五人。純血の郁人。鬼神の運命。混血の蒼一。新しい種の神靈と由加。

この五人の視点から色々考えてユニオンの方針を決めていくらしい。

時雨も乗り気なようで、八神も傘下に入るのだから、必然的に十名家の半分もユニオンに加わる。それだけでも大戦力だ。

鬼神、純血、混血を区別しない共存の組織か。俺ら前の世代から見ると、それは夢物語にしか聞こえない

今まで俺も何回も同じ事を思った。だけど、現実は世知辛い。力無い者は在る者を恐れ、

力在る者は無き者を見下す。これが俺達の世界の常識だった。

だけど、俺と蒼威と森羅は純血と混血だけど親友といえる。あいつみたいな根暗と分かり合えたんだ。

多分、差のある純血と混血と鬼神は分かり合えるのであるつと違うんだ。

#### ・八月

蒼一からユニオンの学校の計画を聞かされた。次代を担う何とかの育成がどーたら。

んで、何か教員だか何だか指導者が必要で俺とか蒼威とか、暇そな熟練者に声かけるんだけど。

ぬははははは。まあ、俺みたいな最強の男にスカウトがくるのは当然かあ！！

だけぢ…… やるなり専門機関で講習とレッスン受けてこゝだつて  
…… どひつよつけかな。

金は向ひ持ひあらし——。

## Days19・牧島竜胆（前書き）

日が開いたら赤文字が出たので投下。  
今回は時間を遡って九年前へ。

次回は郁人視点のホワイトデータ編です。  
男性陣が中心となります。

長編の息抜きに書いたので、軽めのお話です。

一月十三日、IJの日は女の子にとつて勝負の日だ。明日は某お菓子企業の陰謀の日。

モテない男達が家から出ないと言い張る日。そう、明日はバレンタインデー。

そんなわけで、アタシは諸般事情からここハ神家の巨大な厨房をお借りしている。

ちなみに、メンバーはアタシだけじゃない。アタシ、梨香、遥緋さん、奏さん、罪歌さん、由加さん、命さん、律さん、運命さんの九人。正直、ありえない面子であると思つ。

どいつもこいつもが、名家のお嬢様。そーですよ。ビーセ、アタシは牧島産の式神ですよ。

「嘆かわしいな……これだけ女が居て、誰もまともなチョコが作れないとは」

「あのー……私は作れるんですけど」

律さんの言葉に奏さんが恐る恐る反論するが、全員に黙殺された。義姉になる罪歌さんまで無視していた。

奏さんはオロオロと困ったように周囲を見渡している。可愛いなあ……この人。

ちなみにアタシもまともに作れる がこの面子でそんなKYOUな発言をしてみる。アタシなんか一瞬でひき肉。

それほどまでに凶悪で強力な女達の集会。奏さんはまだその辺りの処世術が駄目だねえ。

「どうあえず、失敗作を持ってきた奴は出してくれ」

司会進行の律さんが全員にそいつぶえると、まずはゴンゴンと袋から何かを取り出したのは罪歌さん。

テーブルの上におかれたのは消し炭。さつとチョコレートなのにだらり。

「どうか、何でチョコレートな箸なのに、溶けずに形が残っているかが疑問である。」

「一瞬強く焼いて、後は弱火でじっくりって方法があったから、炎帝でやつてみたの。そしたら……この有様よ」

「あ、これ木炭じゃなかつたんだー」

「食べ物に見えない」

「罪ひやん。お菓子作りド下手だもんねー」

「遙緋さん。由加さん。命さん。もう少しオブリートにね。

「お、お義姉様。何故……強力な炎を使ったのに形が残つてらつしやるんですか？」

「何つて……これは型だよ。中のチョコなんか一瞬で蒸発しちゃつたよ」

罪歌さんの式神に耐える型とか……一体何で出来てるんだらつ。そして、皆の視線が語っていた「ああ、自分は罪歌につけよりマシだろう」と。

どんぐつの背比べだとアタシは想つたんですけどねえ……

罪歌さんの失敗作で皆さん、妙な自身をつけたのか次の由加さんはやけに自信満々にチョコを出した。

由加文 緑? 何故に、

何故に、緑？　由加わらが出したチヨコニーは茶色ではなく、緑。

「名づけて、健康チョコ。少し味見をしてみてほしい」

由加さんが全員を見た、というか睨んだ。まるで、食わなかつたらお前を殺すと言つてゐるような目で。

恐る恐る口にしてみる皆さん アタシは少し危険な色しかしたので、食べたフリをして様子を伺う。

ג' נייר

「おめでとう」

「げえ……」

「！」

発せられた擬音からわかるように、すいじぶぬ不味いらしー。皆、ティッシュに吐き出している。

だが、吐き出さなかつた勇氣ある人物が居た。その名は、七海奏さん。流石お嬢様。

人前で口に入れた物を吐き出すなんて出来ないのだろう。運命さ  
んなんてゴミ箱に吐き捨ててたのにね。

そして、それだけでは終わらなかつた。

「えへへ。」「ふふふん。」「ああああああー。」

奏さんには何があったのだ？とか、と/orんとした田でなくやり楽し  
そつに笑い始めた。

「いかん！　奏が狂ったか……可哀想に、麻薬中毒者のよつな田を  
している」

律さんが奏さんを抱え、血相を変えてそつ怒鳴る。いや、幾らな  
んでもそんな……

「見えますー　見えますー　遙緋先輩の顔が肉まんみたいに～あは  
はははははははははは」

完全に我を失っている……こんな奏さんを見るのは初めてだ。そ  
して、遙緋さんが顔を引きつらせ、

「……殴つて良いかな？」

「ひよやひよー……あれ、何で私、鬼に抱えられてるの？　うわ、  
しかも周りはゴコロばっかり。

あつちのほうじや、絶滅種だつていつのこ……やーーー！　やーー

！　「ココラ共ーバナナ食つてろい！」

奏さんが狂ったのに伴い、全員の殺意が爆発的に膨れ上がった。  
み、眞顔が笑つてない。

「のままじや、戦争が起きてしまつ。そつ判断したアタシは、奏  
さんまでこいつそつ近づき、  
首筋に結構力を込めて、手刀を入れてみた。……おお、本当に意  
識を失つたよ。

すると律さん、気を取り直して、

「尊い犠牲が出たが……我々は前に進もう。とりあえず、由加！君は何を入れたんだ！」

「ローヤルゼリー。野菜各種。山菜、蓬、山椒、蜂蜜、ドリアン、漢方とか薬とか。

確実にこれは健康になる。そう思つて入れてみたのだが……駄目だつたか」

「とりあえず、君はもつ何も入れるな。少し味付けをする程度でいい

「で、でも……私らしく、オリジナル要素を……」

「その有様が、これだぞ！」

ピクピクと痙攣する奏さんを指差して、律さんが告げた。流石の由加さんも何も言い返せるわけも無く、黙つて緑色の産業廃棄物をゴミ箱へと捨てた。そして、次は自信満々の顔で遙緋さんがチョコをテーブルの上に出した。だが、皆さん冷たい表情で

「オチが読めるからこれは遠慮しておこう」

「私、死ぬ程味見させられたし……糖尿病になつたらビックリよつ

「いもーと、ビーセ甘いんでしょう……？ わかつてゐからさつあと捨てて」

「芸が無い」

笑顔は一瞬で消え「せ、遙緋さんはす」「す」と「」箱へと砂糖の塊を捨てた。そして、その後は、大分まともだった。

梨香は純粋に失敗。基礎が出来てないねえ。運命さんはそもそもチョコレートを作った事すらないらしい。

律さんは律さんで、

「僕は、女子高だったので常に貰う側だったのや」

とカツ「いい事を言いのけた。女子高=レズが多いと言つのばどうやら本当らしい。何回か寝込みを襲われたそーな。

まあ、それはただの言い訳でしかなく、律さんは料理は作れるがお菓子系は壊滅との事。

そんなこんなで、私達のチョコレート作りはよしやくスタートした。

律さんが「猿でも出来るチョコレートの作り方」を手に持ちながら、全員に指示を出していく。

元々バレンタインのチョコなんて、簡単なもんだ。溶かして、好きなように味付けをして、

再び固めるだけ。だが、この人達は個性が強すぎる為に失敗していた。しかも我流。

成功するはずが無い。だが、今は律さんの本に群がるようにして、私達は好みのレシピを見ながら作っている。

失敗するはずが無い。そんな自信がついてきたのか、段々とお喋りの方が多くなっていた。

「それにしても、律さんと時雨ちゃんが本当に結婚するとほ、思わなかつたですよ~」

「……どういう意味だい?」

「だつて、時雨ちゃんつて。実はホモなんじゃないかなあ～とか思つてたんですよ。

私がバスタオル一枚で前を通りても、軽くスルーするだけでしたし、昔付き合つてた女の子とはキスはおろか、手すら繋いでませんからね。更に、お兄ちゃんて妙に絡むしね～」

正直、時雨さんが可哀想になつた。そして、何となく笑つてしまふ。

「時雨はホモじゃないぞ。といつも、僕がバスタオル一枚で歩いた時なんて、顔を真っ赤にして服を投げつけてきたもんだが……うーむ。やはり、君が妹分だからじやないかな？」

「そんなもんなんですかねえ」

「……単純に胸が平たいから蒼一さんと間違えてたりして」

梨香がボソッと呟いた。そして全員が、「ああ、あり得る」みたいな表情をすると、遙緋さんの眉が釣りあがる。

梨香も失言に気づいたのか、慌ててフオローリングをするも、上手い言葉が見つからないらしい。

一応、親友なので私は助け舟を出してもやる事にした。

「そーいえば、遙緋さん。莉王さんとトーントーしたらしだすねえ？」

「……え、ああ、うん。律さんにお呼ばれして行つてみたらねー。何か勢いでそういう事に」

遥緋さんの意識が私に向いた。視界の隅では、梨香が涙目で親指を立てている。

フフン。貸しだからね。後で、きつちり返してもいいから。

「正直、僕も戸惑ったよ。小さい頃からの付き合いだが、莉王が生身の女性に此処までの

関心を示したのは、初めての経験だ。一体、遥緋はどんな手を使つてあの変人を骨抜きにしたんだい？」

「骨抜きって……。何か、良く分からないけど。女にぶん殴られたのは、生まれて初めてだ！」

とか叫んだと思ったら、私の殴るフォームの美しさにつけて、二十分ぐらい語られて、

正直何なんだろう……とか思つてたら、何かデートしたいとか言われてそのまま流されるようになってしまった……」

あの人はマゾだったのか。ホント、アタシ達の常識では考えられない事をやってのける。

馬鹿と天才は紙一重。という諺があるけど、あの言葉は莉王さんの為にあるようなものだろう。

「でも、良い事じゃない。遥緋は女の私から見ても可愛いし、莉王も悪人ではないし。お似合いだと思つわよ」

「僕個人としても賛成だよ。どうか、あの馬鹿をよろしく頼む」

「はあ……まあ、なるよつになります」

そこで一旦会話が途切れ、再びアタシ達は作業に集中した。と言つても、アタシのはもう完成した。

郁人と散々お世話になつた蒼一さんに渡す為に、わざわざ一つも作つた。我ながら良い女である。

……ここで、ふと気になつた事がある。この中のメンバーで、誰が誰に渡すのかは大体わかる。だが、一人だけわからない。それは

「運命さんは、誰に上げるんですかあ？」

気がつけば、アタシは【九尾の狐】最強の鬼神にそんな事を聞いていた。

好奇心は身を滅ぼすというが、言つてからまさにその通りだと気づく。だが、運命さんは別段気分を害することも無く、

「ん。大和と空我だよ。そもそも、運命にはそれぐらいしか男性の知り合いは居ないしね」

「ああ、あの人達ですか。一人とも、カッコいい方ですよね」

「カッコいいかな？……大和なんか、私と初めて会つた時、おしつこチビつてたし。

空我なんかは、お母さんにビービー泣き付いてたんだから。……それを知つてるとね」

「そ、そなんですか……」

酒呑童子と大天狗の息子を泣かせるなんて……どれだけこの人は怖かつたんだろう。

だが、命さんはそんな運命さんに臆するわけでもなく、普通に接している。

鬼神と人間の姉妹。アタシと郁人だつて式神と人間でも上手くや

つてゐるし、結局はそんなもんなのだろうか。

「ふんふんふーんふーん

「.....」

運命さん達の所から離れると、何時の間にか復活した奏さんと罪歌さんが作業をしている。

奏さんは軽やかな手つきで次々とチョコを完成させていくのに對し、罪歌さんは腕を組んで唸つてゐる。

よくよく見てみると、奏さんのにはクリームやチョコで狂せんの名前が入っているのに対し、

罪歌さんは何も書かれていない、別に変哲のないチョコ。それを気にしているのか、

先程から奏さんのをチラ見しては、顔を真っ赤に染め、またチラ見をするを繰り返している。

「やつぱり、大人にはスタンダートに行くのが常套よね……あ、でも年寄り臭いチョコとか思われたら……でも、奏ちゃんみたいに可愛い文字なんてかけないし……何より正宗には似合わないし。

またそれが原因で陸人とかにロリコンって苛められたら可哀想だし……うーん……やつぱり、

ああ、でも……でも、可愛いねチョコだねって言つて欲しいなあ

何やら海より深そうな悩みに入つてゐる罪歌さん。話しかけると殺られそうなので、アタシはそくさとその場から退散した。

今度向かつたのは、遙緋さんと梨香の場所。…………何か、梨香泣いてない？

「ハル姉ちゃん～。だから、甘すぎて無理だつてば……」

「い、これでもまだ駄目なの……」

「だーかーらー！ 砂糖禁止だつてば！」

「駄目よ梨香ちゃん。砂糖は地球が生み出した最大の恩恵なの。私は、日々それに感謝して

毎日甘いものを食べなければいけないのが、人間の使命だと私は思つてる。だから、使わなきゃ駄目」

「竜胆～、ハル姉ちゃんを止めて～！」

遙緋さん理論展開中な所申し訳ないけど、アタシを巻き込まないで欲しい。すると遙緋さん。

目をカツと開き、アタシを正面から見据えると、

「竜胆ちゃん……しょっぱいってのはね。何時でも人は味わえるの！」

「は、はあ……」

「人は汗をかく。それを舐めれば、しょっぱいって感覚は何時でも得られるじゃない。」

「でもね！ 甘いってのは人間の体じゃ不可能なの！ だから、甘いってのはとっても重要なの」

もうわけがわからん。アタシは愛想笑いをしながらバックステップで遙緋さんから離れて行つた。

その結果、遙緋理論のターゲットは再び梨香へと戻り、遙緋さんの講釈は続く。

そしてついに、遙緋さんが調理台の隅においてあつた砂糖を梨香と遙緋さんのチョコが入つた鍋へとブチまけた。

「嫌ああああああッ！」

「ふう。これで安心安心」

アレを食べるとになる方々に、心からのじ冥福をお祈り致します。

最期に向かつたのは由加さんと律さんが何時の間にか共同作業している場所。

由加さんはもう完成したようで、包み紙に包まれ無駄に綺麗に包装されていた。

だが、その周囲に散らばるビーカーやフラスコが妙な不安をそそのも事実。

そして、律さんは律さんで、なんかおかしな事をやつていた。

「ふむ……これで、角度はOKかな？」

「うん。でも流石、律。普通はこんな事思いつかない。これで、時雨は律のモノだね」

「フフフ、そう褒めるな。照れてしまつだろ？」

何なんだろ？……まさか媚薬でも盛ったんじゃないかな？ だが、違つようで。

律さんはセーターを脱いで、タンクトップ一枚になると、由加さんが一度指を鳴らす。

すると、律さんの正面にあつたチョコの鍋が爆発を起こし、中身が律さんに大量にかかつた。

「ちょ！ り、律さん大丈夫ですか！？ 今タオルを！」

「いや。いいんだ竜胆。我に、秘策アリ」

律さんはチョコ塗れの顔で綺麗に微笑むと、親指を立てた。

一応アタシ達のチョコが別室で待機していた男性陣にどりつて貰つたかについて言つて置いて置こう。

まずは、運命さんと命さんから。渡す相手は、運命さんは大和さんと空我さん。命さんは言つまでもないだろ？が、蒼一さん。

「ねえ、空我！ 運命ちゃんが僕達にチョコくれたよ！？ 明日は世界が滅ぶんじゃない？」

「いや……それだけじゃねえ。下手すりや、俺らの世界だけでなく、全ての世界が……」

とまで言つた所で、顔を真つ赤にした運命さんに殴られて、一人は沈黙した。蒼一さんは蒼一さんで、

「はい。蒼ちゃん。愛してゐるよ」

「あ……ああ。ありがとよ…………うん……美味しいです」

「嬉しいーありがとー!」

運命さんの阿修羅姫を背中に突きつけられて、蒼一さんは冷や汗を垂らしながら命さんのチョコを頬張つていた。

次は由加さんの番。渡す相手は、森羅さんと神璽さん。一人とも、本当に青い顔をしている。

試作チョコで狂わされた奏さん何かは罪歌さんの後ろに隠れるほどだ。

一人に差し出されたチョコは、茶色で普通の形をしているものの、得体が知れない。

「……食べて、くれないの?」

「も、勿論食つさー、なあ、神璽ー!」

「……へ? ああ、うん。凄く美味そつた香りがしてたから、ボーッとしたまつたよー!」

森羅さんと神璽さんは一口でチョコを口に詰め込むと、物凄い勢いで噛んですぐに飲み込んだ。

そして、同時に「美味かつた」といつと廊下を出で、ドタドタと何処かへ走つていった。

あの分ではしばらくは帰つてこないだらう。

その後は、狂さんに奏さんと罪歌さんが何の変哲も無く渡し、正宗さんは仕事で居ない為に

罪歌さんは今晩泊まって、正宗さんの帰りを待つてから渡すらしい。……何て一途な人なんだろう。何か涙が出そう。

そして、今度は遙緋さんが心から一々一々とした表情で、莉王さんと蒼一さんにチョコを渡した。

蒼一さんは先程までよりも更に青い顔をしており、逆に何も知らない莉王さんは、妙に機嫌がいい。

「ちょっと、私好みの味付けになっちゃつてるんですけど」

「全然構わんぞ。」いつも見えても俺様はチョコ曰が無くてな

蒼一さんがそれを見てボソッと「馬鹿め……」と呟いた。アタシも正直、そう思つた。

莉王さんがチョコを一口齧る。……お、変化が無い。そのまま一口曰く。

それを見た蒼一さんは、今回は大丈夫なのかな?と思つたのだろう。徐に一口噛むと。

「てめえ! また砂糖の塊じじゃねーか!」

「ひ、酷い! チョコなのに……」

蒼一さんと遙緋さんが言い合つをする中、相変わらず無表情でチ

ヨ ハを食べ続ける莉王さん。

食べ終わった後は、放心状態。ところが相思いぐらに。ボケーっと立っている。

一番早く異変に気づいたのは、運命さんだつた。走りよつて、莉王さんの皿の前で手を振ると、

「……立つたまま氣絶してこる」

「莉王……アンタ、意識が無いのに食べ続けたのか。スゲエ、スゲエよアンタ」

「いや、私としては凄い複雑な心境なんだけど……」

運命さんが氣絶した莉王さんを抱いで、部屋から出て行く。後に残つたのは、アタシと梨香。

律さんはさつきから何処かへと行つてしまつてゐる。凄まじく嫌な予感がした。

律さん…………本氣で、あのチマハを時雨さんに渡すつもりなのだろつか。

時雨さんも何か嫌な予感がしてこるので、ちつともから世話をしなく部屋を見渡している。

そして、障子が開き、黒いベールのようなモノを纏つた律さんが現れた。

「り、律……？ その格好は一体……」

「時雨……私の気持ちだ。受け取つてくれ」

由加さんがツカツカと歩み寄り、律さんのベールを剥いだ。その下から現れたのは、

さつきと同じタンクトップにチョコ塗れの律さんの姿。……ああ、本当にこの人がやる気だ。色々な意味で。

「僕」と、召し上がり

精一杯媚びた笑顔と声で律さんは時雨さんにそう言った。だが、当の時雨さんはといふと、顔を真っ赤にしたと思ったら、急に青ざめていき、また真っ赤になつたと思ったら、

今度はちょっと危険な色に染まり やがて、バタンと床に倒れて動かなくなつた。

本人なりに、様々な葛藤があつたんだと思つ。頭の回転が速すぎて、体と心がついていかなかつたようだ。

こうして アタシ達が始めて共同で作ったバレンタインは、重傷者数名という結果を残して終わつたと。めでたし、めでたし。

余談ではあるが、アタシと梨香のチョコは皆から異常な程の評価を受けた。そりや、あの面子ではそうなるに決まつている。

梨香は遙緋さんに内緒で、最低限の分だけは隠しておいたりしくそれを応用して普通のチョコを作つていた。

一番嬉しかつたのが、郁人が凄く美味しいと言つてくれた事。それだけで、アタシは凄い幸せな気分。

ちなみに、時雨さんはその日からストレス性腸炎になつてしまい、

一週間ほど入院。

後に時雨さんはお見舞いに行つたアタシと郁人にボソッと語つた。

「チヨコは何処まで行つても食べ物なんだよ。彼女たちは、少しその辺を履き違えてる気がするんだ……」

…………「もつともで。

というわけで、ホワイトナー編。  
過去例にないほど長いです。

投票してくださった皆様。ありがとうございます。  
千島勢の人気の強さに郁人が泣いた。

次回はよくわかりません。  
年末短編と年始短編とかやりたいのですが。  
時間的にどうも微妙です。

上手くいけばやると思うので、  
暇だから読んでやんよ。みたいな姿勢で見ていただけるとよりしい  
かと。

先月のバレンタインデー。俺は竜胆と梨香ちゃんからチョコを貰い、人生の喜びをかみしめていた。

二人の女の子に手作りのチョコを貰えたのは凄く嬉しい。しかも、片方は好きな子の手作り。

今思えば、あの時は幸せだつたなあ……だが、その一ヵ月後の今、俺は酷く緊張した面持ちで八神家の厨房に居た。

メンバーは俺、蒼一さん、時雨さん、莉王さん、狂さん、神靈さん、陸人さんの六人。

他にも颯太さんや空我さんは物凄い数を貰つたらしく、とても手作りでは返しきれないでの

どうやら業者に大量発注して、一軒一軒配り歩いてるらしい。

颯太さんと令君は一緒に旅に出てて連絡がつかなかつた。一体、何をしているのやら。

森羅さんは来週の休みに由加さんを有名な焼肉店へ連れて行くそう。

「つたくよお……今時のガキはホワイトデーに返すチョコも一人で作れねえのかよ」

そう呴いたのは陸人さん。“偶々”八神に着ていて、そのついでにこの集まりに参加したと聞いている。

だが、それは陸人さんが喋つて居た事であり、他の皆さんには信じていないので、

「うるせーよおっさん！　どうせ、詩歌さんに邪魔だからつて追い

出されてここにきたんだろ！」

「ハツ、それとまた何か愚か極まりない事やつて、今年は詩歌さんから貰えなかつたらしいじやないですか」

「相変わらず駄目だねえ……陸人さん。今度こそ、離婚かもねー」

「つーか。詩歌さんもよくこんな馬鹿と結婚する気になつたよな」

「師匠……流石の俺も今回ばかりはフォロー出来ません」

凄まじい集中砲火が陸人さんに炸裂した。そつか……またこの人何かやらかしたのか。

梨香ちゃんには心から同情できるのと同時に、羨ましさを俺は覚えた。

俺の親父がもしも陸人さんみたいに破天荒な人だつたら、俺はいや、もういいか。

てか、莉王さんは何故に陸人さんを師匠と呼ぶのだ？。あの偉そうな人らしくない。

「ち、違うもん！ ちょっとHOROTORO借りてきただけだもん！」

「ジャンルは？」

「蒼一さん、反応する所がおかしいですよ。

「女子高生ハメ撮り・貧乳厳選集」

「そりアソタガ悪い」

蒼一さんは身も蓋も無い。心から呆れたような目で陸人さんを見ている。狂さん何かは達観の域だ。

莉王さんはフォローに回るかどうかで迷つてこらじかへ、珍しく頭を抱えていた。

とても気持ちはそこなのが時雨さん。二つの倍「一二〇」しながら、陸人さんへと言葉を浴びせる。

「何で奥さんが居るのにそういう類の物を借りるのか理解に苦しみますね。

あんな卑猥な物を借りるなんて、どうかしてるんじゃないですか？」

だが、この一言が時雨さんの失敗だった。全員、驚いたような顔で時雨さんを見ている。

どうせ、全員レンタルした事があるようである。公に言えないが俺もある。

竜胆には絶対に内緒だが。もうね、バレた時の事を考えると恐ろしくてたまらないので、

最近ではパソコンに隠しフォルダを作つて、ネットで拾つた動画を全てそこに隠している。

「時雨兄ちゃん。まさか、借りた事が無いの？ てか、見た事ないとか？」

「言つてやるな神璽。それが、八神の宿命なんだよ。きっとテリヘルでも呼んでるのわ」

「うわあ……時雨。弟分として少し幻滅したぜ」

「同じ十名家の俺様でも使用するのに……なんたる道楽息子だ」

時雨さんはびっくりの常習者といつもこれでしまった  
よつだ。恐ろしい。

当の時雨さんは顔を真っ赤にして、俺達の方をにらむと、  
「呼んだ事なんて無いですよー。そ、それに僕だって、ちやんと見  
た事がありますからー。」

「ほほお。どんなのを見たのかな？」

「そ、そんなの陸人さんに関係ないじゃないですかー。  
「ここの終わらないのが、陸人さんの凄い所でもあり、怖い所でも  
ある。

「へえー。やっぱ嘘なんだな。さやはははー。八神のお坊ちゃんまは  
アバすら見た事ないんでちゅか」

「だから、あるつて言つてるじゃないかー。」

「ほあー？ じゃ、どんなに見たんだよ」

「お、女教師モノですよー。」

「うつははははー。ただの女教師モノとか、中坊かよテメエは。  
時雨ちゃんかわゆいねー」

陸さんの嫌味な笑いは続く。時雨さんは怒りが収まらないよう  
で、更に声を荒らげ、  
怒鳴るようにして、じつ宣言した。

「ただのじゃありません！ 繫縛系の女教師モノです！」

「……おおー、お前SMとか好きなのか？」

「ちよつとは興味ありますよー。あの縄が食い込んだ時の表情がなんとも言えないんですよー。」

もうヤケクソだと言わんばかりに怒鳴る時雨さん。完璧に我を忘れてしまっている。

流石の蒼一さん達もいつもと違う時雨さんの様子に声を出せないようだ。

俺だって驚いている。“あの八神時雨”がアダルトビデオについて語っているのだ。

多分、こんな事は一生無いだろう。これを聞けただけで、わざわざ此処まで来た甲斐といつものを感じた。

「いやー時雨。すまなかつた。うん、お前は俺達と同じ健全な男だ」

陸人さんはそういふと、頭を下げた。うわ、珍しい。

「陸人さん……」

時雨さんも何か感極まつたような表情で陸人さんを見つめた。それと同時に、莉王さんの拍手。

それに釣られるようにして、俺や神璽さんや蒼一さんや狂さんも一人に向かって拍手をした。

両手を挙げて応える陸人さん。そして、俺は一つの違和感に気づいた。

陸人さんの手には、八神の家の中にある内線の子機が握られていた。

る。……嫌な予感がした

「とゆーわけで、八神時雨君の性癖の一ページの報告でした~」

陸人さんが手に持つていた子機に向かつて、笑いながら囁うと、

「時雨ちゃんえつち~」と遙緋さんの涙交じりであひつ、笑い声が静かに部屋に響いた。

そう、今日は三月十四日。すぐに渡す為にも女性陣には、他の部屋に待機してもらっている。

「……あ。ま、まさか……」

時雨さんが口をパクパクと何度も開く。「時雨、男は皆変態つて本に書いてあつた」

「まさか縛るのが好きとはねえ……」「ふふつ。あ、お父さんがごめんなさい」「八神の頭首がこんな変態なんて世も末ね」「すまない……ずっと君の異常な性癖に気づいてあげられなかつた」と立て続けに女性陣からの声が部屋に響く。

時雨さんの目にうつすらと涙のようなものが見えた気がした。そして、次の瞬間。

「うああああああああああああああああああああああああ

奇声をあげて厨房から飛び出していく時雨さん。それを大爆笑で見送る陸人さん。

鬼だ。悪魔だ。この人だけは絶対に敵に回さないようじょひ、そう心に誓つ。

しばらく、気まずい沈黙が流れた。無理も無い。ここに居る人の大半はさつき陸人さんの悪口を言いまくつた。

蒼一さんと狂さんと神璽さんは「自分がもしもやられていたら…

……」とも思つてゐるのだ。」

青い顔で陸人さんの様子を伺つてゐる。

「さて、皆。チョコレート作りを始めよ!」

「は、はい!」と全員の声が揃い、陸人さんに向かつて何故か敬礼をした。そして始まるチョコレート作り、

俺はこつそりと練習していたので、皆さんが本を見たりしてこの中、頭に叩き込んだレシピを思い出しながらやつてゐる。

調子が良いのが陸人さんと狂さんと莉王さん。イライラしているのが、蒼一さんと神靈さん。

「チツ……中々砕けねエ」

普通、チョコはお湯で温めながら溶かすものだ。蒼一さんはそれを知らないらしく、棒で殴つて割つていた。

その地味な作業に段々嫌気がさしてきたのか、いきなり式神を顯現すると修羅雪の刃で砕き始めた。

……しばらく待つてみたが。誰もチツコまない。

「チツ……蒼一の奴。上手い事考えやがつて」

…………神靈さん。貴方つて人は……。俺がそう思つてゐると神靈さんは手に意識を集中。

チョコの入つたボウルを抱きしめるようにして抱えると、ドロリと”容器が”溶けた。

「やべえ……ボウルまで溶かしちまつた!」

神靈さんは特殊な人だ。結晶を持つてゐる為に、そこからの混血

よりも凄い力を持っている。

きっと、反意思を集めて膨大な熱を発生させたんだが。問題はおつむが力についていけなかつた事だらうか。

俺は年上二人を冷めた目つきで見ながら自分の作業を進める。この一ヶ月というものの。

竜胆と梨香ちゃんと美味しいチヨコを食べさせてあげたい一心で、こつそりとレシピ調べたり、試作品を作ってきた。

全ては今日の為。先輩方には悪いが、そろそろツツミはやめて作業に集中させもらいます。そう考えていると

「うつわ、陸人。お前こんな梨香が食つて喜ぶと思つてんのか?」

狂さんが陸人さんのチヨコを舐めたようで、顔を顰めながらそう言った。

「ああ? おじ」「ア。俺の作ったチヨコに文句でもあんのかよ?」

「大有りだ。酒が強すぎる。確實にテーマの趣味の洋酒ブチこんだろ?」

「う……! 良いんだよ。これで、詩歌は喜んでくれたんだもん!」

「詩歌さん。確かに酒弱かつたよな? まさかテーマ……」

狂さんがそう言ってジロりと睨むと、陸人さんから余裕が無くなつた。まさかこの人、と俺が見たように全員がジトつとした目つきで陸人さんの事を見ている。

「いや、違うぞ。ここだけの話、酔っ払つた詩歌はそりゃもう積極

的な女の子なんだ。

もうね。陸人好き好き大好きーみたいな。アニメのような可愛い詩歌になるんだ。

……うつ。偶には良いだる。あの頃の詩歌はめっちゃ消極的な子だつたんだから!」

言い訳が本音になつてますよ。とは誰もシツコまない。流石の狂さんも追求しすぎたと

思つたのかそれ以上は何も言わなかつた。何か見てて可哀想になつてきた。

俺の場合は竜胆は色々と可愛い子なんで、陸人さんの気持ちはよくわからないし、

消極的な竜胆…………と考えると、それはそれで可愛い氣もする。

「……ま、こんな馬鹿は放つておいて俺は俺の作業すつかな」

そう吐き捨てるとい、狂さんは自分のチョコレー卜作成に戻つた。  
といつても、作りながら

俺や蒼一さんや神璽の方を偶にチラ見をすると、何かを言つてくる。

俺はアドバイスをもらえて嬉しかつたのだが、蒼一さんと神璽さんは駄目だしをくらいまくつていた。

莉王さんは淡々とチョコを作つてゐるために、声すら届かない。だが、やはり、人に意見をするだけあつて、

狂さんのチョコはとても美味しそうだつた。この人も結構影で努力したのだろう。

手つきに淀みが無いし、何より香りが素晴らしい。きっと、良いブランドを使つてゐるのだろう。

「さーつてど。時雨……は居ないのか。蒼一、お前包装紙とかある

場所知らねえ？」

「あー……知らん。八神の婦長さんに聞けばわかると思つぜ」

「お、そつか」

狂さんは一寧にチョコを白い箱の中へと納めると、扉を開けて厨房から出て行つた。

…………しばらく黙つて全員が作業に集中した。そして、俺がほぼ全工程を終えて、一息つくと、蒼一さんと神璽さんと陸人さんが狂さんのチョコをまじまじと見ていた。

「やれやれ……何時の間にかこんな美味そうなモン作りやがつて……」

「システムパワーは恐ろしいな……だが、今回ばかりはムカつく」

「狂兄ちゃん。完璧に俺らの事馬鹿にしてたよな……」

三人の背後にドス黒いオーラのようなモノが見える。こ、これが  
悪意 反意思つて奴なのか。

すると、まず陸人さんがまだ中途半端に固まつているチョコの角度を触つて変えた。

狂さんのチョコは一層になつている棒のような細長いチョコだ。  
次に神璽さんが触り、蒼一さんが微妙に修羅雪の冷氣で硬さを調節していく。

知らないぞ……と俺が関わり合いになるのを恐れていると、突然三人はゲラゲラと笑い出した。

「うわ……」

狂さんのチラリーストは「ひ。」つまむと先っぽが太くなつている。

まるで、股間のよつて。そしてまた随分と造詣が細かい。これはマズイだらう……。

それでもう一つは、蛇のよつことぐろを巻かされている。陸入さんの無駄な才能と、

蒼一さんの修羅雪の力が合わさつて出来た最低の一品だ。

「い、これ流石にマズくなつすか？」

「んー？ 郁人、お前はこれが何に見えるんだー？」

「いや、これひどい見てもアレでしょ……」

「どーみても蛇だよなあ？ あ？ 郁人。まさかお前何か変なモン想像してんじやねーのか？」

「蒼一。言つてやるなよ。この年頃の子はシモネタしか考えられないのや。うん」

もう駄目だ。完全に悪ふざけモードに入つてゐる。陸入さん達は笑いを堪えながら、  
包みを元に戻すと、各自の場所へと戻り、何事も無かつたかのように振舞い始める。

そして、狂さんが帰つてきた。鼻歌交じりにちやつちやと包装紙で箱を包み、最後に色違いのリボンを巻くと、

「んじや、俺はお先に渡してくるぜ。テメーらも精々頑張るんだな」

「お、おひ。頑張れよ……ふふつ」

「……こひこひ。…………ふつ」

「~~~~~つー」

三人は笑いを堪えながら狂さんを見送った後、ドアの影から狂さんの成り行きを見守る。

女性陣が待機しているのはこじから見える離れのような場所。

俺も殆ど作業が終わつたので、どうなるのか見てみたい。非常に不謹慎ではあるがね。

「つむ。素晴らしい出来だ」

俺が陸人さん達の方へと歩いてこじると、ずっと黙つていた莉王さんが顔をあげた。

莉王さんの手元には精巧なチョコレートで作った細工物が置いてある。

絵本に出てきそうな城だ。一つ一つがとても丁寧に作られていて、芸術品にも見える。

「へえ、凄いですね」

「つむ。これで遙緋も少しほ俺様の事をまともな人間だと思つだらう」

……果たして、それがまともと思われる要素になるのがどうかはわかないと思います。

「それで、師匠達は何をしておられるのだ?」

「狂さんのチヨコの成り行きを見守つてゐるらしいですよ」

「ほお……流石師匠、素晴らしい心がけだ。どれ、俺様達も行くと  
しよう」

莉王さんと一緒に陸人さんの向かい側のドアに体を貼り付けると、  
離れの様子を伺う。

丁度十秒ぐらい前に入つて行つたそつた。さて、どうなるやう…

…。

そして二十秒くらい経過した頃だらうか。物凄い爆音が鳴り  
響き、離れの障子から真っ黒な炎が噴出した。

その爆発に巻き込まれていたのは紛れも無く狂さんだつた。きり  
もみしながら池の中へ墜落すると、水しぶきを上げたまま上がつて  
こない。

離れから出てきた罪歌さんは、顔を真っ赤にして狂さんに何かを  
言つた後、その後ろを通過していつた奏さんを追いかけていつてし  
まつた。

「ギヤハハハハハハハ。見た？ 今見た？ めっちゃ吹つ飛んで  
やがんの一！」

「ぶはっ。狂の奴しばらく立ち直れないだらうぜ」

「狂兄ちゃんやまあ！」

「はっは。中々面白い姉弟だな」

……もうこの人達にはついていけない。莉王さんは高笑いをしな  
がら、チョコを持って厨房を出てつちゃうし。

狂さんが未だに上がつてこない池を何事も無かつたかのように通り、離れへと入る。

あの神経の國太さは偶に羨ましく思うよ。ホント。そして俺らが  
しばらく待つていると。

「ふええええ~~~~~つー。苦いよ~~~~~つー。」

遥緋さんが緋眼を発動させたのだろう、物凄い速さで離れから飛び出していった。

「は、遙緋いイイイツ！」

それを腰を落として手を伸ばしながら見送る莉王さん。何か、メロドラマみたいだ。

そういえば遙緑さんは物凄く甘党だったな  
前に桑香ちゃんから相談された事があつたつけ。

隣人さん達はもう大爆笑。蒼二さんは何時ものぐさのノリな態度は何処へ行つたのか、腹を抱えて笑つてゐる。

肩を落としてとほとほと歩きながら莉王さんが帰ってきた  
さん達は莉王さんの肩を叩いて未だに笑い続いている。

そのまま三さんには風呂の隣で並んで行くと  
股を抱えて座り込んできました。

「俺はクズだ。俺は駄目人間だ。俺はウンコ以下だ。」

莉王さんはそうブツブツ呟いている。うん、そろそろヤバい。何か色々な人が壊れている。

そろそろ一回空氣を締め直さなければならぬ。そう判断した俺が、陸人さんに声をかけようとすると、ざつぱーん。と物凄い勢いで池の水が上昇した。

「テメエらあアアアツ！ よくもくだらねー細工なんぞしてくれやがつたなあ！」

狂さんが式神、極点神舞を発動させ、そつ怒鳴った。うわあ……マジで怖い。

流石あの死罪六神の第一位と言つべきか。式神の氣配の凶悪さが並みじやない。

だが、この人達には大した効果は無いようだ。平然と笑みを崩さずに狂さんを見ている。

「狂。今回ばかりは、君に力を貸そうと思つ」

ガチャリ。そんな音が廊下の隅から聞こえた。音がした方向を向くと、鎧武者　いや、鎧を着込んだ時雨さんが居た。

戦国武将のような格好をしている時雨さんの目は緋色に染まり、背中や腰には大量の日本刀。

「陸人さん……いや、馬鹿二ワトリ。今回ばかりは、僕も本氣で怒りましたから」

馬鹿二ワトリ。と言われて陸人さんのこめかみに青筋が浮かんだ。顔がピクピクと痙攣もしている。

……………ていうか、今の時雨さんの格好で馬鹿って言われたら相当ショックだわ。

「……おい、クソガキ。テメー今なんつった？」

「頭の軽い馬鹿二ワトリって言つたんだよ。養鶏場に送り込んでやつから覚悟しやがれえ！」

「ぶつ殺す！」

陸人さんが爆轟を顕現させ、時雨さんに襲い掛かるのと同時に、狂さんの風玉が俺達に向かつて大量に降り注ぐ。全員横つ飛びで避けたが、狂さんはグラグラ狂つたように笑いながら更に威力の高い風玉を繰り出した。

「貴様等……俺様がこんなにも心を痛めているところのことを騒々しいんだよオオ！」

隅で蹲っていた莉王さんもついに爆発し、剣王を振つて辺り一体を力任せになぎ払う。

食器や鍋や溶けかけのチョコが大量に神璽さんと蒼一さんに降り注いだ。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ。もう洒落にならない。

「あー…………」のシャツ。一万三千円もしたのに…………

「やつてくれるじゃねーか。コラ」

神璽さんの体に黒いコートと仮面が纏わり付き、手には拳銃が握られた。

蒼一さんは蒼一さんで黒の禍々しいチーンソーを一本ぶら下げて、打ち付けている。

そして

「もうめんどくせえから全員かかってこいやあ！ クソったれのガキ共オー！」

陸さんの発した一言により、その場全員が全力で式神の力を放出した。

後日談になるが、あの戦いは本当に酷かつた。俺はチヨコを守るのに必死で、

フラガラッハを顕現させてしまい、それを挑発と受け取った皆さんに狙われまくった。

本当に、酷い戦いだつた。結局女性陣の声も最終的には届かなくなってしまい、三時間たつぶりと式神や体をぶつけ合つと、最後は何事かとかけつけてきた正宗さんの恫喝によつて、何とか場は収まつた。

八神の屋敷の厨房部分はほぼ全壊。これはあの場に居た全員に均等に修理代の請求が来た。

「はあ……」

そんなわけで、俺達は今同じ病室でそれぞれのベッドでぐつたり

としている。

遥緋さんには治して貰えればすぐなのだが、今回の事には流石の遥緋さんも呆れてしまつたらしく。

自力で治せと蒼一さんをはじめ、俺達全員に冷たく言い放つと病室に来る事は無くなつた。

これには莉王さんが相当堪えたようで、一時期魂が抜けたかのようになり、

最近では何か妙に怒りっぽくなつてしまつてゐる。特にカッフルに対する嫉妬が酷い。

「時雨。お前の大好きな桃を持ってきたぞ」

「ああ、ありがとう。それと……ホワイトナーは『めぐ』よ」

「気にするな。時雨の傷が無事に治つてくれればそれでいい。一番大事なのは時雨だからね」

時雨さんと陸人さんは何時の間にか仲直りしていた。良くも悪くも、お互い好きあつてゐるのだろう。

誤解の無いように言つておくが、上の会話は現在病室で行われている時雨さんと律さんの会話だ。決して陸人さんと時雨さんの会話ではない。

そして、律さんが包丁と手を洗つてくると言つて、病室を出て行くと、俺以外の皆さんからあらゆる病室の凶器が時雨さんに投げつけられた。

「あ、危ないじゃないですか！」

「つむせー！ お前だけ良い思いしやがつて。俺なんか詩歌に一生帰つてこなくていいよって言われたんだぞ！」

「俺様なんか遙緋にメールを送つてもあつそしか返事が無いのだぞ！」

「俺なんか本当なら今日、命と温泉行く予定だつたんだからな！」

「アンタらいいじやん。俺なんか、由加が一回も見舞いに来てくれないんだぜ」

「姉ちゃんに変態のレッテルを貼られ、奏さんに変態プレイは無理ですつて言われた俺はどうしろってんだよ……」

皆さん、相当ストレスが溜まつてゐるようです。この物凄く不毛で醜い言い争いは入院したその日から続いている。

でも、こういう生活も結構楽しい。まず、話し相手には困らないし、晩御飯争奪の看護婦さんの下着の色当てゲームは中々燃える。そんな事を思つていると、突然扉が開き、竜胆がバスケットを持って入ってきた。

「皆さんこんちわー。通い妻でーす」

ふざけたように言う竜胆。だが、今回に限り洒落にならない。莉王さんは突然フォークを磨きだし、

陸人さんは何故か持つてゐる灰皿を手に取つた。時雨さんは壁に刺さつた包丁を引き抜き、

蒼一さんと神璽さんはゴミ箱を何気なく抱え始めた。

「いーくと。今日はねー。サンドイッチ作つてきたんだよー。ホワイドナーのおかえしつてやつ？」

竜胆が居なくなつた瞬間、俺の命は消えるだらう。そんな事を思いながら、俺は大好きなサンドイッチを涙目で口にした。

## Days21・大晦日特別短編（前書き）

大晦日ですね。

今年はフツーに暇だつたので、つい書いてしまつた。  
一日には新年短編も投稿する予定です。

というわけで、それぞれの大晦日の過ごし方を書いてみました。

一応、時間軸上は神々の黄昏から一年後ぐらいの正月ですかね。

## Days21：大晦日特別短編

12月31日。大晦日。その日、天美運命は昼間からこたつに座り、蜜柑を食べながら年末の特番を見ていた。

家には今、誰も居ない。年末の大掃除や買出しも昨日までに全て終わらせてあるのだ。

空我と大和は仕事場の方で何かトラブルがあつたらしく、朝からずっと家に居ない。

命は学校の友達と夕方まで忘年会兼カラオケ大会に行っている。

「…………暇」

本日38個目の蜜柑を口に入れて租借した後、運命は一人そう咳いた。

今までの年末はどうしていたか？と思いつつするも、ずっと気にせず寝てた気がする。

今までは十数年一人でも平氣だつたのに、何故今はこんなに人恋しいのだろう。

弱くなつたのだろうか。いや、逆に強くなつていて。昔の自分と今の自分は全然違う。

冷静に分析してみると、益々分からなくなつた。

「はあ……何か、面白い事ないかなー？」

周囲を見渡しても、特に面白そうな物は転がっていない。

すると、廊下の方から何かがトタトタと歩く音が聞こえた。見ると、少し前に大和が貰ってきた犬が歩いてきた。

キュウと名づけられたその犬はあまり運命に寄り付こうとしない。大体命か大和についていっており、自分の事を遠くから良

く見ているのだけは知っていた。

「……お前も、食うか？」

傍によつてきたキュウに、蜜柑ではなく食べかけのジャーーキーを差し出す。

キュウはやや迷つたそぶりを見せた後、運命の手からジャーーキーを口にすると、皿を細めた。

優しくゆりへつと頭を撫でてやると、何故かくすぐつたそつと頭を振り払う。

何か照れているような感じだ。一瞬、訝しげな顔をした運命だが、すぐに気を取り直し、

「暇だね」

と声をかけた。すると、キュウは運命を見上げ、

「わっふ

とこれまた何か恥ずかしそうに返事のような動作をした。すると、そんなキュウを運命は優しく抱き上げ、

「キュウ。誰も居ない家つて寂しいね。運命は、今まで家族なんて持つた事が無かつた。

父上の事も母上の事も殆ど覚えていない。だから、家族の温もりとか全然知らなかつた」

「……わふ

「うん。でも、今は違うの。空我や大和と出合つて、運命は少し変

わつた。

命と出会つて凄く変わつた。……認めたくないけど、蒼一達とも  
出会つてまた変わつた。

そうしてこの家を手に入れた。キュウとも出会えた。これが、家  
族つてやつなんだね」

運命はキュウを持ち上げて、笑いながら言つた。伝わつたとは思  
えないが、何か無性に喋りかけたい気分だつた。

一方のキュウは犬とは思えないような瞳でしばらく運命の方を見  
た後、やがて身を揺らして運命の手から逃れると、

テーブルの上に飛び乗り、正面から運命の事をジッと見つめた。  
机の上に置いた運命の携帯が、振動したが二人はそれに気にしない。  
しばらく見つめ合つた後、キュウ　九尾の狐は体内で反意思を  
練り、体の構成を改变。

身を少し膨らませ、一本だつた尻尾が次第に増えて、美しい九本  
の尾へと変わつた。

「…………ちちうえ」

懐かしい気配だつた。ずっと昔、少しだけ感じた事のある大きく  
て逞しい気配。

自然と涙が零れた。ずっと会いたかった。この世にたつた一人の  
自分の産みの親。

運命と会話する事なく人間に滅ぼされてしまつたと聞いていた父  
に初めて会えた。

「俺あ……お前になんて弁解したらいいのかわからねえけど……」

「父上え……生きてたんだね。ずっと、ずっと運命の事見守つてくれ  
てたんだね」

「……すまねえ。だが、お前の事はいつも気にかけていた。最悪、神靈と由加を乗っ取つてでもお前の所に何時かは行くつもりだつた。だから、お前がいつらと会つた時から、

俺は……お前の事を見守つていた。愛していた。流石に青鬼の小僧の時は本氣であせつたけどな」

「あの時……父上は居てくれたんだ。うん、運命にはその気持ちだけで十分。

今、こいつやつて会えてだけど死ぬほど嬉しい。父上……父上えー！」  
運命は九尾に顔を埋める様にして抱きついた。九尾もそれを拒まない。親として娘を支えてやりたい一心からの行動だ。  
そして数百年ぶりに、バラバラに離れていた親子が、ついに出会えた。

「あれれ？ 運命姉ちゃん電話に出ないなあ

現在大掃除の真っ只中ではあるが、少し用事があつた為に運命に電話をかけた遙緋。

仕方が無いので携帯を開じて、再び部屋の大掃除を始めた。遙緋の部屋はとても汚い。

蒼一の部屋が綺麗に整頓されているのに対して、遙緋の部屋は服以外殆ど投げ出されている。

それを三十分ほどまとめると出ていく出でていく。過去のどうでもいいプリントの山が。

慎重に重ねて行つてみると、自分の身長と同じくらいの高さになってしまった。

流石に溜めすぎたか……と後悔し、これからこれを纏めるのがとても億劫な気分になる。

「おお。良い事思いついた！」

プリントの山を半分にわけ、そしてさり気になつたばかりの「ミニ箱を近くにもつてくる。

次に、そのプリントをミニ箱に積めて行き、さつきと同じように身長と同じくらいの山を作った。

「よつし、これで後は輪廻転生で……」

と手を離して空間から意識だけで構成を読み込もうとする、支えを失った山が崩れた。

このままで粒子状に分解できるが、それでは折角綺麗にした床が汚れてしまう。

また山を作り直すと、ゆっくりと手を離す。が、まだ体勢がおぼつかない。

「はあつー。」

手に力を込めて、止まれ。止まれ。と念をプリント込める。する

と、プリントがやや安定したかのよう見えた。

後は……分解するだけ。と思っていると再び山が崩れてしまつ。

だが、諦めの悪い遙緋は再び山を作り直し、

「ほあーー。」

と再び念を込めてゅうべつと口から手を離すと、今度はグラフにていない。

これをチャンスだ。とばかりに輪廻転生の分解を発動。一瞬にして粒子状になつたプリントが「ミミ箱の中に入つていぐ。

と予想していたのだが、土台の方から粒子化していつた為、結局粒子は周囲に散らばつてしまつた。

「やーー！ ひなつと待つてよーー。」

慌てて空中で粒子を掬おうとしてると、ドアの方から視線を感じた。

遙緋がその方向を向くと、セレーニは可哀想な子を見るよつた目をした蒼一が立つており、

「……これで、吸えばここと呪わせ」

セレーニは掃除機を差し出された。

「お、お兄ちゃん……どうから見てたの？」

「はあーー。辺りかな……うん。なんていうか、お前つて結構心が幼い子なのな」

セレーニと蒼一は掃除機を置いてそそくかと出て行つてしまつた。

後に残つたのは、見られた事による羞恥心と、大量に散らばつた粒子。

「もう嫌あ～～！」

と遥緋は部屋の真ん中で座り込んでそう叫んだ。

遥緋の部屋を出ると蒼一は一階へと向かつた。自分の部屋の掃除はとっくに終わらせてある。

大晦日ぐりいゆつくりとしたい。そんな思いから、蒼一は定期的に部屋の片づけをしていた為である。

これから、餅でも焼いて食べてながら年末特集を見るのもいいかもしない。

微妙に薄ら笑いを浮かべながら、リビングへと向かつて、蒼威や遙も一階の掃除は全て終わらせたようだ、寝ている光希を膝に抱きながら、三人でこたつに座つて何か本のようなものを見ていた。

「あら、蒼一。片付けはもう終わったの？」

「ああ、遥緋は当分終わりそういうにないけどね。とりあえず、アイツの部屋以外は完璧だよ。

……ん。何見てるの？」

「アルバムよ。さつさ掃除してたら結構出てきてね。面白いから今見てるのよ」

蒼一が視線をやると、そこにはまだ若い。十代後半ぐらこの遙や蒼威や陸人が写っていた。

どこかの学校の前だろ？ 女の子みたいな顔をした男の人や、無駄にテンションの高そうな男達と一緒に写っている。

陸人は話に聞いていた通り、真っ赤な髪。森羅は今からは想像できないほどの金髪だった。

「うわあ……母さんとか随分若い。お、この一番隅っこに居る子は結構可愛いな……」

「それは詩歌だよ」

「ほお、やっぱ何となく梨香に似てるなあ。……で、この真ん中で笑っているのが親父か」

蒼威に問いかけるも、光希の頬をふにふにとつけて返事をしない。

顔が微妙に赤い所から見ても、多分気づいていて恥ずかしいのだろ？と蒼一は思った。

「そういうや、母さんって何で親父と付き合はじめたの？ まさか、親父が初恋の人ってオチはないよな。母さん結構モテそうだし」

「初恋の人はねー。その蒼威君に抱きついてる人。蒼一は会った事あつたかしら？」

「誠一おじさんってわかる？ 友一君のお父さんの。その人がお母さんのか？」

「名前だけ……友一は知ってるけどね。へえ、じゃあ何でこの人と付き合わなかつたの？」

「従兄妹だもん。最後まで妹としか見られてなかつた。誠兄ちゃんはほら、後ろで笑つてる夕先輩つて人の事が好きで好きでたまらなくてね。私には勝ち目がなかつたつてわけ」

遙は妙に懐かしそうにそう呟いた。楽しかつた、人生で一番輝いていた高校時代。

色々あつたけど、今はこうして三人も子供が生まれて、毎日が幸せに包まれている。

遙はそれだけは自分でも運が良いと思つていた。

「ふうん……何か腹黒そうな女人の人だけね」

「実際怒らすと相当怖いわよ。蒼威君でも一回しか勝てなかつた誠兄ちゃんが毎回気絶するぐらいの罠を仕掛ける人だもん」

「え、親父……まさか、緋眼使いの癖に一般人に負けたの？」

蒼一がそう問うと、蒼威は肩をガクガクと震わせながら振り向いた。

「ば、馬鹿野郎。誠一先輩とガチで殴りあつた事がねえからんな事言えるんだ。」

実際戦つてみる。緋眼に追いついてくるわ。殴つたら倍の威力で殴り返してくるわ。

木を蹴つて飛び上がつたりとかな。もう、身体能力が人間の幅を

超えてんだよー。」

「や、そんな奴が居たのか……」

蒼威は高校時代に正宗を倒すほど強かつたと聞いている。その蒼威に一度しか勝たせなかつた男、海野誠一。

式神使いになつていれば蒼威よりも強くなつていたのかもしけない。

正直、身震いした。自分と蒼威が戦つても勝つのは正直、かなり厳しい。それ以上なんて考えたくも無い。

「ちなみに。徹宵義兄さんと良子義姉さんは何かは、もつと凄いぞ。素手で悪鬼をぶつ飛ばしたり

誠一先輩と徹宵兄さんを張り手一発で氣絶させたりな。海野の血統は恐ろしいんだ。

遙ちゃんもやー。たまーに、めっちゃめっちゃ強い力で俺をぶん殴るしね

「自業自得よ。こんな良い嫁さんが居るのに、他の女に現をぬかすからね

「やうだぜ。正直、親父には母さんは勿体無い」

「ぐぬぬ……」

形勢が不利だと判断した蒼威は、光希を蒼一に手渡し、逃げるようにして机付近から脱出。

何か食べようと思い、冷蔵庫を物色しようとすると冷蔵庫に張られたメモに田が留まる。

そして、今年の八神の新年会の事でとある用件を想い出した。

蒼威はそのまま電話のところまで歩くと、時雨の携帯に電話をかけはじめた。

「ええ、やうです。今年はアレやつますよ。ええ、はー。では、当  
日また」

蒼威からかかってきた電話を切ると、八神時雨はふう……と一息  
ついた。

年末までの決算やら報告書を先程せつと仕上げ、父親に提出し、

今度は嫁の実家に挨拶に行く。

今年もハードな一年だった。と何となく思しながら助手席に身を  
預けていると、

「誰だつたんだい？ まさか……浮氣相手とかじやないよな。当田  
とかなんとか言っていたが

「心配なく。蒼威さんだよ。八神の新年会の行事について確認を  
とつただけだ。

それに……まあ、アレだ。今の僕は君以外の女性には全く興味がないから……」

「偶には嬉しい事を言つてくれるね。それをもつと既の前でも言つて欲しいもんだよ」

「君ひひそ。まさか浮氣してゐんじやなかひつむ？」

「そんなわけないだ。お腹の中に君との子供が居るんだ。馬鹿を言つもんじやない」

「そうだつたね…………つて、ええつー？　ええ！？　ぼ、ぼぼぼ僕、初耳なんだけどー！」

時雨は飲んでいたコーヒーを危うく噴出しそうになりながら、そう言つた。

律は律で頬を少し赤らめながら、相変わらずの速度で運転をしている。正直、今年で一番驚いた事だった。

「だつて、言つてないもん。お父様は大変喜んでおこでだつたよ

「と、父さんめ…………だから、最近妙に機嫌が良かつたのか。どうか律、運転して大丈夫なのかい？」

「ほ、僕が代わるつか？　」うみえても、結構車の運転には自信があるんだ

「気張るなつて。君にはもう少ししたらこまこま乗れるんだから。体力は温存しとくといー。

それこ…………多分、時雨じゅのじやじや馬を乗っこなせないと困つみ

そう言つと、律は自分専用のスポーツカーのギアを入れ替え、更にスピードを上げた。

それから一時間ほどすると、今回の目的地である九我山特区へと辿り着いた。

結婚前に数回来た事がある九我山特区だが、何回来てもいい場所だなあ……と思う。

山の上にあり、少し下へと下れば中々に大きな都市もある。景色が良く、不便の無いいい特区であった。

「時雨は……令と紫には会つたんだっけか？」

「会つたよ。君の弟と妹分だっけか？ 隨分と可愛らしい子達だったね」

「成る程……じゃあ、太郎達にはまだ会つてないわけだ」

「まだ、弟分か何かが居るのかい？」

「ああ。まあ、後で紹介するよ。これから、ちょっと私は寄る所があるから。

時雨は先に屋敷に入つていってくれ。父も母も居るはずだから、すぐわかると思つ

そう言つと律はさつと車を降りて物々しい建物の中へと入つてしまつた。

しばらぐほかんと口を開けていた時雨だが、やがてため息と共に車を降りると、鍵をかけて九我山の屋敷へと歩を進める。

八神と同じような日本家屋だ。大体こいつの場所の構造は何処も同じなので、迷つても平氣かもしない。

そんな思いと共に、屋敷の中へと入ると妙にがらんとしている。年末なのに、人の気配を感じない。

仕方ないので「お邪魔します」と言ひて靴を脱いで家のなかへと上がつた。返事は返つてこない。

「ほんにちはー。どなたかいらっしゃいませんかー？」

すると、

「おーーう。こっちだこっちー」

少し離れた部屋から男性の声が聞こえた。随分フレンドリーな声だ。

律の父親はこんな声だったか?と記憶の中を探りながら、その部屋の扉を開けると。

悪鬼が居た。しかも、鬼族のどつみても上位な悪鬼。一瞬、頭の中が真っ白になつた。

「……ん? アンタ、見ねえ顔だな。警備に新しく入った小僧か何かか?」

しかも喋つた。過去に何百という数の悪鬼を見てきた時雨だが、喋る悪鬼は見た事がない。

上級悪鬼は知能が異常に高い。という話は聞いた事があつたが、まさか会話が出来るとは。

「……や、八神時雨です」

「お。アンタが律姉えの田那さんか。はじめましてだな、俺は火鬼の太郎。

結婚式にはよお。流石にこんなナリだから行けなかつたけど、アントラ達の結婚は喜んで祝福するぜ」

「どうも……あの、きぐるみか何かじやないですかよね？」

「当たり前だ。そう思つのも仕方ねえけどよ。九我山の理念は悪鬼と良き隣人として付き合ひつて事らしいんだ。まあ色々あつて、俺は律姉えに散々ボコられて、

仲間と一緒に九我山の家に連れてこられ、今はこうやって名前まで貰つてゐるつてわけよ」

太郎は快活に笑いながら、机の上においてあつた煙草を一本口にくわえると、

指を一度鳴らしだけで火をつけて、ゆつくりと紫煙を吐き出した。ここまでくると、もう人間と殆ど変わらない。

外見は髪の間から角が飛び出でいたり、指の先が異状に尖つたりと変わつてはいるが。

こうして普通に服を着ていれば、それなりの人間に見えない事もない。

この外見は鬼族の上位だからなのだが。流石に蛇とか他の上位悪鬼は人間とは程遠い。

「そりなんですか。何か……凄いですね」

「まあな。つか、ンなとこ突つ立つてないで座つてくれよ。こつちまで緊張しちまう」

しばらく太郎と雑談しながら、部屋で待つていると律の父親と母親がやつてきた。

時雨は土下座せんばかりの勢いで頭を下げるが、何故か面白そうに笑われ。

それから、律の弟の令と妹分の紫と一緒に時間ほど遊び、全員で食事を取つた。

「んで。時雨にーさんはもう。律ねーさんと毎日やりまくりなんですか？」

酔っ払いまくつた紫に、バシバシと背中を叩かれながら時雨は「はあ……」とだけ返した。

父親と母親が居る前でこいつ会話は勘弁して貰いたかったが、何故か父親と母親も

乗り気で思春期の令だけが顔を真っ赤にしながら黙々と食事をしていた。

年下にからかわれたのが、ショックだった時雨だったが。しばらくした後の紫のとんでもない

カミングアウトに時雨は本田一回田の度肝を抜かれた。九我山はとんでもない家なんだと心から思つた。

そして 食事や風呂やお年玉争奪、大富豪大会を終えると全員で新年の挨拶をしてその口は解散となる。

紫や太郎はまだ飲むらしいのだが、時雨と律は早々に引き上げて部屋へと戻つた。

「時雨、疲れたかい？」

「まあね。でも こんなに楽しい大晦日は生まれて初めてかもしれない。

去年まではもう、毎日ぐんぐんやわんやの大忙し。新年会が終わってようやく一息つけてた気がする」

「それは良かつた。九我山は君も知つただろ？ 色々変わつた家なんだ。

それでも、君が嫌わずに楽しんでくれて、私は心から嬉しいよ」

「うふ。太郎くんや紫ちゃんには驚いたけど……まあ、見習つ所は多かつたね。

とりあえず、明日も早いからもう寝よう。来年もよろしくね、律。

愛してる」

「うん。来年もよろしく、時雨。 私も愛してる」

律はそつこいつと、電灯の灯りを消した。

## Days22・元旦特別短編（前書き）

あけましておめでとうございます！

早速初詣行つてきて、現在部屋で一杯やつてます。  
といつわけで、

今年もこの作品をよろしくお願ひします。

と言つてもPASTが終わつたらもう終わりですけどね。  
今後の予定はちと厳しめです。

四月まで多忙になる為、投稿頻度が減るんじゃないかなと思います。

自分の人生でもかなり重要な時期なので察して頂ければ幸いかと。

## Days22・元旦特別短編

「師匠、あけましておめでとうございます」

そんな声で、浅葱陸人は目を覚ました。目の前には髪を金色に染めた偉そうな男が一人。

最愛の妻を手探りで探すが、そこには誰も居ない。目を擦りながら陸人は、半覚醒の状態で男に問う。

「……詩歌は？」

「奥様なら、既に朝食の支度をしています。梨香ちゃんも既に食卓についてらっしゃるので、

不肖、私が起こしにきました。というわけで、早く起きてください。師匠」

何か違和感を感じる。すると、ボケにボケた陸人の頭がようやく覚醒を始め、

珍しく極めて常識的な言葉を口にした。

「つか、莉王。何でお前が此処に居るんだ？」

莉王に引っ張られるようにして陸人は寝室からリビングへと向かう。

大きな欠伸をしながら一人でリビングへと入ると、既に朝食は出来おり、梨香と詩歌がテレビを見ながら既に食べ始めていた。

「……お、奥様。お連れ致しました」

「あら。ありがとうね莉王君。お密さんにこんな事してもらつて申し訳ないわ。

莉王君も確か朝食まだだつたよね？ 口にあつかわからぬけど、良かつたら食べて」

「い、いえ。ありがとうございます」

莉王は何故か顔を赤らめて、詩歌の方を見ようとしている。梨香と陸人はそれを訝しげな目で見つつ陸人は「つい一つす」と適当な挨拶をして席につき、梨香は新たに餅を一つ掴んだ。

「んでさ。莉王、何でお前が此処に居るんだ？」

「八神から頼まれましてね。本日行われる新年会に浅葱家を二度目に向かうついでに迎えに行つてやつて欲しいと。前回は大変迷惑をおかけしてしまいましたからね。このぐらいは師匠を尊敬する人間として、当然の事としてやるうと伺つたわけです」

「ほお、流石四条の人間だな。良い心がけだぞ。わっぱは」

「別にそんな事までしていくださらなくたつて良かつたのに……そういえば今年の新年会は十名家の四条派の全ての家の方がくるんだよね」

詩歌は微笑を浮かべながら莉王へと聞くが、またも莉王は顔を赤

らめてそっぽを向いた。

「え、ええ。神々の黄昏事件の少し前に抗争を行いました。結果、我ら四条は敗北しました。

これからは十名家のハ神派ですね。まあ、一階堂と違つてハ神は良心的です。

支配ではなく、相互扶助といつもで関係をあくまで非公式に結んでくれました。

だから、今年ぐらいは全ての家で集まり新年の挨拶をしよう。といふ話になりましたね」

「良い事だと思つわ。仲間は多い方がいいもんね」

「確かに。十名家ってお前を初めとして、変な奴がいっぱい居るしな」

「はつは。確かにそうですね。律や颯太も子供の頃からの付き合いですが、本当に変な子になつてしまつて」

陸人は心の中で「お前が一番変なんだよ……」と思つても、口には出さなかつた。

眞の変人は変人と一生自覚しないもの。これは陸人の人生経験から出した答えだ。

そして、しばらく食器の音だけがリビングに鳴り響く。すると、今度は梨香が話題を振つた。

「ねえ、莉王さん」

「む。なんだい?」

「何で、やつあからいお母さんのお顔見ると顔を赤くするのー?」

ブフツッと莉王はすすりて、味噌汁を危うく外に噴出しちゃった。

梨香のその発言と、莉王のその態度に、早く危機感を覚えたのは陸人だった。

「て、てめえ、莉王。ま、まさかお前……詩歌の事をお

「い、いえ。違こまへよ師匠!」

「ムキになつて否定する所がかなり怪しい。つか、詩歌も顔赤らめないでよ!」

「こいつ、お前より200ぐらい年下だよ? 僕の方が絶対ダンディズム溢れてるよ!?」

「あらあ……莉王君。おばさん照れちゃうわ。陸人はつっこ

詩歌にやう言われてしょぼーんと頑垂れる陸人。梨香はわくわくしたような目で状況を伺っている。

流石に不味い。普段空氣の読めない莉王でもこの空氣は危険だと思つた。

「た、確かに綺麗だとは思いますが。これには海より深い事情があるんですよ!」

「んじや、話してみる。その海より深い事情つてやつをよ

「つこでこ、何でお父さんの事を師匠と呼んでるのかも聞きたいな

あ

陸人と梨香に詰め寄られて、莉王は困惑した。それと同時に、似たもの親子だなと思う。

外見は詩歌に似ているが、中身はどうと陸人に近い。そんな感想を抱く。

そして、ふう……とため息をつき。

「わかりました。両方お話します。ですが、一つだけ約束してください。師匠、絶対に怒らないでくださいね」

「怒らねえよ。いいから早く言つてみろ」

「はい。では 私の家の力。心眼の事は知っていますね。相手の心を読む。嫌な力です。

ですが、私は何故か。普通の心眼よりも強い力が使えます。簡単に言つなら、相手の心だけでなく、相手の想像してる事も見えるようになつているのです」

「なるほど……思春期の男の中身なんか読んだら大変だな」

「ええ……。で、私は八神戦争の時に、師匠と戦つて敗北しましたよね。

実はあの時もその力を使つていたのですが、師匠は兎に角凄かつたんです。

普通なら殺し合いをする時は、常に勝利へのビジョンや作戦の成功のビジョンが見えるのです」

「へえ。そこから逆算してけば、完全に相手の動きも明確に読めますね」

「そりなんだ。だが、師匠があの時考えて居たのは。梨香ちゃんの事だった。

梨香ちゃんの幼稚園の頃からの姿。あの時の戦つていた姿。師匠は梨香ちゃんの身の安全だけをただ考えていました」

莉王がそう言つと、詩歌は感心したように陸人を見て、陸人と梨香はお互い恥ずかしいのか、顔を赤くして顔を伏せた。

「それが尊敬し、師匠と呼ばせていただく理由です」

「お、おい。照れるじゃねーかよ。んで、詩歌を見ると顔を赤らめる理由は何なんだ?」

「本当に恥づんですか……？」

「当たり前だ。むしろそっちの方が知りたい!」

「莉王君。私も知りたいな」

詩歌と陸人はそう言つと、お互いを見詰め合つて笑つた。莉王は最後まで言うべきかどうか迷つたが、陸人には何か考えがあるので勝手に思い込み、やがて言つた。

「実は梨香ちゃんのイメージが終わると……その、奥様のビジョンが見えたんです。

奥様の今の状態や若い頃までの奥様が……」

「まあ」

「は？ 何で、それで赤くなんだよ」

「実は……その奥様の格好が半裸でしたり……なんというか、非常に官能的とでも申しましょうか。

簡単に言えば、奥様のエロい想像のビジョンが大量に私に流れ込んできたんです。

赤子のように甘える奥様。師匠の事をお兄ちゃんと呼ぶ奥様。その他色々の奥様が……」

莉王が言い終わるとリビングが一瞬、凍りついた。陸人はガクガク震えているし、

詩歌は妙に冷たい笑みを浮かべている。梨香は梨香でこの後の予想がついたのか、携帯電話を取り出して弄り始めた。そして

「し、詩歌。『、』めん！ 『めんなさああい！』

「お、奥様！？ 落ち着いてください」

「つるさああああああああいつ！ 今日といつ今日は絶対に許さないから！」

何かが倒れたり投げつけられたりする音がした後、詩歌の怒鳴り声が響き渡った。

新年会の準備に追われている八神家は兎に角騒がしかつた。家政婦達はてきぱきと動き

周り、厨房では全ての機能を使って調理の作業を進めていた。

そんな中、秋月罪歌はたまに声をかけてくる人達に挨拶を返しつつ、屋敷の中を歩いていた。

すると、携帯にメールが届いた。開いてみると、梨香からで浅葱は少し遅くなるかもしないとの事。

きっと陸人辺りがまた馬鹿をやらかしたのだううと予想すると、返事を返して再び歩き始めた。

しばらく歩いているとお田当ての人物を見つけた。そう 八神正宗。

新年会の最終チェックを行っている正宗は何処か忙しそうだったが、それでも罪歌は何か会話をしたかった。

「ま、正宗」

ややはにかみながら声をかけると、正宗はすぐに振り向き何時の曖昧な笑顔を浮かべる。

この辺りはやはり時雨の父親だなあ……と思い、何か変な気分になつた。

「やあ、罪歌。久しぶりだね。学校はもうそろそろ卒業だね」

「う、うん。でもまだ就職で迷つてて……」

「成る程。じつちの世界に残るか。あつちの世界に行くかだね」

「……凄い、何でもお見通しなんだ」

「君は僕の大切な”娘”のようなんだ。それぐらい、お見通しさ。  
実はそうだろうと考えて幾つかね候補を絞つておいた。実はこっちの世界関連の保育所  
のようなモノもあるんだ。あくまで、ほぼ非公式のようなんだ  
が」

「そりなんだ……」

大切なのは嬉しいけど、娘という言葉にやや消沈してしまった罪歌。  
いつその事、ずっと秘めてきた思いを伝えるべきかもしれない。  
だが、この忙しい時に正宗に余計な心労を増やしていくのだろうか。そんな葛藤も生まれた。

すると正宗。何か微妙な空気を悟ったのか、

「む、無理についてわけじやないよ。それに、結婚するって考え方もある。

君は外見も中身も血統も素晴らしい子だ。お見合いの募集をすれば引く手数多だと思う。

そうだ。なんだつたら、今度僕が誰か　」

とまで正宗が言った所で、ついに罪歌の堪忍袋の緒が切れた。半分涙目で正宗を睨みつけ、

「もういいよ！ 正宗の馬鹿！ 鈍感！ だから口リコンつて陸人  
みたいな馬鹿に馬鹿にされるんだ！」

我ながら酷い言い草だと思いつつも、流石にこればかりは我慢できなかつた罪歌。

これだから八神は　とか、その他様々憤りを心中で吐きつつ、

踵を返して歩いていく。

後に残された正宗は、一体自分の何処に落ち度があつたのかを真剣に考えてみたが、

やはり何も思いつかない。年頃の女性は難しいなあ……と呑氣な事を思いつつ、再び仕事へと戻った。

ここの一時間ほど、牧島竜胆は硬直していた。部屋は暖房が効いて暖かいのだが、妙な冷たさがある。

原因は少し離れた場所で居眠りをこいでいる秋月罪歌。彼女の周りにはかなりの量の酒瓶。

先程まで、罪歌は散々偶々見つけた竜胆に色々愚痴りながら酒に溺れていた。

冷静な人だと今の今まで思っていたが、結構子供っぽい所もあるんだなあと、認識を改める。

「ふう、やつと寝たかあ……」

ようやく硬直を解いて、体をほぐすと途端に暇になってしまった。郁人は、蒼一と遙緋と一緒に訓練場でフラガラッハの訓練に行ってしまっているし、梨香はまだ到着していない。

一緒に訓練について行つても良かつたのだが、流石にあの面子との訓練は洒落にならない。

そんなわけで、竜胆は暇を持て余していた。だが、黙つて座つて

いても何も変わらない。

仕方が無いので、竜胆は罪歌に郁人の置いて行った上着をかけてやると、部屋から出て外へと向かう。

「わあ……」

人が多かった。今年は十名家の四条派の直系がほぼ全員来るらしい、例年よりもかなり人が多いらしい。

遠くのステージでは蒼威が腕相撲大会を行つており、上のパネルの表示を見ると、既に二十人抜きをしているようだ。

華奢に見えて、結構力があるんだなあ……なんて思つてゐると、

「お、マッキーだ」

急に後ろから声がかかつた。振り向くと、そこには年始だといつのに革ジャンを着込んだ命がヘラヘラ笑いながら立つていた。

「あ、命さん。こんちわー。あけおめっす」

「あけおめー。蒼ちゃんともーと見なかつた?」

「郁人と特訓してますよ。ほら、あの山の中腹辺りで何か木が揺れてるじゃないですか」

「あー……アレか。全く、よくやるよな」

「本当ですよ」

「とゆーわけで、マッキー。私とお姉ちゃんと一緒に、カラオケ大会に出よう」

命は相変わらずの表情で竜胆の服の袖を掴んだ。　強い。かな  
りの力が込められている。

命も命で凶悪な式神を使える。姉の運命何かは命より更に強い力  
を持っている。

このまま抗えば、少しマズい事になるかもしない。と考えた時  
には、もう既に遅し。

#### 『会場に転移』

そう命が呟いた瞬間。抗う暇も無く、竜胆と命の姿は廊下から消  
えた。

その頃、有馬空我と石動大和は途方にくれていた。八神家新年会  
に行く筈だったのに、  
何故自分達はこんな場所でこんな事をしているのだ？と思つも、  
現実は変らない。  
命や運命は今頃八神家について美味しいものを沢山食べているの  
だろう。

だが自分達は　　とまで考え、周囲の状況を見て笑つた。

「うつわ。君達見のも久しづりだよ」

「しかも元旦にくるたあ……相変わらず、空氣読めねえみてーだにや」

大和と空我を囮んでいるのは白い儀礼服のよつなものを着た。十数人の外国人。

俗に【教会】と呼ばれる組織の一員で。海外ではもつとも有名な悪鬼討伐集団の一つ。

教会は悪鬼汚らわしい生き物として認識し、その中間である鬼神は世界への冒涭として扱っている。

数年前までは積極的に海外で活動していた空我と大和は、彼らにとつては仇敵であり、また賞金首でもある。

すると、一人豪奢な儀礼服を着ていた男が、紙束を大和に向かって投げつけた。

「わお。僕ら、また賞金が上がったよ。運命ちゃんが150万ドル。空我が、80万ドル。

……え。ゆかりんが75万ドルのみどりんが115万ドルで……何で僕が60万ドル！？」

「おお、下の方見てみい。お前の所にフルだとか何とか書いてあるぜ」

「フルって何の意味だっけ？」

「愚かとか、馬鹿とか。そんな感じだったと思つぜい」

「ぬあああ！ こんなランキングなんてえええ！」

大和は一瞬で狂化すると、儀礼服達に襲い掛かり始めた。見た感じ、大した腕では無さそうだ。

本当の執行者なら大和達に紙すら見せずにひたすら殺そうと襲い掛かってくるだろう。

もうその時点で勝敗は見えていたのかもしれない。空我は翼をはためかせ、空へと飛翔。

(そうすると……あの二人はまだ生きてるつー事だな)

雷神の鬼神　鳴神紫。風神の鬼神　風早碧。十年前に、運命と大喧嘩して九尾の狐から出て行ってしまった一人の鬼神。未だに賞金首として登録されているという事は、一応の目撃証言はあるという事。

碧なんかは賞金額が倍以上に跳ね上がっている事から、派手にやつているのだろうと思う。もしかしたら意外と近くに居たりするのかも知れない。空我は、そんな夢物語を想像し、微笑を作ると、

「行つつづくぜえい！」

自身式神・小鳥を顯現させて儀礼服達に思い切り投げつけた。

そろそろ日付が変わる時間になつた頃。八神家での新年会の熱気

は相変わらず冷めていない。

蒼威や陸人や森羅は、固まつて酒を酌み交わしながらチビチビと語り合っていた。

陸人の顔には沢山の引っかき傷や手形が残つていおり、大体何があつたのかは聞かなくても分かる。

「何か最近虐げられるのが気持ちよくなつてきた気がするんだ……」

「お前、マゾだつたのか……」

「というよりも、調教されたというのが正しいだろう

そこから少し離れた野外に設置されたテーブルでは、ムスつとした顔の詩歌がジューースを飲みながら、遙に愚痴を漏らしていた。

遙は光希を暖かそうな毛布でくるみ、未だ寝る気配が無い息子をあやしながら、それに応えている。

「何で、あんな大馬鹿者に惚れちゃつたんだろう……」

「恋は盲田つて言つからねえ。あの高遠君好き好きーな詩歌が懐かしいわ」

「うう……昔はもうちょい賢かつた氣がするんだけどなあ

庭に設置されたステージでは、莉王と颯太と時雨の飲み比べ対決を大勢のギャラリーが見守っている。

「ふつふ。まだ22杯目だ。貴様ら、俺様に負けたらそここの池を全裸で泳ぐのだぞ」

「……負けない。正義は勝つ」

「ふん。じゃあ、莉王。君が負けたら、遥緋の前で裸踊りでもやつてもらおうかな」

ステージの隅の方では完全に酔いつぶれた紫が仰向けになつて倒れている。

流石に放つて置くとマズいと判断したのか、令が駆け寄つて紫を重そうに背負つと、家の中にある休憩スペースの布団へと持つていく。

「よつこいせ」と自分よりまだ身長の高い紫を、布団に寝かすとその重さに引っ張られ、そのまま押し倒すよつた形になつてしまつた。

しかも、最悪な事にその衝撃で紫の目が覚めてしまつといつおまけつきで。

「……令、アンタ。何しとん？」

「ほ、僕は善意から紫ちゃんをつて……ああ、あばばばばばばー…

「こんの一……エロガキがああつ！ 変な知識ばっかりつけおつてしまえ！」

凄まじい電流が令の体を襲い。冤罪だ。誤解なんだ。と心の中で呴き、令の意識は闇に消えた。

その隣の部屋では、暗闇の中。鍋がぐつぐつと煮える音だけが響いていた。

部屋の中に居るのは、蒼一、遙緋、神璽、由加、命、運命、郁人の七人。

誰もが無言で、茶碗と箸を持ちながら鍋の具合を待つている。すると、運命が鍋の蓋を開け、

「うん。 そろそろ平気。 じゃあ、まずは蒼一から

「お、俺からかよ」

現在行われているのは闇鍋。しかも食に関しては最悪なメンツと言える。

お玉で一掬いし、ドロリとした嫌な感触のものを茶碗に入れると、蒼一は意を決して口に入れた。

「……美味しい。これは、餅か！」

「あ、それ俺が入れた奴ですね」

「なーいす！ 郁人なーいす！」

相当嬉しかったのか、蒼一は気持ち悪いぐらいはしゃいだ。そして、次に郁人がお玉で掬い、茶碗の中の物を口に入れると、

「…………うづえ。ぶよぶよして気持ち悪い。おえ」

「ああ、多分それ運命が入れた蛙だと思う。さつき、近くの田んぼで見つけたの。昔食べただけど、美味しかったよ」

全員に激震が走った。次の番の命が涙目で全員を見るが、誰も田んぼをあわせようとしない。

そして闇鍋はどんどんと続いていく

。

宴もそろそろ終わりが近づいてきた。今は全員が大きな広場に集まつてあり、八神の直系である正宗と時雨が中心に立つている。先程までの、「ロリコン引っ込みー」とか「消えうせりーワトコ」とかいう某一人名による罵詈雑言の合戦はようやくの終局を見せ、今は厳かな雰囲気の中、全員が壇上に上がった時雨を見つめていた。

「はい。というわけで、今年の八神家新年会も終わりが近づいてきました。神々の黄昏事件から一年が経ち、こうしていつもの面子に加え、今年は他の十名家とも合同で新年会を開催出来た事を嬉しく思います」

蒼一達のすぐ傍で時雨の挨拶を聞いていた律はうつとうとして、もはや意識が他の場所へと移っていた。

「人は一人では生きていけません。誰かに支えられて、誰かを支えて、生きてきます。

それは何処の世界でも同じです。こっちの世界だろうが、一般的な世界だろうが変わりません。

願わくば、このような何処の世界でもありえる平穏が続くよう祈りつつ、今年の新年会の終了を宣言させていただきます」

時雨の言葉が終わると、花火が上がった。それと同時に拍手の嵐。そして、それぞれの一族が挨拶をしつつ帰路へとついていく。この時ばかりは皆笑っていた。誰もが楽しそうに今を生きている。

それは人として当たり前の事。

こうして、異能の力を持つ式神使い達の元旦の夜は更けて行つた。

## D a y s 2 3 · 七海奏（前書き）

三ヶ月ぶりのdaysですね。

奏はこの時、秋月姓になつてているのですが。

まあ、daysは結構時間軸に差があるので。

一応、タイトルだけは初期登場時の名前にしようかと。

次回は紡かなあ……

数話PASTが進んだら投稿しようと思つてます。

私の人生は、中々に上手く行っていたんだと思います。子供の頃にはお姉さまの悲しい事件がありましたけど、高校生ぐらいでしょうか。あの頃から大きくなり人生は変わったのではないかと思います。あの、八神主催のお見合いの日。

狂さんと初めて出会った日。あの日からですね。私が楽しそうに、心から笑えるようになったのは。

私と狂さんは数年前に結婚し、今では子供が一人居ます。善という男の子です。毎日成長していくわが子の

顔を見ているだけで、一日の疲れなんて吹っ飛んでしまいます。子供つて本当に安らぎますよね。

最近では、言葉を覚えてきて少し生意気になっているのですが、

こういうのは嬉しいです。親馬鹿ですかね？

ですが……不満が無いというわけではありません。これは……結婚した女の宿命なのでしょうか。

ここ最近ずっと、狂さんの帰りが遅いんですよ。そりや、ユニオンの重役なんですから、忙しいのは当たり前です。

七海の仕事は、かぐちやんが全部引き継いでくれているので、私は善がもう少し大きくなるまでは

家事に従事し、しばらくしたらユニオンに復帰する事になっています。

神聖先輩がキチンとそのような人材へのユニオン側の対応をしつかりしてくれているお陰で、現在はこのような生活をおくれています。

話が逸れましたね。狂さんの事です。ええ、忙しいのはわかるんですよ。ですけどね……

もう少し、私へのサービスとでもいうのでしょうか。『ハリコケーション』をとつて貰いたいなーなんて。

わかつてます。我僕だというのはわかつてゐるんです。でもね。お

風呂入つてご飯食べたらそのまま

食卓で寝る事ないじやないですか。知つてます？ 私が念動で毎日ベッドまで運んでるんですよ。

それで朝起きたら私に「おはよつ」といい、お風呂に籠つて二十分ぐらいしたらキッチリとした格好で出でてきます。

ええ、狂さん。お風呂場にスーツを置いておくんですよ。勿論、頼まれて私が置いてるんですけどね。

新婚当初からそうなので、私が折角練習したネクタイ結びの技術も未だに日の光を浴びてません。

そして、狂さんは朝ごはんを食べません。煙草を一本吸つたらお弁当を持つて「いつてきます」といい、出ていつちゃいます。

いいんですね。いいんですね。煙草ぐらい吸つたって。善が居る前では絶対に吸いませんし。私の傍で吸う時も絶対に許可をとり、

窓の傍か、換気扇の下で吸うんですよ。私が言いたいのはそういうやなくてですね。私の作った朝ごはんを隣には食べてはまどりですかと。

我僕ですね。仕事に支障が出ちやうから食べないんですね。いいんです。お弁当は全部食べてくれますし。

そしてお昼頃ですかね。ユニークンにも当然お昼の休憩はあります。その時間を見計らつて私は狂さんにメールを出します。

電話はしません。話したい事がいっぱいありますし。迷惑でしうしね。メールの内容は簡単なものです。

今日のお昼はどうでした？ とか晩御飯何か食べたいものありますか？ とかそういう内容。

でもあまり返事は返つてきません。お昼はお昼で部下の相談に乗つたり、陸人さんや時雨さんに何処かへ拉致されてしまつようですが

から。

「話しながらでもメールを返せると悪いのですが、狂さんはそういう事をあまりしません。

話す時はどんなにくだらない話題でも会話に集中する人なんです。そんな所も大好きなんですけどね。

でもですね。その会話すらどんどん減っている私はどうすればいいんでしょうね。馬鹿。

ああ、狂さんとの生活を話そうとしたらいたら愚痴ばっかりになっちゃいましたね。はい、すいません。

「……と、いろんな感じなのですが、どうでしょうか?」

私は今まで喋ってきた事を眼前の一人 遥緋先輩と命先輩にそう聞いてみました。

遥緋先輩と命先輩は私と同じくもう結婚して子供まで居ます。子供達は現在少し離れたリビングで楽しそうに遊んでいますね。

兄弟がいないウチの善は蒼華ちゃんや莉那ちゃんや煉次君や灼汰君と遊べるのがとても嬉しいらしく、いつも以上にはしゃいでます。そんな善を優しく見守る莉那ちゃん。兎に角暴れまくる蒼華ちゃん。流されるままの煉次君。一人テレビでやつてるアニメに夢中な灼汰君。

そんな微笑ましい日常の風景を見ていると、まずは命先輩が口を開きました。

死罪六神の頃から狂さんの事を知っているので、この中では一番狂さんの事に詳しいのです。

「狂ちゃんもなんというか……相変わらずとこつか。うん、秦ちゃんの意見は痛い程わかるよ。

ウチだってそうだもん。蒼ちゃんなんかも、私や子供達の事ずっと放置でさ。

もう仕事と結婚しやがれバカヤローって感じなのね。休みなんかあつてもないようなものだし。

最後に家族全員で晩御飯食べたのって、もう半年以上前な気がするよ」

流石にそれは壮絶な氣がします。私だつたら悲しみのあまり、変な宗教に入っちゃいそうです。

まあ……ユーロンの長ですからね。たつた数年でここまで組織拡大をした蒼一さんは本当に凄いと思います。

ウチの父も、蒼一さんの協力要請を頼まれた時に完全に呑まれてましたからね。私なんか、緊張しそぎて次の日熱を出しちゃいましたし。

そんな命さんの壮絶な語りに、私は少し気分が楽になった。上には上が居るつて事ですね。

だが、遙緋先輩はなんとも曖昧で幸せそうな笑顔を浮かべながら、「ウチはそうでもないかなあ。共働きだけど、莉王さんも私も戦闘専門だから、一週間に一回ぐらいしかこいつやって、本部にこないしね。

だからどちらか一人は四条に居るから子供達の世話はできるし、何より莉王さんは家族の為なら仕事を物凄い勢いで完璧に終わらせる人だからさ。

すれ違いとかミニニュース不足ってはそんなに感じた事はないね。夜も四人で一緒に寝る日もあるし」

遙緋先輩を羨ましそうな目で見る私と命先輩。だが、それはあの四条莉王さんだからこそ可能な事なのです。

莉王さんの事は子供の頃から知っています。人格以外は歴代の四条でも最高の男と、褒めてるんだだけなしてるんだかわからない風評もよく耳にしました。

「つむかさ。奏ちゃんもいもーとも浮氣とかちやんと氣をつけてる?  
蒼ちゃんもまさかしないだろ?」

思つていただけどあの人結構流れやすいからね。この前なんかキヤバ嬢の名刺もつてたんだよー!」

「あ、それウチもあつた。ユーニオンの神璽君主催の接待に参加した  
ら無理やりとか、言い訳してたけどさ。

無理やりなのに、財布の中に名刺入つてたんだよ。そんな無理や  
り渡していくような女の子の前で財布なんか取り出すかな?」

「うわ。莉王ちゃんもやっぱ男なんだねー」

「やついえば私……そんなの全く確認した覚えがありません……」

「確認した方がいいよ。それでさー。郁人君締め上げたら、その莉  
王さんに名刺渡した女凄い巨乳だつたらしいのよ。

何それ。私じゃやつぱり不満つてわけ? つていついたらね。普通  
そこはすぐに否定するじやん?

間が空いたのよ。それも三秒ぐらいー。あんまりにもムカついた  
から、三日ぐらい無視してやつたけどさ」

遥緋先輩の胸は確かに出ているとは言い難いです。今みたいな体  
のラインがでるインナーを着ていれば尚更です。

私と命先輩は大体同じくらいでしょう。そこまで大きくはないが、  
無いというわけではない。女にとつてはかなりの問題ですが。

私がらしてみれば、かえつて遥緋先輩のような細身の体型が羨ま  
しかつた。最近、子育てしかしていない所為か、前よりもお腹が少  
し出でてきているんですね。

「まあ、こもーと落ち着いて。どこにだつて需要はあるもんだし」

「やつですよ。貧乳はステータスなんですよ」

私達がそうフォローしますが、段々と遙緋先輩の田が据わつてきましたので、私は話題を変える事にしました。

「そつにえば……もう一つ相談したい事があるんですけど」

と私が先輩達に言つた瞬間、莉那ちゃんが涙目でこりの部屋に飛び込んできました。可愛いですね。

「お、おかあさん。蒼華ちゃんが……蒼華ちゃんがあ……」

何かを訴えたいのだが、それを言つのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしたまま喋らない莉那ちゃん。

遙緋先輩がどうしたの？ と心配そうな顔で言つも、顔を伏せて何も言いません。

そして、命先輩の表情がひきつり、立ち上がりとした時です。

「やつべ。これ、すつじくやばーい。ほら、お前らも見ろつて」

およそ女の子とは思えない口調の蒼華ちゃんの声が聞こえました。どうやら、廊下にいるようです。

私は念動で戸を開けて、何をしているかを見ました。すると、そこでは蒼華ちゃんが善と煉次君にこ本を読んでくれてるようです。

ですが……その本が問題でした。そして、それこそが私のこれらとの相談内容の物だったのです。

私の次に気にづいたのは、命先輩でした。すると、徐々に顔

を赤くしながら命先輩は口を開き、

「蒼華ああッ！」

と怒鳴り声を発しました。

それから二十分、じつたりと蒼華ちゃんは絞られ、死にそうな顔で子供達が遊んでいた部屋へと帰っていました。

ちなみに、今子供達はおやつを食べています。蒼華ちゃんは罰として、命先輩に半分食べられてしましましたが。

……おっと、莉那ちゃんの泣声が聞こえますね。多分、蒼華ちゃんがもぎ取ろうとしているのでしょうか。

再び命先輩のカミナリが落ちました。おっと蒼華ちゃん泣いてます。泣いてます。煉次君がかばつてます。美しきかな姉弟愛。

「全く……！ 何であんな子になっちゃったのかしら」

「楽しそうでいいじゃない。アレだけ元氣がある子もある意味羨ましいよ」

「そうですよ。ウチの善なんか、幼稚園のお泊り会にも緊張して参加できない子だったんですから」

すると命先輩、疲れたように再び座ると、

「蒼華はそんなの全くないけどね。あの年で、もう近所の高学年の

子と混ざって野球やつてるんだから。

本当に、蒼華だけは将来が恐ろしくて堪らない。まだ小学校に上がつたばかりのこと

わかります。わかりますよその気持ち。子供つて本当に成長が早いですね。うん。うん。

と、私が一人頷いていると遙緋先輩は例の本をペラペラとめくらながら、信じられないというような顔をしていた。  
そうなんですか……これが、狂さんの帰りが遅い事に続く私の悩みなんです。

「これ……H口本だよね？ しかも、漫|ひつぐの」

遙緋先輩の言葉に私は立ち上がると、奥の狂さんの部屋に行き、蒼華ちゃん達が開けたであるづクローゼットにて

意識を集中。念動の力を使い、そこに収納されていた全てのH口本を、遙緋先輩達が居る部屋に持つていった。

その数、約数百冊。何時の間にこんなものをこんなに集めたのでしょうか？ 私はずっと家にいますのにね。

「凄いね……これ」

「全部狂ちゃんの部屋にあつたの？」

「はい……これは、どうしたらいいのでしょうか？ 狂さんも男子ですか……。この辺に興味はあります。思っています。

無理に規制をするのは出来ればしたくないのですが……この量は流石に……。

多分、全てが狂さんの所有物なのではないと思います。面倒見の良い人ですから、誰かのを隠してあげてるのかもしれませんし

改めて見返してみると物凄い量です。しかも、ジャンルが様々。年上、年下、人妻、女子高生、中には流石に警察に捕まってしまうんじゃないかなあ……なんて思つてしまつ程のモノがあります。

思い返してみれば、狂さんつて結構エッチな方なんですね。昔のバレンタインとか、お見合いの時とか……すると、暫くじつと本を読んでいた遙緋先輩が突然顔を上げ、

「私だつたら全部捨てるね！」

と言いました。ちなみに、遙緋先輩が読んでいた本は巨乳人妻狩りという本です。ああ、嫉妬ですか。

命先輩は腕を組んで何かジッと考え込んでいますね。何を考えているのでしょうか。

そのまま沈黙が五分ほど続いた頃合いでしょうか、今度は命先輩がいきなり顔を上げ、

「良い事思いついた！ 私の式神にちょっと任せてみなよ

「はあ……」

「何をするの？」

「（）のH日本の山を購入者の下に返すんだよ。私の式神ならきっと出来る」

そういうえば最近、忘れがちなのですが、命先輩つて物凄い式神を使えるんですね。

蒼一さんがユニオンを動かしているので、夫婦共働きになると、

子育ては出来なくなっちゃいます。

だから、命先輩はユニーク側でも最高峰の式神使いなのに、ユニークには所属してないんですね。

そして、命先輩はエロ本の山に軽く触ると、

『購入者の下に戻れ』

と口にした。すると、エロ本の山達が神々しく輝きました。シユールすぎです。遥緋先輩はもう笑っています。

そして、ドカンッと轟音を立てて部屋の壁を容赦なく破壊し、エロ本達はユニークの本部へと飛んでいきました。

「あー……そ、そろそろ晩御飯の支度しなきやね。う、うん。いつも」と。後よりしぐ

「ちょ！ そんな殺生な！」

「てゆーか壁直してくださいよー。ウチ、最近財政が厳しいんですよからあー……」

私が涙田でそう言つと、遥緋先輩が一瞬で輪廻転生の力を使って、壁を元通りに復元してくれました。

流石です！ その間にもう命先輩は台所へと逃げてしまつたようです。何て、無責任な。

ですが、遥緋先輩に台所を任せせるよりは百倍安心できます。命先輩つてお料理が凄い上手なんですね。

私と遥緋先輩は一度顔を見合せると、

「……行きましょつか

「最高に気乗りしないけどね……」

ユニーク本部まで私達が走つていいくと、パッと見た感じでは相変わらず莊厳な建物でした。

ですが、窓ガラスが幾つか割れています。何やら、悲鳴のような声も聞こえた気がします。

冷や汗を浮かべながら、本部へ入つていいく私達。今日は隊員の方があまり多くないようで、閑散としています。

そういえば、この前に協会と小さな小競り合いがあつたんでしたね。その埋め合わせの休暇でしょうか。

「狂さんのオフィスは確か……五階だったわよね？」

「は、はい。五階の一一番奥の部屋です」

被害状況を確かめる為に、階段を使って一階づつチェックしていく事にしました。一階は特に異状は無いようで  
続いて二階へ。確か、ここは情報課の一部があつたような気がします。慎重に一部屋一部屋回つて行くと、

「うう……」

半ば予想は出来ていましたが、陸人さんが本に埋もれて倒れています。貧乳やら幼い系が好きなんですか。はい。

テーブルを見ると、コーヒーカップが三つあります。ひとつ、詩

歌さんと梨香ちゃんも一緒に居たのでしょうか。

「これは……何時ものお決まりのパターンね」

「ですね。陸人さんはこれだから陸人さん何ですよね」

そのまま私達は部屋を出て三階へ。陸人さんだから大丈夫でしょうとの判断からです。見捨てたわけではございません。

三階には特に異状は無いみたいでした。皆さん真面目にお仕事に取り組んでいらっしゃっています。ご苦労様です。

そのまま歩いていると、休憩所で律さんと時雨さんが一人で和やかに話し合つてます。流石前年度ユニオンベスト夫婦ですね。

「む。奏と遙緋じゃないか。珍しい組み合わせだね。何があったのかい？」

「いえー……ちょっと、パトロールを

遙緋先輩……

「怪しいな。昔から遙緋は嘘をつく時は、わけがわからぬ事を言いい出すんだよね。さ、僕に言つて見なさい。

今なら怒らないし、何だつたらその罪を陸人さんと蒼威さんに被せる協力だってするよ」

「もう！ 何時までも子供も扱いしないでよー！」

いや、ツッコむべき所はそこなんでしょうか遙緋先輩。と、口ことはとても出せないので心中で呟いていると、

一冊の本がフラフラとこちらへと飛んできた。そして、時雨さん

の頭の上辺りまでくると、ぽとっと時雨さんの膝の上に落ちました。タイトルは「〇」緊縛特集」時雨さんの顔から笑顔が消えました。逆に、律さんは恐い位の笑顔を作っています。

「な、何だこれは！？ ま、また陸人さんと蒼威さんの仕業か！ 全くもう… 怒ってこなきや！」

わざとらしく声を上げ立ち上がったとした時雨さんの服を律さんが相変わらずの笑顔で掴みます。そして

「遙緋。時雨が嘘をつく時の癖を知っているかい？」

「まず、お父さんか陸人さんに罪を着せようとします」

律さんはそのまま体を巧みに入れ替え、時雨さんを羽交い絞めにします。とても、痛そうですが私も狂さんにはあんな事をされてみたいと思ってしまいます。……私も変態さんなんでしょうかね。

「時雨。夫婦会議だ。しっかり話し合おうつな」

「な、何で… わざ… わざ隣の県まで買いに行つて… データ化したら狂に押し付けたのに…」

時雨さんはそのまま近くにあつた空き会議室へと連れ込まれてしました。

遙緋先輩と一人でそのまま暫く耳を澄ましていました

「時雨、言つたよな。私はお前しか見ない。だから、お前も私だけを見ていろと！」

大体いい年してなんなんだ君は。こんな盛りのついたウチの弟が買つような本をのこのこと買いやがつて。

それでもお前は2児の父親かい？ 全く、私を幻滅させてくれるなよ。この「阿呆が！」

「「」、「めんなさい……」

といつお一人のやり取りが聞こえました。それを聞いて遙緋先輩はフツと笑うと、

「時雨ちゃんも段々陸人さんと似てきたね……昔はあんなキャラじやなかつたんだけどなあ」

「ですね。なんだかんだって仲良いですから……根本が似てらっしゃるのではないでしょつか」

そんなやり取りをかわしながら、四階に上ると廊下に十字架が立つていました。しかも神璽先輩が架刑にされています。

これもいつも通りの事なので、私達は当然の如くスルー。

「ちょおおおッ！？ 見捨てないでよー！」

と声が聞こえてきたので、助けてあげようかと思いましたが、遙緋先輩の「甘やかすとつけあがる」という言葉に妙に納得してしまい、五階へ。ついに狂さんのオフィスがある階です！ お願いですから、百番位であつてください。

私は怒りませんから。どんな狂さんだつて受け入れますから。と、願いを込めながら五階に辿り着きました。

「何も……無いわね」

「ええ……オフィスへ行つて見ましょつか」

そーっと何故か足音を立てずに、狂さんのオフィスのドアをノックします。

「か、奏です」

「ん？ どうした。入つてくれ」

許可が出たので、ドアを開けて中に入ると驚いた顔をしている狂さんの顔が見えました。きやあ、カッコいいです。

遥緋先輩は気を使つていてるのか、ドアの外で待つていてくれてるようです。……きっと違うと思いますが、そうしておきます。

狂さんは嬉しいのか、よくわからないのか曖昧な笑顔を浮かべています。

「で、どうした？」

「い、いえ……そ、最近お話してないので、つ、つに着てしまつてしまつて……」迷惑でしたよね

「あー……ま、偶にはいいんじゃないかな。俺だつて、最近忙しくてお前の事構つてやれてないしね。

それも多分、今までだから安心してくれ。教会との小競り合いもやつと事後処理が終わつた事だし。

しばらくは定時上がりにさせて貰えるからだ。後給料は期待しつけよ！ 残業手当がガツポリでるからさー！」

子供のように笑う狂さん。それだけで、これまで生きてこて良か

つたと思える程心が温かくなりました。

工口本？ 別に何千冊持つていようがどうでもいいです。私はそ

んな狂さんを心から愛しているんでしたから。

すると、不意に狂さんが私を抱きしめてくれました。私も、手を回して思い切り甘えます。偶にはいいでしょ。

暫く頭を撫でられて至福の状態に入っていると、突然狂さんは思

に困ったよう」話しが始めました。

「そういや、本部内に今、工口本がバラまかれる事件が起きたらしい。どうせ、犯人は陸人か蒼威か神璽。

……後は、如等の悪乗りには巻き込まれた有り難い変なモノがいっぱい落ちてるから見ちゃ駄目だぞ」

まあ、いいです。購入者の下に帰つたみたいですか? 皆さん、工口本はちゃんとマナーを守つて処分しましょうね。

それから暫くした後、お義姉様が赤ちゃんを出産したと聞いたので、私は遙緋先輩と命先輩の休みが偶々重なった日に全員で祝福しに行きました。お義姉様は自宅出産をなさつたそうです。これは、八神の習慣だとか何とか。

ちなみに、女の子です。名前は緋緒ちゃん。少し変わった名前ですね。善も変わっているといえば変わっていますが。

「お義姉様。お疲れ様でした。とても、大変だったでしょ？」

「ああ……うん。何か、嫌がらせみたいのもあったから、結構動搖しちゃつて焦つたわ」

「嫌がらせ？」

「うん。僕らちは初出産で緊張しまくってると話の間に、大量の工口本を私が寝てる間に部屋にバラまいた馬鹿が居るのよ。正宗がそれに兎に角怒っちゃつてね。陸人と蒼威に向かって斬りかかっちゃつてさ。結局、アリバイがあつたから

三人とも病院送り位で住んだんだから良かつたんだけどね。でも、笑っちゃうのがさ。幾つかの工口本に見覚えがあつてさ。

その中にまだ私が死罪六神だった頃に、狂ちゃんに買つてあげた工口本があつたのよ。アレには、流石に笑つたわね。懐かしいわあ」

「あ……あははははは。そ、それは奇怪なお話ですね」

「で、でもまあ！ 無事に出産できた良かつたじゃないですか！」

「そうですよ！ もうそんな事はパッパと忘れて、子供の事考えてあげましょっよー」

私達の必死な表情に少し驚きつつもお義姉様は綺麗な笑顔を作り、「そうね。……でも、何時か犯人がわかつたらハツ裂きにしてやるわ。その時は、三人も協力してね」

そう笑いながら言いました。じょ、「冗談であると信じたいです。  
ああ、狂さん……私、どうしたらいいのでしょうか？」

## Days24・六道紡（前書き）

一月ぶりのDaysですね。

多分、次もDaysで由加の話になるんじゃないかな。  
これがまた長くてですね。

紡の倍以上の文字数があるんですね……

ちょっと洒落にならないくらい長いのです。

また投稿頻度が激減しますが。

できればお付き合いいただければ幸いです。

亜矢子ちゃんが由加になつて、勇一君が神靈になつた後、私はしばらく六道を離れた。

裏切つたのは身内である継人。あの男が、自身の研究を進める為に私と亜矢子ちゃんと勇一君を引き離したのだ。

ガルム　おじいちゃんにそれを話したら、上手くやると言つていたので、私はそれからおじいちゃんと一緒に世界中で研究していった。

だから、知らなかつた。一人が一課に預けられて、亜矢子ちゃんは軟禁状態にされて、

勇一君は記憶を消されて悠々自適に他の女の子とエッチな事ばかりしていたなんて知らなかつた。最低。

「ふうん。この子も被験者だつたんだね。ま、アダムとイヴは二人だつたんだ。今更いいでしょ」

そして、ロキが二人を新たな種として迎え入れようとしていたのを知つたのは、かなり後だつた。

ロキ達の目的は、世界を滅ぼすと言つていたが、結論から言えば人間の支配からの脱却。

そして、あの二人でまた人間を一から創りなおすのが目的と言えるだろう。それを知つた時に浮かんだ感情は、嫉妬。

亜矢子ちゃんじゃなくて、私でも。

と我ながら恥ずかしい持論を展開していったわけだ。私が戒君との時の討伐についていつたのも

あの一人だけの世界が気にくわなかつた。それだけ。三人だつたのに、いつの間にか一人という寂しさ。

我ながらくだらない。そして、神々の黄昏事件でロキを撃破したのを見た時、私はあの一人の絆を感じてしまった。

もう、私が入る場所はない。

幼い頃の馬鹿だつた私は、あの一人から自分の記憶を吸い出してしまつたので自業自得なのだが。

アレだ。恋する人間なんてものは、皆精神病にかかつたかの如く、通常の思考じやいられないんだよね。うん。

だが、それ以上に悲しい事があつた。おじいちゃんの記憶を継承した時に、きっとおじいちゃんが誰かのを継承したのだろう。

結晶計画の全てを知つてしまつた。とても悲しかつた。そして、怒りが湧いた。世の中にこんな腹立たしい事があつていいのかと思つてしまふ程。

それを知ると、頭の中から私達以外の被験者の叫び声、鳴き声。全てが耳にこびりついて離れなくなつた。

私の頭なら、その記憶だけ消し去る事も出来ただろう。だけど、それは私も彼らと同類になるという事である。

それだけは嫌だつた。だから、私はその声に一人耐えるようにして、毎日を呆然と過ごすようになつた。

どうすれば、彼らに償えるのだろう。どうすれば、彼らの無念を晴らす事が出来るのだろう。と心の奥底で考えながら。

誰か、誰か助けて。

頼れる人間は居なかつた。世界で一番の味方だつた友達も居ない。

親も死んでいる。六道内で唯一信頼していたおじいちゃんも死んだ。

私は日々を自堕落に過ごし、おじいちゃんが残した研究を適当に

進める毎日。そんなある日、一人の鬼神が私を訪ねてきた。

それが

風神の鬼神の風早碧ちゃん。彼女の存在は知っていた。

天美運命が命と出会い少し前だろうか、後だろうか。

詳しくは曖昧になってしまったが、その頃に九尾の狐を脱退した

鬼神。その彼女が尋ねてきた理由は、簡単なもの。

「……ガルムに頼まれたの。……もし、世界が無くなつてなかつたら紡を助けてやってくれつて」

「それだけで、私の所に？」

「……私、何でも屋だもん。報酬は貰つてあるからね。……紡。何でも私を頼つて。……私、頑張るから」

おじいちゃんめ。これを見越して、私にあの時全てを継承させたんだな。全く、優しいんだか厳しいんだか。

おじいちゃんは科学者失格だ。でも、ありがとう。本当に嬉しいよ。やっぱり、おじいちゃん大好き。

そして、私の中で何かが燃え上がった。おじいちゃんの意思を継ぐわけじゃない。私自身の手で、思いで、結晶計画の犠牲者に出来る事をはじめた。

「……は？……大悪鬼を討伐する？」

しばらく一緒に過ごした後、碧ちゃんに計画の一端を説明すると、彼女は珍しく驚いたような顔で私を見た。おじいちゃんの記憶によると、

結晶を移植する上で一番重要なのが、結晶が集まつて出来た大悪

鬼の結晶を移植する事である。

やはり、人間だけでは反意思を制御出来ないらしい。大悪鬼と上手く共存し、作業分担する事が大切だという。

亜矢子ちゃんと勇一君の場合は、九尾の狐の力が異常に消耗していたので、本当に僅かな力しか使えなかつたのだが、二人は戦闘を重ね、反意思を少しづつ蓄えていき、神代事件の時に覚醒したという事だ。

私もそれ相応の覚悟をしなければならない。だから、血らの手で大悪鬼を倒し、結晶に戻したそれを移植しようと思つた。

「……私の父は、純正悪鬼だから駄目だよ。……それに、風神程度じゃ九尾には遙かに劣つちやう」

「不羨な質問だつたね。確かに、九尾の狐はアジア最強の悪鬼だとすれば、西洋しかないか」

「……バジリスク」

「え？」

「……最強の蛇の悪鬼、バジリスクなら居る。……確か、二十年前に会つた事があるから、まだ生きてるかも」

「それだ！ よし、早速準備をしようか」

「……一人で、やるの？ ……紡は式神使えたつけ？」

「今ならまだ使える。ただね、結晶を移植すると使えなくなるみたいなんだ。結晶の意思が自分の根源に何か影響を与えるんだろうね。上手く、呼び寄せる事が出来ないらし

「……これは、一課の研究で

結果が出てるよ。うん。だから、亞矢子ちゃんは武器一つでもあんなに強く訓練されているわけだけだね」

「……そつなんだ。ある意味、諸刃の剣といつべきかも」

「式神が強ければそうだね。千島蒼威氏や戒君何かは逆に弱くなっちゃうんじゃないかな。

だけど、私の式神はそうでもない。一応、十名家としては恥ずかしくない程度の能力を持つていて、

莉王君や律ちゃんには及ばないだろうね。あの一人は戒君さえいなければ、十名家最強になれたんじゃないかな」

「……十名家ってやつぱりまだあつたんだ」

「まだ、存在してるよ。顔ぶれは多少変わったけどね。最近ではハ頭が消えて、あの八神が入ってきたんだったかな」

「……緋眼か。……そういえば、私の何でも屋ルートでの知り合いなんだけど。十名家の人人が居たよ。

……最近フラフラとこっちの方に来たんだけど、やっぱ腕がいいから結構人気があがってるね」

「ふむ……その子も何でも屋なのかい？」

「……ん。彼は、用心棒？ みたいな感じかな。戦闘ばっかの傭兵みたいな感じ」

「うん。それではその子に早速会いに行つてみようか」

碧ちゃんの案内に従つて、どうみても良心的じやない酒場へと向かつた。何というのだろう。物凄い匂いだ。

酒、香水、加齢臭、火薬、油、様々なモノを集めて、それを火で温めた時に出た蒸氣のよつた匂いだ。

それなりに育ちの良い私が顔を顰めて歩く中、碧ちゃんは平気な顔で奥の方まで歩いていく。そして、その奥で私は颯太君と久しぶりの再会をした。

六道と五月は同じ十名家だ。私も被験者となる前に何回か会つた。いやはや、あの氣弱そうな男の子が中々に精悍な男になつていてるじゃないか。

碧ちゃんと私が自己紹介すると、彼は無表情だった顔を様々な形に変化させ、

「お前が……あの六道の紡？」

「そうだよ。君のエキセントリックなお姉様方は元氣かい？ それにも、五月待望の長男様がこんな場所に居るとは驚きだね」

「もう三年会つてない。俺、ほぼ五月から出家しているみたいなもの。姉や妹に任せておけば  
あの家は安泰。無理に長男が居座つている必要無い。だから、ここにいる」

「かくいう私も六道は完全に放置だがね。頭首なんて名ばかりさ」

挨拶もそこそこに、私は早速本題を切り出した。バジリスク討伐したい。そんな無謀でどうでもいい依頼を颯太君は真面目に聞いてくれた。

真摯な男だ。そして、愚かだ。こんな自己満足でしかない依頼を彼は大した見返りもなく、快諾したのだ。

最初は何で彼が受けたのかわからなかつた。もしかしたら、遊ばれているのかもしれない。そんな思いが浮かぶも、彼の目は真剣そのもの。

後になつてわかれれば、彼はこの時既に私に恋していたらしい。彼の女性の好みがいまいちよくわからない。

今でこそマシにはなつているが、あの頃の私は髪は伸ばしつぱなし。肌の状態も悪い。服なんて適当に見繕つたものに白衣を着ているだけ。

そんな女に魅力を感じるつてのはアレか。もしかしてB専なのか。私は自分でそこまで自分の容姿は悪いとは思わない。

あの勇一君にキスを求められた程だぞ。うん。それに、小さい頃の六道紡ちゃんの愛らしさは研究員の間でも有名だつたらしいし。

……話が逸れた。私の悪い癖の一つだ。そんなわけで、私と颯太君と碧ちゃんはバジリスク討伐の為にヨーロッパの奥地へと向かった。

言葉でいうのは簡単だが、あの大悪鬼を倒すのに私達は数ヶ月かかつた。そこにはもう、長編小説が上下巻執筆出来るほどのロマンや冒険がつまっていたのだが、これは割愛させて頂こう。正直に言つと、十八回死に掛けた。私はこの三人の中じゃ一番弱いしね。

そして、私はバジリスクの本体となつていた一際異彩な輝きを放つ結晶を手に入れた。無論、他の結晶も回収した。

碧ちゃんとはそこで一旦別れた。何やら、どうしても日本に行きたくないらしい。嫌な奴がどうのこうのと言つていたが詮索するのも無粋だろう。

私と颯太君は結晶を移植する為に、六道特区へと向かい、結晶を移植する手術の準備を始めた。

すると、何処から私が帰ってきた情報を得たのか、我らが十文字

の五兄妹が六道特区を訪ねて来た。

「久しぶりだね。紡」

戒君は変わり果てていた。あのヘタレだった男の子が、複雑な雰囲気を纏っていた。言うならば、憎悪と愛。曖昧だが、そんな感じ。四つ子も相変わらずだったが、何処か大人びている。原因はすぐわかった。過去に一度会った時に居なくて、現在会った時に居る人。

彼女が居ない。だが、その場所にはもう別の人間が居る。当たり前の事だが、ひどく悲しい。そして、嬉しくもある。  
どうせなら、二人一緒に居て欲しかったね。それならば私は心から笑顔で祝福の言葉を投げかけたであろう。

「やあ、久しぶり。早速だけど、不躾な事を聞いてもいいかな？」

「全て話そつ……あの時、手伝つて貰つた時には殆ど話してなかつたしな」

戒君の目的は最初からそれだったのだろう。私は兼ねてより気になつていた彼女の存在と反逆の十文字件の全てを聞いた。

中でも特筆すべきは彼女　希ちゃんの事だろう。あのお爺ちゃんも興味を示していたほどだ。

やはり普通なわけがなかつた。六道に彼女の存在が知れていたら、十文字と六道の抗争にまで発展していたのかもしれない。

私だって希ちゃんの真実を聞いた時には、胸が震えた。だが、戒君にとつては希ちゃんは何処まで行つても希ちゃん。それでしかない。

彼女の存在も、境遇も、何もかもを気にせずに、ただ愛し続けた男。恋は盲目とはやはり上手い事を言つてゐるものだ。

「成る程。概ねの事情は理解できたよ。それにしても、君達は結構物騒な事を考えて居たんだね。

お爺ちゃんを介して、ラグナロクを操り。最終的にはコグドラシルを奪うつもりだったんだろう?

確かにあの時何で私が呼ばれたんだろう? とは思つていたけど、その為だったのか

「ああ。だがな あの子が、楽しそうに笑うんだ。友達がいっぱい出来たって。今日は誰と何をしたとか、明日は誰と何をするとか。あの子は何も知らずに、世界を楽しんでいる。そんなあの子を見ていたら……踏みどじまつてしまつた」

「ある意味では最高の判断だったね。アレを実行してたら、私は戒君の敵に回つていただろうし。

おじいちゃんは終焉を望んでいた。だが、私は終焉を望んではない。何もない世界なんて、もはや研究する価値もない。

何がが。悪い事も良い事があるから、世界は楽しいんだ。破壊なんてされちゃ、良い迷惑だよ

私がそう言つと、戒君は黙つてしまう。私も特に話を進めようと思わなかつた。やがて、彼は決心したような顔をすると、時は、力を貸してくれるか?」

「それでも、何時かあの子が希を求める日が来るだろう?……。その時は、力を貸してくれるか?」

「復讐?」

私は戒君に全てを話した。六道とのこの国の一のトップによつて行われていた結晶計画の真実。

その計画に携わつっていた人物の現状と所在地を調べる事に苦労しているといふ事。

どれもこれも、六道の力だけじゃ無理だつた。相手は日本のトップシークレットだ。十文字の力を借りても辿り着けるかどうかわからぬと言つ事も。

その全てを私が話し終えると、戒君は簡単に頷くと、

「わかつた。十文字の全権限を使ってでも調べよう。俺自身、純血の傲慢さにいい加減腹が立つてゐる。

十文字戒の名にかけて、眞実を全て明かし、お前に伝える事を誓う。だから、お前ももしもの時は頼む。

あの子には笑つていて欲しい。泣き顔なんてみたくない。あの子には全てを与えてやりたいんだ」

その言葉に私はしばし呆然とした感覚を覚えた。あの十文字戒がこんな事を言つようになるとは誰が想像できるだろ。

それ程までに愛おしいのだろう。経験の無い私にはわからない。だが、私もいつかはこうなりたい。何となくそんな事を思う。

そこで戒君と別れ、数日後の私の結晶移植手術の少し前だつたか。颯太君は真正面から私を見つめた後に、

「始めて会つた時から、お前がずっと好きだつた。嫌じゃなければ、結婚して欲しい」

最初が緊張をほぐす為の冗談かと思つたよ。あの五月颯太が結婚してくれ？ おいおい、そんなキャラじゃないだろに。

理解できぬままへラヘラ笑つてゐると、今度は抱きしめられた。

……流石に焦つたね。私は恋愛経験なんてゲームや脳内ショミレー

ションだけの

典型的な引きこもり少女だつたわけだしね。ああ。うん。思い返すだけで恥ずかしい。いや、嫌じやなかつたんだ。ただね。顔から火が出そうな心境だつたんだ。

それにしても颯太君。結婚の前に、まずは付き合つてくれじゃないか。君らしいといえば君らしいが。

と、今はこんな冷静であるが、当時の私は相当酷い反応をしてしまつた。

「へ……？ あ、あ？ あの……颯太君？」

「嫌なら拒絶してかまわない」

初心な私にどう拒絶しようと。しばらく黙つて抱きしめられていると、私の胸の中に残つていたとある感情が働き、

私は何時の間にか、颯太君の腕から離れていた。そして見上げると、そこには泣きそうな颯太君の顔。もう、戻れない。

黙つていれば幸せになれたのかもしれない。颯太君は優しいし、強いしね。きっと、私だって大切にしてくれるだろう。

だが、当時の私はどうしても勇一君の事が忘れられなかつた。彼は、最高の男だ。優しく、強く、面白く、私の初恋の人。

二人の絆は知つている。だが、諦めきれない。全てを思い出したら、もしかして私の所に来てくれるかもしれない。

「ごめんね颯太君……今は、君の気持ちに答えを出せない。うん、ごめんね」

「何時か、答えは出るのか？」

「出すよ。君の気持ちに少しでも報いる為にね。だが、まずは結晶

を移植しようと思つ

「さうか……。なら俺、待つ。何時かその田まで、お前の傍で待つ

「……ありがとう。じゃあ、行つてくるね」

それから手術が始まる。移植自体はそう難しくはない。だが、問題はその後だ。私のバジリスクは九尾の狐と違い、力を存在ギリギリまで消耗させていない。そう、移植して私と繋がつた瞬間から、アイツは暴れだしたんだよね。

とても苦しかった。闇が、私を満たしていく感覚。一日中口汚く、バジリスクと罵りあう様は正に獸の如く。

私は全てをぶつけた。バジリスクも全てをぶつけてきた。結果から言わせて貰えば、アイツは私の相棒になつたがね。

今でもうるさいよ。やれ、お前の中は窮屈だの。やれ、颯太君とヤつちまいなだの。余計なお世話である。

「俺、何時でも準備は出来る」

そんな恥ずかしい台詞を、相変わらずの表情でかましてくれる颯太君も颯太君だがね。それでも、彼が居てよかつた。きっと彼が居なくては、私はバジリスクに負けていだらう。辛い時、彼は何時も私を励ましてくれた。

そんな颯太君に、私は勇一君と亜矢子ちゃんの事を全て話した。彼等が知り合いなのは、何となく知っていた。

ショックだらうとは思つたけど、一応全てを話してみた。案の定、ショックだというのがわかる顔をした颯太君は、

「神璽だけはお勧めしない。いや、嫌いなわけじゃない。人間としては良い奴。でも、でも、神璽が好きだなんて……！」

「ほお、珍しく饒舌だね」

「からかうな。……ひひ、だが。お前が良いならそれでいい。お、俺は認めよう」

「可愛いなあ、颯太君は」

「お前には負ける」

そんな日々が続き、再び私と颯太君は碧ちゃんとの会流して、一緒にあの場所へと戻り、それなりに幸せな生活を送っていた。

そして 戒君からついに連絡が着た。助けて欲しい。力をかけて欲しいと。当然の如く、私も動き出す事にした。

亞矢子ちゃんと勇一君については、もはやストーカーと言えるほど情報を集めてある。そのついでにユーランの事も調べはついていた。そして、碧ちゃんが偶に話す雷神の鬼神の件についてもほぼ居場所は知れている。まさか、本名で大学に通っているとは夢にも思っていないだろうね。頭の中でその様々な情報を煮詰めながら計画を立てていると、

颯太君と碧ちゃんが私の方を向き、

「紡。悪巧みをしているな？」

「……また。変な実験をするの？」

……どうして私が考え事をしている=悪巧みになるのだろうか。とまあ、今はそれは置いておこう。あながち間違いでもないし。

とりあえず、ジトツとした視線で私を見ている一人に、まずは染髪料を買ってきて貰おうと思い、私は笑いながら財布を手に取った。



## Days25・森田加（前書き）

少し、読者の皆様にお聞きしたい事があるのですが。  
Daysでファーストコントラクト（死罪六神結成の話）  
を投稿するかでとても迷っています。

一応、話の展開は全部決まつていて。  
全部で六話か五話辺りになると踏んでいるのですが。  
どうしても今更感が漂つてしまつんですよね。  
同じ過去の話で、朱音の話もdaysでやる予定なのですが。  
これはPASTの最終話辺りに欠かせない話なので書きますが。  
ここで死罪六神の話を今更……みたいな。

というわけで、読者様方の意見をお聞きしたいのです。  
評価欄でもメッセージでもキャラ投票のコメント欄  
の何処にでも構いませんので。

読んでやっからさつやと書けよカス

とか

別に読みたくねーよ。

のような意見でも全然構いませんので  
ようしかつたら「」意見の程をよろしくお願ひ致します。

高校を卒業して、すぐに私と神璽は旅立ちの準備を始めた。ガルムの言つていた、六道紡という人間を探す為、そして、私達の本当の親について調べる為。

その為なら 例え、一課の皆だつて敵に回す覚悟があつた。だが、現実は思いがけない方向へと進んでいった。森羅さんや未来さん。他の一課の皆さんといった

一課ぐるみで私と神璽は開放され、それぞれの親元へと旅立つて行く事になった。

……あの時、皆は心配ないと言つていたが國と相当な問題となつたらしい。しばらく、雲隠れしなければならない程に。

それを解決してくれたのが、八神。時雨をはじめとした色々な人達に、私と神璽は救われたのだ。

ありがとう。本当にありがとうございます。この数年間で出来た仲間は最高だった。

未来さんが私の両親の事を調べてくれていたので私は寝台電車で移動しながら、その書類へと手を通していく。

母親の名前は棗文香というらしい。私自身、母親の事は殆ど覚えていない。心の痛みだけは残っているのに、何故か記憶だけがない。こんなにも悲しいというのを覚えていたのに。何で私は辛い記憶の殆ど持つていないのでだろうか。

そんな事を考えていても始まらないので、書類を一枚めくつた。そこを読んで行くと、大体私がどんな境遇で捨てられたのかがわかる。

母、棗文香は十代半ばで当時付き合っていた男との間に私を身ごもつたらしい。だが、男はその責任を逃れる為に金で無理やり解決。

凄い、こんな人間の屑の遺伝子が私にも混じつているんだ。死にたいね。母親はそのまま学校を退学し、アルバイトをしながら私を育てはじめたとの事。

理解ある両親 私からすれば、祖父と祖母。だったのか。私はそれなりに幸福に育てられたらしい。

だが、その後に祖父と祖母が順に病気になつたらしい。その看病と仕事、そして私に追われ、母は日に日に衰弱していく、ついには半ば頭がおかしくなつてしまつたらしい。それに追い討ちをかけるようにして、祖父と祖母が病死。

その時の母の唯一の便りが、当時付き合っていたヤクザの男。

だが、その男も組から横領した金を返済する為に祖母と祖父の保険金狙いの為に近づいただけだった。

だが、それだけで男は赦されなかつた。かなり悪辣な組だつたらしく、詳しくは書いてないが今でもその男は行方不明となつていて。きっと始末されたのだろう。そして、保険金も全ての金も取られた母は、六道の上手い口車にのつて私を売つたと。非常にわかりやすいね。

私の母は、男を見る目が無さ過ぎる。……私も人の事は言えないかも知れないが。そして、一つだけ気になった事がある。

「どうして……私はこんな人に会いたいなんて思つてるんだらう……」

世の中には謎が多くすぎる。

翌朝田を覚まし、目的の駅に降りて更にそこから三十分ぐらい電車に揺られて、私は鳥取県のある町へとやつてきた。

今まで住んでいた都会ではなく、中途半端な開発が成されたどこにでもあるような町だった。

鳥取砂丘というものを一度見てみたかったが、ここからは全く見えない。後で本屋で地図を買ってみよう。

私は未来さんから貰った書類にある、母が今何処へ住んでいるのかを記したメモを見ながら町の中を歩いていく。

同年代の女の子達を見かけるが、どうにも素朴で自分の同級生達と比べると、何かノンビリしそぎな感じもする。

しばらく歩いて行くと、目的の住所附近に辿り着いたようだつた。電柱を見ながら緊張しながら、そして何かよくわからない感情を抱えたまま

私はついにそこを見つけてしまつた。妙にこじんまりとした、自宅を改造した惣菜屋。だが、外装もどちからかといえば微妙。花丸惣菜と書かれた看板の上には、粗末な絵が書かれた紙が貼り付けてある。よくよく見てみると、全部花丸柄だった。店名の由来はこれらしい。

まだ昼前だからか、客の姿は無い。というよりも、この店は儲けが出ているのだろうか？と何故か心配になつてしまつ。

心を落ち着けて、少しずつ惣菜屋へと近づいていく。揚げ物の良い匂いが漂ってきた。そういうえば、昨日から何も食べてない。

恐る恐る中の様子を伺つが、今は姿が見えない。ホッと一息つくと、何か無性に怖くなつてきた。

やつぱり帰らうかな……と思い、私が振り返りうとした時だつた。

「あ、あのー」

心臓が跳ね上がった。相当油断していたのか、背後からの気配に全く気がつかなかつた自分が恨めしい。

緊張しながら、そして何故か高鳴る物を押さえながら私はゆっくりと振り向く。

と、そこには期待した姿は無く、小さな、制服を着た女の子が立つている。今風の中学生だった。

縮毛強制した髪。あどけない顔。何処にでもいそうな、ごく普通の女の子。何だろう? この子。

もしかしたら、ここリピーターなのかもしない。とりあえず、私は何か喋らうとしたが、

「あ、アルバイトの面接に来た方ですか!？」

先に言われた。何を言つてるんだこの子は。私が訝しげな顔をしたのに気づいていないのか、女の子は、

「や、やっと来ました! 花丸惣菜初のアルバイト店員が。これで、ぐっと負担が減る筈。

お姉さん。自給は確かに高く無いです! 午後は死ぬほど忙しいです!

でも! それでも、ここを選んだお姉さんは店舗を見る目があります! 私が保証しますから!」

ちょっと頭の緩い子なのかもしれない。命と似ているといつたらお互いに失礼かも。

一人興奮して勝手に頭の中で話を進めている女の子は、息を荒らげて私の手を掴むと引っ張り始めた。

……この子、結構力が強い。何か格闘技かスポーツをやつしているのかもしれない。私の悪い癖だ。すぐに分析を始めてしまう。

そのまま女の子は脇にあつたドアをバンと開けると、私を店の中

へと引き込み、

「お母さん！ つこに、つににー！」の花丸惣菜にもアルバイト店員がきましたよー！」

お母さん の呼び声がしたすぐ後に、奥の方から沢山の材料を抱えた女性が現れた。

まだ若い。この年頃の娘がいるように見えない。私が半ば予想していた通り、その女性は私の母親。

少しだが、顔を覚えている。何より、匂いというのだろうか。私がそう知覚しているものが過去の母親と確かに重なった気がする。昔よりも明らかに老けたが、それでもまだ若い。細かつた腕は今では普通の太さに戻っている。

それと引き換えに腕にはかなりの筋肉がついたようだった。母親は荷物を置くと、私の方を向き、

「えーーーと……本当に、アルバイト希望の子なの？」

「違います」

「ええっ！？ お姉さん！ お嬢さんだつたんですかー！？」

凄まじく、驚いた顔をする女の子。……もしかして、この子。私の妹なのかな？

馬鹿な子程可愛いとはよく言つが、この子は少し頭にお花が咲きすぎなのではないだろうか。

ただ、アルバイトか。元々、母親がどんな感じで生きていくのかを知りたかつただけなのだ。

話す氣や正体を明かす気は殆ど無い。とりあえず、この調子を含わせてみようと思い、

「でも、アルバイトは探しています。もし良かつたら、後日面接をしてくれませんか？」

「そんなのいいですよー。もつ即決だよねー。お母さんー。」

「ええ……確かに、今は人手が欲しいしね。とりあえず、貴女。名前と連絡先だけ教えて貰えますか？」

母親が私をジッと見つめてくる。多分、私の正体はバレていないだろ。神璽が言うには、子供の頃と今の私は本当に違うらしいし。笑顔が無くなつた……と言われたのには些かショックではあったが。仕方ないじやん。

そして私は少し嫌味の感情を込めて名前を名乗つた。

「棗由加です。よろしくお願いします」

「冬木文香です。」ひらひら娘の美也子です、

「よろしくねー。由加さん」

母と妹は私の正体に気がつかないまま、嬉しそうに微笑んだ。

とりあえず、住む場所を決めなくては。と思ふ、マンションは名義とかが面倒なのでホテルを取つた。

未来さんが一課の予算を少しずつ、少しづつ削つていってお金を沢山貯めてくれてあつたので

ありがたく使わせて貰おう。あの人より、未来さんの方がずっと  
母親らしい。

それで、森羅さんが父親。神靈と私が子供。悪くは無い。森羅さんは本当に良い人だ。

あの人達の子供になる子はきっと幸せだらうなと思いながら、ホテルの一室でベッドに寝転がり、一息つく。  
後で履歴書も書かなくては。といつても、大半は嘘になってしまふが。一課から渡された偽造の住民票を添えれば完璧だらう。そもそも、無理に働く必要なんてないのだ。

「私……何がしたいんだろ」

そんな言葉を発するが、ついに答えは出なかつた。

翌日、もやもやとした気分のまま、ホテルから出て再び花丸惣菜へと向かつた。まだ、開店前のようすで、妙に静かだ。「失礼します」と言い、昨日のドアを開けて入ると、そこには熱心な顔で下ごしらえをしている母の姿。すると、私の存在によつやく気づいたのか、顔を上げ、

「あら、麻さん。おはようございます」

「おはようござります」

「アルバイトの件だけど、昨日連絡したように。短期でなら雇えるんだけど……それでいいかな？」

「ええ、構いません。元々、長期滞在は私の望む所ではないので」

そう。此処に居るわけにはいかない。私には、帰るべき場所があ

る。今は唯、待つしかないが。

「良かつたわあ。じゃあ、よろしくお願ひしますね」

「はい。じつうに、よろしくお願ひします」

それからは、一言で言つなら大変だった。体力や力には自信があつた。実際、母も舌を巻く程の力がある。

ただ……誤算だったのは、此処は惣菜屋だという事。そして、私の料理の腕は壊滅的だという事。

母を少し呆れさせるほどの失敗を幾つかしてしまい、必然的に私は調理よりも接客や力仕事を任されるようになつた。

「こりつしゃいませ!」

「ゆ、由加ちゃん。目が笑つてないわよ…… も、もう少しにこやかにね?」

何時の間にか母は、私の事を由加ちゃんと呼んでいる。どうでもいいけどね。本名じゃないし。

そして、「めんなさい。

「はい……」

地味にショックだつた。お密さんの一人に、冗談交じりではあるが、睨み殺されるかと思ったと言われてしまつた。

花丸惣菜はこの地域では微妙に有名らしく、昼過ぎから夕方にかけては戦場のような忙しさである。

気がつけば、既に時刻は六時半。ようやく客足も減り始め、私は数時間ぶりの休憩をようやく満喫していた。

「由加ちゃん、お疲れ様。大変だったでしょ？」

「はい。久しぶりに、疲れました」

「疲れている所を申し訳ないけど……一つ頼まれてくれないかな？」

「大丈夫です」

「ありがとうございます。助かるわあ。実はね、美也子を迎えて欲しいの。今日は部活が長い日ですね。」

「帰り道は暗いところばかりだし、部活の友達は皆方向違つらしくて……最近物騒だから、心配でして」

「わかりました。地図さえ貰えれば、行つてきます」

「あ、わかった」

私は、母から美也子の通つている学校までの地図を受け取り、花丸惣菜を後にしてた。……愛されているね。あの子。

私の事は金で売つたのにね。……だからこそかもしれない。どう

ちみち、私が捨てられた事実には変わらない。

昔は酷く悲しかつたが、捨てられて結晶を移植されて、私は神靈を初めとする皆と出会えた。それがあるから良い。

そんな事を考えながら歩いていると、眼前に中学校が見えた。若干緊張しながら中に入つてみると

「由加さん？」

心臓が飛び出るかと思った！ 門を入つてすぐの場所にまさか美

セ子が居るなんて、誰が気づくだらう。

「……頼まれて、迎えにきたよ」

「わあー、ありがと!!」  
「ます。」

嬉しそうに私の周りを飛び跳ねる美也子。やつぱり、命と似ている。良い意味で、子供っぽい。  
そのまま私と美也子は会話をしながら、夜道を歩いてこゝのだが、この子。好奇心が強い子なのか、バンバンと質問を飛ばしてくれる。もつね、この子命の妹で良いよ。私は似ても似つかない。

「由加さんは、何処から着たんですか? 地元の人じゃないっぽいですけど」

「東京だよ。ワケあって、この街にきたの」

とか。

「年齢は幾つなんですか?」

「19だよ」

とか。

「どうなお友達が居るんですか?」

「どうしようもない女たらしとか、激甘党とか、バカップルとか。口っこコンだつたりシステムだつたりも。」

……よくよく考えてみれば、私にはまともな友達が一人もいない。まともなのは、郁人と英輔ぐらいかも」

とか。不覚にも、美也子のペースに釣られてかなりの情報を喋らされてしまった。うん、気を引き締めなきや。

そして、美也子を家まで送り届けて、母に誘われるがままに夕食を「駆走になつてしまふ私。流されやすい。

……ただ、母親の味というモノが感じられた。森羅さんや遙さんが作る類の味。私にはあの味は出せない。

それから 暫く穏やかで、忙しい時が流れた。朝九時ごろから花丸惣菜に行つて、夜までバイト。

そこで晩御飯を「駆走になつて、ホテルに帰つて寝る。現在、母の旦那。美也子の父は、出張で居ないらしい。

どうやら在宅系の仕事を基本はしているらしく、花丸惣菜は時に二人で、美也子が暇な日は三人でやつてるらしい。

母は、中々良い家庭を築いているようだ。これなら、もつ私は安心して帰る事が出来る。……そう、私は忘れ去られた子。

もう、この世には居ない子。母の記憶にも残っていない子なんだ。棗亞矢子は、もう結晶使い、棗由加なんだ。

「由加ちゃん……？ どうかしたの？」

「いえ、何でもないです。それより、アルバイト期間は何時まででしょつか？」

「え……あ、うん。旦那が一日後位に帰つてくるらしいからさ。それまでで。本当は、もっと雇つてあげたいんだけどね」

「いえ、私ももうこの町には用事が無いので、丁度良いです」

「ううつ……寂しくなるわね」

「…………美也子を、大切にしてあげてくださいね」

「え……？」

「そりそり時間です。美也子を迎えに行つてきます」

逃げるよつにして、花丸惣菜を飛び出す私。何で、あんな事を言つてしまつたんだろう。氣づいて欲しいのか。

わかんない。意味わかんない。心と体が矛盾してゐる。もう嫌だ。

明日にでも荷物を纏めて出てこひ。

苦しいよ。悲しいよ。寂しいよ。よくわかんないよ。フフフフと複雑な気持ちで、美也子を迎えて行くと、

今日も美也子は何も知らずに元気だった。とりあえず、お別れだけはしておひつ。そう思い、

「美也子。多少、今日でもうお別れ。私はこの町を出て行くから」

「…………え？ も、もうですか！」

「うん。用事も済んだし、バイト募集も終わりだつて……だから、元気でね」

「また、何時かこの町に来ますよね？ 帰つてきてくれますよねー」

「一度といな」と思つ。色々あつてね、この町に居ると、私壊れちゃう

「そんな……」

「でも、美也子の事は忘れないよ。ずっと、覚えてる。また、日本の何処かで会えたら良いね」

美也子はずっと私に懐いてくれた。年下に懐かれるのは初めてだと思う。光希だって、私を蒼一の次に嫌っていたしね。今では、そうでもないけど。一年位までは地味にショックだった。神璽が光希に何故か好かれていたのもあるだろうけど。……話がそれた。美也子はまだ俯いたまま何も喋らない。そして

「……ん」

私達の周囲一帯に結界が張られる気配。きっと、人払い。もしくは記憶を曖昧にするタイプの結界。

そして、道の影からぞろぞろと現れたのは、いかにも悪人のような風体の男達。……賞金稼ぎ達だ。

「ひつ」と、美也子が脅えながら私の背後に隠れる。奴らの凶悪極まりない顔つきでは無理もないだろうが。

「棗由加だな?」

「そうだよ」

「依頼により、お前を捕縛する。異論は聞かない」

「……汚らしい」

「？」

「やり方が汚らしい。美也子は何も知らない一般人だよ。何で、巻き込むの？ 私がバイト終えてから襲えばいいのに」

「いつも時間ギリギリなんだよ。あの八神が出張つてくる前に片付けねえと、めんどくせエ事になつからな」

合点がいった。やはり、時雨達が動いてくれてるのだろう。その前に、国か他の機関は私達を捕まえたい。

だから、金で動く賞金稼ぎ。他の家に頼むわけにはいかない。相手は十名家の八神だからね。

まずしり込みするだらうし。そして、私は薄く笑うと、美也子の方を向いた。

「美也子。残念だけど、ここでお別れ」

「由加さん……」

「楽しかったよ。美也子は、お母さんと幸せになつてね」

「……？」

そして 私は力を発動させた。体内に反意思が駆け巡り、そして溢れ出した反意思を、武器や防具へと変換。

何時もの黒のコートに、巨大な斧。そして、足元には世界から奪い取つた私だけの領域。

まずは、領域に命じて黒の刃を大量に顯現させて賞金稼ぎ達へと襲い掛けさせた。その隙に、美也子を抱えて飛翔。

「え……ええつ！？」

「掴まつててー！」

そのまま全速力で花丸惣菜へと飛んで行くと、花丸惣菜の前にも賞金稼ぎ達が居た。……つ。読まれていたか。  
ゆっくりと降り立ち、男達の前まで歩くと、やはりそこにはリーダー格の男が笑いながら立っている。だが、余裕が無さそうだ。  
そして、徐に巨大な燃え盛る剣の式神を取り出し、花丸惣菜へとそれを向けた。

「つ！ やめて！」

「……なら、俺達の依頼を完遂させてもらひつか

「……わかった。でも、此処の安全は保障して。約束破つたら、九尾を召還して全部滅ぼしてやるから」

私が睨みつけながらそう言つと、リーダーは冷や汗を垂らしてそれを承諾した。これで、大丈夫だ。

花丸惣菜に迷惑をかけるわけにはいかない。これは、全部私の我が侭なんだから。私が勝手に乱したんだから。  
すると、騒ぎを聞きつけたのか、母が花丸惣菜の中から出てきた。  
私と賞金稼ぎ達の不穏な雰囲気を感じたのだろう。妙に脅えていたように見える。すると、リーダーが作り笑顔を浮かべ、

「いや、騒いでしまつて申し訳ない。我々は、彼女の保護者の代理人でね。迎えに来たんですよ」

「……由加ちゃん。 そうなの？」

「……はー。」迷惑をおかけしました」

私がそつ言つと、母もそれ以上何も言えないのか、黙つてしまつた。私は美也子に目配せをすると、母の下に行くように促した。最初は齎えていた美也子だったが、ゆっくりと歩き出す。 それでいい。

と思つていた矢先、美也子は足を止めると、

「お母さん！ 嘘だよ！ この人達、由加さんを齎して、嘘をつかせてるんだよ！」

そう、怒鳴つた。美也子のバカ、何で、何で黙つてないの？ と思つが時既に遅し、

「なつ ー？」

「美也子ー！」

そして、慌ててリーダーが叫んだ。

「もういい。兎に角回収しろ。事後処理は上にやつてもらえー。」

その場にいた式神使い達が、一斉に向かって襲い掛かってくる。だが、ここを戦場にするわけにはいかない。

そのまま動けないと、母と目が合つた。齎えているのか。必死なのか。そして、大きく口を開け、

「亜矢子つー 後ろー！」

母の叫びに、勝手に体が反応した。瞬間に横に移動し、背後から振り下ろされた巨大な棒の一撃をかわす。

そのまま、私は斧を振つて男の体を吹き飛ばし、コンクリートの壁に叩きつけた。そして、冷静な思考が働き出す。

……あの人今、私の事……亜矢子って呼んだ。美也子じゃない。確かに、亜矢子って呼んだ。呼んでくれた。

怒りに顔を染めた賞金稼ぎ達が再び向かってくる気配。私も応戦体勢を一応取る。すると、一発の銃声が鳴り響いた。

「はい。そこまで」

全員が銃声のした方向を見ると、そこには拳銃を構えた時雨が立っていた。明らかに、機嫌が悪い。一瞬でそれがわかる。

だが、すぐに何時もの蒼一曰く「曖昧な作り笑顔」を浮かべると、私達の方に向かって歩いてきた。

「由加の身柄は現在八神預かりの身になつていてね。残念ながら、これ以上好き勝手はやらせないよ」

「あ……ああ。わかつた。もう手を引こう」

「君達は、何処の所属かな？ 鎧木？ それとも九十九？」

「九十九だ……」

「ふんふん。九十九とは初対面だね。うん……ウチの身内に攻撃。それに加え、一般人を人質に。はいはい。どうしようもなく、僕等八神を舐めきつてるね。これは、九十九が八神に喧嘩を売ったとみなすべきだろ？」「

「な……なんだと！？」

「容赦しないよ。裏の不文律を破つた君らが悪い。全く、最近の若い賞金稼ぎときたら、これだからね」

そして、時雨が手を上げると同時に、賞金稼ぎ達が微動だにできなくなる。動きたいのに動けないようだ。

奥の方を見ると、奏も珍しく機嫌悪そうな顔で立っていた。成る程、七海の念動の力で固定されたんだね。

恐怖に脅える賞金稼ぎ達だが、その後更にその顔が引きつった。奏の奥から、「蒼」と罪歌が出てきたのだ。

元死罪六神でも最強クラスの一人だ。しかも、一人とも性格は凶悪極まりないとされている。

「よお、由加。久しふりじゃん。そのHプロンはどうかと思つが」「蒼」。幾ら似合つてないとほいえ、言つて良い事と悪い事があるわよ

「蒼」。幾ら似合つてないとほいえ、言つて良い事と悪い事があるわよ

……初っ端からこの二人は喧嘩を売つているのかな？ とりあえず、助けて貰つたので良しとしよう。

すると、時雨が私に視線で目配せをしてきた。その視線の先には、硬直したままの母と美也子の姿。

息をつき、緊張しながら私は一人に近づいていき、店の中で話したいといつ血を伝える。そして、店の中に入ると、

「……亜矢子って、わかつてたんだ」

「うん……。娘の顔だもんね。笑いそうなのを堪えている顔とかは、

美也子そつくりだし

「え……？　お母さんと由加さんは親子なの？」

私と母は全ての事情を知っている。だけど、美也子は何も知らない。この辺りは、母に任せよ。そう思い、

「美也子。少し、上に行つててくれるかな？　私は大事な話があるから。後で、全部お母さんに話して貰つから」

「う、うん……」

美也子は私の方を何度も向きながら、厨房から出て行つてしまつた。後に残つたのは、私と母だけ。

氣まずい沈黙が流れる。当たり前だ。捨てた方と捨てられた方。昔の私だつたら、間違いなく殴つている。

それでも、今は違う。とりあえず、私から言ひ事は特に無いので、黙つて母の言葉を待つ。

「……最初見た時にもう気づいたの。美也子と亜矢子が並んでるんだもの。心臓がひっくり返りそうだつたわ。

絶対、私に復讐しにきたつて思ったわ。全部バラして、私の家庭を壊されるんだと思ってた。でも、覚悟してた。

再婚した時も、美也子が生まれた時も、何時かこの幸せを亜矢子が壊しにくるかもつて。それが、私の罪だつて

「そんな事……しないよ」

「でも、私はそれ位の事をさせちゃうみたいな事をしたんだよ……」

母はそう言つと、地面に手をつき、土下座して私に深々と謝罪をした。 それが、とても嫌だ。

私は母に近づき、手を握る。母の手が一瞬、ビクッと震えるが、すぐに覚悟したよつにその震えを止める。

そして、そのまま腕を掴んで母を立たせると、

「土下座なんてしないで。母親に土下座をさせるなんて、ヤクザみたい」

「でも……でも私は……」

「貴女に捨てられたけど。今では、それでも良かつたって思える。……あの後ね、いっぱいあつたの。

色んな人と出会いつて、戦つて。何回も死に掛けたりしたけど、外に居る人達と毎日楽しくやつてる。

多分、貴女と暮らしていたら、私は彼等とは出会えなかつた。こんな樂しい日常は無かつたと思つの」

「でも……実の娘を……お金で……」

「仕方ない。結果は結果。今更、過去は変えられない。反省は大事だけど、後悔は何も生まないよ。

私の分も美也子を大事にしてあげて。それが、私に出来る一番の罪滅ぼしだと思って」

そう、過去は変えられない。どんなに悔いても変えられないんだ。私だって、時を戻せるなら戻したい。

棗由加ではなく、棗亞矢子の人生を歩んで見たい。そう思つ事もある。暫く俯いていた母だが、

ようやく顔を上げると、震える声で私にこう言つた。

「亜矢子……一度だけ、一度だけで良いから抱きしめをさせてくれるかな？」

「うん」

私は母よりも背が高い。母は背伸びするような格好で私を抱きしめた。それは、久しぶりの感覚。

私の記憶の奥底に封印されている、思い出せない記憶が、確かに「久しぶり」と認識させた。

結局、私には母を責める事なんて出来ない。この小さな肩。傷だらけの腕。きっと、相当苦労してきた筈。

母も私も生きるのに必死だったんだ。だからもういい。今気づいた。私は怒ってなんかいない。

今回だって私はただ、会いたいから來たんだ。そんな事を思つていると、私は母から体を離すと、

「もう行くね。仲間が待ってるからさ」

「うん……。亜矢子。もし……もし気が向いたら、また来て頂戴。気が向いたらでいいから」

「どうしようかな……うん。此処のお惣菜。ただ無料で食べさせてくれるならいいよ」

「わかった。何時でも、亜矢子には無料で食べさせてあげる

私と母は、微笑を作りながら一緒に外へと出た。外ではもう、粗

方の作業が終わつたようで時雨と罪歌と蒼一と奏しかいな。

……ああ、そういえば。言う事があったんだ。私は母の方を向い

て、花丸惣菜の看板を指差し、

「あの絵。趣味悪いから、何とかした方がいいよ」

と忠告した。幾らなんでも、あの絵はないだらつ……幼児が書いたようなぐぢやくぢやの花丸だ。

私の言葉に母は暫く曖昧な顔をした後、やがてとても言い難い事を言うような顔を作り、

「アレは……亜矢子が書いたのよ？ 覚えてないかな。私に、亜矢子が始めてくれたプレゼントだった。

私はそれを自分への戒めとして、何時か、亜矢子が此処を見つけた時にすぐわかるようについて。

それで、この店を開いてからずっとアレを看板にしてきたのよ。美也子も何故か気に入ってくれてね」

「え……」

後ろで、蒼一が笑いを堪えているのが、見なくともわかる。あいつめ、後で命に色々吹き込んでやる。

だが、流石に恥ずかしかつた。まさか、自分で自分の絵を趣味悪いとか言つ口がこようとは……。

顔を赤くしているがバレるのは嫌なので、私は流れをぶつた切つて母の方を再び向き、

「じゃあ……また何時か。美也子には全部話してあげてね」

「うん……わかってる。全部、話すつもり。あ、亜矢子。今までの給料、持つてきなさい」

母から渡された、微妙に分厚い封筒。私はそれをありがたく受け取り、

「じゃ、行つてきます」

「……は、はい！ 行つてらっしゃい」

そう言つと蒼一と時雨と罪歌と奏と一緒に、私の帰るべき場所へと帰る事にした。とりあえず、ここからは四人で来たらしい。仕方が無いので、私の部屋で今晩は雑魚寝という事に。時雨がスイートじゃないと嫌だとか

ごねていたがめんじくさいので全員で黙殺。その晩、皆が寝静まつた後に、私はゆっくりとベッドから起き上がつた。

そのまま蒼一の体を優しく反意思で浮き上がりせ、ベッドで寝ている奏と罪歌の真ん中に置いてやる。

少し手の位置を入れ替え、蒼一が一人を抱いて寝ている状況を作ると、それを写真で撮つて命と狂のアドレスに送信。無事に復讐を完了した私は、久しぶりに心地いい気持ちで眠りについた。そして 翌朝。

「きや…………きやあああああああああ！ そ、蒼一さん？」

と、いう奏の悲鳴で半分意識を覚醒させ、その後断続的に起きた蒼一の悲鳴によつて私は完全に目を覚ました。

そして、ゆっくりと順番に皆で支度して、駅へと向かう。蒼一はその最中も、今度はずっとメールを打つていた。

余りにもその表情が必死な為、若干の同情を覚えたが、すぐにどうでもよくなり、私は母と妹が住んでいる町を最後に見つめた。

色々と思う事がある数日間だったと思つ。やつ感傷に耽り、新幹線に乗るつとするど、

「由加さん！」

と駅のホームに声が響き渡った。私がそちらを向くと、そこには息を切らした美也子が立っている。

「美也子……」

「お母さんから、全部聞きました……折角、折角姉妹だつてわかつたのに……！」

「うん。『じめんね。でも私、行かなきゃならないの』

「……もつ、会えないの？」

美也子が寂しそうな顔で私を見上げた。私は優しく美也子を抱きしめると、ポケットの中でこつそり紙を反意思で作成。

それは、私の携帯電話の番号とメールアドレスが書かれた少し高級そうな紙。それを、美也子に握らすと

「今度、電話かメールしてね。困った時はすぐに連絡するんだよ。  
”お姉ちゃん”が、力になつてあげるから」

「う、うん！」

「夏休み頃になつたら、私も住む場所が決まつてるだろ？から、遊びにあいでよ。一匹危険な狼が近くに居るけど……」

「狼……？　お……お姉ちゃんも何時でも遊びに来てね。私、由加さんがお姉ちゃんで良かった。嬉しかったから！」

「私も、美也子みたいな妹が居て良かった。お母さんを、支えてあげてね。きっと、今でもあの人は自分を責めてるから」

「わかつた……」

そう言つと、ついに発車を知らせるベルが鳴つてしまつた。名残惜しいが、これでもうお別れだ。

美也子が涙目で手を振つてゐる。私も笑つて手を振り替えした。  
そして 違和感。何故か、目が熱い。

よくよく見てみると、 ガラスに映つた自分の顔は涙で溢れていた。これが、別れ。とても悲しい。

でも今生の別れじゃない。また、何時か会える。これは、嬉し涙なのだろう。とりあえず、そう結論付けて、

私は大切な居場所。仲間の居る場所へと歩いていった。

今回は連投します。

その町は、一階堂特区と呼ばれる暗黒街。暴力と欲望の街。ここでは誰もが平等、殺人犯でも浮浪者でも力があれば幸せに生きていける。そんな街。

財力でも腕つ節でも頭脳でも良い、とにかく人より何かが秀でていれば誰もが幸せになれる街だった。

だが逆に、力の無い者は人権すらない、永遠の負け犬。ある意味では天国と地獄、両方の顔を持っている。

その街の入り口には一人の少年が立っていた。乱れた長髪、ボロボロになつた服。だが、目だけは死んでいない。

「ここが一階堂特区か……」

少年 真砂剣菱はそう呟いた。まだ中学生ぐらいの外見であるが、完全に中身は大人ほど。

復讐のためにまず力を得る事にした剣菱は、特区の中でも一番目に危険なこの街へとやってきたのだった。

汚らしい路地を歩きながら剣菱は周囲を見る。酒を飲んでいる者、非合法の薬でイッている者。

本当にクズが集まるような街だった。剣菱は嫌悪感を隠さずに路地をどんどんと歩き、中心通りへと出た。

まず目に付いたのはヤクザの多さ。堅気の服装をした者など全くと言つて良いほど見かけない。

周囲には露天や店舗が並び、それなりの活気を見せているが売られているものは危険な物も多い。

「本当に、腐った街だな」

半ば呆れながら、剣菱はまたぼやく。とりあえず、じばらくはこの街に居るので宿を手に入れなくてはならない。

式神を使って、強盗でもすれば簡単に金は稼げるだろ。実際に、剣菱は”あの日”から今までそつやつて生きてきた。

人を殺すこともはや躊躇いは無い。全ては復讐を果たすその日まで生き抜く事が剣菱の人生の目標。

そんな事を、考えていると突如として大きな音が鳴り響き、通りでは新聞社の使いのような者が紙を撒いていた。

「号外！ 号外！ 特区の代表が変わったよー！」

代表？ と剣菱も気になり号外を拾いに行こうとした所、周囲にあつたTVやビルにあるスクリーン。

全てが一気に切り替わり、豪華なホテルの一室が映し出された。どうやら、特区内の番組らしい。

偉そうにソファーにふんぞり返つて居るのは、自分と同じぐらいの年齢の少年。

「雨龍だ……」

「一階堂の三男がどうして……」

「やっぱ……殺しちまつたのかねえ」

周囲から、そんなざわめきが漏れた。すると画面に映つていた少

年 一階堂雨龍はニヤリと笑い、

「俺がこの特区の新しい支配者だ。これより、新しい特区のルールを発表するぜ。」

まずは、兄貴の時に禁止されていた強盗以外の殺人禁止令。これ

は解除だ、存分に殺しあえ！

気にいらねえヤツ、邪魔なヤツ。全部殺して良いぞ。俺が許す。  
つか、あらゆる犯罪が解禁だ。何でもやりな」

歓喜の咆哮が街を突き抜けた。それもそのはず、この街に居るの人間の大抵が犯罪者。

しかも理由無き犯罪者。ただ、金が欲しかつたらとか安易な理由で人を踏みにじつてきた者達。

そんなクズ共にとつては、まさに雨龍の発言は最高以外のなんでもない。

「だーが、一つだけルールがある。それは、一階堂特区の運営にとつてマイナスになるような行動をするな、だ。

爆破テロとか式神で街壊しまくった奴は問答無用で俺らが殺す。後、二階堂への上納金は二倍な。

各家の派遣やヤクザのにーちゃん達は必死こいて弱い奴から搾取するんだな。以上。　後は、好きにやりな」

再び上がる歓声。既に何人かはナイフや角材を持って、大通りにも関わらず強盗を始めていた。

ある者はそれを無視し、ある者は周囲から野次を飛ばしたりしている。血が舞い、肉と肉がぶつかり合つ嫌な音。

そして最後に歓声と悲鳴。地獄絵図のような光景が剣菱の視界に広がっていた。

剣菱はそれから目を背けるように裏路地へと入るつとしていた、だが、またしても付近から悲鳴が上がる。

「やだあ……嫌だあ！　離して！」

一人の少女が、汚らしい格好をした大人達に羽交い絞めにされ、

服を破かれていた。

下卑た表情を上げる男達。泣き叫ぶ少女。通行人は好奇な視線と、嫌悪が混じった視線で彼らを見ている。

「助けて！ お兄ちゃん助けてえ！」

その時、その声によって剣菱の死んだ妹の姿が助けを求めた光景を思いだしてしまった。

寄生型悪鬼に取り付かれた妹と一族。誰もが泣きながら殺してくれと願っていたあの日。

自分はただ何も出来ずに、ただ殺されていくのを黙つて見ていた。それが、とても悔しかつた。

やがて、剣菱はその雜音を振り払うように意識を集中して、自身の式神【天照】の力を発動させた。

「黙れエ！」

怒りとも悲しみともつかない感情と共に、剣菱の周囲から強力な熱線が照射された。

通行人を掠り、その熱線は男達の胸や頭を貫通し一瞬で命を奪い、或いは瀕死の重傷を負わせる。

しかしそれだけでは終わらなかつた。更に別の方向から一陣の風が吹き、生き残つた男達の首筋を切り裂いた。

血が迸り、歎声と悲鳴が上ると、剣菱はその風を放つた方を向く。そこには無愛想な金髪の男。

「…………」

「…………」

一瞬目が合つた。だが、一人はすぐに目を逸らすと、別方向へと向かつて歩き出す。

一つ気になつたのは、金髪の男の目。自分と何かが似ている感じがした、がやや距離が遠いためよく見えない。

そして剣菱は裏路地に消えるようにして行き、金髪の男は大通りの人ごみへと消えてしまった。

剣菱が特区に来てから一週間が経つた。相変わらず、街には犯罪が蔓延つてゐる。

だが、それを良しとしない勢力も出てきた。街では毎日対立が起り、何人もが死んでいく。

それでも特区の人口は減らない。一人減れば人生に絶望した一人がまた来るといった凶式。

そんな中、剣菱はこの前殺した男達が使っていたアパートの一室に住んでいた。

あの後強姦されかけていた少女が剣菱を追いかけてきて、このアパートの事を教えてくれた。

少女はこの特区に家族と暮らしているらしく、買い物帰りにあのような目に会つたと言う話。

無事に家まで送り届けてからは、もう会う事も無くなつていた。

「……金が、無いな」

ベットに寝転びながら、そんな事を呟く。隣に置かれた財布には小銭しか入つていない。

特区といえども、家賃はある。力ずくで払わなくても良いが、二

階堂を敵に回したらそれこそ死ぬ。

……とりあえず、滞納は止めよう。そう考えて、剣菱はベットから起き上ると鍵をかけて外へと出た。

「むう……」

特区から見える青空は綺麗だった。青空は世界のどんな場所にも平等に、美しい。

特区の最端には薄い膜のようなモノが見える。アレこそが、特区でどんな事件が起きようとも、

外界に知れ渡らない理由。聞いた話によると、外から見える特区は普通の街に見えるらしい。

だが、一歩入ってみればそこは式神と暴力の巣窟。その理由は、常に同じ景色を写す結界によるもの。

そして、街を歩きながら剣菱は何か金が手に入る事は無いかと思案をめぐらせた。だが、何も浮かばない。

本当にこのままでは、強盗でもするしかない。あまり気が乗らないが、せつやつて生きるしかない。

「おにーさん」

「ぬ……？」

何時の間にか、目の前に白髪の少年が立っていた。染めた髪ではない、普通の白髪。

きっと大変な事情があったのだろう。勝手にそんな風に解釈していると、少年は笑顔で、

「こ」の前、大通りで人殺ししてた人だよねー？ バビューン光線で

「バビューン光線…………多分、我だろ?」

「僕らね。今強い人集めてるんだよ。だからおにーさんもびりっ。  
一応実技試験とかあるけど」

「興味ない」

「あちやー、おにーさん自閉症? もうちょっと人と関わってかな  
いとこの街では生き残れないよ?」

「一理あるが、我は今忙しい。また今度会つたら話は聞いてやろう  
「んー、わかりました。僕らいつも西通りの酒場に居るんで、興味  
あつたらきてくださいね」

「つむ」

そう言つと、元気よく白髪の少年は駆けて行つて、やがて人ごみ  
の中に消えた。

そして剣菱は本来の目的地へと歩を進める。建前上はジャンク屋  
となつてゐるが、汚い仕事を斡旋してくれるその店。  
よくわからない機械の部品の隙間を縫いながら、店の奥のほうへ  
と向かうとキチンとしたスーツを着た一人の男。

パツと見た感じでは普通の町に居るサラリーマンのような外見。  
だが、特区ではかなりの有名人なその男。

「仕事を紹介して欲しい」

「君はあ……この前大通りで式神を使った子だね」

「そりだ。だが、出来るだけ殺しの依頼は避けたい。痛めつける程度の仕事を望む」

「そんな仕事があるかと思う?」

「あるだろう。復讐代行人のような仕事が」

「くつくつ。若いのに随分知ってるね。確かに依頼はあるよ。街のチンピラの掃除だ。しかもさつき入ったばかりのね」

「是非、紹介して欲しい。それとも、我では腕が足りぬか?」

「いやいや十分さ。中々強力な式神だったよ。ただ一つ、問題があつてね。別に殺そうが殺さないがどっちでもいいんだよ。だが、この仕事の報酬はたつた一人分。勿論他の斡旋場から着てる人も居るだろうね。君ほど腕の立つ人も居るかもしれない。ここまで丁寧に教えてやれば、僕のいいたい事はわかるね?」

「請負人同士の殺し合いが予想されるのか」

「正解。それでもいいなら紹介するよ?」

「……頼もう」

男から連絡用の携帯電話と、大まかな仕事に必要な情報が書いてある紙を受け取ると早速剣菱は

チンピラ達のたまり場へと向かった。早くしなくては先に報酬を達成されてしまう。そんな思いからか足は速まった。

ターゲットは二十人ぐらいの武装集団。依頼人は一階堂家。つまり、彼らは一階堂の執行部隊が動き出すほど

強敵ではなく、少し腕が立てば余裕と言つたところのレベルだろうと解釈した。よくよく書類を読んでみると、どうやら特区の建物を破壊したり、一階堂直営の店からも強盗をしたため標的にされたらしい。

「フン……」

殺しても良いぐらいの悪人だろう。そう判断すると、そろそろ田的の廃ビル付近。

剣菱は懐から小瓶を取り出し、それを一気に飲み干すと一息つく。段々と体が熱くなる感覚。

そして 剣菱の目が緋色に染まつた。それは真砂が代々次いできた力 緋眼。

意識を集中させると、いくつかの式神の気配も感じられた。しかも、どこかで感じたような気配。

ビルの門を天照で破壊し、中へと進むと焦げ臭い匂いが立ち込めていた。周囲には幾つかの死体もある。

「…………」

耳を澄ますと、上の階から怒声や悲鳴が響き渡つてゐる。急いで剣菱は階段を駆け上がり、

上の階へと行くとそこでは金属バットやナイフや拳銃を構えた男達。そしてその中心に居るのは

田映い弓を右手に持つた 細身の男。剣菱も負けじと天照を照射して、とりあえず一人を殺した。

すると、男はこちいらを向く、

「ああ？ 邪魔するならテメーも殺す」

「フン」

男も田にも止まらぬ速さで何発のも雷の弾を放つと、次々と黒焦げの死体を量産していった。

剣菱はその弓の合間に縫うよつて天照を放ち、同じよつて良い後を奪つていった。

流石に短期間にこれだけ殺すと、倫理もクソもなくなつて来る。段々と心が冷えていく。

そして最後の一人に天照を連続して照射した後、剣菱の頬にチクリと痛みが走り、その横を雷が通過していった。

振り向くと、先程の男が弓を構えてこちらを狙つている。

「やはつ、じうなるか」

「テメエも紹介屋から説明を受けたんだる？ わかつてた事じゃねーか」

「まあな」

「一応殺す前に自己紹介しつづけ、俺あ……御崎暁だ」

「真砂剣菱だ」

一人はお互いの”苗字”に驚愕しつつも、平静を装つた表情をした。

どちらもこちらの世界では名が通つた家。だが、お互いの下の名前はお互いとも聞いた事が無い。

そして これが後に親友となり、死罪六神のメンバーとなる真砂剣菱と御崎暁の始めての出会いだった。



ただ、疲れた……

次回は雨龍とか万里とか、色々動きはじめます。

閃光と轟音鳴り響くビルの三階。剣菱と暁は休む事無く、走り続け必殺の一撃を繰り出す。

天照の閃光が障害物を貫くため、暁は常に移動しなくてはならない。

だが、こちらの霹靂は壁を貫けない分、大体ではあるが矢の軌道を変えることができる。

条件は殆ど同じ。後は、体力の勝負。

(負けねえ……この程度、あの時に比べれば……！)

暁の脳裏に思い起こされたのは、悪鬼の餌にされた時、死に物狂いで逃げた光景。

迫りくる異形から、泣きながら、怪我の痛みを無視しながらひたすら叫んで走つたあの日。

一度地獄というもの見た暁には、この程度の事なら何の苦でもない。

一方の剣菱も、家の者全てが寄生型悪鬼に支配された時に、地獄を見た。

いつも笑いあっていた人々が、急に異形に取り付かれ、人としての理性を失つてしまつた。

逃げた。逃げた。妹の手を引いて。だが、その妹も 最後には寄生されてしまった。

(我は死ぬわけにはいかん。まだ　まだ復讐が!)

そして、一人が同時に飛び出し、相手に全力の一撃を叩きこもつとした時だった。

窓ガラスを突き破つて、莫大な炎が一人へと迫る。咄嗟に転がり、壁に隠れるも、

何箇所かは火傷を負つてしまつ。その炎はすぐに霧散し、それが晴れると一人の少女が立つていた。

黒髪で少し肌の焼けている少女。その目は最近どこかで見た事あるような目をしている。

「シシシシビーブークを鳴らし、少女は剣菱と暁から少し離れた場所で止まると、

「報酬、ちょうだい」

無慈悲な声だった。ただ、要求しているだけの声。その言い草に怒りを覚えた暁は、ゆつくつと壁の影から出ると、怒りに顔を歪ませ、

「おーおー、姉ちゃんよ。テメエ、何言つたかわかつてんのか?」

「うん。報酬を寄せせと言つてるの」

「チッ……おい、真砂。一旦休戦だ。この女にお仕置きしてから決着と行こ!」  
「せー

「つむ。気をつけろ。只者ではない」

暁の言葉は強がりという事はわかっていた。それほどまでに、目の前の少女は強力な力を持っている。

剣菱も背中に冷や汗が伝うのがわかる。そして、一人が同時に式神の力を放とうとした時、

「遅いよ」

足元に既に炎が纏わりついていた。それは一瞬で燃え上がり、暁の体が炎に包まれる。

剣菱はギリギリのタイミングで緋眼を発動させ、高速で移動しながら少女へと天照を放とうとする。

だが、背後に回ったときに少女は確かに反応し、振り返った。その瞳の色は、自分と同じ緋色。衝撃が剣菱に走る。少女はその動搖を逃さずに攻め込むと、

剣菱の腹部に強烈な拳。更に一瞬後には荒れ狂う炎が生まれ、腹の中で爆弾が爆発したような錯覚に陥る。

「君、やっぱり緋眼使いか。真砂って言つてたからもしかしたらと思つてたけど」

「貴様は誰だ？ 見た所ハ神ではないようだが……」

「私は、”秋月”罪歌。もう、これでわかるわよね？」

秋月は自分達緋眼の一族の本家。だが、何年か前に悪鬼の襲撃を受けて全て死んだと聞く。

何故、滅んだはずの秋月の名を名乗る少女が、こんな腐った街に居るのだろう。

次々と疑問が浮かび、剣菱はそれを口にしようとしたが、罪歌のブーツが顔にめり込み、剣菱の意識はそこで絶たれた。

次に剣菱が意識を取り戻したのは、小汚い病院のベッドの上だつた。何故、こんな所に。

という疑問が湧き、そして自分がまだ生きている事に正直、驚きを覚えた。

秋月罪歌に自分を生かしておくれ理由なんて無かつた筈。なのに、何故殺さなかつたのだろう。

気まぐれか、それとも何か事情があつたのか。考えても答えは出ない。仕方が無いので、

剣菱は起き上がるとベッドの上から降りた。式神で治癒されたのが、痛みは殆ど無い。

サンダルをペタペタと鳴らしながら、何となく剣菱は病院の屋上へと向かつ。

「む……」

屋上へ続くドアを開けると、自分と同じ、病院支給のパジャマを着た御崎暁が居た。

相変わらず悪い目つきで、猫のプリントがしてあるパジャマは力ケラも似合つてなかつた。

そして、ふと自分のパジャマを見てみると、そこにはウサギのプリント。何か、無性に裸になりたい気分になる。

「やつと、起きたか

「つむ。快眠であった

「どこが快眠なモンだつつの。仕事の金は取られるわ。変な女に殺されかけるわ。

あーあ……これで、あのアパートはおんだされんだりな。また野良猫生活に逆戻りだぜ」

「いいではないか。そのパジャマの猫みたいで

「ぶつ殺すぞテメええエツ！」

暁自身も猫柄は嫌なようで、声を荒らげて剣菱を睨むと猫のプリント部分を何度も引っかく。

「ふむ……では、我のアパートに来るか？　一人での家賃を払うのはどうにも厳しい。

お互い半々の折半で行こう。そうすれば貴様も晴れて野良猫卒業だ。おめでとう」

「は？　お前正気かよ？　このクソの巣窟みてーな一階堂特区で、よくそんな甘つちよろい事言つてられんな」

「背に腹は変えられん。貴様もそうだろう。それに、貴様は腐つてもある”御崎”の人間だ。

それなりの訓練も受けている筈。実力にも不足は無いだろつな名家だぜ」

「だが、もう無い」

「……は？」

「真砂は我以外寄生型悪鬼にとりつかれ、千島蒼威と八神正宗に全員殺された。

父も母も祖父母も、友人や叔父や叔母も。そして、妹も殺されてしまった」

「マジかよ……」

「力が無いのが悔しかつた。妹を最後まで守りたかった。可能性はあつたんだ。

あの時奴らが殺さずに監禁でもしていくとしたら、もしかしたら寄生型を祓えるような

式神使いが居たかもしれない。外科手術で摘出できたのかもしない。

その可能性を全て捨てて……奴らは真砂を殺し尽くした。我には、それが一番我慢ならない

暁に言ひのではなく、独白するように剣菱はブツブツと小さな声で呟いていく。

流石の暁にもこれには言葉が出ない。寄生型悪鬼の恐ろしさは聞いただけでも悲惨なビジョンしか見えない。

それを、目の前に居る男は見てきたのだ。それも、家族が寄生されるという最悪な場を。

同じ地獄を見てきた人間。共通の敵は人と悪鬼。何となく、自分達が似ている事を一人は同時に悟っていた。

しばらく黙つて、お互いそっぽを向いていると、先に折れたのは暁の方だった。

「仕方ねえから 手工組んでやるよ」

「……そつか」

「改めて自己紹介するぜー。俺は御崎暁。よろしくなー。」

「つむ。私は真砂剣菱。よろしく頼むぞ、暁」

どちらとも無く笑うと、二人は固い握手を交わし一度病室へと戻つて帰宅の準備を始める。

そして、一度剣菱が借りているアパートに暁が今住んでいる場所から引越しの荷物を持ち出そうと一人で話しながら歩いていると、眼前で大きな爆発が起きた。咄嗟に反応し、建物の影に隠れてやりすごすと、近くにあつたパチンコ屋から数人の男が楽しそうに飛び出してきた。

式神の気配が二つ。後は銃火器を装備している集団。楽しそうに拳銃を乱射し、周囲に破壊を振りまいている。

アホだ……と剣菱は思つ。雨龍の言つていた犯罪奨励政策の表面しか彼らはわかっていないのだろう。

確かに、あらゆる犯罪が解禁だ。だが、一階堂特区のマイナスになるような事をしてはいけない。

今回の騒ぎはどう考へてもマイナスだらう。あの政策の本当の狙いは、こういうアホを早急に、そして合法的に一階堂特区から消す為だとという事は

よくわかつっていた。結局、このまましばらくしけば一階堂特区は今より治安がずっとマシになるだらう。  
一階堂雨龍という男は暴力的な思考の持ち主だと大半は思つてゐるだらう。だが、実際は実に効率よく特区の安定を図る政策を打ち出しているのだ。

「どうするよ。」そのまま一階堂の鎮圧が来るのを待つか？ 俺らで殺すか？

暁もそれには気づいていたらしい。だが、剣菱はそれを聞きながら視線の一一番奥を見ていた。

逃げ惑う人と人の隙間に、黒衣の長身の男が堂々と歩いていた。その姿は、異質。

どう見ても只者ではない。そして、強盗していた男達もようやく黒衣の男に気がついたようだ。

だが、笑つて武器を向けている。愚かだ。あんな異常な気配を出す人間を前にして、笑つていられる神経が信じられないと二人は息を呑む。

「どうしたよ。おっさん。何か文句でもあるのか？」

「……黙れ。俺は今、機嫌が悪い。貴様等の所為で、ラーメン屋が途中で店を閉めてしまつたではないか」

そう口にすると、男は半分しかスープの入っていない器を取り出し、ぐいっと男に近づけた。

「アイツは……！」

すると、剣菱の背後から様子を伺っていた暁が驚いたような声を上げた。

「知っているのか？」

「ああ……」

暁の顔には冷や汗が浮かんでいた。その間も男達の言い合いは続していく。黒衣の男が差し出した器を見て、男達は大笑いしている。

「こいつ小せえ」とか明らかに余裕をかましきっていた。やがて、式神使いの男が奥の方から出てきて、

黒衣の男に巨大な斧を突きつけた。だが、黒衣の男は動じる事なく、相変わらず器を差し出している。

「マージ、おっさんうぜえから。殺されてえの？」

「足りない分の賠償しろと言つていい」

「ハツ。舐めやがつて！ ンなもん知るか！」

「なら貴様の血で贖え」

黒衣の男が洗練された動作で右手を振つた。それと同時に、男の斧を握つていた腕がごとりと音を立てて地面へと落ちる。

男はそれを他人事のように見た後、顔を引きつらせ悲鳴を上げた。傷口からは夥しい量の出血。

それを器で受け止めながら黒衣の男は楽しそうに笑つた。当然、男の仲間達も動き出した。拳銃を構え、或いは剣の式神を構え、だが

「アイツは……八神を追放された長男の八神村兩だ。あの八神正宗の冗談だよ。

ウチは八神と仲悪かつたから顔を覚えさせられたんだ。何でだよ……何での戦闘狂がこんな場所に……！」

暁の声は震えていた。その気持ちは剣菱にも良くわかる。黒衣の

男　八神村兩からは濃密な死の匂いがした。

現に今も眼を緋色に染めて、刀の式神を使い、凄まじい速さで男達の体を切り刻んでいる。剣の技術だけみても、凄まじい。

アレが　八神の直系。自分がこれから復讐【しゆう】しつとしてこの家を追放された人間。正直、背筋が寒くなつた。

「あいやりや、村雨さん。またこんな所で力使つちやつてもーー！」

突然、剣菱と暁の背後から幼い声が響く。振り向くと、そこには数日前に剣菱に話しかけてきて白髪の少年が居た。

「さう。おこーさん。また会つたね」

「お前は……あの時のー！」

驚く剣菱の間をすり抜け、白髪の少年は村雨へと向かってゆっくりと歩いていく。そして、

「村雨さん！ もー終わーー！」

「む……」

少年の声によつて、村雨の動きが止まつた。男達は既に息絶えてしまつたようだ、ピクリとも動かない。

疲れたように、血が並々と注がれた器を投げ捨て、ついでといわんばかりに、持っていた刀をも投げ捨てる。

器は音を立てて割れ、刀はすぐにこの世から消えてしまつた。それを見届けると、

「つまらんな。クソ野郎の癖にクソ見たいな式神でクソみたいな応戦しやがつて、余計にクソ腹が立つたではないか。

ナナシ。一回でいいから貴様を殺せり、かつすればこのクソみたいな気持ちもクソ晴れるかもしれん」

「嫌だよ。どうせなら、あっちのほうに一さん達とやり合つた方が楽しいかもよ」

「……ほお」

ナナシと呼ばれた少年の指が剣菱と暁の方を指差した。それを見ると、村雨の顔に獰猛な笑みが張り付いた。

肉食獣が獲物を見つけた時のような表情。そして村雨は、ゆっくりと一人へと向かって歩を進めた。

当然、剣菱と暁は応戦体勢を取つた。その身のこなしに少しほらしみそうだと感じだ村雨は、再び式神を召還。

「ほほお。ガキにしては中々の気配を出すじゃないか」

そして、村雨の目が緋色に染まつた瞬間。剣菱と暁は、はじけるようにして村雨へと突進した。

剣菱は家に伝わる秘伝の薬を口に含み、緋眼を発動させて暁よりも前へ。暁は手に雷を纏わせて剣菱のやや後ろを走る。

先制攻撃。剣菱の周囲から熱線が飛び出し、村雨を襲うがそれは難なく回避されてしまう。そして、刀を振り下ろす一撃。

「つーーー！」

それを懐から取り出したナイフで何とか矛先だけは変えた。豪快な一撃がアスファルトを碎いた瞬間、

今度は暁が雷の弓と矢を形成し、村雨が防御体勢を取れない体勢の時に一斉に矢を放つ。確実に、これは避けられない筈。

だが、村雨は緋眼使い。ギリギリで反応し、何とか矢を避けた。

「ナイスだ、暁」

バランスを大きく崩した村雨の背後に剣菱が迫る。天照の熱を拳に集中させ、膨大な熱を持つ拳を形成。

防御が出来ないと悟った村雨は何故か、持っていた刀を地面に突き刺し、剣菱へと向き直る。

だが、同じ緋眼使いでも流石にこのタイミングでは剣菱の方が圧倒的に有利。未だ防御体勢を取っていない村雨の

顔面に拳を叩き込もうとした時だった。突如として先程の男達が流した鮮血がボコボコと泡を立て、剣菱の顔へとかかった。

「ぬう！」

目を潰されてしまった所為か、剣菱の拳は空振りし、その腕を逆に村雨へと取られてしまう。

そして、腹部で爆弾が爆発したかのような凄まじい衝撃。殴られたとわかつた時には更に、顔面に一撃。

そのまま暁目掛けて村雨は剣菱を投げつけた。そして、刀を再び地面から引き抜き、剣菱達に突きつけると、

「及第点という所か。喜ぶがいい、貴様等を今日から俺達の組織の一員にしてやる」

最初村雨が何を言っているのか理解できなかつた。組織の一員？何だそれはといった感じで

剣菱と暁が目の前に居る村雨を見つめていると、白髪の少年が二ヤニヤ笑いながら近づき、

「じゃあ、案内するよ。僕らのボス達の場所にね。そっちのバビューンのお兄さんには前に場所言つたと思うけど」

「うむ。 それでは腹も減つたし帰るとしよう。 ほれ、 ぐびり殺されたくなけりやせつせと立て」

村雨に強引に立ち上がらされ、 痛む体の部分を押さえながら剣菱と暁は村雨と白髪の少年に並んで歩き出す。

これからどうなるかわからない事が気がかりなのか、 二人は終始俯いている。 否。 笑っていた。

この男達についていけば絶対に強くなれる。 そんな確信が一人にはあった。 そう、 自分達は力を求めてこの街に

来たのだ。 隨分と遠まわりしてしまったが、 再び復讐の道を歩める。 剣菱は家族の仇を討つため。 暁は家族に復讐する為。

正反対の理由を持つ、 一人の式神使いの少年は低く笑いながら、 更なる闇の中へと進む。 その先に、 何があるのかも知らずに

## First contact : 3 帰りたいもの（記書き）

正直、このFirst contactはPAST書くよりも纏んで書いてたりします。

過去編つて難しいですね。ホント。

十名家が関わっているので、PASTと繋がる箇所も意外と多く、微妙に後々に重大になる設定とかも盛り込んであるので、お楽しみいただければ幸いです。

「うーちゃん！ 特区の代表就任おめでとうございますー。」

パンツと音がして、一階堂雨龍の前で粗末なクラッカーが一回音を立てた。ここは、一階堂特区の管理棟の中。

本家から少し離れた場所にある大きなビルの最上階の部屋だ。そこに居る人間は、現在二人。

十名家の一つ、三枝家の次女、三枝万里と一階堂家の三男、一階堂雨龍だ。雨龍の机の上には万里が買ってきた

様々なお菓子や飲み物が置かれており、雨龍は万里の祝いにやや苦笑しつつ、

「ありがとよ」

と口にして万里の頭を撫でてやる。万里は雨龍よりも一歳年下なのだが、外見が非常に幼い為に年よりかなり  
低く見られることが多い。だが、小学生は小学生でも大人が束になつても敵わないほどの力を持っている。

普段は普通の女の子なのだが、剣を握った時の万里は凄まじい。歴代の三枝の中でもかなり抜きん出た才能といえる。

「これで、うーちゃんの政策が上手くいけば、龍一様や竜男様からも認められますよね。」

「私は、いっぱい協力します。お父様から暫くお姉様と一緒にうーちゃんについてるようについて

指示されましたから。暫くは一緒に居れますですよ」

「ああ……ま、何とか上手く行きそうだわ。一階堂特区に利点は犯

罪者の多さだがよ。龍介の管理情報を

見てるとな、行き過ぎ感がどう見ても漂つてゐるし、小物臭が酷いんだわ。まずは、アイツの匂い消しからだ。

一階堂特区に只の快楽馬鹿は必要ねエ。これからは、新しい犯罪の街だぜ。全く、クソつたれな事によオ

「どんな街にするつもりなの?」

「まずは、治安を良くする事。居住区域のレベルをもう少し上げて、少しワケアリ程度の人間も住めるようにする。

このクソつたれな治安じや相当切羽詰つた野郎しか来やがらねエしなア。そして、一階堂の絶対的権威がほしい。

安全の保証を完全に一階堂が掌握する事によつて、上納金をもう少し上げる。流石に治安良くすりや、反論は

出ねーだろうじ。後はまあ、この前演説した通りだ。あらゆる犯罪が解禁。だが、一階堂の迷惑になる事は禁止。

頭の良いヤツはわかるだろうが、これはもう商売的な意味でしか効果をなさねえって事だ」

「うー……難しいです」

「つまり、強盗や重度の傷害は確実に駆逐対象、その代わり、売買だけは何でも自由つて事だ。

流石に薬の類には無い使うが、後は自由。何でも売れ。何でも買え。人間でも物でも何でも売買可つて話

「成る程。流石うーちゃん。わかりやすいですフ」

そう言い陽気に笑う万里を尻目に、雨龍は一人その他の懸案事項についても考え始めた。

大体の問題はクリアした。だが、一つだけ大きな問題がこの街には残っていた。というよりも、生まれてしまった。

それは余りの治安の悪さに耐えかねた一部住人が始めた自警団という存在。その数は十数人と多くはないが、

どれもこれもが、中々の式神使い。二階堂の下つ端達ではいくら予知の力があるとはいえ、勝つのは難しい。

だが、このまま彼等の存在を許してしまえば、雨龍の理想とする特区を作るのに大きな障害となってしまうのだ。

「ケーキ。ケーキ。うーちゃん好きなのマロンケーキ。私が好きなミルフィーユー」

雨龍は呑気に歌を歌いながらケーキを箱から出している万里を見つめた。万里は、雨龍にとつてかけがえのない

存在だ。母親が死に、孤独だった雨龍の前に現れた万里は、二階堂によつて傷ついた心を癒してくれた唯一の存在といえる。

龍一や竜男が望む大悪党、二階堂雨龍。その結果、「人でなし」「人間のクズ」「二度と近づくな」とはもう数え切れないほど言われてきた。あらゆる人間から恨みを買い、暗殺されそうになつた数等もはや数え切れない。

それでも、雨龍の傍に万里は居続けてくれている。全てを許し、受け入れ、一緒に居てくれている。万感の感謝があつた。

(万里を……守るには……)

三枝は二階堂の下の家だ。万里の姉の千里は、好きな人が居るのに何時かは龍一の女にされてしまうだろう。

もし、千里がその人間と結ばれてくれたらそんな事にはならないかもしがれない。だが、その時は今度は万里が

龍一の玩具にされてしまうだろう。そんのは、絶対に嫌だつた。

千里にも万里にも幸せで居てほしい。

だから この一階堂特区は絶対に成功させなければならない。

ここでの功績を認めさせ、妾の子といつ

立場から脱却しなければ雨龍は一生一階堂に屈して生きていかなければならなくなる。 それも嫌だ。

「う……」

雨龍は万里に氣づかれなによつてひそつとパソコンを立ち上げると、部下宛にメールの作成を開始。

その内容は、自警団の詳細の調査・警戒とこつものと一階堂の本家から精銳部隊を派遣しろといつもの。

一階堂特区に、騒乱の嵐が吹き荒れよつとしていた。だが、

雨龍は迷わない。守りたいものが、田の前にあるから。

一度と失わないために、一度と後悔する事がないよつ。

「はつ、はつ、はつ、はつ！」

何も見えない暗闇。一いつの荒い息遣いだけが聞こえる。それに加え、三つの人の気配と、三つの式神の気配がする。

真砂剣菱は感覚を研ぎ澄まして、味方である暁の気配を掴むと、もう一つの気配。八神村雨の位置を特定しようとした。

だが、出来ない。大まかな方角だけはわかるのだが、距離感が全くつかめないで居る。剣菱は、利き手に握っている

短刀を握り締め、周囲を伺うもそこは相変わらずの暗闇。そして、背後で足跡。咄嗟に緋眼を発動させて、しゃがむと

その上を刃が通り過ぎていく感覚がした。すぐさまその位置掛けて短刀を振るつも、手じたえは無し。

「バカめ、振つて良いのは確実に当たると判断した場合と言つただろ？」

直後、腹部に凄まじい衝撃。腹の中の物が一気に喉を通り抜け、剣菱は跪いて嘔吐した。すると、暗闇の中で指を鳴らす音が聞こえた。それと同時に、部屋の照明が点灯し、目をすぼめながら剣菱は状況を確認した。

ここは、地下にある村雨達の訓練場だ。一ヶ月ほど前から、この辺り一帯で剣菱と暁は村雨達と共に訓練している。

今日は暗闇の中での戦闘訓練。痛む体を傾けて周囲を見渡すと、ボコボコに殴られて気絶している暁の姿も見える。

「ほれ、さつさと立たぬか。一ヶ月も俺様が直々にコーチをしてやつているというのに、貴様等は相変わらずカスではないか。

俺様のプラン通りだつたら、とっくにナナシと同格程度にはなつていると思ったのだが、現実はやはり上手くいかんな

そうほやく村雨を尻目に、剣菱は立ち上ると暁を起しに行つた。「三回名前を呼ぶと、暁は頭を振つてよつやく起き上がり、ばつが悪そうに俯いてしまつ。だが、剣菱には微妙に村雨が褒めているのがわかつていた。

一ヶ月前はクソだつたが、今はカスだ。一応、汚物ではない。それなりに評価してもらつているのだと考へてもいいだらう。というか前向きでなきやこの男とは付き合えない。と剣菱はこの一ヶ月で理解していたので、もはや考へない事にしていた。そんな一人が起き上がるのを見ると、村雨は再び獰猛に笑いながら言つ。

「よし、飯行くぞ。飯。よく殺しあつて、よく肉を食る。これぞ、生物の本来のあり方だからな」

絶対違う　　と一人は胸の中で呟き、村雨の後へと続いた。階段を上がって、たまり場である酒場の一階フロアへ。

もう夕方な所為か、それなりに繁盛している。所々で喧嘩が起り、はたまた下世話な話をしてはいるが、

誰も彼もがそれなりに楽しそうなので、特に気にせず三人が歩いていくと、目の前に一人のメイド服を着た少女が現れた。

天真爛漫という言葉が似合いそうな、柔軟な表情。黒く艶やかな黒髪。その少女を見ると、剣菱と暁は顔を顰めた。

「ありやりやりやん。まつた、村雨にボコられたのー？」

それはこの前会つた少女　秋月罪歌。村雨曰く、この酒場の最高権力者との事。しかも厄介な事に、秋月罪歌は二重人格だつた。今出ているのが、彼女のもう一人の人格、緋澄である。剣菱はこの良く喋る緋澄の事が苦手だつた。だが、村雨は剣菱達に向ける顔とは違い、表情を緩めると、

「ええ。このカス共ときたら、今日も今日とて俺のサンドバックに成り下がりやりましてね。

これから肉を食わせて、もう少し肉食獣としての氣概を持たせようと思案していたところなんですよ」

「そりや、いいねー！ アタシもお肉食べたいけど、まだバイトの時間だからねん。今度はアタシ”達”も連れてつてよー」

「わかりました。……今日は罪歌はお休みで？」

「うん。今日はねん。あの日だからさあ。罪ちゃん調子悪そんで、変わりにアタシが出てるつてわけよん」

「(ノ)苦勞様です。では、我々はこれで

「はいはいー。背後には気を付けてねー」

緋澄に送られて三人は酒場を出ると、大通りを歩いていく。村雨達と出会つて一ヶ月近く経つが、一階堂特区はそれなりに

治安が良くなつてゐるようであつた。凶悪な犯罪は日に日に減少し、明らかに堅気な人間も偶に見かけるほどに。

それでも、まだ堅気の人間は住めないだろ？。だからこそ、自警団が必要だと八神村雨は言つ。聞いた話によると、村雨は

この街で何か商売を始めようとしていた所、偶然白髪の少年、ナナシ。それと行動を共にする秋月姉弟と出会つたらしく。

八神村雨は今でこそこれが、基本的に家に縛られている類の人間だ。だからこそ、秋月には絶対的な忠誠を誓つている。

「そういえば、村雨。秋月の方とはどのような人間なのだ？」

ふと気になつてそう村雨に剣菱は聞いてみることとした。

「ハツ。姉がアレだからなあ……ビーセ、弟のほうも口クでもねえに決まつてるじゃねーか」

暁がそう茶化すも、村雨に拳骨を一発くらいすぐに大人しくなつてしまつ。そして、今度は村雨が口を開いた。

「狂はどちらかといふと、お前等よりは大人だ。俺様と出合つまでずっと、ナナシと緋澄と囚と罪歌の相手をしていたらしいからな。相当精神年齢が高いぞ。少なくとも、暁貴様のようなカスよりは上だらつ」

「るつせえんだよクソおやじつーー！」

「ほほお。俺様がオヤジか。……ほほお。ほおほお。うん。ああ、イラついてきたぞオー！」

再び村雨の拳骨をくらい、暁は頭を押さえながら黙つて歩き出した。剣菱も肩をすくめ、村雨の後に続く。

そして、三人がほぼ毎日通つている食堂へと辿り着いた。剣菱と暁がメニューを見るまでも無く、店員に「こいつら一人には肉とビールと飯」と言い放ち、自分は何を食べようかを真剣に悩んでいた。もはや、これにも慣れだ。暁は近くにあつた式神関連の新聞を取り、剣菱と自分自身の前に広げる。

「お、七海と鴻巣の抗争にやつとケリがついたか……。やっぱ、十名家の喧嘩つてスゲエんかねえ。相手は海の藻屑だつてよ

「わからん。我が見た事ある有名どじひは、八神正宗と千島蒼威だけだ。それでも、奴等は十名家に属しておらん。

あの一人とも、凄まじい式神だったが、十名家に属するという事は、やはりもつと強いのではなかろうか」

「……ふむ。いい疑問だな」

メニューが決まったのか、何時の間にか村雨が珍しく機嫌が良さそうな顔で剣菱と暁の方を見ている。

剣菱は意を決して、触れてはいけなさそな事を聞いてみるとした。下手すれば殺されるかもしれない。だが、それでも聞きたいことがあるのだ。

「八神正宗は、強いのか？」

そう問うと、一瞬の間が空き、

「強い。何故だか知らんが、俺様が海外で教会とか苛めてた隙に、別人のようになつてやがつたな。

アレは子供の頃から捻くれに捻くれていたんだが、どういうわけか、一本筋が通つていやがつた。

確實に蒼威の影響だろう。いや、陸人のバカ小僧の方か？　どちらでもいいが、今までとは段違いだった。

あの日皆殺しにしてやろうと思つていたんだがなあ……あれは俺様の人生最大の誤算だった

そう言ひとて村雨は左腕を差し出し、暁と剣菱へと見せる。よくよく見てみると、それは義手であった。

状況から察するに、八神正宗に左手を切り飛ばされてしまったの

だろ？ 晓と剣菱は押し黙つてしまつが、

当の村雨は涼しい顔をしてそのまま黙つて義手を弄り始めてしまつ。

そして、暫くすると大量の焼肉が乗つた更の上に山のよつなご飯が盛られた皿とビールが三本運ばれてきた。

抵抗しても仕方が無いので、剣菱と曉は黙々とそれを口に運ぶ。味は悪くないのだ。

村雨は幸せそうな顔で北京ダックなんかを酒のつまみでつまんでいる。その後、完食すると村雨はテーブルの上に五千円札を起き、

「さて、俺様はこれから枕営業があるから、このまま仕事場所に向かうぞ。釣りはくれてやるから、後で好きなものでも食え。

ちなみに、満腹の状態で腹を刺されたりすると、死亡確率が格段に跳ね上がるからな。夜道は気をつける事だ。

しかも酒も入つて頭がフワフワするだろ？ ふはははは… 貴

様等に喧嘩を売るように何人か仕向けておいたから安心しろ。

確実に襲われるだろ？ から、殺されずに家に帰つて、また明日俺様の所に顔を出せ。そしたら貴様等を次のステップへと進めてやろうではないか」

そう最悪な言葉を吐いてくともはや振り返らすじ、村雨は食堂から出て行つた。

村雨と別れ、剣菱と暁は特にやることも無いので一階堂特区をバラバラとつらついていた。

あの酒場を拠点とした自警団に入つてからとこいつもの、よつやく二人はこの街に馴染んできた気がしないでもない。

顔見知りもだが徐々に増えてきたりはしていたし、逆に今のようになつやつて命を狙われる事だつてしましばある。

「ふむ……」

「つたくよ。あのおっさん、何考えてやがんだ！」

現在剣菱の前に倒れているのは、拳銃を持った男達の死体。剣菱と暁はこの男たちの事を知つていた。

彼等は下つ端ではあるが、立派な一階堂の一員。狩猟部隊とも呼ばれる一階堂特区の闇とも言える存在。

こんな男達に突然命を狙われては流石の剣菱達でもただでは済まない、と思つていたが案外あつさりと片付いてしまつた。

八神村雨の訓練は非常に厳しいものだつたが、流石にこれは今考えても背筋が震える。

早々にこの場を立ち去つうと、死体はこのままに歩いていた裏路地から走つていいくと、

「きやつ」

路地から出た所で誰かとぶつかつた。剣菱達よりも背の低い人間だつたので、こちらは倒れはしなかつたものの

相手は転んでしまう。そして、よくよく見てみると、ぶつかつた子は何処かで見た女の子。

「む。お前は……」

「あ、お兄ちゃんだ！」

ぶつかつたのは剣菱が特区に来た初日に助けた女の子だった。相変わらず、危なっかしいというか

今まで生きていられたのが不思議なくらいである。

「ん、お前。アマネと知り合いだつたんか？」

すると後ろから歩いてきた暁が、微妙に驚いた顔で剣菱へと問う。剣菱も驚きを隠せなかつた。

お前もかとでも言いたげな顔で暫く一人が見つめ合つていろると、女の子 アマネは楽しそうな声を上げた。

「暁お兄ちゃんと光線のお兄ちゃんはお友達だつたんだね」

「つむ。それと、まだ名を名乗つていなかつたな。我的名は真砂剣菱だ。お前は？」

「アマネだよ。よろしくね、剣菱お兄ちゃん」

「つむ。それで暁、何でお前はアマネと知り合つなのだ？ ま、まさか……お前。このクズが！」

と、剣菱が犯罪者を見るような目で暁を見た。

「ふ、ふざけんな」「ラマ！ 僕はコイツが危なっかしくて、イライラしてきたから式神の使い方を教えてやつてるだけだつたの！」

「アマネ。本当にやうなのが？」

「うん！ 式神って面白いよね。暁お兄ちゃんに教わつてから、変なお兄さんを三人ほど追いつちやつた」

それを聞くと、剣菱は安堵したように胸をなでおろした。一階堂特区は、力が全てである。

だから、アマネのような力が弱い女の子は全て強者の慰み者や玩具とされてしまうのが、実情であるのだ。

だが、式神を得た事によつて幾らかはマシになるだらつ そこまで思つて剣菱は、自分の本心に気がついた。

自分は力が得たくて、八神村雨の弟子となつた。だが、本当に、自警団というものに惹かれたのは、こついう弱いもの

を守りたかったのかもしれない。妹を守れなかつたあの頃とは違う。今の剣菱にはそれが出来る気がした。

これから復讐に生きようとしているものが、こんな事を思つのはバカらしい。と、自分で意見が出るも、

それはそれ、これはこれ。と剣菱はそれを受け入れた。復讐は、する。だが、守りたいというモノだつてあるのだ。

「お、おい剣菱。いきなりやけるとか、気味悪いぞ？」

「剣菱お兄ちゃん。何か楽しい事でもあつたの？」

一人の問いに剣菱は答えずに、ただそのままの笑顔を返しただけだつた。

その翌日、一階堂雨龍は自分の執務室で頭を抱えていた。昨日、警告の意味も兼ねて自警団に最近入った

少年一人に刺客を差し向けたのではあるが、全員返り討ちという結果になってしまったのである。

監視カメラの映像から一人の事を調べてみると、一人は御崎の裏切り者。しかも、直系での御崎朱音の兄にあたる男。

もう一人が、緋眼の一派の真砂。全員悪鬼に憑かれ、八神に皆殺しにされたと聞いていたがまさか生き残りが居るとは思つてもいなかつた。これは、絶対に一階堂特区の脅威へと成りえる。

「仕方ねえ……か」

そう呟くと、電話を取つてとある番号を押す。これは、一種の賭け。雨龍は絶対に負けるわけにはいかない。

その為なら十名家になんかこだわつてられない。もしもその時の為に最強のカードを揃えておく必要がある。

数「一」ルすると、電話が繋がつた。出たのは勿論その家の使用人。家の名と、下の名を敢えて別々に名乗ると、暫くお待ちくださいと言われ、待つ事一分ほど。ようやくお相手が出てきた。

「もしもし、お電話変わりました。御崎家長女、御崎朱音でござります」



First contact : 4 兄と妹（前書き）

緋色の眼執筆当時は、文章力がカケラも無かつたのであんまりな戦闘シーンだった暁と朱音ですが。ようやくリベンジを果たせた気がする。.

何かイベントでもあるのか、今日の酒場は思いのほかすいている。もはや、やる事が無いぐらいに。

この酒場の店主も今田はあつさりと帰ってしまう、現在居るのは最近調理担当として雇われた剣菱と、

オーダー担当の罪歌の二人だけ。本当に、この酒場は大丈夫なのかと思ってしまう。村雨と暁は、先ほどから情報収集に向かい、狂とナナシは、特区の外に出て特区以外の情報収集をしているので、暫くは罪歌と剣菱の二人だけだ。

「ねえ、剣菱」

「む。何だ?」

カケラも似合っていないエプロンを付けた剣菱は、アイスクリームの下ごしらえをしていた手を止めた。

罪歌と剣菱が初めて会ったのは、もう一ヶ月以上も前の話だ。仕事でぶつかり、戦闘したが罪歌の圧勝。

だが、始末はしなかった。罪歌は無用な殺生は好まないし、何より剣菱が緋眼使いという事もある。

何より重要視したのは、剣菱もそうだが暁も罪歌と同じ、復讐にとり憑かれた目をしていた事。

「剣菱と暁はこうやって私達の仲間になつたわけだけど、貴方の最終目標って何なの?」

「八神正宗と千島蒼威を殺す事だ。可能性を信じず、我が一族を殺した恨みがあるからな」

「そう……」

ああ、と罪歌は心の中で悲しくなつた。罪歌だって、正宗の事を恨んでいた。あれだけ優しくしてたのも全ては秋月の直系である自分達の恩恵に預かりたかっただけ。そして、秋月が悪鬼に襲われた際には自分の事も、狂の事も全て見捨てて助けてくれなかつた。他の一族だつて、そつだつた。

散々秋月に頼つていたのに、最終的に要らなくなつたら捨てる。だつたら、今度は自分達が同じ事をしてやる。とこの特区でしている事は、その足がかりである仲間と資金集め。前者についてはもう、叶つたと言える。

「全く最低よね……」んな世界。悪鬼なんて、居なければいいのだ

「だが、現実には居る。だから、こうして力をつけて殺すしかない得力無いわよ」

「……ほほお。折角我が氣を利かせて作つてやつてるとこいつの」。お前は、これが要らないと見えるが、それでいいんだな

「……ごめんなさい」

「全くもってアホだな、貴様は」

「テーマ程じゃねーよ、クソジジイ」

八神村雨と御崎暁のコンビは、いがみ合ひながらも一階堂特区の数箇所での情報収集を終え、

ようやくの帰路につこうとしていた。村雨は自身が放つ拳骨を前までとは違い、軽くかわせるようになった暁が  
小憎らしいとばかりに、拳を再びポケットの中へと突っ込むと黙つて先を歩く。

村雨と出会つてからそろそろ一ヶ月と少し、その間に暁は剣菱よりも弱かつた為に、散々村雨に殴られてきた。

何度も病院の世話になり、今では常連と呼ばれてしまつぽい。だが、確實に暁は強くなつている。そんな実感があった。

村雨の理不尽な暴力に耐え、受け流す術を思いつき、そして戦闘の手ほどきを受けて此処にいる。

「クソガキの分際で生意氣な……」

最初はクソだったが今ではクソガキ。剣菱が言つには、自分達は村雨によつやく人間として認められたという事。

胸になにかもやもやしたものを抱えつつ、村雨の後を暁は走つて

追いかけた。だが、その足が途中で止まる。

今居る場所から見えたものに気をとられたからだ。それは、流れ者ではなく、それなりの立場の者がこの特区に来る際に使う駐車場。少量ではあるが、高級車ばかり並んでおり、近くには一階堂の警備兵も居た。

「む、どうした

「いや、あれ。三枝の長女じゃねーか？」

村雨も曉に釣られて田をやると、三枝家の長女が車のすぐ近くで同じ位の年の子と会話しているのが見えた。

物腰が柔らかそうで、綺麗な顔で笑う女の子だ。曉は完全に見惚れてしまつており、村雨もつい田をやつてしまつ。

そして、彼女を見ていてふと思つ。幼い頃から気性が荒く、八神という家族集団の中でも孤立していた八神村雨。

そんな村雨が一番欲し、今では一生手に入らないもの。何となくではあるが、それを彼女は持つてゐる気がした。

「…………」

「あ？ んだよ、おっさん。テメー、ああいつタイプが好みだつたのか？」

「……なあ、クソガキ」

「だから、何だよ？」

「今から、あの女に近づいたらどうなると想つ?」

虚ろな目をして、綺麗な笑顔を浮かべる少女を見ている村雨に危機感を覚えたのか、暁は冷や汗を浮かべ、

「ば、バカ！ んな事してみろ。相手はあの狂乱の三枝だぜ！？ 殺されちまつに決まつてんだろ？！」

そう言つと、流石の村雨も自分が何か変な事を言つたのだと自覺していたのか、ため息をついた。

「だよなあ……」

もし、この時八神村雨が彼女と会話していたら。もし、この時、村雨が勇気を出して一步進んでいたら。

何もかもが変わつたのかもしれない。だが、結局村雨はため息をつき、彼女から目を逸らす。

その間にその笑顔の綺麗な少女は、車へと乗り込み、何回も三枝の長女と別れを惜しみながら、ついに行つてしまつた。すると、それと入れ違いでもう一台車が入つてきた。その車を見た途端、暁は身を強張らせた。

「む……」

「何で……御崎の車が。おい、おっさん。一回呑んで

「過去から、逃げるのか？」

暁の言葉に、村雨はただ一言呑みこはなつた。暁の表情は硬い。色々な葛藤がある。

何より、あの車の中に乘つている人間が誰なのかはもうわかつてゐる。御崎の家は荒事はそこまで得意ではない。

一部の直系が異様に郡を抜いて強いのでそう思われているだけなのだ。そして、ここは二階堂特区。

流石に十名家の仕事にはちゃんとした人間が来るはず。その中でも御崎の力を誇示てきて、尚且つ十名家の

期待に応えられそうな人間なんて暁が知る限り一人しか居ない。だからこそ、嫌だ。

「……テメエに、何がわかる」

「フン……まあ、今はいいだろ。引くならさつと引くぞ」

そう言ひと村雨は踵を返して走り出した。暁も、苦々しげな顔でそれに続く。そして、暫く路地を走つたり、裏道を抜けたりしていると、村雨の姿が何時の間にか消えていた。何か、嫌なものを感じる。

こんな日はさつと家に帰つたほうが無難だ。そう思い、裏路地から出て中心街を歩き始めた。やはり、違和感。

何か首の辺りがチリチリする。一瞬振り返ると、何かが視界の中で変化した。何か欣然としないものを抱えたまま暁は再び裏路地へと入ると、階段を音を立てずに登り、物陰に潜む。すると、すぐに誰かが走つてくる気配。

「あいつ等は……」

見覚えのある顔だつた。御崎の、直属部隊の人間だ。実力的には大した事が無い。それを知つてゐる暁は、

物陰から飛び出すと、式神を発動。ここ暫くといふもの、暁は村雨にとある訓練を強要されていた。

遠距離から走つてくる村雨に百発以上放ち、尚且つ十発以上有効打を与えるという単純な訓練だったが、

相手は緋眼使い、百発撃つだけでもかなり集中しなければならないのに、それに加え、有効打を与えるのは難しい。

訓練は困難を極め、何度も何度もボコボコにされた。その甲斐あってか、一瞬で一発放ち、二人居た直属部隊は一撃で昏倒した。

「……ふん

微妙な達成感がある。だが、満足はしていない。御崎がつけてきたという事は、最強の相手と対峙しなくてはならないからだ。そのまま暁は、階段を登つて屋上まで上がる。とりあえず、周囲の状況を確認したいからだ。

そして、屋上へ辿り着いた瞬間、黒の斬撃が暁へと襲い掛かるが、何かを考えるよりも先に体が動き、事なきを得る。物陰に隠れ、斬撃の方向を見ると、そこには半ば予想していた人間の姿があつた。

「お久しぶりです、兄さん」

やはり と、暁は舌打ちした。屋上の縁に優雅に腰掛け、優雅な佇まいでの自分の妹、御崎朱音がそこに居た。

とりあえず、今は式神はしまつてあるようで、暁はゆっくりと物陰から出ると、数年前まで可愛がっていた妹と対峙。

昔を思い返してみれば、とても仲の良かつた兄妹だったと思う。だが、今はそれと全く正反対。

暁が敵前逃亡し、御崎の裏切り者とされた今では、狩るものと狩られるものになってしまっている。

「久しぶりだな。 何で、お前がここに居る？」

「二階堂から連絡があつたんですよ。お宅の脱走した長男が、二階

堂特区の害になつてゐるつてね。

つまり、身内の不始末は身内でつけろつて話です。それに、私も、試されているんですね。

御崎を担うものとして、裏切り者の兄を始末できるかどうか。なんとこゝやら、嫌な家に生まれてしまいましたよ」

「ほお、テメエの出世の為にテメエの兄貴を殺すつてか。元々、瀬死だつた俺を餌にしたのはそつちなのによお」

「それが、家です。兄さんが餌役から逃亡した所為で、攻撃に転じた十二人があの大悪鬼に殺されてしましました。  
その責任は取らないとつて事です。　といつわけなので、お分かりいただけましたか？」

何処までも冷たい妹の言葉。怒りの炎が暁の中で滾つていく。そう 結局、弱いものが悪いのだ。

だつたら、強くなつてやる。御崎を越えて、御崎を弱いものとすれば、暁はこれから先もずっと生きていける。

そう思つと、暁は笑つた。もつ、妹だろうが何だろうが容赦はない。そう決めてしまった。

「わかつた。　とりあえず、お前を殺す」

「……わかりました。私も、始末つけさせてもらいます」

朱音はゆつくりと立ち上がり、手を大きく広げた。すると、朱音の影が大きく膨らみ、影で出来た鎧武者が現れた。

暁はその式神の能力を良く知つてゐる。歴代の御崎の中でも最強と呼ばれる式神、影武者。

影武者は刀を引き抜き、一気に暁へと迫る。暁も腰から、村雨に

貰つた短刀を引き抜き、鎧武者へと接近。

前に戦つたときは、鎧武者の速さについていけなかつた。だが、今はそうではない。村雨に比べると、笑えるような遅さだ。

振り下ろされた刀の一撃を紙一重で避けると、短刀を影武者の顔の部分に叩きつけた。

もがき苦しむ、影武者。暁はその隙に助走をつけて、隣のビルへと飛び移り、朱音日掛けて霹靂の矢を連射した。

その数、七発。朱音は影武者を影の中にしまつと、腕の影の中から壁を作り出し、雷の矢を防ぐ。

「……やつますね」

そして、朱音の足をついていた場所の影が膨れ上がり、朱音の体「」と影の線となつて暁まで伸びていく。

走るよりも早いので、朱音はすぐに暁へと追いついた。対する暁は、霹靂を持っていた腕で、短刀を掴み、雷を纏わせ

踵を返して朱音へと迫るも、朱音も朱音で手を丸めて、影を作り、両腕に剣を作ると暁へと接近。

雷の剣と影の剣が交差する。剣の技量と体格は暁の方が上なので、そのまま押し切ろうとしたがそつはいかない。

「出できなさい！」

朱音の影から影武者の野太い腕が伸びてきて、暁の胴体を掴むと思いつりビルの外へと投げつけた。

「つー！」

だが、暁もこれを予想していなかつたわけじゃない。先端に銅線を巻きつけておいたフック付のワイヤーを

投げて何とかビルの一部に引っ掛けると、事なきを得る。だが、朱音の攻撃がそれで終わるはずが無い。

慌てて上空から伸びてきた影の一撃を避けながら、地面へと飛び降りた。痛みと痺れが足の裏から伝わるが構つてはいられない。そのまま走り出す。対する朱音も、影を伸ばして着地すると、走り出す。

「すいません。兄さん……時間が無いので、これで」

暁が走っていた前にあった影。ほんの小さな建物から生まれた影から影武者の拳が飛び出し、暁を殴りつけた。流石に予想ができない攻撃だ。地面に頭から叩きつけられ、意識だけはどうにか繋ぎとめる。

その間に朱音は暁との距離を詰め、自身の影から幾つもの影の刃を呼び出した。暁はそれに敗北を覚えた。

もう、勝てない。そんな惨めな感情が頭をよぎる。だが、その時、風が吹いた。唯の風じゃない。

台風の時の、殴りつけるような暴風だ。

「おひと、姉ちゃん。そこまでだぜ」

暁の意識がよつやくはつきつとすると、眼前に金髪の男が立っていた。知り合いには居ない顔だ。

だが、何処かで見た事がある。暁は慌てて立ち上がり、金髪の男を見据えると、

「誰だ、お前？」

と問う。

「ああ、会つのは初めてだな。俺は、秋月狂。秋月罪歌の弟だ。村雨からさつき連絡があつてな。ウチに入った新人が、何か危ない目にあつてゐるから助けてやつてくれつて頼まれたんだよ」

「おっさんが……？」

「そうだ。村雨の奴。今、ナナシと商店街の肉の特売戦争に参加してゐるから、これねえらしいんだわ」

「俺の事は特売の肉以下かよ」と思つも、一応連絡はしてくれたのだ。素直に感謝することにした。

何より、八神村雨らしいと。笑いまでこみ上げてきたほどだ。さつきまで、死にそつたのがウソのようだ。

ふと、見ると朱音が羨ましそうな顔で自分の事を見ていたことに気づく。だが、それは一瞬で消え、

「一体一では分が悪いですね……今日のところは、引きます」

「ああ、出来れば一生そのツラ見せないでくれ。アンタとは正直、戦いたくない」

「それは無理な相談です。では、兄さん。また、お会いしましょう」

そう言つと、朱音はとぼとぼと歩いていつてしまつた。後に残つたのは状況が良くわかつていらない狂と暁だけ。

とりあえず、話は後にするとして、狂と暁は自己紹介をしつつ、自分達のアジトである酒場へと向かう。

酒場までの道は特に危険は無かつた。相変わらずの一階堂特区の現状を見ながら、歩いていく。

そして酒場までつくり、中は相変わらず騒がしい。中に入ると、それぞれのテーブルについて、何時もの面子が肉と飯のみの焼肉大会を開催していた。一人は、その中の一つ、剣菱、罪歌、ナナシ、村雨、そしてアマネが居るテーブルへと向かう。

すると、恐ろしい勢いで肉を食っていた村雨が顔を上げ、

「クソッタレ。もう帰つてきやがつた。俺様の見込みだと、今頃狂が暁の死体処理をしている時間な筈なのだが！」

「うおい！　俺の死体処理の為だけに狂を向かわせたのかよー！？」

「だつて……あの女。お前の妹だつけか？　影からちょっと見てたんだが、とてもじゃないが貴様じや勝てんぞ。御崎もあんなガキを用意してやがるとは、八神も結構苦戦するんじゃないか。俺様でも微妙に手こずるほどだ」

「なら、助けるよー。じつちは結構ヒヤヒヤしてたんだぞコラフアー！」

暁がそう怒鳴ると、無言でタン塩だけを粗つて食べていた罪歌が顔を上げ、

「暁、うるさいわよ。生きてたんだからいいじゃない。ほら、これ貴方と狂の分。さつひと席について食べなさい」

「俺の命つて……焼肉よりも低いのか……」

暁と狂は、席に着いて焼肉をつつき始めた。剣菱は我関せずな態度で、恐ろしい勢いで焼いては消費されていく。焼肉に脅えているアマネの為に、肉を取つてやつている。ナナシ

は一見笑っているが、先ほどから罪歌と

壮絶なタン塩争奪戦を繰り広げては敗北していた。村雨は、豚肉ばかりを焼いてひたすら飯と肉を往復している。

暁はそれに負けじと箸を突っ込ませていぐのに対して、狂ほのんびりと一枚を大切に焼き、守っていた。

「つーか、おっさん。何で、いきなり焼肉なんだ？　しかも、酒場の密にまで振舞うなんて随分気前がいいじゃねーか」

「……む？　こいつ等は、客じゃないぞ。俺様の私的な部下だ。ただ、戦闘力がクソッタレな程弱いので主に情報収集や、雑務を担当してもらっているだけだ。ふははは、偉い。俺様偉い。部下の事ちゃんと考えてる」

「え……」

「つーまーりーだ。今現在、俺様と対等に戦える仲間と認めたのは、今、このテーブルについてる奴等だけだぞ。

ふははは。泣いて喜べ暁。今日の戦いは良かったから、貴様も一応合格だ。この、クソッタレめ」

すると、他のテーブルから「村雨さんー。そりゃないつすよー」とか、軽い口調が次々と聞こえてくる。

村雨も村雨で機嫌がいいのか「今すぐ殺してやるから、速攻生まれ変わつて成長しろ」等と無茶な事を言つている。

すると、暁の心中に何かが芽生えた。口では表せない。どうしようもない感情の波。すると、アマネが不安そうな声を出した。

「わ……私も？」

「む。そうだなあ……アマネも一応、候補だな！　何より、貴様の式神は面白い！　面白すぎるぞ。」

今すづチ殺してやりたい程に貴様の式神は面白い。後、十年経つたら、絶対に俺様と戦え、勝つたら嫁にしてやる！」

そう機嫌よく返した村雨だが、物騒な物言いにアマネは完全に脅えてしまって剣菱に抱きついている。

それを優しく宥める剣菱。どうやら、年下の扱いには相当長けているようだ。そして、今度はナナシが口を開いた。

「駄目だよー、村雨さん。アマネっちは、僕のお嫁さんにするんだから！　ね？　アマネっち」

するとアマネは頬を染めて、剣菱の方を一度見ると顔を伏せてしまった。

その瞬間、ナナシと狂の表情が驚愕に染まり、罪歌だけが意味わからなくなさそうに、相変わらず肉を焼いている。

狂と暁は大体事情を理解したのか、生暖かい目で剣菱の事を見つめた。そして、村雨がビールを煽り、

「ふはははー！　ナナシ、ざまかないな。まさか、身近な新参者に取られるとは。この負け犬が！」

と嘲るように笑う。ナナシも負けじと、手近にあつた焼酎をラップ飲みし、

「む、村雨さんだつて負け犬じゃんよー。何、その左手。弟に負けるとかマジないわー」

「ぬう……！　ナナシ貴様！　表に出ろ」

「望むところさあ…」

「お、おい。村雨もナナシも落ち着けつて。ほら、まだ肉も酒も飯もいっぺいあるからよ」

いがみ合つ一人を狂が仲裁しようとするが、何故か今度は狂に一人の矛先が向いたようだ。

特にナナシが酷い。酔っ払つてゐるのか狂にくだを巻き、離れない。剣菱は何もわかつてないのか。

ただ黙つてアマネに抱きつかれながら状況を静観していた。そして、暁は気づく。何時の間にか、笑つてゐる事に。

そして 理解した。御崎を出てから、よつやく自分は信頼できる仲間を手に入れたといつ事を。

「ほーお、暁。何、一人でニヤけている?」

唐突に、さつきまで狂に絡んでいた村雨が話しかけてきた。暁は恥ずかしいのか、「うつせ」と短く呟く。

それで終わると思ひきや、今度は、村雨の手がポンと頭の上に乗つた。更にそのまま、わしゃわしゃと髪をぐしゃぐしゃにされ、

「ま、今日はよく頑張ったな」

そう言つと村雨はそのまま酒瓶を持って、酒場の外へと出て行つてしまつた。すると、暁の心が何故か震えた。

我慢できなさそうな感情が今にも溢れそつである。恥ずかしい。だが、どんどん感情は昂ぶつて行く。

すると、氣の毒そうな顔をした罪歌と目が合つた。氣づかれたか

と暁は恥ずかしさから、罪歌を睨むも、

「な、何見てんだよー。」

「いや……なんて言ひていいのかな？ わよつと、髪触つたらひるがなさい。」

そう言われ、髪を触つてみると何故かベトベトしてくる。匂いを嗅いでみると、焼肉のタレのにおいがした。

昂ぶつていた感情が一瞬、急速に収まり、他の感情が凄まじい勢いで上昇を始める。

「さつきナナシが暴れたときに零れたのが手についたのね……」

罪歌の氣の毒そつな視線が痛い。そして、暁は咆哮した。

「あんつの クソジジイイイイイツ！ 何処行きやがったアアア  
アツー！」

久しぶりの投稿つ！

その日、一階堂特区の天気は快晴だった。時刻は午後三時を過ぎた辺り。八神村雨は、たまり場である酒場の外に設置されているカフェテラスで新聞を広げてのんびりとくつろいでいた。だが、一人ではない。

村雨の対面には、凄まじい量のフルーツやらアイスやらお菓子が突き刺さったパフェをつづいているアマネが居た。

厨房で働いている剣菱がアマネの為に特別に作ったものだ。村雨でも「うつ」としてしまった量のパフェを、アマネは剣菱の好意を無駄にしたくないのか、必死になつて食べていた。

「……残しても、構わんぞ?」

「ううん。食べれる。村雨おじちゃんに今日はいっぱい教えてもらつたから、お腹すいちゃつた」

そういうアマネだが、顔色が芳しくない。だが、アマネが食べるというのなら、もはや村雨に口を出す権利はない。

アマネの式神に興味を持ち、剣術の基礎から最近叩き込んでいる村雨だが、アマネの出来は良くない。

優しすぎるのだ。自分の身を守るためなら、それなりの攻撃を出来るが、それ以外では大した一撃は打てない。

いや、打つてこない。勿体ない逸材だ、と村雨は心の中でため息をつき、「コーヒーを一杯口に含む。

「ふむ……」

穏やかすぎる午後だ。こんな安穏とした日々を過ごすのは、初めての経験で若干戸惑っている。

八神村雨は修羅の道を歩んできた人間である。数え切れないほどの人を殺し、気まぐれで他人の人生を破壊する。

それが、確固たる自分 の在り方だという確信もある。だが 最近は何かがおかしい。心に何かが引っかかる。

この町に来てから特にそれが強い。自分が変わってしまっている気がするのだ。現に、数年前の自分なら

アマネの訓練をつけたりしなかつたし、剣菱と暁の命もあの場で奪つていただろう。

「おじちゃん。どうしたの？」

と、考えていると、アマネが心配そうな顔で覗き込んでいた。余りの顔の近さに、村雨は若干身を引く。

こんな無防備に近寄られた事が今までの人生の中にはあつただろうか。こんな、穏やかに他人と過ごした事があつただろうか。

否、一度も無い。すると、アマネは持っていたスプーンでパフェを掬うと、村雨の前に差し出し、

「疲れたときは、甘いものを食べるのがいいんだって。だからはい、おじちゃん。あーん」

冷や汗が久しぶりに出てきた。この八神村雨がこんな小学生にあーんして貰うなんて、シユールすぎる光景だ。

と客観的だが、ある種主観的に判断し、一瞬で周囲を伺う。中で働いている剣菱と罪歌の姿は見えない。

ナナシは朝からパチンコに行っている。先ほどプレミアキターとのメールが来たので、当分帰つてこないだろ。

狂と暁は仲介所からの依頼。居長の直系の子犬探しの依頼に奔走

しているはず。だと状況と思考を数秒で完了すると、アマネの突き出したスプーンに素早く口を運び、パフュを一口貪った。

「美味しいでしょ？」

「……ああ、しかし甘つたるこな。帰つたら、ひやんと歯磨きをするのだべ」

「うんー。」

そう言つと、アマネは快活に笑つた。村雨も釣られて笑つてしまふ。そして、パキンッといつ音が響いた。

アマネの顔の横に、一枚のカードが浮いている。これが、噂に聞いていたアマネの式神の力だと判断。

剣菱と暁とナナシで考えてつけた名前は「絆」。正に話に聞いていた通りだ、と若干村雨は驚いてしまつた。

そしてその能力は、今まで考えて、村雨は自分が完全に変わつてしまつた事を自覚した。

「あ……おじちゃん。勝手にごめんなさい。この子、これだけはぬーー」ときかなくて……」

アマネもそれについて悩んでいたようだつた。だからこそ、剣菱達は「絆」という綺麗な言葉に置き換えたのだと判断。

昔の村雨だつたら、この瞬間に確實にアマネの事を殺していた。だが、今は握り拳一つ作つていない。いや、作れない。

「気にするな。俺様には実害は無いしな」

そう、何とか大人として強がつた。アマネはそれに無事騙されてくれたようで、安堵の息を漏らしている。

とりあえず、この件については保留として置くことにした。震える手を押されて、何とかコーヒーを再び口に含む。

そのまま何気なしに周囲を見渡すと、違和感。相変わらずの路地裏だが、何かが違う。

そして、村雨はその違和感に気がついた。何人かが、風呂敷包みを抱えていた。どれもこれもが、同じ形。

しかもその人間たちの表情がどこかおかしい。追い詰められ、極限状態に達しているような顔だった。

それを見て、反射的に、村雨は立ち上がり、大きく叫ぼうとする

と、先にアマネが声を上げた。

「お父さん！」

風呂敷包みを抱えた男の一人が、アマネの声がした方へと振り向く。そして、その表情が更なる絶望に染まり、

次の瞬間だつた。男は、一瞬だけ我にかえり、風呂敷を大きく上方へと投げ捨てるとアマネへと駆け寄つた。

村雨にはその風呂敷が何なのかそれだけで大まかに理解できた。アマネと父親らしき人間のいた方向に、

テーブルを投げ捨て、村雨自身は隣のテーブルを盾のよつに構えて、同時に紅椿を顕現。

直後 男たちの持つていた風呂敷包みと、上に投げ捨てられた風呂敷包みが閃光を発し、大爆発が起きた。

「な……つー?」

一階堂のジルの最上階から、眼下に広がる町が破壊されていく様を、雨龍は驚愕と共に、見下ろしていた。

炎を上げている箇所は三箇所。しかも、その付近には既に結界が展開され、一階堂のトラックが乗り付けている。

町に住ませていた一階堂も知らない雨龍の密偵から報告が入つて、一分ほどでこの惨状。

誰がこんな事を　想像を巡らすも答えは出ない。密偵から入つた連絡も、町の様子がおかしい。とだけ。

「つーちや……雨龍様」

万里が不安そうに雨龍の袖を引く、それでどうにか冷静を取り戻す。とりあえず、現場に行こう。

そう判断し、出口の方へと歩いていくと、唐突にドアが開いた。入ってきたのは　派手な衣装の男だ。

それは一階堂の時期頭にして、雨龍の腹違いの兄である、一階堂龍一。

「兄様……」

「よお、雨龍。相変わらず、可愛くなえシワしてんなア、おい」

ヘラヘラ笑いながら言つ龍一。そして、雨龍の中で全てが繋がつた。

「外の騒ぎは兄様の、」指示でしょうか？」

「ああ、喜べ弟よ。テメーが抱えた問題は、この俺様が今日で解決してやるつ。

なんだつけか？ 自警団？ あの八神のイカれ戦闘狂が中心の、力ス共に随分て「ぱすてるわうじやねーか」

「……はー。申し訳ござりません」

「いいや、気にするな。俺も、久しぶりに暴れたいんだわ。手始めに、一階堂に借金背負ってるクソ共を脅してな、人間爆弾をあのヤロー共と、反抗勢力にぶちこんでやつたからよお。戦争が始まるぜえ！」 ははははー！

くやつたれ。と言ふそうになるのを、雨龍はギリギリで堪えた。この兄のやり方は、身にしみてわかっている。

自分の欲望にしか興味がないのだ。殺したいから殺す。ただ、それだけ。確かに、自警団の存在は邪魔

だつた。しかも、強い人間が多い。だからこそ、他の利用価値があつたのだが、これではもう全てが水の泡だ。

「しかし、人間爆弾は、流石に住民達の反感を買つのでは……？」

「ああ、そりや、お前が何とかするんだな。実はよ、今日爆弾にした奴らってのはな。どうしようもねークズだが。

娘や比較的若い連れ合いが多いんだ。だが、無理やりモノにすつと、あいつらつむせーだろ？

だから、邪魔だから有効利用させたもんつたわけだ。はははー！ これぞ、一石二鳥つてヤツじやね？」

「ですね。流石兄様です。お話の通り、爆弾の件については私が対処致します」

「おう。出来によつちや、雨龍。テーマの待遇について、俺が親父に言つて色々甘い汁吸わせてやつからよ。気張つてやれや」

「はい……！」

だがしかし、これはチャンスでもあった。龍一が口利きしてくれれば、権力は倍以上に跳ね上がる。

雨龍の最初の目標である妾の子からの脱出ができるのだ。迷ったのは、ほんの数秒。

自分は人の恨みを買い、その代償として大切な者を守ると決めた。

龍一は、その雨龍の瞳を見て

表面上はへラへラ笑つたまま、心の奥でほくそ笑む。　これは、死んだ弟より良い手駒になると。

「とりあえず、その自警団の奴らの詳細見せろよ。流石に、相手があの八神村雨だ。

俺たち十名家の人間でも、下手すりや食い殺されちまうような化けもんだぜ。準備するに越した事はねえ」

「ですね。こちらになります」

雨龍が書類を渡すと、龍一の顔が若干真剣みを帯びる。よくもまあ、これだけ調べたものだと感心もした。

露出が多い八神村雨の詳細は勿論。それ以外の人間の名前までもが、そこに記されている。

しかも、書いてある名前が一名を除き、全員が名家の出身。秋月、

真砂、御崎と油断していたら不味い相手だ。

特に厄介な紺眼使いが多い。それを見た後、龍一は自分の趣味と利益を考慮した結果、

「俺は、この罪歌つてのを貰おうか。それ以外はテーマで処理しな。後、万里は千里と一緒に出る。

流石にこの面子は少し不味いからな。十名家の一階堂、二枝つて体面上、数に任せた方法でやつと

他の十名家である、九我山や四条の連中にナメられかけまつしよ  
「おれじつまつしそ

と言い、肉食獣を思わせるような笑顔を作った。

熱い。と八神村雨は爆発のショックからようやく立ち直った。その手には式神と木製のテーブルが握られている。

目に映るのは瓦礫と炎。そして、うめき声を上げる人間。遠くの方では、悲鳴や怒鳴り声が響いていた。

村雨はゆっくりと立ち上がり、体の状態を確認。体の節々に痛みを感じるもの、出血無し、損傷無しの状態。

それに安堵し、ふと近くに目をやるとアマネが倒れていた。最悪な事に、体中から血を流して。

あの時、近寄っていったのが原因だろ。自業自得だ、と切り捨てて剣菱達を探しに行こうとする、が

「む……」

何故か体と心が合わなかつた。頭ではわかっているのに、村雨は一步踏み出せなかつた。

「俺様も墮ちたものだ……こんなガキ程度に」

アマネの出血はよろしくない。このままでは、十数分もすれば死んでしまうだろう。だが、治療できそうな物は近くに無い。あるのは、死体ばかり。万事休す、だがふと閃いた。一つだけ方法があつた。

だがそれは、八神村雨が一度もした事がない事。そして、今までの生き方を否定する行為。迷つたのは一瞬。

結局自分は甘い、と考えた後に、村雨は唐突に自分の本質を理解した。

「ああ　俺様は、飢えていたのか」

八神村雨は修羅の道を生きてきた。殺し、殺され、悪いことは何でもやつた。その行動の行き着く先は、孤独を埋めたかった。八神という家に生まれて、子供の頃から村雨は独りだったのだ。

力を求めたのは、父を独占したくて。罪も無い人間を殺してきたのは、嫉妬から。それが、自分の本質。だが、眼前で死に掛けている少女は、無垢な好意を村雨にくれた。二十数年生きてきて、村雨は初めて

他人から無垢な、何の含みも無い好意を受け取つたのだ。それが、きっと村雨を惹きつけて放さない。だから

「一度だけだ。俺様はもう、生き方を変えるのには遅すぎる」、殺しすぎた

心ではわかつても、もう変えられない。過去は振り返らない。だから、今日、この時だけ。

八神村雨はアマネを助ける為に、一度だけ自分を曲げる事に決めた。そして、紅椿を顕現し、アマネの傷口へと突き刺す。紅椿の力は、血を操る力。これで、アマネの血液の流れを調節し、地面に落ちた分は穢れを除去して体内へ戻す。ビデオの逆再生のようにアマネの体へと血液が戻っていく。そして、着ていたシャツを脱ぎ、破いてはアマネの体に止血処置を施し、血の流出を防ぐと、

「おい、貴様」

少し歩いた所に見知った情報屋が居た。多分、早くも情報収集に来たのだろう。「苦労な事だ。と 村雨はため息をつき、駆け寄つていく。

「おお、八神の旦那！ 生きてたんかい」

「ああ。ついでに、貴様に一つ要求しようか」

「なんだい？ ここの事件の首謀者か？ それは高くつくねえ……なんせ、相手は」

とまで言つた所で、村雨は紅椿を情報屋へと突きつけ、

「ここの子を病院に運べ。そして、この事件の首謀者を吐け。支払いは、貴様の命の安全。悪くはないだろう？」

「あ……ははつ。ああ、構わないよ。だ、だからその式神しまつてくれつて！」

村雨が式神をしまつと、情報屋は聞いてもいない事までべらべらと喋りだした。犯人は、「階堂龍一」。

方法は人間爆弾。爆弾となつたのは、「階堂特区に借金を抱える人間。頭の中で情報が整理されていく。狙われた理由はわかつてゐる。多分、自分達がやつてゐる事が二階堂にとつては邪魔なのだろう。

何時か、じうなる事は覚悟してゐた。これを、自分の組織の始めとする事も。

「……わかつた。さつさと、アマネを病院に連れて行け」

「わ、わかつたよ田那」

「もし、アマネを闇に売つてみる。貴様の一族諸共皆殺しにしたやるからな」

そして、情報屋がアマネを抱えて走り去つていく。これで、もう失うものは何も無い。元に戻つた。

アマネは夢だつた。一瞬限りの。それだけで、もう良いのだ。

「……お前は、いつちに来るなよ」

そして、村雨は沈黙した。直後、酒場が爆発して瓦礫が飛び散る。そちらに目を向けると、

粉塵の隙間から剣菱の襟を掴んだ罪歌が現れた。何時に無く、機嫌が悪い。多分緋澄であろうと予測。

「あー、もう。マジでいいやあーーー！」

「無事でしたか」

「あ、村雨。もう、何よこれえーー！」

「一階堂の仕業ですよ。とりあえず、罪歌と剣菱を起こしてください」

そういうと緋澄は、自分の頬と剣菱の頬をペチャペチと叩き出した。  
……時間は、もう少しかかってしまうだらう。

と考えていると、ナナシと狂と暁が走つてくるのが見えた。状況  
が状況な為か、何時に無く表情が硬い。

そして、村雨は三人に今回の事件について知っている事を話した。  
暁は若干青ざめ、ナナシも珍しく

へラヘラ笑いを消す。やがて、全ての話を聞き終えた狂が神妙な  
表情で口を開いた。

「……村雨。やつぱりこれを発端にするのか？」

「ええ、少数精銳の戦力は整いました。剣菱と暁もすぐに使い物に  
なるでしょ？」「これでいいのでは？」

「後は罪歌次第か……つとお一人さんも目覚めたよ？」

狂の言葉に全員が罪歌と剣菱の方を向いた。起き上がった罪歌は、  
頭に打撲でも作ったのは頭の一部分を  
手で押さえつつ、

「話は聞こえてたわ。……私もそれに賛成。今日が私達の始まりの日。このクソッタレな世界に皆で教えてやりましょうか。私達の恨みと、自分達がやつてきたことの罪深さをね！」

そう言つと、罪歌の瞳に憎惡の色が宿つた。誰も、それに何も言わなかつた。この場に居る全員がこの世界と悪鬼に恨みを抱いている。その根底にあるのは、復讐という大儀。自分達を見捨てた世界への復讐。人間への復讐。そして或いは、矜持。

「これより、私達は復讐の同士よ。それぞれの目的の為に、しばしの共闘といきましょうか」

罪歌がそう言つと、全員が頷き、やがてナナシがふと思い出したよつこ一言。

「つてゆーか、僕ら。チーム名とか無いの？ これからこつぱい悪い事するのに、ナナシじや駄目駄目っしょー」

「貴様がそれを言つた……だが、一理あるな」

そして全員が黙つてしまつ。罪歌も強力な同士を揃えることしか頭に無かつたので、そこまでは考へていなかつたようだ。自警団は、もう既に無理だつ。これから、自警をするわけでは無いのだ。

そのまま暫く黙考していると、罪歌の立つている場所の上に設置されていた酒場の看板が焼け落ちた。

「ナナシ」

「へいよー」

ナナシが式神を虚空から抜き放ち、看板を一閃。真っ一につに断ち切られた看板の片割れが全員のちょうど真ん中辺りに落下した。煤や汚れがついたその看板に書かれていた文字は、

「死罪、か」

「ここ」、最低な名前だつたよな。何だよ、酒場の名前が死罪上等つて。店主がアレだから仕方ない氣もするが」

「客の殆どが死罪人のような店だつたからな。ある意味、的を得た名前だつた」

そう話していると、狂がゆつくりとしゃがみ、

「俺達は、六人だよな」

と死罪の横に六と文字をつけたした。それを見たナナシは急にテンションを上げ勢いよく喋りだすと、

「うつひょ！ やつぱいねえ。これ、マジで中一っぽくてカッコいいねえ！ 僕、テンション上がってきたよー！」

とゆーわけで、僕からも一文字。僕らは、式神使いだよねえ。つーわけで、僕の好きな漢字の、神を

「死、罪、六、神。死罪をくらつた六人の式神使い、とも読める。ナナシのセンスはどうにもガキっぽくていいかん」

だが、これ以上誰も何も意見が出ないようだつた。そして、まず暁が罪歌に視線を向けた。次いで剣菱が。

つられてナナシも。そして、村雨と狂が最後に視線を送ると、罪歌は観念したようにため息をつき、

「仕方ないわね……。これでいきましょう。ちょっとセンスがアレだけど、まずは二階堂にお仕置きしなきゃだしね」

そうぼやいたが、口元には本人が気づかないうちに微笑が浮かんでいた。

D a y s 2 6 ·夫婦円満の秘訣とは（前書き）

本当に久しぶりですね。

円満な夫婦関係を築きたい。

これが、最近の俺のテーマだ。簡単に言えば、命と仲直りしたいって事だ。もう、一週間口きてない。

原因は俺の仕事が忙しすぎる事。殆ど家に帰れず、ヨーロン本部の宿舎に単身赴任のようなものだ。

その間、命は一人で全てをこなす。育児、家事、その他諸々。だが、俺だって遊んでいるわけじゃない。

お互いがイライラが募り、はい、一週間前また大喧嘩しましたよと。原因すら思い出せない。

「というわけで……円満な夫婦関係のコツを教えてもらいたい」

俺は田の前に居る男、小さな頃から兄貴分として慕つてきた八神時雨にそう聞いてみた。

「この男、俺と同じくらい忙しいのに夫婦関係良好といつ強者なのである。時雨は何時もの曖昧な笑顔を浮かべ、手を顎に当てて暫く考え込むと、

「僕の嫁は、異常だからね……まだまともな命との参考にはそんなんにならないと思つんだが……」

「いや、でもや。律だつて育児と仕事の両立してゐし、お前も忙しいし、境遇似てるじやんかよ」

「……蒼一、律はね、もつ凄いんだ。僕がこの前徹夜で明けで午前

中に家に帰った時の話だ。

家に帰ると北斗と南斗が律とかくれんぼをしてたんだよね。で、僕が子供の頃によく君達とかくれんぼした時に使った場所を教えてあげたんだ。んで、その後律とも会つたわけだよ

「ほお、別に普通じゃん」

「律は、書類を書きながら屋敷内を歩いていたんだ。僕は注意したね、北斗と南斗との遊びはどうしたと。そしたら平然と答えたよ。かくれんぼしながら仕事をやつてるってね。しかも、その数分後にあの二人は律に見つかって三人で楽しそうにはしゃいでいた。んで、僕がシャワーを浴びて夜の会合の準備をして仮眠しようとすると、北斗と南斗は疲れてお昼寝しててね。律がまた書類を書きながら子守唄を歌つていたんだ。怖いのは書類を殆ど見ずに、子供達の方ばかり見て、片手で頭を撫でてやつてるんだよ。何かもう言葉が出なかつた。で、僕が仮眠をすると報告すると、律は起き上がりつて布団を敷き、ここに寝ろと言つたんだよ。

もう、疲れてたからね。抵抗する意思もなくそのまま布団に寝転がると、律が布団をくつつけて、僕と二人の間で書類を書き始めたんだ。寝れるかよ！ カリカリカリカリカリ音が聞こえるんだよ！ 後眠いのにキスとかもう……！」

「後半、ただの愚痴じゃねえか」

「はあ……はあつ……少し喋りすぎた。まあ、僕が言いたいのは一つだ。

夫婦円満のコツは、どちらかが折れてやること。我が家では必然的

に僕が折れてばっかだけどね

「成る程……ありがと、参考になった」

「いや、僕も愚痴を吐き出して少し楽になつた。それに、次の時間までいい時間つぶしにもなつたしね」

「ああ、ウチの親父とのアレか。まだ、時間はあるよつだな

「やうだね。残りの時間はコーヒーでも飲む事にするよ」

「いや、そこの自販機の陰で落ち込んでいる嫁さんの相手をしてやつた方が懸命だぞ」

そう言つと時雨の顔が強張り、自分の背面にあつた自販機の影で俯いている律の姿によつやく気づいたよつだ。

慌てて駆け寄り、あーだこーだと弁解する時雨を見ていると、何となくだが一人とも楽しそうに見えた。

そのまま次は狂辺りにでも話を聞いてみよつと廊下を歩いて行くと、親父と森羅さんの姿を見つけた。

珍しいことに、陸人さんがいない。きっと、何処かでじょうもない事をまたして詩歌さんに怒られてるんだろうな。

「よお、蒼!」

「お、馬鹿息子。聞いたぞ。また、命と喧嘩したんだってな!」

「ああ、今日はその事で相談がある。夫婦円満のコツってヤツを教えて貰いたくてな」

そう言つと親父の瞳に光が灯つた。とても偉そうな顔を作り、腕組みをすると

「ふふん！ そういう事ならお父様が優しくパートナークトに」

「悪い。眞面目な話なんだ。森羅さんの話に集中したいから大人しくしててな」

何か話し出さうとしたが、ふざけてる余裕はない。何か放心したような顔になつてゐるが、この父親はテンションで生きているので考へるだけ時間の無駄だ。それに、親父をずっと見てきた身としては

よくわかっている。千島家の夫婦円満のコツは「怒り、殴られ」定期的に母さんのストレスを溜めて

これまた定期的に怒らせて殴らせる。高度なコツだが、俺はマジではないのでそれは遠慮したいのだ。

「円満のコツつうのもなあ……。ウチはお互にが折れるから喧嘩もしねえし。今のトコ問題もねえし。

強いて言つなら、プレゼントだな。だが、ありきたりのものを渡しても面白くない。サプライズプレゼントとかどうよ？」

「サプライズプレゼント……か」

「そりそり！ サプライズプレゼント！ 僕昔ね、遥ちゃんに酔つ払つて勢いのまま俺をあげのつて自分にリボンを巻いてプレゼントしてみたらね！ うん！ 何がすつ！」二笑つてくれてよお。

何か次の日一緒に病院にデートしに行つたんだぜ！ レントゲンとかカウンセリングとかも受けさせられたな！

流石遙ちゃん！ デートしながら俺の体調管理とは主婦パワー恐るべしッ！」

……またも親父が無理矢理割り込んできた。が、無視。つっこむのすら時間の無駄だ。俺に無視されて寂しそうな顔をしている親父。森羅さんはそれを気まずそうに見ている。いや、頭が気の毒な子を見る目だ。

とりあえず、また一步理解が深まった。森羅さんに「参考になりました」と手を上げて挨拶し、

「親父、もう年なんだから年相応の発言じりよな……」

そう親父に言い残し、俺は親父達と別れ、今度は狂のオフィスへと向かつた。奏と狂は良い夫婦だと思う。

お互いがお互いを思いやり、噂によると相当円満な夫婦らしい。あの狂も成長したもんだ。昔はめっちゃ

口が悪かったのにな。そういう想いで、狂のオフィスへと辿り着いた。ノックをすると、すぐに返事。

ドアを開けて入ると、そこにはスーシ姿の狂が休憩時間なのか、

コーヒー片手にテレビを見ていた。

俺に気づいた狂はテレビを消し、若干驚きを隠せないような顔でこちらに向き直った。

「珍しいな。お前が俺のオフィスにくるなんて。何か、重大な案件でも出来たのか？」

「いや、今日は友人として来た。仕事の話じゃねーから、そんなに身構えないでくれ」

「安心したわ。実は今日、善と一緒に料理の勉強する約束しててな。

悪いが早上がりさせて貰つか

「構わない。ただでさえ、お前には残業押し付けてばかりだからな。やつぱり、管理職の中じゃお前が一番しつかりやつてくれるからさ。他の部署でも評判だぞ。狂の下で働きたいってヤツも結構多いんだ」

「そりゃ、ありがたい話だな。で、何の用事だよ？」

「夫婦円満のコツを教えてもらいたい」

「ああ、命と喧嘩してるのな。だが、ウチは喧嘩なんて殆どしないからな。最後に揉めたのだつて、善の子供服の色ぐらいだし、結局両方買つて、善が気に入った方を使つて事で落ち着いたけどな」

「ほお……じゃあ、何か奏が喜ぶような事とかしてるとか? 例えばサプライズプレゼントとか……」

「奏は殆ど物欲がないからなあ。変な物買つ時間あるなら、早く家に帰つてきて欲しいって言つてたし。

……あ、一つだけあった。奏が喜ぶ事。だがしかし、これは参考にならな」と思うんだがよ……」

「いいから言つてみてくれ。ヒントになるかもしれん」

「ああ……実は、この前ふざけて関節技をかけてみたんだ。……何だよ、その意外そうなツラはよー」

俺だつてアソツの前じゃ少し違つんだ。んで、関節技を軽くかけたら、痛いとかいいつつも喜んでんだよ。

その後、めっちゃ機嫌いいの！ 関節技かけた次の日の昼飯とかめつちや気合入ってるしな！」

「関節技か……」

「ずっとスキンシップをしてなかつたからな。そんな些細な事でも嬉しいんだる。本当に、良い嫁貰つたよ」

「……ありがとう。参考になつた」

「そか。まあ、頑張れよ。命だつてきつと仲直りしたい筈だからさ」

三時間後、俺は緊張した面持ちで自宅の玄関前に立つていた。手には、花束。命に花束なんかあげた事がなかつたので、これが俺のサプライズプレゼントだ。ああ見えて、花言葉に詳しかつたりするので喜んでくれるはず。蒼華と煉次は今日は確か地元の子供会のお泊りに行つてている。

今日が勝負だ 色々な意味で。意を決してドアを開け、「ただいま」

と何時もより大きな声で俺の存在をアピール。奥の方から若干くぐもつてはいるが、びっくりしたような命の声が聞こえた。

「お、おかえり……」

奥のキッチンからエプロンをつけた命が現れた。何故か、顔にマスクをしている。

風邪でも引いたのかな。この後の家事は俺が代わってやる事にし

よ。まずは、サプライズプレゼント。

後ろ手に隠していた花束を勢いよく命に突きつけた。

「…………っくしゅ！」

途端に命が大きなくしゃみ。まさか、コイツ。花粉症なのか？ そうだ。毎年この時期命は花粉症が酷く苦しそうにしていた。俺は花粉症とか全く関係ないから忘れていた。同時に、命の顔が曇った。

俺をジッと見て、更に恨めしげに花束をみた後、

「私……花粉症なんだけど」

「…………すまん」

「ま、いいけど」

冷たく命はそう言い放つと、俺から花束を引つたぐり、リビングへと歩き出してしまった。不味い。

俺もムカついてきたぞ。あの態度は何だよとか、人が折角気を利かせりや とイライラが止まらない。

だが、時雨の言葉を思い出した。夫婦円満のコシはどちらかが折れてやる事。うん。そうだ。俺が折れればいい。

………… よし、落ち着いた。靴を脱いでまずは風呂場へと向かつた。そう、風呂に入ればいい。風呂は良い。

日本人に生まれてよかったです。ああ、そう、風呂だ。だが

「……あ？」

風呂が沸いていない。お湯すら張っていない。何だこれは。先程まで我慢していたイライラが復活。

すると、命が風呂場へとやってきた。手には、俺の持ってきた荷物の中の洗濯物が抱えられている。

俺はイラつく自分をどうにか抑え、笑顔を作ると言間に聞いてみた。

「なあ……風呂は沸いてないのか？」

「うん。蒼ちゃんにきなり帰つてくるんだもん。そりゃ、沸かしてないに決まってるでしょ」

「……じゃ、沸かしてくれよ」

「えー。洗濯物今日中にやつちやいたいから、その後ね。……てゆーか、シャワーでいいじゃんもー」

……そう、折れるんだ千島蒼一。確かに連絡もせずに帰つてきた俺が悪い。洗濯物を溜めた俺が悪い。

俺がちょっと頑張つて風呂掃除をしてお湯を張ればいいだけの話じゃないか。何をそんなにイラつく。

仕事で疲れてるけど、めつちや疲れてるナビ、偶にほんたつていい。

「…………わかった。じゃ、自分でやつて自分で入るわ

「く……？ あ、うん……」

驚いた顔をして、命は出て行った。それから三十分、風呂を掃除し、ぼーっとしていたら風呂が沸いた。

ざつぱーんという音をわざと立てて入浴。やはり、風呂は素晴らしい。疲れが落ちていく。

たっぷりと三十分入浴を楽しみ、今晚の事を考えて入念に体を洗うと、何時の間にか用意されていた

パジャマを着て、俺は風呂場を後にした。キッチンへと行く。命は俺の夕食の準備をしてくれていた。

久しぶりの命の料理だ。ここ最近は出前か、コニオン内の食堂でばかり飯食つてたからなあ……。

「もーちょい待つてね。あ、ビールなら冷蔵庫にあるよ」

「おひ」「ひお

言われるままに冷蔵庫からビールを取り出し、蓋を開けた、プシュッとこう音が堪らない。

ビールは味わうものではない。喉越しを楽しむものだ。ゴクゴクと音を立てて冷たいビールを喉へと通す。

「ふはあっ！」

いや、美味しいね。我が家で飲むビールは最高だ。…………しまつた。そうだ、夫婦円満をしなければ。

サプライズプレゼントも駄目だった。折れても上手くいかない。相変わらず氣まずい雰囲気である。

何時もなら命がベラベラと喋りまわしているが、それがない。何か、寂しい。

「おまたせ」

何時もなら、「へいお待ついー」ぐらいの勢いで置いていくのが、それすらもない。

俺は、気配を殺して立ち上がった。もう、いじるしかないのか。これだけは避けたかった。

左足を命の左足の外からまわし俺の足首を引っ掛けると、俺の左腕を命の右わきの下を通して

命の首に後ろからまわすと、はい、パラリストですよ。

「ううあああああつー！」

「ひつ！？ 痛い！ いたたたたあ！ 痛いつばああー！」

(頼む……夫婦円満になってくれ……つー)

「いたたたたたつ！ てえ！ 痛いっていつてるじやんかよー！ 吹っ飛べ！」

ピカーッと命と俺の体が発光し、命の言靈が発動した。はい、現在時刻19時43分。千島蒼一。

窓に突っ込み、網戸をぶち破り、マンションのテラスに転がり出ましたよと。ご近所の皆さん申し訳ない。

「あ、蒼ちゃん！？ 大丈夫つー？」

「……とにかくで、俺なりに夫婦円満を考えた結果、いつなりました」

「…………」

言葉によつて、ガラスの修理と俺の怪我の手当が終わると、全て白状をせられた。

最初はふんふんと怒つていた命だが、今は呆れ果てたのか、何時もと何も変わらない。

言葉を出ないよつて、俺はただ命の言葉の続きを待つしかない。

「蒼ちゃん」

「は」

「うん。私も、夫婦円満したい」

「命……」

「わかつてゐんだよ、私だつて。ヨーロンが忙しい事ぐらう。でもね、偶に感情がそれを超えちやうの。

蒼ちゃんが頑張つてるから、私は専業主婦やつてられる。だから、蒼華も煉次も寂しくないつて言つてた。

だからね……いつやつて偶に喧嘩しちやうかじや。また、こんな風にどちらかが仲良くなつとすれば、

私達は一生愛し合つていられる。それを、忘れないよつてよつて……お互いにねつて……

「やつだな……どんなに喧嘩したつて、歩み寄ればいいのか。お互  
いが、お互いを愛してつる限り

「うひー！ それにね、結構面白かったよ。まさか、あの蒼ちゃんがふざけて関節技をかけてくる口がくるとはね~」

「ハハハ……」

狂よ、お前に心からありがとつと言いたい。森羅さんも時雨もありがとう。ついでに親父は……ああ、いいや。

「だーからー！ 今日は私も関節技かけちゃおーー！」

そう言ひ、命は笑うと俺に飛びついてきた。俺も思い切り抱きしめ返し、命を離さなかつた。

久しぶりの感覚。とても温かく、心地いい時間が流れしていく。何も考えたくない。仕事の事も。全て。

命だけに集中し、命の感覚を味わう。至福の時間が流れていた

「お母さん……」

ぼふつという何かが落ちる音と共に、声。俺と命が同時に振り向き、硬直した。

更に不幸な状況は続く、煉次の後ろから蒼華がひょっこり顔を出したのだ。しかも、母さんの姿もある。

「煉。パパ達びついたんだー？」

「ちゅーしてた。これが、この前ゆってたえつしたこと?~」

「ねえ、おばあちゃん！ パパ達えっちな事してたんだよー！ おじつてよーー！」

「え？　あ……ああ、うん。蒼一、命ちゃん、あんまり変な事しちや駄目よ。子供の前なんだから」

そして、俺と命は20代後半になつてまでキスをしてた罪で子供の前で母親に叱られた。

最悪な事に、それが蒼華から親父に伝わって、尾ひれが大量にして最終的にはユニーク全體まで広がってしまった。

「蒼一さんも、まだまだお盛なんですね。子供の前でなんて……」

奏の頬をちよつと赤らめた笑顔が憎たらしい。

「お兄ちゃん。あれは、蒼華ちゃん達の教育上よろしくないよー。」

鬼の首をとつたかのような遙緋の顔が心底ムカついた。

「出たぞー！　強姦魔だー！　ひひやひやひやひやー。」

「お前ら逃げるーー　襲われるーー。」

「……蒼一、人の噂も75日まだだ。頑張るんだぞ」

そう言い、ゲラゲラ笑いながらユニーク内部を走り回つてく親父と陸人さんの給料を下げてやつた。

今日もこうやって、俺の穏やかに過ぎないとする一日は無常に過ぎていくのだ。

ま、平気だけどな。だつてよ

「はいー。蒼ちゃん元氣ー？　蒼華達がそろそろ帰つてくるから、

おやつ作つてゐるか——」

あの件以来、暇な時間は命と音声メッセージのやり取りをする事にしたのだ。しかし。

だが、まさかこれが原因でまた命と喧嘩する事になるとは、夢にも思つてなかつたがな。

First contact : 6 鬼神（前書き）

連続投稿 1

一階堂特区の一階堂本陣ビル前。時刻はとうに深夜だが、騒がしかつた。

響き渡る、悲鳴。悲鳴。悲鳴。そして断末魔。周囲一帯に血の霧が立ち込め、おぞましい惨状だった。

バラバラにされた人体が幾つも転がり、そこには人類の敵 悪鬼の姿が在った。

一階堂の警備の人間の頭部を両腕で握りつぶした鹿の顔を持つ人型の悪鬼。その肩には、白髪の少年。

「脆弱ねえ！」

白髪 ナナシは楽しそうにそう叫ぶと、近くに居た警備の胴体を自身の式神で真つ二つに断ち切った。

恐ろしいほどの切れ味と腕力。小柄な体からは想像できない程の力だ。そして、ナナシが切り開いた道を、

三つの影が音もなく走つていった。村雨と剣菱と暁だ。進行を確認するとナナシも周囲を警戒しながら、ビルの内部へと侵入。既に戦闘は終わっていた返り血を大量に浴びた鬼の如き村雨だけがそこに居た。

「十名家も大した事ないな。興ざめだ。帰りたくなってきた」

「おっさん……こんな強かつたのかよ」

村雨の本気の戦いをはじめて見たのか、剣菱と暁は言葉が出ない

ようだつた。ナナシはそれを見て笑う。

「どう見ても剣菱と暁は自分よりも年上なのに、どうか自分より下の子に見えてしまうのだ。

実際、ナナシは村雨の戦いを見ても特に感想を抱かなかつた。記憶は失くしても、体は覚えていた。

ナナシは村雨以上の圧倒的な剣士を見た事がある。そんな確信が心の中にあつた。

「じゃ、手筈通りに」

四人は散開して、それぞれの役割をこなす為に走り出した。そして、ナナシの目的は本陣への強襲だ。

籠絡を優しく撫でると、異音が周囲に響き渡つた。黒色の点が周囲に現れ、やがて収束して鳥の悪鬼が生まれる。

「行こうか」

鳥型悪鬼に飛び乗り、頭を叩いて飛翔させる。そのまま一階堂特区のビルを瞬く間に上昇していくナナシ。

そして、最上階にある本家のオフィスの窓ガラスの傍まで上がると、手榴弾のピンを引っこ抜いて投げつけた。

数秒後、爆発。ガラスが轟音と爆碎と共に飛び散り、ナナシは一ヤリと笑つた。開けた窓の隙間に、黒いものが見えたからだ。

雨龍の式神の黒龍だ。雨龍を守るようにして、黒い鉄板を重ね合わせたような龍が一匹。

「やつてくれるな。こんな子供がよ

子供、と言われてナナシは何故だか笑いがこみ上ってきた。とりあえず、

「うるせーよー。」

と叫ぶと共に鳥型悪鬼を黒龍田掛けて突っ込ませた。黒龍と雨龍も同時に臨戦態勢へと入った。

窓を抜け、鳥型悪鬼が黒龍に襲い掛かる。鋭利な爪を閃かせて黒龍を襲う鳥型悪鬼だったが、黒龍が大きく振った拳の一撃でバラバラにされてしまった。物凄い力である。だが、その頃にはナナシはとっくに鳥型悪鬼から離れており、

「いくら式神が強くてもねー。主をやつちやえば、すぐなんだよー。」  
空中から雨龍田掛けて籠絡を振るうが、雨龍は簡単にそれを避けた。

(あれ?)

すぐさま着地し、今度は確実な殺意をこめて籠絡を振るう。一度だけではなく。二度三度も。だが、雨龍には当らない。  
やがて、雨龍の右拳が顔面に炸裂し、ナナシは後ろにひきめいた。雨龍は淡々と拳を叩き込む作業に徹し、その間もナナシは籠絡を振るうが、どうして当らない。そして、背後に違和感。風の流れが変わったと思えば、黒龍が大きく腕を振り上げている。このタイミングでは避けられない。籠絡を盾にして防御するが、それでも衝撃は凄まじかった。  
反対側の窓を突き破つても止まらない勢いでナナシは空中に投げ出されると共に、大きく笑った。

「はっはー。流石僕だ……！ 時間通り！」

隣のビルの壁に籠絡を突き刺して落下を止め、その上にふわりと飛び乗る。そして、遠く離れたビルの屋上を見た。

今夜は月が雲で覆われている暗い夜だ。だからこそ、気がつかなかつたのだろう。そのビルの屋上で、黒の炎が

渦巻いている事に。罪歌の目的は、一階堂ビルの機密が詰まつた最上階の完全破壊。自分達の情報の元を破壊すると共に、一階堂の仕事を止めて暫く自分達への追っ手が手につかないような状況にするのが目的だ。

「罪ちゃん。いっけーー！」

凝縮された黒の炎が一階堂ビル目掛けて発射された。流石の雨龍もこれには焦つた。黒龍の中に逃げ込み、

何とか自分の身だけは守れるだろうが、他は駄目だらう。だからこのよろくな連中に喧嘩を売りたくなかつたのだ  
と雨龍の怒りは龍一へと向かつた。だが、

「諦めるのは早いんじゃない？」

声が聞こえ、何時の間に現れたのか三枝千里が雨龍の前に立つた。虚空から自身の式神を抜き放つた

千里は、腰を落として乖離のオーラを長く伸ばし、

「つふー！」

向かつてくる炎を真つ一つに叩き斬つた。その一撃によつ、黒の炎は一階堂ビル最上階を焼きぬく事が出来なかつた。

罪歌は舌打ちし、違うビルへと移動を始めようとした。だが、その足が止まつた。何時の間にか、自分の背後に誰かがいた。

偉そうな大柄な男。口元には下品な笑みと共にタバコが咥えられ

ている。

「！」いやあ、上玉だ。五体満足でいたきや、服脱いでメスらしくケツを振る事をおススメするぜ」

「尊よりも下品でちよつと中一病が入ってるわね、一階堂龍一。気持ち悪いから、殺すわ」

「交渉決裂ってか。ま、両腕ぶつたぎりや、考え方も変わんだろ」

罪歌と龍一は獰猛に笑い、戦闘を始めた。

その頃、一階堂ビルの最下層で剣菱と暁は死に掛けていた。  
広大なロビー付近では装飾品やバイクが燃えており、夜の闇と相  
まって、無数の影が生まれている。

相手はたった一人。暁の妹、御崎朱音。それ以外の人間はこのフ  
ロアには居ない。村雨は上の階層に行ってしまつたし  
狂は罪歌の攻撃が失敗した時の事を考えて、罪歌とは違うビルの  
屋上で力を溜めている手筈だった。

それ故に増援はない。剣菱と暁だけで、ふらりと現れた御崎朱音  
を倒さなくては、未来がない。

「流石に、しぶといですね」

朱音はロビーに腰掛けて寂しそうに呟く。それだけで、周囲のあらゆる影が質量を持つて一人を襲う。

それを避けながら霹靂と天照で攻撃を行うが、朱音も強い。影で完全に攻撃を飲み込んでしまっていた。

接近戦を挑もうにも、緋眼を持たない暁では近づくのも厳しい。更に剣菱だけでは、決め手にかけてしまう。

「貴様の妹、凶悪すぎると思つのだが……」

「当たり前だ。御崎がハ神に喧嘩売つてられんのも、全てアイツといつ存在のお陰だからな」

「アホか！ 何でそんな妹をきつちり躰けておかんのだ！」

「つぬせえよ！ 」うなづいたもんは仕方ねえだろうが！

言い合ひを続ける暁と剣菱は朱音は冷めた目で見つめていた。戦いの最中に喧嘩をするとか、兄は相変わらずだ。

身体能力や式神は前よりもかなり上昇しているものの、精神方面での成長はなっていない。

とまで考えて、朱音は不信感を抱く。

(そんな弱点をあの八神村雨が )

とまで考えた時だつた。罵りあつたまま剣菱と暁が床に自身の式神の攻撃を叩きつけた。そして、轟音を立てて剣菱と暁は一階層下へと落ちていく。

「……やられましたね。でも つ！」

影の中から巨大な腕が飛び出し、剣菱と暁の空けた穴を大きく砕いて広げる。更に、もう一本影の中から手が現れ、燃えていた装飾品やバイクを一階層下へと落とす。暗かつた階層に明かりが灯り、これで朱音の影が消える心配はない。

影に乗つてゆっくりと降り立つ。だが、それこそが最大の誤算だという事に朱音は気づいた。

一階層下の通路は一本道。しかも、広くない。横道もない。その通路の最奥には、二つの光。

「引っかかったな！」

「流石に、これは防げまい！」

ずっと天照と霹靂の力を凝縮していた一人の攻撃が同時に放たれ、通路が光で満ちる。あまりの圧倒的な光に、

朱音の影は消し飛ばされてしまい。どうにか自分の体の部分だけは守った。だが、溜めた一人の威力の方が強い。

影の式神が限界を迎へ、電撃と熱線を至近距離でくらいい、朱音の体が火を噴いて吹き飛んで通路の壁に大きく叩きつけられた。

「つか……はつ！」

それを好機と感じたか、剣菱と暁が走つてくるのが見えた。特に、剣菱の速さは並じやない。朱音は力を振り絞つて影を顕現させ、剣菱目掛けて影の拳を放つが、緋眼使いにそれが当るはずもなく、簡単に避けられてしまった。だが、意識が拳に向いたので朱音は剣菱の足元の影を少し膨らませ、足をすくつた。バランスを崩し、空中に浮いた剣菱を朱音は見逃さなかつた。

「つはー。」

影で全方位を囲い、全身に強烈な一撃を『えた。剣菱の全身が嫌な音を立て、そのままバランスを戻す事が出来ずに、倒れ伏した。嫌な音が響き渡り、

「やりやがったな！」

暁が怒りのままに突っ込んできた。朱音はそれを冷静な目で見据え、影武者で迎え撃つた。雷を纏つた刀をはたき落とし、それでも至近距離から放とうとする暁を周囲の影で一斉に殴りつけた。一発。一発。三発と影の拳が暁の体のめり込み、その度に骨が変な音を立てた。

「くつそ……が！」

暁が壁に持たれかかってたまま、ゆっくりと崩れ落ちていく。戦闘が終わり、静けさがこの場所だけ戻った。上方では今でも激しい戦闘音が響いているのが聞こえる。朱音は暁の前に立つて、影の刃を手にした。狙うは首筋。それで、全部終わり、

朱音の未来は約束される。二階堂の依頼をこなし、尚且つ暁を殺した事で御崎での位置は不動のものとなる。

「…………」

だが、出来なかつた。影の刃を引っ込め、朱音は気絶している暁を悲しげな瞳で見つめたまま動かない。

「…………やらぬのか？」

背後から声が聞こえた。振り向くと、真砂剣菱が立っていた。あの攻撃をくらったというのに、まだ立てるとは流石の朱音も予想していなかつた。だが、もう剣菱には戦闘をする意思はないようで、式神は顯現されていない。

「頭の中では整理はついているのに、心がついてくれないんですよ」

剣菱の言葉に、朱音は達観したような微笑でそう答えた。

「それは、貴様がまだ人間だという証拠だ。心を失つて、戦い続けるのは獸がする事だ」

「ですね。この光の届かない世界でも、やはり理性は必要ですから」

「うむ」

会話が一度途切れた。お互ひ黙つたままの時が数秒過ぎ、やがて朱音は意を決して口にした。

「兄さんをよろしくお願ひします。貴方達と居れば、任務失敗もうそろ責められないでしよう。

私は、御崎の家の勝手な希望なのですからね。だから、いつもするしかないんです。殺す寸前まで追い詰めたが、

御崎暁の仲間に阻まれた、と。兄さんにどれだけ恨まれてもいい。でも、兄さんを生かすにはこれしかなさそうですから

「本当にそれでいいのか？ 暁はこう見えて出来た男だ。全部話せば、きっと妹に力になってくれるのではないか？」

だからこそ、貴様は兄を殺せないのではないか？ 暁から貴様の話は聞いた。ずっと昔は、仲が良い兄妹だったのだろう！？」

剣菱は声を張り上げた。剣菱には救えなかつた妹が居た。だが、今ならまだ暁ならば妹を救えるのだ。

仲間には自分のような無念さは味わつて欲しくない。だからこその言葉だつたのだが

「きっと、そうでしょうな。兄さんは、ずっと私を助けてくれましたから。でも、私が兄さん側についたら、御崎の家は終わりです。私と一部の力が強いのをいい事に、敵を多く作つてしましましたが、それでも家族は見捨てられません。きっと、数多くの方が死ぬでしょう」

「…………そう、決めたのか？」

「はい。でも、希望がないわけじゃないんです。何時か、私を救つてくれる人が現れてくれるんじゃないかな。

そんな淡い希望ですが、すぐるのには十分です。私はこれからも、御崎でその時を待つ事にしようと思います」

朱音の言葉ははつきりとしていた。だから、剣菱はもう何も言わなかつた。再び警戒した顔に戻り、構えを作る。

「ならば、我と貴様は敵同士だ。今日の事は無かつた。聞かなかつた。我是これからも暁を狙うのならば、全力で貴様を撃退すると誓おう。暁が御崎に復讐するならば、何処までも付き合つと誓おう。貴様と、暁自身の為にな」

「ええ。それで、よろしくお願ひします」

剣菱は暁を担いで朱音の地下通路を歩き始めた。悲しい兄妹だ。  
きっと、死ぬまで分かり合える事はないだろう。

だから と剣菱は願つ。御崎朱音を本当の意味で救ってくれる  
人間が現れる事を。

ナナシは再び始まつた戦闘で苦戦していた。

空を飛べる雨龍と空中戦をやるのは不利なので、一旦ビルの中に  
逃げ込んだのだが、黒龍の体が変化したのだ。  
体の形が大きく変わり、あれだけ大きかつた黒龍が雨龍ぐらいの  
背丈へと縮んだのである。

厄介なのは、それで更に装甲が硬くなつた事。今の自分では切断  
できないレベルまでになつてしまつた。  
そして、一番厄介なのが

「当らない……！」

ナナシの攻撃が全く当らない。雨龍の予知の力による恩恵だ。全  
ての攻撃が読まれ、常にカウンターの恐怖に晒される。

時間をおう毎に傷ついていくナナシの体。それでも、ナナシの体  
力が尽きる事はなかつた。

(こいつの体力は……人間のレベルじゃねえ)

このまま千里眼を使えばジリ貧になるのはこちらだ。あまり長時間使える能力ではないからだ。だからもう、決着をつける。

ナナシの突きの一撃を回避し、カウンターで腹に拳を打ち込む。それだけでは終わらない。くの字に折曲がった体を

更に殴りつけ、顔が降りた所に手加減なしのアッパー。黒龍の硬い拳で殴られ、ナナシの額から鮮血が飛び散る。

「終わりだア！」

口から火球を放つ。至近距離から放たれた火球はナナシの体に直撃し、爆碎。轟音をと煙を立ててナナシの小柄な体は転がつていった。雨龍は空中へと飛び、ナナシの籠絡を握っていた手を踏みつけた。骨の折れる音がし、ナナシが苦悶の声をあげる。これで、勝負はついた。ここで殺すにはあまりに惜しいので、雨龍は提案を投げかける。今回の事件の六人を仲間に引き込めば、雨龍にとつて大きな力となる。将来、二階堂を潰す為の大きな力になる。

「いいか。よく聞け。死にたくなかつたら、投降して俺に従え。悪いようにはしねえよ」

「つか……はつ！　まだ、勝負は……！」

「こひちには御崎も居る。あの八神村雨も、千里と戦えばただじや済まねえだろう。後は、ウチの万里が全員倒して終わりだ。いいか。万里は俺達の中じや一番強い。あいつが本気を出せば、俺と千里で行つても勝てるかわからねえぐらいなんだ」

「う、ウチだつて……罪ちゃんが居る……もんね！」

秋月罪歌は諦めな。お前らが俺に忠誠を誓つても、悪いがアイツだけは今助けてやれねえ。

兄貴の慰み者として数年はコキ使われるだろうな。だが、俺とく  
りや、何時かは」

その言葉を聴いた瞬間、ナナシの中の理性が途切れた。  
幸になる　？ そんな事は絶対に許さない。

気がついたら怪我だらけだった。記憶もなかつた。何が何なのかわからなかつた。そんな自分を、罪歌と狂は助けてくれた。

言葉にできないほどの感謝がある人に優しくされたのは久しぶりだつた。それが、とても暖かくて嬉しかつた。

が。罪歌が。罪歌がががががががががが

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！

絶叫。いきなりの事に、雨龍が一瞬たじろいだ。バランスを崩したので、後ろに大きく跳んで、体勢を立て直す。

を持つて、体中の出血も止み、傷口も次々と消えていく。

「な、  
んだ……よ」

! ! !

咆哮を上げ、理性無く雨龍へと襲い掛かつた。見れば、籠絡の形  
状も変化している。刀身が大きく広がり、

大剣のような大きさにまでなっている。更に一番驚いたのは、頭からは角が飛び出していた。即ち、人間ではない。

「……まさか、鬼神かよ！？」

十名家のみ知っている秘密の一つ。鬼神という種族の存在。日本では、十文字が特に何も言わない為に何も知られていない。人間と上級悪鬼の間に生まれた、異形。その力は、絶大であると雨龍は聞いていた。

目の前の化け物を見て、改めて納得。ナナシの身体能力は先程までとは比べ物にならない。

「降魔籠絡……」

ナナシが小さな声で呟くと同時に、降魔籠絡を振った。それだけで、周囲に大量の鬼の悪鬼が現れた。

小鬼から大鬼まで、多種多様だ。そして、ナナシが降魔籠絡を振るつと同時に鬼達も一斉に襲い掛かってきた。

流石に危険すぎた。雨龍はビルの窓を突き破り、空中へと脱出。

「つ。悪い冗談にも程があるぞ……！」

そう吐き捨てていると、

「雨龍！ 後ろだ！」

黒龍が大きく叫んだ。慌てて雨龍が振り返ると、ナナシを先頭として全ての鬼達が力を溜めていた。

その前には闇色の巨大な球体。あれは危険だ。嫌な予感がする。今すぐ、予知の力を。

とまで考えた時にはもう遅かった。

「大鬼砲！」

闇色の光が発射され、雨龍はまともにそれを正面から受けた。圧倒的な威力で次々と装甲が破壊されていく。

何とか力を振り絞つて光の中から脱出した時には、既に満身創痍で勢いを殺せず、近くにビルに激突した。

そして、意識が薄れる瞬間。雨龍は見た。近くにあつた、先程の光を受けた30階建てのビルが真つ二つに倒壊していくのを。

「本当に……悪い冗談であつてほしいわ……」

そう言つと、意識を完全に失つた。

First contact : 7 宣戰布告（前書き）

連續投稿 2

八神村雨は粗方の敵を斬り終えて、不満げに死体を蹴っていた。  
どれもこれもが弱すぎる。これが、日本に名だたる十名家の力な  
のかと幻滅もしていた。

「仕方ない。直系でも殺しに行こう」

堂々とエレベーターを使い、最上階へ向かおうとする。意外な事  
に、罪歌の目的の遠距離破壊はまだ  
行われていないようだった。やがて、エレベーターが最上階到達。  
ドアが開くと、肌寒い。天井が無くなっている。

見えるのは闇色の空と少しだけ壊れた部屋の内部。人影は一つだ  
け。刀を持った女だ。

この前見た、村雨が妙に惹きつけられた少女と一緒に居た、三枝  
の長女。三枝千里だ。

「こんばんは。八神のおじさま」

「良い夜だな。三枝の出来損ない長女」

敢えて挑発してみる。村雨が調べた限りでは、三枝は長女よりも  
まだ小学生の妹の方が優れているらしい。

だからこそその言葉に、千里は歯を食いしばって耐えていた。反応  
から察するに、妹の事も嫌いになれないのだろう。

このようなタイプは一度壊れると、そのまま壊れて進むタイプだ  
と村雨はニヤリと笑った。そう、自分とそっくりなのだ。

「殺しますよ、貴方」

「奇遇だな。俺様もお前を殺す予定だった」

お互い同時に動き出す。千里は自身の式神、乖離を抜き放つ。村雨も紅椿を抜き放つて応戦を始めた。

光るオーラは全てを切断するという事は知っている。対する千里も、紅椿の真の怖さは血による攻撃だと知っている。

お互いの情報は出揃っていた。後は、剣の腕のみ。

「ハハハハハハッ！」

血の霧を撒き散らしながら、村雨は千里へと襲い掛かった。血で刀身を倍以上の太さまで大きくし、凝固して以上に硬くなつた血の刀身で千里を叩き潰すように紅椿を振るう。千里は狂乱の力を発動させ、身体能力を高めると、乖離を振つて血の刀身を切り裂いた。だが

「若いな。小娘」

斬つた刀身部分が爆ぜて千里へと襲い掛かる。田ぐらましをされ、乖離のオーラが一瞬制御を離れた。

その期を逃さず、村雨は緋眼を発動させて一気に千里へと襲い掛けた。獣のようで、何処か洗練された

荒々しい剣撃が千里を襲うと共に、村雨は哄笑しながら言葉を紡ぎだす。

「いいよなあ！妹といつのは、無条件に慕つてくれるのでだから！たとえ、無能でも！」

「つー

「知ってるんだろう？　妹の方が優れていると。妹が氣をつかって手加減しているのを！」

村雨の言葉は適當だった。だが、千里の中にはほんの僅かな疑念を膨らませるには最高の言葉だった。

「努力なんて無駄。でも諦めきれないんだろう？」

千里の目に涙が見えてきた。防御もかなり遅れてきている。段々と、千里は村雨の術中に嵌りつつあった。  
だが、村雨は気づいていた。千里に言っている言葉は、全て自分がかつて思っていた事だ。

弟に全てを奪われた。八神の未来も。左腕も。剣士としての誇りも。当事は「うして、毎日世界を呪っていた。

「そ……んな事！」

不恰好な一撃を村雨は見逃さなかつた。紅椿で器用に千里の手を打ち、乖離は千里の腕からすっぽ抜けた。

回転し、ソファードに刺さった自分の式神を絶望と共に、見つめる千里。村雨は、笑顔で千里の首筋に紅椿を突きつける。

「このまま生きていても、将来きっと苦渋を舐める事になる。妹が果たして、今の純なまま育つてくれるかな？」

「……」

「将来才能に溺れた妹はきっと歪むぞ！　その才能を使って、お

前を滅ぼしにくるやつだ。

「……つー。」

「お前は頑張ったよ、凡人。もういいだろ？ 楽になりたいだろ？  
安心しろ、一瞬で殺してやる」

村雨の中には何時の間にか妙な怒りが生まれていた。千里に対し  
てか、はたまた自分に対してもか。  
だが、千里はきっと村雨の事を睨みあげた。たとえそうであって  
も、千里には味方が居る。

どんな時でも自分を見捨てたりしない、大切な親友が居る。だから  
諦めない。これからも生きてやると。

それは、村雨が一番心の奥底から欲し、言葉にできないものであ  
つた。対峙している村雨も、それに気づいた。  
千里の心を照らした希望の光に。

「死ね」

冷徹な声でそう言つと、本氣で紅椿を振り下ろそうとしたが、直  
前で手を止めて後ろへと跳躍した。

上空から何かが落ちてくる気配がしたからだ。そして、轟音を立  
てて落ちてきたのは、満身創痍の秋月狂だった。

「狂！」

「痛つ……何だよ、あのガキ」

上空を見上げると、長刀を下げた一人の少女が炎の翼を纏つてい  
た。そして、炎を噴射し、急降下すると村雨の前へ。

ぞくつと。本能的な恐怖を感じ、本氣で後ずさつたと同時に銀色の閃光が走る。恐ろしいほどの剣速で、斬撃が放たれたのだ。緋眼を発動しても、見切るのは難しいほどの速さ。しかも、体は小柄で非常に見難い。

「お姉様。お下がりください！ 私が、倒します」

「万里……！」

千里の返事も聞かず、万里は炎を噴射させて飛び掛った。起き上がった狂も、同時に風を纏つて万里に襲い掛かる。

一対一。万里には圧倒的に不利な状況。だが、万里は剣速を囮にしたとび蹴りを村雨の腹に叩き込んでいた。

子供といえど狂乱の力を発動しているため、威力は強い。そのまま蹴った反動を利用して、空中で半回転。

そのままの体勢のまま、驚異的なボディバランスで、万里は狂目掛けて斬撃を放つ。流石に、あの体勢から斬られるとは思っていなかつた狂は、右腕を打ち付けられ大きく飛ばされた。そして、万里は音も無く着地。

「訓練中で模造刀しか持つていなかつたのが幸運でしたね。真剣なら、貴方の腕は飛んでいました」

その通りだつた。狂はしばらくは使えそうに無い右腕を使うのをやめた。村雨と横に並び、

「俺が援護。村雨が斬り込んでくれ。相手はかなりのもんだ」

「わかつてます。久しぶりに、ぞつとする剣士と出合いました」

村雨がじりじりと距離をつめていくと、万里は刀身を鞘にしまい、抜刀体勢をとつた。その場にいた全員が息を呑んだ。

剣菱は万里の殺気の強さに驚き、呑まれかけていた。天才の妹など、所詮は子供レベルと侮っていたが、

三枝万里は本物の天才だつた。小学生とは思えない。だが、逆に燃えても居た。これが、十名家の直系。殺しあうには樂しすぎる相手。

そして、村雨は緋眼を発動させて本氣で万里を殺しにかかった。対する万里は、少しタイミングを外して、刀を抜いた。

高速の一撃。村雨は緋眼を発動し、集中力を極限まで高めてその一撃を避けた。

(勝つた!)

そのまま、紅椿で万里を脳天から割つてやろうと手を振るうと、万里が右手の刀を投げ捨てたのが見えた。

投げ捨てたのは何故。何故、勢いをつけたのだ。答えを得た時は、万里の持つていた鞘がわき腹にめり込んでいた。

「が……っ！ あああああああ！」

骨が折れる音。呼吸が出来ない。威力が凄まじい。意識が途切れそうだった。村雨は大きく吹き飛び、屋上から落とされてしまった。

「村雨！」

狂が意識を失つたであろう村雨を追いかけて同じくビルから落ちていった。万里は、それを冷たい目で確認すると、千里に何時もの表情で向き直る。

「大丈夫ですか？ お姉様？」

「ええ。 平気よ」

何故だか、千里は万里の顔を見ることが出来なかつた。

他ビルの屋上で戦闘を行つていた罪歌は、余裕だつた。

一階堂龍一。一階堂の長男だからと思つて期待してみれば、大した事がない。

式神は鋼鉄化するのみ。攻撃はそれなりだが、そこまでのキレはない。本当に、無能な長男だと理解した。

「ええ。ええ。そのまま、脱出の手筈はお願ひ。ナナシは見つけたの？ うん。氣絶してるだけなのね。良かつた。

じゃあ、狂と連絡をとつて合流も必要かもね。うん。後は、こっちで適当にやつておくから」

龍一の攻撃を避けながら、携帯電話で脱出の手筈を整えている剣菱と会話している。龍一にとつてこれ以上ない屈辱だ。

どれだけ振つても、フェイントをかけても、罪歌の長い髪一本すら斬る事が出来ない。こんな筈じやなかつた。

予定ではとつぐにこの女を好きにしている筈だつた。なのに、何

故。自分ひとりだけこんな必死になつてゐるのかわからない。

「くつそがあああああああああ！」

「そうね。コンビニで人数分お弁当を買っておいて。あ、私リンクジュー<sup>ス</sup>は100%じゃないと飲まないから」

「死ね！ 死ね！ 当れえええ！」

「え？ 好き嫌いは駄目？ 嫌よ。嫌いなものを嫌つて何が悪いのよ。30%なんて邪道もいいとこだわ」

決して噛み合わない罪歌と龍一の言葉。通話を終えると、罪歌は「まだやつてたの？」みたいな目で龍一を見た。

「で。私もう帰つていいかしら？ 他の所から、貴方のビルの最上階壊さなきや」

「て、テメエ……」

「貴方つて何時もそんなハアハアしてるの？ それじゃ、モテないわよ？ ああ、モテないから権力で女をモノにしてるのね。何それ？ 素人童貞以下だわそんなの。生きてて恥ずかしくないの？ ああ、バカだから恥ずかしいとか知らないのね」

罪歌はニヤニヤしながら龍一を挑発していく。龍一はあまりの怒りに声を大にして叫んだ。

「お前、殺すからな。俺は、十名家の一階堂龍一だぞ！ もう、テメ<sup>ヒ</sup>に安息の日々はないと思ひなア！」

「現在進行形で安息だけど?」

「地の果てまで追つても、殺してやつからなあ!」

「いや、日本から出る気はないけど」

「絶対後悔させてやつからなあ!」

「そんな泣きそうな顔で言われても」

ついに我慢できなくなつた龍一。全力で拳を振りかぶつて罪歌へと放つ。そして拳が届く直前。

「残念でした」

龍一の拳の傍に小爆発が起きて軌道が変わつた。更にそれは連續し、龍一が苦悶の声を上げる。

距離をとつた所で少し大きめの炎を起こす。膨張した空氣に龍一の体が飛んでいく。数十メートル上まで上げ、罪歌は全力で力を溜めた。凝縮された闇色の炎が拳に集中し、龍一と二階堂ビルの中腹が重なつた瞬間、

「吹つ飛びなさい!」

圧倒的な闇色の炎が放たれ、龍一を勢いよく飲み込んで二階堂ビルへの中腹を貫通した。中心を炎によつて

全て焼き尽くされた二階堂ビルは周りの建物を巻き込みながら倒壊を開始した。流石に、やりすぎたかと思う程の轟音。

そして土煙。何時の間にか、ビルの下は野次馬で埋め尽くされて

いた。だが、目的は果たした。この世界への宣戦布告が。

「まあ、景気づけにはなるでしょ」

罪歌はビルを降りて大騒ぎになつた野次馬の群れの間を器用にすり抜け、やがて姿を消した。

その次の日から、日本中は大騒ぎとなつた。

十名家の中でも有数の一階堂が新鋭の組織で完膚なきまでに叩き潰されたと。

この一件から一階堂の権威が僅かに下がり、下の家だった三枝の謀反が計画されるようになり。

三枝姉妹の関係は崩壊の発端を見せ、命を救われた少女はまた彼等に会いたいと願うようになり戦いの道を選び始めるようになる。そして、

秋月罪歌

秋月狂

八神村雨

ナナシ

真砂剣菱

御崎暁

の六人は文字通り、世界の敵と認知されるようになつた。  
死罪六神は復讐者達の集まり。そして後に、彼女等のかけがえの  
ない居場所となるのであつた。

## ねめけ編+イリカガニアを読む上での注意（前書き）

これよつての話を読む場合。  
緋色の眼シリーズ終了後の話となります。  
ネタバレもあるのでお気をつけください。

おまけ編 + ヒトから下を読む上での注意

おまけ編。

今回のおまけ編はアレです。神々の黄昏からPASTまで数年  
間があります。

神々やDaysまで出でていて、PASTで全く出でていないキャラ  
が居ますので、  
その人達がPAST時にどうしているかとか、その他PASTか  
らの裏設定のようなモノを書いていきたいと思います。

### 【サブキャラの現在について】

・岩瀬奈央

バイト先だけの関係になると思っていたが、罪歌と同時期に保育  
の学校に入学。一年間同じクラスで卒業。

罪歌の初めての親友となり、八神家に招待された際に陸人達と出  
会い、話の弾みで純也の娘だという事が発覚し  
蒼威と森羅と陸人の度肝をぬく。卒業後は保育士となり、充実し  
た毎日を送っている。

・絹塚志保

高校卒業後、某有名国立大学へ。そこで四年間過ごした後に、親の会社の下請け会社を設立し、

社長として働き出す。高校で仲良くなつた聖子は、現在そこのパート事務員。未だ未婚。仕事が現在の生きがい。

・大野（伊達）聖子

高校卒業後、英輔と同じ大学へ。一回ほど別れたり、よりを戻したりしながらも、最終的には英輔と結婚。

現在は実家に身を寄せ、親に一歳になる娘の面倒を見てもらいながら夫婦で自立資金を溜めている。

・伊達英輔

高校卒業後、聖子と同じ大学の工学部へ。四年間資格を取るために忙しい日々を送り、何回か破局。

大学卒業後は、大手部品工場勤務。子供には不自由させたくないので、ひたすら働く毎日。

休日は少しだが、聖子の実家の店の手伝いもしている為、聖子の家族とはとても仲が良い。

・村松信吾

高校卒業後、大した目標も無く大学へ進学。その時期、今までの常識を全てブチ壊す変な女の子と出会いつ。

糺余曲折を経て、現在は命に仕事を紹介してもらい、大和と空我の店で働きながら、将来どうするかを決めていく。

何回か仕事後に運命と飲んだ事があり、その時から理想の女性＝運命という考えが生まれた。

・松島颯  
マツシマカツ

何気に郁人と竜胆と梨香と高校卒業まで同じクラスだった。その為か、今でも付き合いはある。

現在は大学を卒業し、教職課程を取っていたので、母校の新任教師をやつている。科目は国語。

・牧島信哉

郁人と竜胆は、神々の黄昏事件終了後に蛇王を返しに行つた。その後、勇雄が病氣で死亡し、牧島の頭首へ。

他の家とは違い、ユニオンの傘下には入らずに段々と悪鬼討伐家業から引退し、用心棒やヤクザ関係の家へと移行。

郁人の事は特に恨んでは居ない。ただ、牧島から追い出した者の当然の結果としてユニオンとは違う道を自ら歩む。

・四条帝

自分の式神が結界だつた事に絶望し、全てを莉王に押し付けて四条から逃げ出す。

それから、莉王に会うのが恐くて水商売をしながら、抜け殻のような状態で毎日を過ごしていたが。

その間に戌亥翔と海野友一と出会い、何かが変わる。意を決して、莉王から届いていた遙緋との結婚式の招待状を

二人の持つて結婚式へ。そこで莉王に謝罪。遙緋は翔と友一と帝が知り合いだつた事にただ驚くだけだった。

・杉谷（神崎）未来

一課を退職した後に、森羅と共に逃亡。その過程で森羅の事を愛するようになり、森羅も森羅で母から脱却し、結婚を決意。その際に実家から勘当されるも、その有能な能力を買われて八神と浅葱の情報部に抜擢。

娘の真央には自分のようになつて欲しくないと想い、四苦八苦しながら子育てを行つてゐる。

・庄屋正人

運命の狐砲をくらうも、全くの無傷だったが、その際に式神に嫌気がさして解散後は暫く実家に帰る。

そこで、幼馴染と恋仲となり結婚するも、仕事が中々上手くいかなく、再び式神を使う仕事を生業とし、かつての仲間だった白鷺兄弟と共にヨニオンに入隊。現在は、再び森羅の部下となつてゐる。

【PAST新キャラについて】

・九我山令

律の弟、姉とは違いのんびりと育てられた為に、姉とは全くタイプの違う子に育つ。

紫と太郎に小さい頃から散々可愛がつて貰つた。その為か、年上に甘えるのが上手いと良く言われる。

大学での交友関係は狭く深く。染谷、紫、令の他に一名の五人で基本は授業を受けている。経済学が専攻。

年上が好きだと思われがちだが、守備範囲は中学一年生までと少し口の氣がある。

・鳴神紫

雷神の鬼神。雷神の住む谷での生活に飽きて、知り合いだつた大和と空我に誘われて、九尾の狐に入る。

その後、運命と大喧嘩をした際に、運命に殴られて泣きながら碧と共に、山の中へと逃走。そして、人間に襲われ、瀕死だつた所を太郎と令に助けられる。それから反抗したもの、律と律の母に教育を受けて、九我山家の一員となつた。趣味はパチンコと麻雀。大学ではそのままのサークルに入つてゐる為交友関係が広い。

・風早碧

幼い頃から好きだつた空我と紫と一緒に居たくて、九尾の狐に入つた後、紫と共に脱走。

途中、人間と戦闘になり、そのまま空を飛んで海外へと逃げた。そこで、様々な人間と出会い、十数年程

海外での活動を主流とし、最後にガルムからの依頼を受けて紡と一時期行動を共にした。

趣味は料理と掃除。全ての鬼神の中で、一番家庭的な鬼神だと自負している。

・永沢希恵

令の大学の同級生。口リ顔巨乳と、令の好みのド真ん中。紫の大

学でのツレの一人。麻雀同好会所属。

実は、陸人が引っかかった出会い系の美津子ちゃんの姪である。親同士が離婚している為、母方に引き取られており、妹の胡桃は

父方の親戚に預けられた。

### 【五月颶太の姉について】

- ・長女 五月風香
- ・次女 五月霧香
- ・三女 五月舞香

年子の長女と次女の次に、颶太が生まれる。それから颶太に十歳年下の妹、霧香が生まれる。

現在の頭首は颶太の父だが、実質は姉妹で取り仕切っている。長女と次女は結婚済。

### 【初期の十名家について】

元々十名家は緋色の眼シリーズに出るというわけで考えたわけではなかつたんです。

時雨を主人公とした独立した物語のキャラとして浮かび上がったのが、十名家のキャラ達なんですね。

十人でとあるものを求めてとある場所で争いあう。そんな感じで生まれた彼等でしたが、何時の間にか

神々の黄昏に登場し、PASTでは全員出てきて抗争を行つているわけですが、初期設定とは多く違います。

一之瀨凜 式神も何も考えてなく、ただのやられキャラ扱い。多分、戒に一撃でやられちゃうような子。

二階堂雨龍 ちょっと強いかませ犬 長男という設定だった。

三枝万里 初期設定では男でした。名前も「まり」と読むのではなく、「ばんり」と読むキャラ 中身はPASTの莉王。

四条莉王 初期の莉王には名前が無かつたです。最終的にテキトーにつけたのが正式な名前です。

キターにつおうでいいやつって決めました。中ボス的な感じ。

五月颯太 初期設定から何も変化していない。颯太は本当に何處まで行つても颯太でした。

六道紡 初期設定では男でキモオタっぽい子。2ちゃん語を現実で使っちゃう痛い子でした。

七海奏 初期設定では最強電波キャラだった。式神名が「すーぱーおめがはんまー」とか考へてた当事の俺は死んだ方がいい。

八神時雨 これは変わらず。

九我山律 時雨に惚れていない。後は相変わらず。令? なにそれ? 美味しいの?

十文字戒 初期設定ではどちらにしろ重大犯罪者。ラスボス的な位置。PASTのように穢やかではなく、獣のような男の設定だった。

## 【二階堂雨龍が七海遠音をブチ殺したがっている理由について】

空船の甲板の上。そこに設置されたテーブルには、幾つかのツマミと飲み物が置かれていた。

本来なら物凄い風が吹き荒れているのだろうが、甲板に居る人間達の髪は全く揺れていらない。

その原因、六道紡はテーブルの上に空いた小さなスペースに将棋盤を置いて、二階堂雨龍と向き合っていた。

暇そうだった雨龍に声をかけて、対戦を申し入れてみたものの、雨龍はかなり強かった。

「驚いたね。颶太君よりも段違いの腕前だ。私の頭の中に無い戦法をこつも取れるとは驚きだよ」

「まあ、な。こういう勉強は二階堂で腐るほどやらされたし。それに、母親が俺に教えてくれた唯一の遊びなんだよ」

「ふむ。母親といえば、雨龍君。何で君はあんなに遠慮ちやんと仲が悪いのかな？」

昨日もこの船の通路で何か言い合つていただろう。といつよりも、君が一方的に怒鳴つていたみたいだが

「……言いたくねエ」

「残念だね。では、こつしよう。この勝負に、私が勝つたら教えてくれ」

「……いいぜ。ま、この陣形を破れたらなの話だがな。」

雨龍の陣形は完全な守備状態に入っていた。これだけ深く守られては崩すのが難しい。

しばらく無言で二人が打ち合っていると、紡が突如猛攻に出だした。重要な駒が取られるにも関わらず

どんどん進めてくる。雨龍は少し訝しげに思いながらも順調に撃

退していくと、紡の表情は何時しか満面の笑みに、

「何笑つてんだよ?」

「いや。王手だ。これは詰みかな」

気がつくと、何時まにか王が追い詰められていた。しかも、周りの駒に幅まれて動けない。

あらゆる手を考えてみたが、どう考へても詰みだった。負けたのは久しぶりだった雨龍は肩を落として落ち込む。

「いやあ、君は最強の敵だつたよ。といつワケで教えてくれないか? 何で遠音ちゃんが嫌いなのかをさ」

紡は一二口一二口笑いながら雨龍を見つめた。その、全てを見透かされそうな視線についに耐え切れなくなつたのか、

「…………か…………た…………んだよ」

「ん? よく聞こえない。もつと大きな声で頼む

「戦いに負けて、万里の目の前で素っ裸にされたんだよつッ!」

数年前だったか、一階堂の仕事と遠音が何かの柵で請け負つた仕事が重なつた。

報酬が払われるのは一人。その頃の雨龍は気性が荒く、遠音の事を完全に舐めきついていたのだ。

そして案の定ボコボコに殴られ、更には、

「だーれの顔がとても十代に見えないってえ?」

勝てないとわかつた雨龍は挑発して、隙を作る為に遠音に罵詈雑言の嵐を浴びせた。

だが、それは火に油を注ぐよつた行為であつたわけで、遠音は楽しそうに顔を歪めると、

「お前みたいな馬鹿タレにはキツいお仕置きが必要なよつだね」

遠音は超動で雨龍の体を空中に固定すると、更に超動をかけて雨龍の服を引き裂いた。

「ほひー、万里ちゃん。雨龍のヌード初披露だよお」

そして、ぽーんと雨龍の体を持ち上げ後ろに控えていた万里の方へとなげつけたのだ。

当時の万里は思春期の真っ只中、男性の裸なんて見ただけで悲鳴をあげてしまう程であった。

それだけなら、良かつた。本当にそれで終わってくれたなら良かつたのだ。

「きやつ！？…………あれ？ 小さ…………ああつ！？」

すぐに万里は自分の失言に気づいたのか、慌てて口を塞いだ。それを見て、遠音は腹を抱えて大笑い。

以来、雨龍は遠音の事が嫌いになつた。遠音も遠音で雨龍をからかうのが面白いのか、会つたびに

その話を振つてくる始末。その全ての事情を聞いた紡は、身を乗り出して雨龍の肩をポンポンと叩き、

「雨龍君。男の良さはそれの大きなじやないさ。器の大きさが大事

なんだよ

「うむせえよー 絶対そつこいつと思つたから言いたくなかったんだ  
よー」「

「何なら我ら六道に任せてくれー 少々移植、改造するかも知れな  
いが、万里ちゃんをヒィヒ ヒィヒ」

そう紡がエロオヤジのような顔をしながら話していると、

「無理だよ紡。その男の小わざは筋金入りだ。私の小指ほどしかな  
い」

甲板の影から七海遠音が一ニヤニニヤ笑いながら歩いてきた。それと  
同時に、雨龍の顔が怒りと羞恥に赤く歪む。  
だが、どうにか堪えたようすでコーヒーを一杯すすり、下を向いて  
遠音の方を見ようとしない。

「あららー。器を大きく見せよつて魂胆かな？ よせよせ、そん  
な事をしても大きくならないぞー」

「…………ぶつ殺すー！」

「やつしてみるがいいわ」

椅子から飛び出し、猛然と遠音に殴りかかっていく雨龍。遠音は  
それを楽しそうに避けていく。

それを見て紡は、少しの羨ましさを覚えた。アレは遠音なりの愛  
情表現なのだとわかっているからである。

雨龍が万里と別れて落ち込んでいたのを見かねて、声をかけたの

だが、エリザベスは遠慮も回りみだりだった。

「ハハハ、どうしたどうしたあ

「つるひせー！ 化粧落としたら眉毛が麻田みたいにならへんへんせー。  
貴族かアリマー。」

「……お前、それを呟つたな

「え……？ あーーーうわあああああああーー？」

「あ……つまつた」

遠畠に投げ飛ばされて空船から落下してこへて雨籠を見て、やつぱり違うかもしれないと考え直した紡だった。

## D a y s 2 7 · 御崎朱音の思に出（前書き）

お蔵入りだったものを  
最終回後としてアレンジしたものです。  
某シーンとかぶるのは仕様です。

久しぶりに、休暇を取れた。本当に、久しぶりだ。ここ所、ずっと仕事詰めだから、当然といえば当然。

優しい郁人と竜胆が仕事を肩代わりしてくれたお陰で、一週間ぶりに昨日、俺は家へと帰ってきた。しかも、夕方帰宅。

無駄にテンションが上がったので、ケーキでも買っていつてみれば、命は娘と息子を連れて実家に行ってしまった。

そわそわしながら待つ事三十分。疲れが極限に達していた俺は、本当に！ 本当に少しだけ！ という気持ちで布団に入り

結局、今の今まで寝てしまっていたというわけである。ちなみに、現在時刻は翌日の正午過ぎだ。

「不味いな……」

ここ最近、全く命の相手をしてやれていないので、機嫌は最悪に等しい。だからこそ、ケーキを用意したのだが、起き上がって冷蔵庫を漁つてみれば、そこにはもう一皿分しか残っていないケーキしかない。しかも「丁寧に

「蒼華のおやつ！ 蒼ちゃんは食べちゃ駄目」と書いてある。もう、アレだな。涙すら枯れたよ。

仕方が無いので、リビングへ行つてみると 皿を凝る光景がそこに広がっていた。そう、娘の蒼華が勉強をしている。

（ありえねえ……）

千島蒼華という女の子は、何処で育て方を間違えたのか、とても女の子らしくない女の子に育ってしまった。

現在は小学生。髪は命に似てさらさらのストレートを、ショート程度に切りそろえてある。もう少し伸ばせば可愛いのに。

と思うも、本人が邪魔で嫌だと言つてるので無理に伸ばさずわけにもいかない。そんな蒼華の俺に似ている部分は、目つきの悪さ。親がこういうのもアレだが、蒼華は目つきがあまり良くない。こんな所は、せめて俺に似ないでほしかった。

性格は、破天荒。興味ある事にはすぐに没頭し、周囲の迷惑なんのその。趣味はサッカーと野球。嫌いなモノは、

スカートと勉強とピーマンとニンジン。……勉強嫌いは絶対に命の遺伝である。俺は成績はかなり良いほうだったしな。

そんな娘だが、可愛くて堪らない。何時か、蒼華も嫁に行つてしまつのであろうが、もう絶対に渡したくない程に。

「ねえ、パパ」

ああ、こんな蒼華でも何時かは彼氏が出来て、出来ちゃったとか言つてしまふのであろうか。

もし、そんな事になつたら相手をユニークン総力を挙げてつぶしかねない。どうか、まともな彼氏が出来ますように。

「パパつてば！」

「お……？ どうした？ つか、命と煉次は何処へ行つたか知らな  
いか？」

気がつけば蒼華が顔を見上げて、俺を見ていた。いやはや、一週間ぶりに娘と言葉をかわせるとは、感無量だわ。

「ママと煉は運命ぢやんとお、一か月と一緒にアーレットモールに行っちゃった。

アタシもついてきたかったんだけどさー。ママがパパが一人だと可哀想だから、残つてついて言つてたから残つてるんだよ

「運命の野郎……確かに先週も由加と何処かへ遊びに行つてた気がするんだが。何?こんな働いてるの俺だけ?」  
と思いつつも、ヤツは数日間全く寝ずに仕事を出来るので、その時に終わらせてくるのであるうが。

「成る程な……じめんな、蒼華。ママ、何か怒つてたか?」

「ずっと機嫌悪かったよ。パパからお仕事で帰れないーって電話がかかってくると、たまーに泣いてたもん。

だから、アタシはこうやって宿題ちやんとせつめて、ママを喜ばせてたの。煉が考え付いたんだけどね

小学生ながら空氣の読める子だ。……そんな事を考え付く煉次の将来も間違いく心配はあるが。

そんな事を考へていると、蒼華は再び算数のドリルに向かって鉛筆を走らせている。懐かしいなあ。

我が娘ながら所々とつつか、結構間違えている箇所すら遅おそい。

……といえば昔、いつも誰かがやっているのを見ていた事があつた。遙緋じやない。

時雨でもない。命でもない。

ああ、そうだ。アイツだ。

「……お前、何やつてるの？」

「学校の宿題ですー。忙しくて余り学校に行けてないので、ちゃんと追試と課題をこなさないと留年しちゃうんですよ」

「うー、俺が多分一番勉強していた頃、そして、世界で一番幸福だと思っていた頃の話だ。

「ほお。……つかお前、そこの計算違くね？　ああ、横の英語の綴りだつてミスもあるしな」

「ふふん、蒼一君。並べずっぽはよくありませんよ。蒼一君はまだ中学生なんですか？　あつちでテレビでも見てて下れー」

「千島蒼一」、14歳。御崎朱音、16歳。御崎戦争で、朱音が死んでしまった少し前の話だ。

「馬鹿が。ちいっと答え合わせしてみな」

「はいはい。仕方ありませんね…………って、ええー？」

式神はデタラメに強く、若干16歳にして、御崎の人達を従えて家を動かしていた御崎朱音は

「つか、お前の学校レベル低いな。これなら、俺でも解けるぞ」

「…………。蒼一君の意地悪う……」

馬鹿だった 人間的にではなく、勉学的意味で。それも、結構危ないぐらいに。

というわけで、当時遙緋よりも、自分を見てほしい。そんな勉強する理由にすら気づいていなかつた俺は  
この馬鹿な年上の女の勉強を少しみてやる事にしたのだ。まずは、一番危うそうな英語から。

朱音の通っていた高校はそんなレベルが高くない、頭は並み以下ではあるが、経歴は立派なお嬢様学校。  
きっと、トップクラスの人たちが頑張って評価を上げていたのだろう。ご苦労なこつて。

故にテキストはそう難しくない。英文が書いてあって、その空欄に単語を入れてくるという初步的なもの。

「蒼一君。蒼一君。確か、”ど”が入ついたら疑問文なんですよ  
ね」

「ドゥーと読む。しかも微妙に違つ

「……でいすいすあんあつほーう」

「誤魔化すな」

前途多難だ。ここまで壊滅的だとは誰が想像できよつ。

「蒼一君。蒼一君。」の言葉の意味、知つてます?」

と、朱音。俺がその場所に田をやると「ユオベ」と書いてある。

「好き、だ」

「あやつ。いきなり告白だなんて、最近の中学生は大胆ですね。では、私も。でいすいすいりふそりじー」

「これは蒼一が好きです。そういうなら、アイラブソウジだひ」

「え……何で私が蒼一君に好きって言つんですか？ 勘違いしないでください。」

私は「これは蒼一が好きです。って言いたかっただけです！ フク  
くくく」

……殴つていいだろうか、この女。ちょっとムカついたので、席を立とうとすると朱音はすぐに俺にすがりつき、

「「めんなさい」。」「めんなさい。真面目にやります」

とかよつとか可愛い顔でねだったので俺は再び席について、勉強を教えてやつた。それから一時間。

俺の声が枯れてしまつほどに大声をあげ、その代償とばかりに御

崎朱音の英語の宿題はよつやくの終わりを告げた。

流石に少し疲れたので、悲煉に変わつて貰おうと思つても、

（蒼一）貴方がこんな疲れる仕事を、私が肩代わりすると思ひます  
？

といい体の支配権を幾ら譲ろうにも絶対に変わつてくれなかつた。今思えば、あいつなりに氣を使つてくれたのかも。

もう、この世には居ない煉という千島の血に宿る人格。アイツは、多分俺を世界で一番理解してくれていた人間だろう。  
どんな時でも味方でいてくれた。どんな時でも俺の心配をしてくれた。ある意味では、俺のヒーロー。

すると、朱音は一番の難関の英語が終わつた安堵からか、珍しく足を崩して、リラックスした体勢になつた。

「いや、疲れましたよ。先生に、御崎は一生日本から出るな。と言われた意味がようやく理解できました」

「出たら、日本の高等教育の恥を晒すようなもんだからな。臭いものには蓋をする、とは良く言つたものだ」

「ひ、酷いです！ 先生だつてそこまで言わなかつたのに……」

「ははつ。悪かつたよ。でも、逆にここまで酷いと何時かお前と英語圏の国に行つてみたい気もするわ」

「では、新婚旅行の際はアメリカに行きましょうか。アメリカンドリームです。一人でビッグになりましょう」

「ん？ お前、俺の事好きじゃないんだろ。勘違いなんだろ？ そ

んな奴と新婚旅行?「

「……あいりふそうじです」

「良く出来ました」

「パパ、どうしたの?」

気がつくと、蒼華が俺の顔を覗き込んでいた。そして、握っていた鉛筆を放し、俺の目元を拭つた。

……恥ずかしい。娘の目の前で、思い出に耽つて泣くなんて。だが、これが俺の本心なのだろう。

それでも、あの頃とは違う。もう、俺は悲しくても笑えるんだ。

とても、残酷な事に

「お仕事で、いやな事あつたの？」

「いや……パパな。多分、もつ。受け入れちまつたんだ」

「何それー？」

「それよりも蒼華、宿題は終わつたのか？」

「うん！」

「じゃあ、久しづびりに公園でキャッチボールでもするか？」

「いいのー？ やつたあ！」

俺は戸締りをして、玄関に立てかけてあつたグローブとボール。一応バットも持つて、蒼華と外に出た。

「ひつやつて、落ち着いた日常を過ごすのは久々だ。何時もは、暗い裏の世界で生きている俺にとって、

それはとても新鮮な事のように感じる。そして、マンションの敷地から出ると、近所の公園へと向かい、蒼華と向き合つて、ボールを投げあつ。…………。小学生の女の子は投げる球とは思えん。だが、

「しんかー」

といいつつも普通の球が飛んでくるのがまた可憐うしい。そのまゝ、俺と蒼華は無言で、だが楽しくキヤッチボールを続けた。それは、とても幸せな時間だった。俺

の中にある汚いものが浄化されていくよつにも

感じる。あの14歳の夏。俺は、全てを失った。生きる意味も、希望も、愛する人も。何度死のうと思ったか

わからない。何度楽になりたいと思つたかわからない。それでも、俺は生きていて良かったと今では思える。

命と結婚して良かった。蒼華と煉次が生まれてくれた日には涙を流して喜んだ。そこで、諦めなくて良かったと

「ふおーく」

俺は、御崎朱音を失つた世界で生きていくしかない。そう思つようになつたのは何時頃だったか。

それを受け入れるのに、何年かかったかわからない。朱音だけではない。今まで、大切な者を何人失つただろうか。

それでも生きていこう。失う事があつても、俺は進むしかないのだ。それが結局、俺の選んだ道。

「あーー！ わ前等、何面白うな事やつてんだよー！」

すると、公園の前の通りから、親父の声が聞こえた。見ると、買い物から帰ってきたのだろう。荷物を抱えている。

そして親父は、荷物を命に預けると柵を軽々と飛び越えて、こっちへと走ってきた。

「や、運命もやるー 煉次も行こ。あ、遥ママ、この荷物お願ひ

「はいはい。行ってりっしゃー

おいおい……運命まできやがつた。煉次は煉次で相変わらず、参加したいのかしたくないのかわからない顔だ。

母さんと命は、そんな俺達を何故か微笑ましげに見ると、マンションの中へと入つて行つてしまつた。

そして揃う大人一人と子供が一人に子供もどきが一人。

「よつしゃ！ 俺、ピッチャーな！ 運命、お前キャッチャーやれ！ 俺の神速速球を取れるのはお前ぐらいだ」

「えー、運命はアレやりたい。ぼーる！ とか すとらーいく！ とか言つ人」

「……そ、そつか審判か。じゃあ、煉次。お前何処やりたい？」

「キャッチャー……」

「お前らしいな。つーわけで、息子よ、俺がピッチャーお前が外野な」

「もう、年なんだから無理すんじゃねーぞ」

「バカ、俺を誰だと思つてやがんだ」

そう言い合つと、俺は親父にボールを渡し、外野をやるべく後ろへと下がつていった。とりあえず、こんな草野球でこれだけ盛り上がれる人間つて言つのは、結構重要なかもしない。なんて思つてしまう。

そして蒼華には激甘い親父が、どう見てもホームランが打てる優しい球を投げたが、速球待ちだった蒼華は見事からぶつてしまつた。

「ボール」

「ええつ！？ 今のストライクだるづが！」

「ていうか、蒼威パパ。ボールとストライクってどんな意味なの？」

「知らないのつ！？ てか、知らないのに審判やりたがるなよ！？」

「だつて運命も、ああやつてカツ！」よく叫んでみたかつたんでもん！」

「……まあいい、続けるべ。よつしゃ、蒼華。おじーちゃんからヒット打てたら、お小遣いたんまりやるべ」

「ホントに…？ よつし、おじーちゃん。ばつひーーー！」

気前は良いくせに、微妙にケチな親父はやや速めの球を投げた。普通の小学生なら、まず打てないだろづ。

そう、普通の小学生なら。だが、ウチの娘は普通じゃない。幼いながらも、緋眼を使え、それに見合つ肉体を生まれつき持っている。案の定、蒼華は親父の球を平氣でかつ飛び、外野の俺の出番が来ましたよど。

「や、蒼一様アアア！ 必ず取つてくださいー！」

「（）」はリクエストに応えるか、もしくは娘の為にミスしてやるか迷うも結局、球は取りこぼしてしまった。

親父は絶望したような表情。蒼華は運命と煉次に抱きついて大喜びしている。それを見て、思つた。

多分、これが俺が得た答えだ。

御崎朱音や仲間達を失つても生きていこうと決意した、その結果。

とても愛しく、とても優しいこの時間。

大切にしよう。もう、一度と失わないようだ。散つていった仲間達の分も楽しく生きてほしいと願いながら

## Days28・九我山令（前書き）

今は書いて非常に楽しいキャラでした。

あの十名家とコニオンの戦いから、半年が過ぎて僕の周りはかなり変わってしまった。

例を挙げるのなら、まずは太郎君が九我山の家から出て行った。子供化した太郎君は、新しい苗字を与えられ人間として生きていく事になったのだ。というわけで、お姉ちゃんの家に半ば半分拉致のような形で現在は居候している。

「何で俺が小学校に通わなくちゃ……！」

僕の甥の北斗と南斗と一緒に学校に通わされているらしい。あの二人と一緒に、「愁傷様」としか言えない。

しかも子供なので、大好きなお酒も禁止されてしまったとの事。逆らおうにも相手はあのお姉ちゃん。

太郎君は結局、恭順の道を選んだ。この前、久しぶりに会った時に、その気持ちはよくわかるので、話が盛り上がった。

碧ちゃんも家から出て行つた。碧ちゃん。どうやら空我さんの事が好きらしく、押しかけ女房をしているらしく。

空我さんが涙声で僕に電話してきた時には、本当に驚いたものだ。僕は空我さんの仕事と、住んでる場所を教えただけなのに。この前、コニオンのパーティーで会つた時に、散々首を絞められたのも、今ではいい思い出だよ。

さて、そんな感じで僕の近況はこれで終わりたい。正直、紫ちゃんの話題にはあまり触れたくない。

いや、でも最近の紫ちゃんの可愛さは異常。といつ事で、

少しばかり自慢話でもしてみたい気分だ。ハツハー！

紫ちゃんが変わり始めたのは、太郎君と碧ちゃんが出て行つてすぐだった。

「今日は、アタシがご飯作つたる」

無愛想な口調でそう言い、紫ちゃんが珍しく厨房に入つたのだが、しかも、ずっと暮らしてて気がつかなかつたのだが、紫ちゃんは料理が上手だつた。僕の家のお味噌汁は濃くてあまり好きじやなかつたのだが、紫ちゃんのお味噌汁は僕が一番好きな味なのだ。僕はどうして料理作つてくれたの？と聞いたが、紫ちゃんは答えをはぐらかした。

「ただの気まぐれ」

まだまだある。今まで僕の隣の部屋で寝ていた紫ちゃんだが、紫ちゃんの部屋のクーラーが壊れたのを機会に、僕の部屋で寝るようになつた。最初の一晩は、緊張して眠れなかつた。何度襲い掛からうと思つたかわからない。

だが、寝息を立てながら放電をした紫ちゃんを見て、その度に僕とリトル令は縮み上がつてしまつたのだ。チキンっていうなよ。しかも、クーラーが壊れた原因は謎の回路のショート。直そつとしたのだが、

「アタシと一緒に寝るのが、そんなに嫌なん？」

そんな事を言われては、直す気にはならなかつた。他にも色々あるが、個人的に一番嬉しかつたのが、

服装が若干の変化を見せた事。今まで、パンツスタイルが多かつ

た紫ちゃんだが、休日にはスカートを履くよつに

なつたのだ。いや、素晴らしい心がけだと思つよ。しかも//「じ

やないところが、また僕の心を揺さぶるのだ。

そして、現在。紫ちゃんは僕の正面のソファーですやすと可愛い寝息を立てている。

「これは……誘つているのか？」

実を言ひつと、一度だけキスはした。その後、襲い掛かつたが見事に鳩尾に一撃を決められ、悶絶したけど

寝ているのはチャンスだ。今日は、放電していい。気配を消して、近づいてみる。反応は見られない。

ソファーと一緒に寝転がつてみる。反応は無い。髪を撫でてみると、反応は少しだけあった。

「ん……」

声が聞こえた。……九我山令。そろそろ我慢の限界です。ゆつくりと、立ち上がり、紫ちゃんに襲い掛けた！

……なんて事が出来るわけもなく、タオルケットをかけてあげ、敗残兵のような気持ちで僕は自分の部屋に帰つた。

そんな惚氣話から数日。

相も変わらず、九我山特区は平和です。両親は最近あまり家に帰つてきません。僕たちが今住んでいるのが

九我山の由緒正しきお屋敷。それとは別に、九我山の仕事を行うビルが一軒あるんだけど、お姉ちゃんが

前回の母の日には、温水プールとサウナを増設してあげたら、両親揃つて入り浸るようになり、ついには寝具を持ち込んだ。

だからこの広いお屋敷は基本的に、僕と紫ちゃんをお手伝いさん達だけ。ずっとお母さんが管理していたお屋敷の鍵も、

「はい、令ちゃん。後はよろしくね」

「はあ……」

という感じで押し付けられてしまった。しかも、笑えないのが、

「後、これもね」

追加でそう言い、コンドームを渡された。絶句して言葉が出なかつたが、お母さんは当たり前のようにニコニコ笑っている。

そうだった。この人は、性について男として越えられたくない部分を平気で越えてくる人だった。

僕の15歳の誕生日は擬似AVという何とも微妙な代物だった。

……いや、お世話にはなったけどね。

鍵の横に置かれている袋を見つめる。暫くぼーっと見つめていると、僕はとても重大な事に気づいた。そう、

「ヤバい……使い方がわからない」

童貞。この世界で一番嬉しくない称号。それ故に、コンドームは言わば未知の装着品。

大学の友人に相談してみるか。いや、死ぬほど笑われるだろ？  
それでは、ユニオン関連にしようか。

郁人君は笑わなさうだけど、忙しそうでバス。莉王兄ちゃん、無理。義兄さんは……お姉ちゃんに伝わりそうだからバス。

颯太兄ちゃんは恥ずかしい。……神璽ちゃんは絶対に喋る。うん。  
頼れるのは自分自身だ。

「……やるか！」

ズボンと下着を脱ぐ。ノートパソコンを引き寄せ、お気に入りを開くと同時に、僕はコンドームの封を切った。

下半身裸で、検索窓に『コンドーム つけ方』と打ち込むとサイトがいくつか見つかり、後は僕の準備だけだ。

音量を確認し、お気に入りの動画をクリックして再生。色々な意味でお世話になります。その時だった。

「令。ちょっとええかな？ 入るよー」

僕は全力でドアに飛びついていた。緋眼使いと同等ぐらいの速度だろう。今の状態は不味い。下半身を露出し、正面のパソコンに映るのは

女性の大半が嫌いなもの。しかも、かなり優しい表現をすれば若い。手にはゴム製のアレ。……殺される。見られたら確実に殺される。

「ちよ！ な、なんや？ 開けてよー。ちよっと、見て欲しいものがあんねん」

「無理！ 無理！ 五分待つて！」

「……あー。もしかして、また変なもん見てるんやろ？ アタシ嫌やゆーたでしょ？」

「後生だから……！」

「だーめ！」

「愛してるー 愛してるからー 紫ちゃんに大事なものがあるから  
！ 開けないで！ お願ひ！ 今は……！」

「そ、そななんか。な、なら後でええわ」

ふう。何とか事なきを得た。紫ちゃんも案外チヨロいね。

「つて。そんな見え透いた嘘に騙されるかい！」

ギヤアアアアアアアアアア。

「れ、令……あんた……！」

不意打ちで開けられたドア。紫ちゃんの視線。照準、今日も元気  
だリトル令。振り上げられる足。激痛。そして、僕は意識を失  
つた。

「つはー！」

意識を取り戻した。部屋を見回す。パソコンについたイヤホンか  
ら流れる喘ぎ声が恼ましい。時計を見る。どうやら、

30分ぐらい意識を失っていたようだ。しかも、不味いよこれ。  
紫ちゃんきっとマジギレだよ。ゴムを投げ捨て、ズボンをはぐ。  
隣の紫ちゃんの部屋をそっとのぞく（ノックするとノブ越しに電

撃を流される可能性がある為) どうやら居ない。

お手伝いさん達は買い物に行っている時間だ。家中を走り回つていると、廊下の奥で外を見ながら座っている紫ちゃんが居た。紫ちゃんはすぐに僕の存在に気がついた。僕を睨む。そして、

「ちよっと、ここに座りなさい」

命令。逆らえるわけが無いでしょ。黙つて頑張り、紫ちゃんの横に座る。

「せつしきの、何なん?」

「その……未知への探究心が

拳骨。痛い。

「今もある……。将来の事とかちゃんと考えとる?」

「一応……」

「この前な。ママさんに言われたん。悲しいけど、子孫が見込めない子を九我山の跡取りと一緒にさせるのは無理やで。あたし、鬼神やもん。人間の学校行つたからわかるけど、生理なんて来た事あらへん。性欲なんて、滅多に湧かんわ。多分、悪鬼には生殖能力がほぼ不要やからやろうな。おまけみたいなもんや」

「でも、人間になれば

「それや。人間になれば、トマトさんもゆーとつた。でもな。人間

になるゆ一事は、これまでの数百年のあたしを捨てると同義や。正直言えば、怖いよ。鬼神の回復能力や身体能力もなくなつてしまつし。何よりあたしは雷神ではなくなる。簡単な事やない」

その言葉を聞いて、僕は自分の浅はかさを知った。人間になれば、万事解決。そう考えていた自分を殺したい程に。

太郎君は緊急時だつた。だけど、紫ちゃんは違う。僕が紫ちゃんと一緒に居るためには、その全ての不安を取り除かないといけない。力が必要だ。暴力と権力も含めて。その他にも色々とやるべき事もある。そんな現実を僕は何も見ていなかつた。

「……ごめん」

「責めてるんじゃないよ。ただ、もう少し自覚して欲しかつただけ。あたしと一緒に居る事へのリスクをな」

紫ちゃんの手が僕の頭に乗せられた。とても、落ち着く。子供の頃から何時もそうだつた。僕の隣には太郎君が紫ちゃんが必ず居た。お姉ちゃんが寮生だつたけど、何時も寂しくなかつた。多分きっと、あの頃から僕は紫ちゃんに惹かれていたのだろう。

あの日、紫ちゃんのあの発言を聞いて、僕の中にずっとあつた思いもはじけた。でも、それは間違いの思いだったのかも知れない。でも今なら言える。僕は紫ちゃんに惚れている。自分が一番厳しいのに、それでも僕を気遣う優しさが愛おしかつた。

「跡継ぎに関して言つなら。僕はきっと、近い将来、お姉ちゃんの息子の南斗と争う事になるよ」

だから、僕も全力を尽くす。紫ちゃんを安心して、幸せにして上げられるように。

「そつか……。南斗は鬼憑を継いだんやもんな」

「南斗が継げるよつた年になるまで、後十年近くある。多分、お父さんも何時か僕と南斗を試すつもりだと思ひ。南斗は八神を継げないから、そつなると行く所がなくなるわけだからね。その間に、僕は僕の可能性を広げるよ。紫ちゃんを守れる力を手に入れて。紫ちゃんを幸せに出来るよう立派な男になつて。そして、僕が頭首になつたら、改めて紫さんに告白するよ。したら、人間になつて、僕と死ぬまで一緒に居てほしー」

「…………わかつた。ま、後十年ぐらくなら早いもんや」

「良かつた。正直、愛想つかされるかもと思つてヒヤヒヤしたよ

する」と紫ちゃん。僕の肩に頭を乗せてきました。

「あー…………でも、この先十年はあたしは令の彼女つて立場がええな。  
……他の女にとられたら嫌やし」

更に僕の腕に自分の腕を絡ませてきました。……もつ、これは行くしかない。紫ちゃんを正面から抱きしめる。

流石といふか、やはり女の子。柔らかい。莉王兄ちゃんには何回か抱きしめられた事があるけど、比にならない。

むしろ今では思い出すだけでおぞましい。さよなら莉王兄ちゃん。よし、このまま少し触つてみよう。ほんの少しだけ。

手を少しずつ動かす。あくまで、不意打ちが重要だ。意思を悟られてはならない。すると、紫ちゃんが思つて出したよつて言つた。

「あ、今度あたしのお父ちゃんに挨拶にいがんとね。めっちゃ短気やけど、酒飲ませれば気のいい悪鬼やから」

「ゆ。紫ちゃんのお父さん……ですか？」

「大丈夫やで。碧も連れてけば、たとえ大暴れしても何とか勝てそうやし。勿論、あたしも協力するで」

「は、ははは。穩便に行こうね」

これから数日後、僕は紫ちゃんのお父さんに「挨拶に行くのだが、大泣きするわ。五時間ぶつ続けて暴れるハメになるわの大変な事件が起ころるのだが、それはまた、別の機会にという事で。

Days to follow・千島光希（前書き）

緋色の眼シリーズの中でも  
本当に最後となるお話です。

皆様本当にありがとうございました。

大学一年からずっと連載してきて、良かつたです。  
……でも五年生になっちゃいそうな予感も○'z

一人称が僕から俺に変わったのは、何時からだろうか。

少なくとも小学生の時の一人称は、僕だった。中学一年になる今から思い返してみれば、何故か子供っぽい。

でも、あの頃はそれが普通だった。多分、俺も大人になったのだろうと、一人納得するほかないだろう。

早く大人になりたい。というよりも、俺は彼女に近づきたかった。二つ年上の、数年前に出会った女の子、未希ちゃん。

未希ちゃんは意地悪だ。俺の気持ちにとっくに気づいているくせに、わざと俺の心を乱すような行動をとる。

やはり、からかわれている内はまだ子供だと扱われているに違いない。だから、もつと強くなりたい。

強くなつて彼女に頼られるような存在になりたかった。毎日、それを目指して訓練をしてきたのだが

「はあ……」

実家の屋根の上でため息をつく。明日から、舞浜学園に編入だ。正直に言えば、かなり心が重い。

ずっと生まれ育つたこの町から離れ、舞浜学園の寮に入る。知っている人間が居ないでもない。

親戚の八神兄弟。姪の四条莉那。彼等は舞浜学園の小等部に在籍している。それでも、不安といえば不安だ。

一つは未希ちゃんとの事。もう一つは、俺の力の事だ。

「……」

両腕にグローブの式神を顯現。その瞬間から、恐ろしいほどの力

が俺の中を駆け巡り、闘争本能を刺激する。

今でこそこれだが、訓練する前はもつと酷かつた。俺の式神は一度だけ他人の式神を複製する式神。

運がいいのか悪いのか、俺はユニオンの長である自分の兄の式神と、かつて最強の鬼神と呼ばれたご先祖様の式神を複製してしまっている。そんな式神を自由に使うのに、あの事件後からずっと鍛錬の毎日。

「強く、なつたよな」

風が吹く。まだ寒い。

「光希ー。『飯よー!』

「おおつー!? 今日は焼肉だとー?」

「皆揃つてからね……って早つー!」

「つはははー 焼肉は早いもの勝ちって……痛い痛いごめんなさいー!」

相変わらず、楽しそうな両親だ。だけビ、こちらの気分も上がつてくるというものの。俺は返事をして、一階に降りた。

リビングへ行くと煙が充満しており、父さん母さんと、現在プチ家出中の姉さんが居た。姉さん何かは既に良い感じに出来上がっていいる。

「姉さん。まだ居たんだ」

「光ちゃん酷い! そんなお姉ちゃんを邪魔者みたいに扱つて!」

「いやだつて、いい加減莉那も寂しがつてると思ひます。確かに義兄さんの態度も悪かつたとは思うけどさ。」ヒは大人になつてね

姉さんのこのプチ家出は現在一週間を記録している。莉王義兄さんが接待でベロベロに酔つ払つてきたのが原因らしい。

ちなみに、この家は皆莉王義兄さんの味方だ。浮氣したわけでもないのに、かまつてほしい姉さんがこうして気を引こうとしている。

「うーん。そうだねえ。莉那も仲直りしてつて言つてたからなあ」

「莉王君も灼汰の世話を一人でやつてるんでしょ。いい加減帰つてあげなさいよ」

母さんの追撃も入る。父さんは、

「ぎゃははは！　この芸人面白れーな！」

駄目な人だ。

「そうねえ。莉王さんつたら灼汰には甘いんだから。あの子、手がかからないけど、放つておいたら数日部屋から出てこないし」

俺の甥に当たる四条灼汰。若干小学生ながら機械やネットに精通しており、ゲーム分野においては数々の大会を総なめにしている。ちなみに甥と姪は全部で四人居て、灼汰の姉の四条莉那は人畜無害でとても優しい子。兄さんの娘の千島蒼華は活潑で、

父さんにそつくりな性格。今は確か陸上で活躍している。その弟の千島煉次は顔立ちが良い為に、偶に子供服のモデルをやってたりもする。

何気に多彩な親戚達だ。まあ、この家族を見れば一筋縄ではいかないような子が生まれるのは当然な気もする。

「じゃ、明日は帰らうかな。あ、そうだ光っちゃん。後で、お姉ちゃんに会合つてね。ちょっと用事があるから」

「飲酒運転は駄目だよ」

「いやいや、歩いていける場所だから平氣だよ」

何故か、姉さんの含みをもつた笑顔が気になつた。

そして、食事も終わり一旦自室に帰る。俺の部屋はかつて兄が使っていた部屋だ。偶に命義姉さんの私物が残っているのが多少気になるところ。それでも姉さんの部屋よりはマシだらう。あの独特的の甘い匂いは今も取れる事がないからな。

それに悲しいが、この家もそろそろ終わりだ。俺が舞浜の寮生になつた後、母さん達も舞浜に住むみたいだし。この家は売ると。十数年育つた家がなくなるのは寂しいが、仕方が無い。そんなこんなで暫く物思いに耽つていると、姉さんがドアを開けて入ってきた。

「ノックぐらじよつよ」

「男の子はいいの。着替え見られたって減るもんじゃないでしょ」

「姉さんは減つたら困るもんね」

拳骨。痛え。流石ユニークの体長格。かなりのモノだ。そんな姉さんの最近の悩みは肩の発達による服のサイズの上昇。まあ、かなり筋肉ついちゃつたから仕方ない

とはいって、姉さんも女性ならではの悩みもある。

梨香姉ちゃんも指の皮膚の事かなり気にしてたし（『』を使うだけ）

（二）

「わい、そろそろお姉ちゃんとトークに行こつか」

「人妻と夜の『トーク』とは、中学生にはドキドキの展開だよ」

「流石年上好きね」

「姉の影響かな」

今ではこんな軽口が叩けるようになった、俺と姉さん。兄さんとはじつもいかない。の人、意外と頭固いし。

一人で階段を降りて一階へ。リビングを覗くと父さんが酔いつぶれていびきをかけて寝ていた。我が父ながら自由だ。家から出ると、先程よりも寒くなっていた。

「ハハハハ……寒い……」

寒さに震える姉さん。だつたら外に出なければいいのに。しかしそのままふらふらと先に進みだしてしまった。こいつなつてしまえば、俺はもうついていくしかない。

護衛なわけではない。この人が負けるなら俺だつて勝てないわ。ただ、何か愚かなしないように監視というか。そんな感じ。

そのまま暫く歩いていくと、懐かしい場所に来た。家の近くにある丘の上だ。俺が、かつて兄の式神を複製した場所。

広い敷地の中心辺りで姉さんは立ち止まると、携帯端末を取り出して何処かに連絡し始めた。

「光つちゃん。頑張ってね」

ヘラヘラと手を振る姉さん。次の瞬間、空中に紋様が現れてその中から数人が出てきた。全員見知った顔。

ユニーク幹部、榛名神靈さん。棗……ああ、今は榛名由加さん。

牧島郁人さん。竜胆さん。運命義姉さん。

兄さん 千島蒼一。最期に出てきたのは、俺の師匠でもある鬼塚一郎さんだつた。

「光希。まずは舞浜入学おめでとう」

兄さんが仏頂面でまずはそう切り出した。

「祝うなら、もう少し笑顔で祝つてよ」

「む……。すまん」

兄さんはそう言つと不自然な笑顔を作つた。それを見て神靈さん達は爆笑の渦に巻き込まれた。姉さんも腹を抱えて笑つている。

そして兄さんがひとしきり式神を振り回した所で、ようやく笑いは沈下した。ユニークの代表がこんなに短気でいいのだろうか。

「それで、何の用事かな？ これだけの面子が揃つたんだ。ただの祝福だけではないんでしょ？」

「ああ。お前を特別扱いするわけではないんだが……。やはり、現時点でのお前の力は舞浜に来てでも飛びぬけている。

ウチの生徒達の地力もかなり上がつてはいるんだが、まずお前は入学した時点で、もう五本の指には入るだろう。

だから、テストをさせてもらひ。お前のその力がちゃんと制御でき

るのかどうか。俺と……一郎の「一人でな

そういう事か。意外と信頼されていない。確かに俺は兄さんと師匠の力を複製した。その力が凄まじい事は認める。

だからといって、何もしてこなかつたわけじゃない。あの事件以降、ずっと鍛錬を続けた。師匠が居ても、一人の時でも。

兄さんを見る。不自然な笑顔は消え、殺氣すら感じさせる表情。師匠の方も、かなり本気だ。それに、背筋がぞくつとした。

「わかつたよ。兄さん。師匠。テストを受けさせてもいいよ。ただし、負けても文句は言わないでね！」

式神を発動。両腕にグローブが現れ、更にその中から一振りの剣を顯現させる。氷の式神修羅紅雪。炎の式神レヴァティーン。ユニオン最強の男と鬼神最強の男の式神だ。兄さんと師匠もゆっくりとお互いの剣を抜いた。それと同時に、神璽さんと由加さんが結界のようなものを張った。それを合図として、俺と兄さんと師匠は同時に動く。

「流石に、緋眼じゃ勝ち目が無いか」

兄さんと師匠に比べると、やはり俺の緋眼は経験的にも肉体的にもまだ劣る所が多い。速さでは勝てない。更に

「つふー！」

師匠のレヴァティーンを同じくレヴァティーンで受け止める。手が痺れ、靴が地面にめり込む。力でも勝てない。ならば

「式神で圧倒するしかないよねえ！」

修羅紅雪とレヴァティーンの炎を限界まで上げ、周囲を炎と氷で埋め尽くす。それをお互いの式神で対抗する兄さんと師匠。兄さんは俺の炎を掃い、師匠は俺の氷を山を破壊する。だが、それはブラフだよ。

「いけえ！」

氷の山の中に火種を埋め込んでいた。一気に炎が広がり、更に飛び散った破片が兄さんと師匠を襲う手筈になっている。

だが、兄さんと師匠は急に加速した。それだけで何をしたかがわかる。まだ俺が禁止されている緋眼の昇華型を使ったのだろう。

「光希やるなあ！」

「だが、まだツメが甘い」

炎と氷を引き連れて襲い来る一人。そこで、ふと迷つた。テスト状態の技が成功すれば、兄さんと師匠には勝てるだろう。

だが、失敗する確立がまだ高い。失敗すれば暴発し、どんな被害が出るかわからない。俺の入学はなくなるだろう。

未希ちゃんと同じ学校に通えなくなってしまう。それだけは嫌だった。

「正面突破！」

俺も緋眼を再発動させて兄さんと師匠へと突つ込んだ。射程距離に入った瞬間、炎や氷ではなく剣撃で兄さんと師匠を狙う。

向こうもそのつもりのようだ。名だたる二人の相手は厳しい。決して真ん中に入る事はせず、前方に一人を捉える。

兄さんの下段中段を攻撃。その間、片腕ででは修羅紅雪で師匠の攻撃を防ぐ。うつは、容赦ない。大きく後ろに跳躍し、距離をとる。

「いっくぞお！」

炎と氷の力を暴発寸前まで一瞬で溜めた。そして斬撃と共に、それを放つ。兄さんと師匠は正面からそれを迎え撃つた。

「嘘おー!？」

兄さんと師匠が腰を屈め、俺よりも早く力を練り上げるとお互いの式神で俺の放った炎と氷の斬撃を弾き返した。

信じられない。父さんでもこれは返せなかつたのに。畜生。

と何とか防御はしたもの、俺の体は氷と炎に削られた。

痛い。熱い。痛い。痛い。裂傷がすぐに焼けどとなり、傷口は塞がるが地獄のような痛みだ。

「はいはい。決着はついたみたいだね」

安全圏で状況を見守っていた姉さんが輪廻転生の力で俺の傷口を再生してくれた。ああ、やつぱり良い姉だ。

兄さんと師匠の方を向くと、驚いたような顔で俺の事を見ていた。どんだけ俺を過小評価してたのって聞いてみたい。

「兄さん、師匠。どうかな?」

「素直に驚いたよ。もう、俺達と殆ど変わらないよな

「ああ。俺のコーチももう必要ないだろ?。光希。後はお前次第だ。お前の意思一つで、全てが決まるぞ」

俺次第。といつ事は……

「光希。お前は今日から戦闘においては一人前だ。後は清く正しく学生として、精神を育め、コニオンはお前を歓迎する」

兄さんはそう言つと、嬉しそうな笑顔を作つた。今度は、誰かに笑われるような不自然な笑顔ではなかつた。

そして翌朝。何時もの朝が始まる。

「お兄ちゃん！ 洗面所早くしてよ。女の子は化粧とか色々あるんだからね！」

「はあ？ もう女の子って年じゃねえだろ！ 男だって髭剃りとか色々あんだよ！」

「お前ら朝からいつもせえーーー！ 日酔いに響くだらうが！ 静かにしやがれ！」

「三人とも。あんまりつるわこと朝じはん抜きよ」

母さんの一声により、今日も千島家は平和になつた。俺は兄さんや姉さんと違つて朝は強いので、既に支度は済ませてある。こういつ時は、母さん似で本当に良かつたと思うね。それからバタバタと姉さんが洗面所から走つていき、父さんがかつたる

そうに俺の目の前で新聞（競馬）を読み始め、兄さんも新聞（経

済）を読み始めると共に、母さんが置いていった牛乳を飲む。

そうこうしている内にまたバタバタと姉さんが一階から降りてきて、テレビの占いをチョックし始める。

「光つかやん今日占い一位だよ。あつと良い事あるんじゃない？」

「入学式で彼女できるフラグがたつたね。それとも、曲がり角でパン壁えた女の子とぶつかったりするのかな」

「灼汰みたいな事言わないでよ……」

落ち込む姉さん。「冗談なに……。

「つかやべえ。俺、入学式でユーロン代表挨拶しなきやならねえんだ。神璽に原稿頼んどいたんだけど、やつてくれたかなあ」

今日の兄さんの挨拶はアドリブ確定しました。

「遙ちゃん。デジカメの充電終わってる？ 莉那の勇姿を取らなくては！」

「嘘でもいいから息子の写真とるつて言つてよ。しかも莉那初等部だし。つてしまさかそつちに行く気！？」

「光希の写真なんざどつかの勢力が腐るほど撮ると思つから、後でそつちから奪うわ」

なんて父親だ。

「ほら光希。そろそろ電車の時間よ。荷物多いんだから、ちょっと

早めに出なさいね。後でちやんと行くから

流石母親だ。

「うさ。じゃあ、やあやあ行こうかな」

今日から寮生なので、荷物は多いといえぱ多い。それを担いで玄関から外に出る。今田でこの家も見納めだ。

振り返ると、父さん母さん兄さん姉さんの全員が玄関から出てきて手を振っていた。俺もそれに笑顔で手を振り返し、

「こつときます」

とこつと舞浜に向けて歩を出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0260b/>

---

緋色の眼～Days～

2010年10月20日13時30分発行